

# 京都府埋蔵文化財調査報告書

令和 2 年度

京 都 府 教 育 委 員 会



卷頭図版第1 恭仁宮跡第101次



(1) 掘立柱塙 S A 19001 検出状況（南から）



(2) 掘立柱塙 S A 5501 検出状況（南から）

巻頭図版第2 国営緊急農地再編整備事業（法貴峰古墳群第1次）



法貴峰 20号墳遠景（南西から）

卷頭図版第3 府内遺跡（特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園）



鹿苑寺（金閣寺）庭園測量図（京都府所蔵 原図縮尺1/1,000 左が北）

巻頭図版第4 府内遺跡（特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園）



(1) 第1トレンチa区（南東から）



(2) 第1トレンチb区（南から）

巻頭図版第5 府内遺跡（特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園）



(1) 第2トレンチ（北東から）



(2) 第2トレンチ（東から）

## 巻頭図版第6 府内遺跡（奈具遺跡第4次）



(1) 遺構検出状況（南東から）



(2) 出土遺物（弥生・古墳時代）

卷頭図版第7 府内遺跡（奈具遺跡第4次）



(1) 出土遺物（石器）



(2) 出土遺物（古代）



# 序

京都府内では、令和2年に301件の発掘調査が行われ、各地で重要な発見が相次ぎました。

京都御苑内の仙洞御所で実施された発掘調査では、豊臣秀吉が最晩年に築いた京都新城の石垣と堀跡の一部が検出されました。これまで実態が不明であった京都新城の存在が考古学的に確認された極めて貴重な成果となりました。城陽市小樋尻遺跡では、古墳時代から古代にわたり、灌漑のために整備された大きな溝が見つかりました。木製の堰跡など古代の優れた土木技術の一端を垣間見ることができる重要な成果です。木津川市史跡恭仁宮跡では、朝堂院を区画する掘立柱屏の南東隅を検出し、朝堂院の規模が確定しました。併せて朝堂院北辺の門想定地で新たな柱穴を確認し、その構造が三間門であった可能性が高まりました。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大という未曾有の事態により、私たちの生活様式は一変しました。感染拡大を防止するための様々な取組は日々の活動をも制約し、発掘調査現地説明会の中止、考古学体験講座の縮小など、文化財の保存・活用にも大きな影を落としました。今回の事態を受け、長い歴史の中で育まれ受け継がれてきた貴重な文化財を、次世代へと伝えていく思いを新たにいたしました。

本書は、令和2年度に京都府教育委員会が実施した発掘調査の概要をまとめたものです。この報告書の刊行を含め、発掘調査等に御協力いただいた多くの方々と関係機関に厚くお礼申し上げますとともに、本書が府の歴史や文化を御理解いただく上での一助となり、文化財の保存と活用に役立つこととなれば幸いです。

令和3年3月

京都府教育委員会

教育長 橋本 幸三

## 凡 例

- 1 本書は平成 30、令和元（平成 31）・2 年度に京都府教育委員会が実施した埋蔵文化財調査関係の報告書である。
- 2 本書に収めた調査対象遺跡、執筆担当者は下表のとおりである。

	調査対象遺跡	執筆担当者
1	恭仁宮跡	中居和志
2	府営農業農村整備事業関係遺跡	北山大熙
3	国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡	川崎雄一郎
4	平成 30 年～令和 2 年府内遺跡等調査	石崎善久・古川匠・中居和志・岡田健吾・北山大熙・川崎雄一郎・馬瀬智光・熊井亮介
5	平成 31 年、令和元・2 年における埋蔵文化財の発掘	奈良康正・岡田健吾

- 3 本書の執筆は各担当者が行い、文責についてはそれぞれ文末に記した。編集は各担当者が行ったものを北山がまとめた。
- 4 府内遺跡等調査のうち、特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園（第 25 次調査）の報告文は当課職員と京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課職員の合同執筆である。同報告文は京都市文化市民局刊行『京都市内遺跡発掘調査報告 令和 2 年度』に掲載されている。
- 5 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の地形図である。周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲は京都府・市町村共同ポータルサイト (<http://g-kyoto.gis.pref.kyoto.lg.jp/g-kyoto/top/index.asp>) に掲載する文化財 G I S データを基に作成した。国土座標・方位のないものは、上位が北である。
- 6 本書で使用している測地系は、恭仁宮跡第 101 次は測量法改正（2001 年 6 月 12 日改正、2002 年 4 月 1 日施行）前の平面直角座標系 VI である。府営農業農村整備事業関係遺跡（上ヶ市遺跡第 3 次調査）及び国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡（法貴峰古墳第 1 次調査・千代川遺跡第 33 次調査）は新座標（国土座標 2000、平面直角座標系第 VI 座標系）である。
- 7 本書に使用した遺構番号の前には S A（築地・塀・柱列）、S B（掘立柱建物）、S D（溝）、S K（土坑）、S X（その他）等の記号を付した。
- 8 本書で使用した方位記号は、矢羽根記号は座標北を表し、線書き記号で磁北を表している。
- 9 卷頭図版及び図版に掲載の奈具遺跡第 4 次調査出土遺物写真は、写房楠華堂 内田真紀子氏に撮影を委託したもので、著作権は京都府教育委員会に帰属する。
- 10 本書に掲載している写真等の転載については、京都府教育委員会に問い合わせ、許可を得ること。ただし、京都府に著作権が属さないものは許可しない場合がある。

# 目 次

1 恒仁宮跡令和2年度保存活用調査報告（恒仁宮跡第101次調査）	1
2 府営農業農村整備事業関係遺跡令和2年度発掘調査報告	21
[1] 上ヶ市遺跡（第3次調査）	22
[2] 梅ノ木原遺跡・北野台遺跡（第1次調査）	24
3 国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡平成30年～令和2年度発掘調査報告	25
[1] 平成30・令和元（平成31）年度の調査（法貴峰古墳群第1次）	28
[2] 令和2年度の調査（千代川遺跡第33次調査）	36
4 平成30年～令和2年府内遺跡等報告	39
[1] 特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園（第25次調査）	41
[2] 奈具遺跡試掘・確認調査（第4次調査）	73
[3] 矢田遺跡試掘・確認調査（第4次調査）	104
[4] 瓜生野古墳群試掘・確認調査（第2次調査）	108
[5] 篠塙業生産遺跡群試掘・確認調査	109
[6] 福知山城跡試掘・確認調査	111
[7] 木津川河床遺跡試掘・確認調査	113
5 平成31年、令和元・2年における埋蔵文化財の発掘	115
[1] 平成31年、令和元・2年の動向	115
[2] 府内の主な発掘調査	117

## CONTENTS

1 Overview of the excavation of the Kuni Palace site (from April 2020 to March 2021)	1
2 Overview of the excavation of the sites caused by pref-managed improvement in agricultural infrastructure for raising an agriculture manager (from April 2020 to March 2021)	21
3 Overview of the excavation of the sites caused by government-managed urgent farmland reorganization maintenance project "Kameoka center district" (from April 2019 to March 2021)	25
4 Overview of the trial excavation (from 2018 to 2021)	39
5 General view of excavation in Kyoto prefecture (from 2019 to 2020)	115

# 挿図目次

1 恭仁宮跡（第101次調査）	.....	35
第1図 恭仁宮跡位置図（1/50,000）	.....	1
第2図 調査地位置図（トーンは調査地、1/4,000）	.....	3
第3図 恭仁宮跡主要遺構図（1/4,000）	.....	4
第4図 基本層序（I R 10 I-s北壁、1/40）	.....	7
第5図 I R 10 I-s 第1面遺構平面図（全体1/200 、集石拡大1/40、網掛けは瓦）	.....	8
第6図 I R 10 I-s第2面遺構平面図、北壁・拡張 区東壁断面図（平面1/150、断面1/80）	.....	9
第7図 I R 10 I-s西・暗渠北・南・断割南壁断面 図（1/80）	.....	10
第8図 I M22 H-s遺構平面図、西壁断面図（中世 ・中世～近世1/200、古代1/100、断面1/60）	.....	12
第9図 I N 05 G-s遺構平面図、西壁断面図（平面 1/100、断面1/60）	.....	14
第10図 出土遺物実測図（土器・瓦類1/4）	.....	15
第11図 出土遺物実測図（木製品・金属製品1/4、 木簡・赤外線写真・石器1/2）	.....	16
第12図 I R 10 I-s遺構変遷想定図（1/300）	.....	17
第13図 I R 10 I-s・I M22 H-s周辺遺構検出状況 図（1/450）	.....	18
第14図 I N 05 G-s周辺遺構検出状況図（1/400）	.....	20
2 府営農業農村整備事業関係遺跡		
[1] 上ヶ市遺跡（第3次調査）		
第15図 調査地周辺の遺跡（国土地理院「福知山東 部」1/50,000）	.....	22
第16図 調査位置図（1/4,000）	.....	23
第17図 各トレンチ柱状図（1/50）	.....	23
[2] 梅ノ木原遺跡・北野台遺跡（第1次調査）		
第18図 トレンチ配置図（1/4,000）	.....	24
3 国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係 遺跡		
[1] 平成30・令和元（平成31）年度の調査（法貴 峠古墳群第1次）		
第19図 調査対象遺跡及び周辺遺跡（1/60,000）	.....	27
第20図 法貴峠古墳群墳丘位置図（1/5,000）	.....	32
第21図 法貴峠20号墳測量図（1/150）	.....	34
第22図 法貴峠20号墳トレンチ平・断面図（1/100）	.....	
第23図 法貴峠20号墳出土遺物実測図（1/4）	.....	36
[2] 令和2年度の調査（千代川遺跡第33次調査）		
第24図 千代川遺跡第33次調査トレンチ配置計画図 (1/12,000)	.....	37
4 平成30年～令和2年府内遺跡等報告		
第25図 令和2年府内遺跡調査位置図（番号は付表 4に対応）	.....	40
[1] 特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園 (第25次調査)		
第26図 特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭 園位置図（国土地理院『京都西北部』S= 1/25,000）	.....	41
第27図 特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭 園指定範囲（京都市都市計画地図『原谷』 ・『衣笠山』S=1/4,000）	.....	42
第28図 周辺調査事例（S=1/1,500）（付表5文献 13掲載図に加筆）	.....	45
第29図 鹿苑寺（金閣寺）庭園 土壇測量図A（S =1/400京都府・京都市作図・電子測量）	.....	49
第30図 測量図A トレンチ設定位置図(S=1/500)	.....	50
第31図 鹿苑寺（金閣寺）庭園 土壇測量図B（部 分）（原図縮尺200分の1・鹿苑寺所蔵）	.....	51
第32図 鹿苑寺（金閣寺）庭園 土壇測量図C（原 図縮尺1,000分の1・京都府所蔵）	.....	51
第33図 昭和25・昭和10・昭和5・大正11年地図（ ①、③、④「京都西北部」国土地理院・ 大日本帝国陸地測量部 ②「船岡山」京都 市都市計画地図）	.....	52
第34図 第1トレンチa区 調査着手前（南東から・ 令和2年（2020）8月26日）	.....	53
第35図 第1トレンチb区 調査着手前（東から・ 令和2年（2020）9月23日）	.....	53
第36図 令和2年度鹿苑寺（金閣寺）庭園（第25次 調査）第1トレンチ位置図（S=1/150）	.....	54
第37図 令和2年度鹿苑寺（金閣寺）庭園（第25次 調査）第1トレンチ位置図（S=1/60）	.....	55
第38図 第1トレンチ a 区土層断面図（S=1/50）	.....	56

第39図	第1トレンチb区土層断面図 (S=1/50) .....	57
第40図	第13次調査トレンチ (南から・平成25年 (2013) 8月) .....	58
第41図	第1トレンチa区塩ビ管S X 101掘削開始 (西から・平成25年 (2013) 12月13日) .....	58
第42図	測量図A・B・C 第1トレンチ周辺 (S=1/100) .....	59
第43図	第1トレンチ該当部遠景 (南西から・平成26年 (2014) 1月16日) .....	60
第44図	第1トレンチ該当部近景 (南西から・平成26年 (2014) 1月22日) .....	60
第45図	第1トレンチ設定地点 (東から・平成27年 (2015) 1月30日) .....	60
第46図	令和2年度鹿苑寺 (金閣寺) 庭園 (第25次調査) 第2トレンチ位置図 (S=1/100) .....	63
第47図	第2トレンチ地点 調査着手前 (北東から・令和2年 (2020) 8月25日) .....	63
第48図	第2トレンチ地点 苔・堰板除去状況 (南東から・令和2年 (2020) 9月14日) .....	63
第49図	第2トレンチ平面図・土層断面図 (S=1/60) .....	64
第50図	第2トレンチ地点 平成28年度調査終了状況 (北東から・平成28年 (2016) 11月19日) .....	65
第51図	測量図B 土壇部分 (S=1/400) .....	66
第52図	測量図A・B合成 (黒・測量図A 赤・測量図B) (S=1/400) .....	66
第53図	測量図C 土壇部分 (S=1/400) .....	67
第54図	測量図A・C合成 (黒・測量図A 赤・測量図C) (S=1/400) .....	67
第55図	出土遺物実測図 (S=1/4) .....	69
	[2] 奈具遺跡試掘・確認調査 (第4次調査)	
第56図	奈具遺跡位置図 (国土地理院1/25,000「網野」「峰山」) .....	73
第57図	調査地位置図 (1/2,500) .....	73
第58図	奈具遺跡第4次調査区平面・北壁断面図 (1/120) .....	74
第59図	奈具遺跡第4次SD12断面図 (1/50) .....	75
第60図	奈具遺跡第4次SK01出土遺物 (1/4) .....	78
第61図	奈具遺跡第4次SK02出土遺物 (1/4) .....	78
第62図	奈具遺跡第4次SK16上層出土遺物 (1/4) .....	79
第63図	奈具遺跡第4次SK16下層出土遺物 (1/4) .....	80
第64図	奈具遺跡第4次SD12出土遺物1 (1/4) .....	81
第65図	奈具遺跡第4次SD12出土遺物2 (1/4) .....	82
第66図	奈具遺跡第4次SD19最上層出土遺物 (1/4、137のみ1/8) .....	83
第67図	奈具遺跡第4次SD19中層出土遺物1 (1/4) .....	84
第68図	奈具遺跡第4次SD19中層出土遺物2 (1/4) .....	85
第69図	奈具遺跡第4次SD19中層出土遺物3 (1/4) .....	86
第70図	奈具遺跡第4次SD19中層出土遺物4 (1/4) .....	87
第71図	奈具遺跡第4次SD19最下層出土遺物 (1/4) .....	87
第72図	奈具遺跡第4次ピット出土遺物 (1/4) .....	88
第73図	奈具遺跡第4次II層出土遺物 (1/4) .....	90
第74図	奈具遺跡第4次IV層出土遺物 (1/4) .....	91
第75図	奈具遺跡第4次IV層・SD19最下層出土遺物 (1/4) .....	93
第76図	奈具遺跡第4次廃土採集遺物 (1/4) .....	94
第77図	奈具遺跡第4次石製品など (S 1~3:1/2、S 4~10:1/4) .....	95
第78図	管状混和剤と土器 (写真下の目盛りは1mm、土器1/4) .....	97
	[3] 矢田遺跡試掘・確認調査 (第4次調査)	
第79図	矢田遺跡位置図 (国土地理院1/25,000「亀国・法貴」) .....	104
第80図	矢田遺跡トレンチ配置図 (1/2,000) .....	104
第81図	第1トレンチ平面・断面図 (1/200) .....	105
第82図	第2・3トレンチ平面・断面図 (1/200) .....	106
第83図	矢田遺跡出土遺物実測図 (1/4、1/6) .....	107
	[4] 瓜生野古墳群試掘・確認調査 (第2次調査)	
第84図	瓜生野古墳群位置図 (国土地理院1/25,000「園部」) .....	108
第85図	瓜生野古墳群トレンチ位置図 (1/1,000) .....	108
第86図	平面・断面図 (1/100) .....	109
	[5] 篠窯業生産遺跡群試掘・確認調査	
第87図	篠窯業生産遺跡群位置図 (国土地理院1/25,000「亀岡」) .....	109
第88図	調査区位置図 (1/1,000) .....	110
第89図	平面・断面図 (1/150) .....	110

# 付表目次

## [6] 福知山城跡試掘・確認調査

第90図 福知山城跡位置図（国土地理院1/25,000 「福知山西部」「福知山東部」）	111
第91図 調査区位置図（1/1,000）	112
第92図 調査区平面図（1/100）・断面図（1/50）	
	112

## [7] 木津川河床遺跡試掘・確認調査

第93図 木津川河床位置図（国土地理院1/25,000 「淀」）	113
第94図 調査区位置図（1/2,000）	113
第95図 調査区平面・断面（1/100）	114

## 5 平成31年、令和元・2年における埋蔵文化財の発掘

### [2] 府内の主な発掘調査

第96図 稚児野遺跡出土石器	117
第97図 小樋尻遺跡出土導水施設	118
第98図 法貴峰20号墳主体部	118
第99図 京都新城出土石垣	121

## 2 府営農業農村整備事業関係遺跡

付表1 令和2年度調査遺跡一覧	21
-----------------	----

## 3 国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

付表2 平成30年～令和2年度調査遺跡一覧	26
付表3 法貴峰20号墳出土遺物観察表	36

## 4 平成30年～令和2年府内遺跡等報告

付表4 令和2年府内遺跡調査一覧	40
付表5 周辺調査事例一覧（第28図に対応）	46
付表6 遺物概要表	68
付表7 奈具遺跡第4次 出土遺物観察	98

## 5 平成31年、令和元・2年における埋蔵文化財の発掘

付表8 令和元（平成31）年度埋蔵文化財専門職員及び埋蔵文化財包蔵地数市町村別一覧	123
付表9 令和元（平成31）年度埋蔵文化財関係届出・通知件数市町村別一覧	124
付表10 土木工事等による発掘届出・通知件数一覧	125
付表11 埋蔵文化財発掘調査届出・報告件数一覧	125
付表12 埋蔵文化財認定件数一覧	125
付表13 令和2年度埋蔵文化財国庫補助事業一覧	126
付表14 令和2年度（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター委託事業等一覧	127
付表15 令和元（平成31）年度発掘調査報告書等刊行状況	129
付表16 令和元（平成31）年度埋蔵文化財発掘調査届出・報告一覧	132

# 卷頭図版目次

## 1 恭仁宮跡（第101次調査）

### 卷頭図版第1

- (1) 堀立柱塀 S A 19001 検出状況（南から）
- (2) 堀立柱塀 S A 5501 検出状況（南から）

## 3 国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係 遺跡

### [1] 平成30・令和元（平成31）年度の調査（法貴 峠古墳群第1次）

#### 卷頭図版第2

- 法貴峠 20号墳遠景（南西から）

## 4 平成30年～令和2年府内遺跡等報告

### [1] 特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園 (第25次調査)

#### 卷頭図版第3

鹿苑寺（金閣寺）庭園測量図（京都府所蔵 原図縮尺  
1/1,000 左が北）

#### 卷頭図版第4

- (1) 第1トレンチa区（南東から）
- (2) 第1トレンチb区（南から）

#### 卷頭図版第5

- (1) 第2トレンチ（北東から）
- (2) 第2トレンチ（東から）

### [2] 奈具遺跡（第4次調査）

#### 卷頭図版第6

- (1) 遺構検出状況（南東から）
- (2) 出土遺物（弥生・古墳時代）

#### 卷頭図版第7

- (1) 出土遺物（石器）
- (2) 出土遺物（古代）

# 図版目次

## 1 恭仁宮跡（第101次調査）

### 図版第1 (1) I R 10 I-s調査区第1面遺構検出状 況（北西から）

### (2) I R 10 I-s調査区第1面遺構集石・ 瓦検出状況（南から）

### 図版第2 (1) I R 10 I-s調査区全景（北から）

### (2) I R 10 I-s調査区北壁土層断面（南 西から）

### 図版第3 (1) S D 20103検出状況（南から）

### (2) S D 20103・S K 20104土層断面（北 から）

### 図版第4 (1) I R 10 I-s調査区断割断面（北西か ら）

### (2) I R 10 I-s調査区西壁土層断面（東 から）

### 図版第5 (1) S D 20103北端掘削状況（南西から ）

### (2) I M 22 H-s調査区SA 19001検出状況 (西から)

### 図版第6 (1) I M 22 H-s調査区西壁断面（北東か ら）

### (2) I M 22 H-s調査区東壁土層断面（北 西から）

### 図版第7 (1) I N 05 G-s調査区全景（東から）

### (2) I N 05 G-s調査区西壁土層断面（東 から）

## 2 府営農業農村整備事業関係遺跡

### [上ヶ市遺跡（第3次調査）]

### 図版第8 (1) 上ヶ市遺跡 遠景（南から）

### (2) 第2トレンチ 全景（南東から）

### (3) 第4トレンチ 全景（南東から）

## 3 国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係 遺跡

### [1] 平成30・令和元（平成31）年度の調査（法貴 峠古墳群第1次）

### 図版第9 (1) 法貴峠20号墳垂直写真 (2) 法貴峠20号墳調査前近景（南西から ）

### 図版第10 (1) 調査区全景（北東から）

### (2) 調査区東壁土層断面（西から）

#### 4 平成30年～令和2年府内遺跡等報告

##### [1] 特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園

（第25次調査）

- 図版第11 (1) 第1トレンチa区東壁（西から）  
(2) 第1トレンチa区北壁東部（南から  
）

- 図版第12 (1) 第1トレンチ断割西壁（南東から）  
(2) 第1トレンチb区（南から）

- 図版第13 (1) 第2トレンチ（南東から）  
(2) 第2トレンチ盛土層近景（東から）

##### [2] 奈具遺跡（第4次調査）

- 図版第14 (1) 遺構検出状況（南東から）  
(2) 遺構検出状況（西から）  
(3) S P 15遺物出土状況（南から）

- 図版第15 出土遺物（1）

- 図版第16 出土遺物（2）

- 図版第17 出土遺物（3）

- 図版第18 (1) 出土遺物（4）S D12出土遺物  
(2) 出土遺物（5）S D19出土遺物

- 図版第19 (1) 出土遺物（6）S K16出土遺物  
(2) 出土遺物（7）石器・石製品など

##### [3] 矢田遺跡（第4次調査）

- 図版第20 (1) 第1トレンチ 全景（南から）  
(2) S D01 全景（南東から）  
(3) 第2トレンチ 全景（南から）

# 1 恭仁宮跡令和2年度保存活用調査報告 (恭仁宮跡第101次調査)

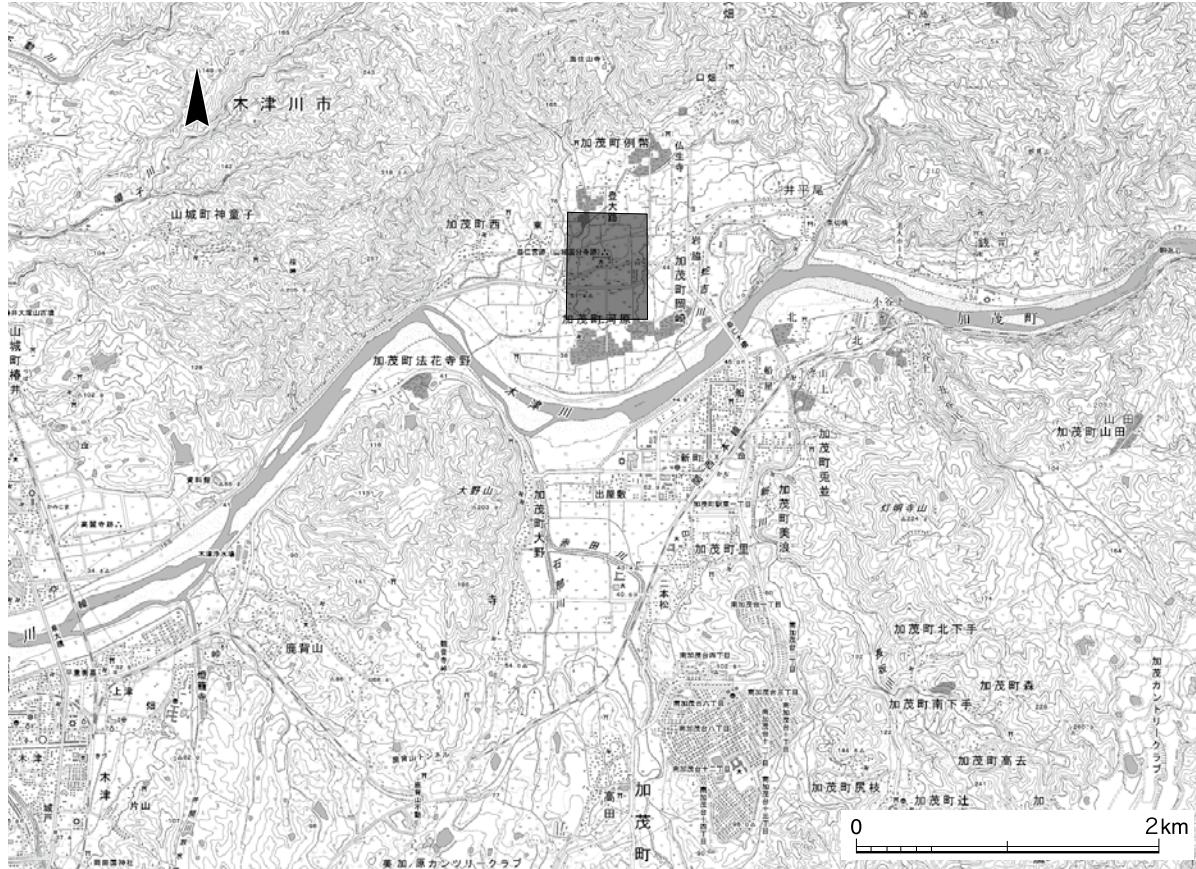
## 1 はじめに

恭仁京は、聖武天皇により天平12（740）年から同16（744）年まで足かけ5年にわたって営まれた古代宮都である（『続日本紀』）。京都府教育委員会では、諸開発に備え、恭仁宮跡の実態解明を目的として、昭和48年度から継続的に調査を実施し、平成8年度には恭仁宮跡の四至を確定した。

また恭仁宮跡は、昭和32年に史跡山城国分寺跡として指定され、平成19年に史跡恭仁宮跡（山城国分寺跡）と名称変更・追加指定され、平成20年、22年、27年、29年、30年、31年にさらに史跡範囲の追加指定が行われた。

平成9年度からは、恭仁宮跡の保存及び活用を図るため、宮内のより重要な地区についての詳細な内容把握を目的として、保存活用調査に着手した。内裏地区では、大極殿の北方に2つの区画施設が設けられていることを確認し、平成16年度には、併設された内裏東、西地区それぞれの範囲を確定するに至った。平成24年度からは、中心部の内部構造の解明を目的とした10箇年計画を策定し、調査を進めている。

本報告では、令和2年度に実施した第101次調査の報告を行う。



第1図 恭仁宮跡位置図（1/50,000）

《調査組織・令和2年度》

調査主体 京都府教育委員会

調査責任者 京都府教育庁指導部文化財保護課長 森下 衛

専門家会議

委員長 上原真人（京都大学名誉教授）

副委員長 井上和人（公益財団法人東洋文庫客員研究員）

委員 箱崎和久（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部長兼遺構研究室長）

清野清之（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部副部長兼考古第一研究室長）

調査指導 文化庁、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

技術協力 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部史料研究室、遺跡・調査技術研究室

調査担当者 京都府教育庁指導部文化財保護課記念物係 主幹兼係長 石崎善久

副主査 古川 匠

副主査 中居和志

主任 岡田健吾

調査事務局 京都府立山城郷土資料館

調査協力 木津川市、木津川市教育委員会、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

現地調査及び整理作業に当たっては、多数の方々に多大な協力を得た。心より感謝したい。

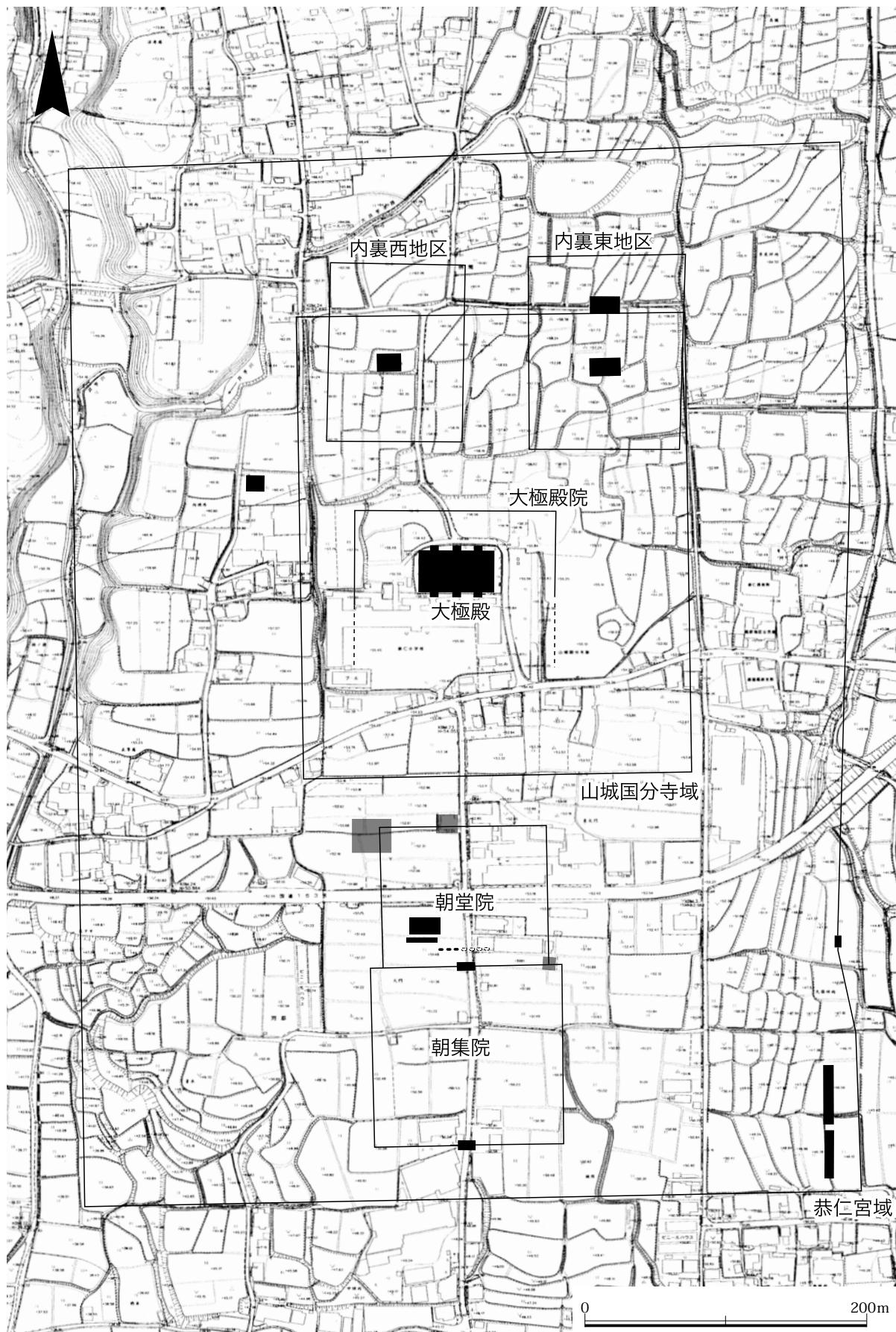
## 2 調査経過

京都府教育委員会による恭仁宮跡の調査は昭和48年度から実施しており、今年度で47年目を迎えた。昭和48年度の分布調査及び文献調査を経て、昭和49年度からは発掘調査に着手した。昭和50年度から昭和61年度は、宮内の重要施設を確認するため宮跡中枢域において発掘調査を実施し、大極殿院や朝堂院の区画施設、内裏に関連すると想定される建物や塀等の遺構を確認した。

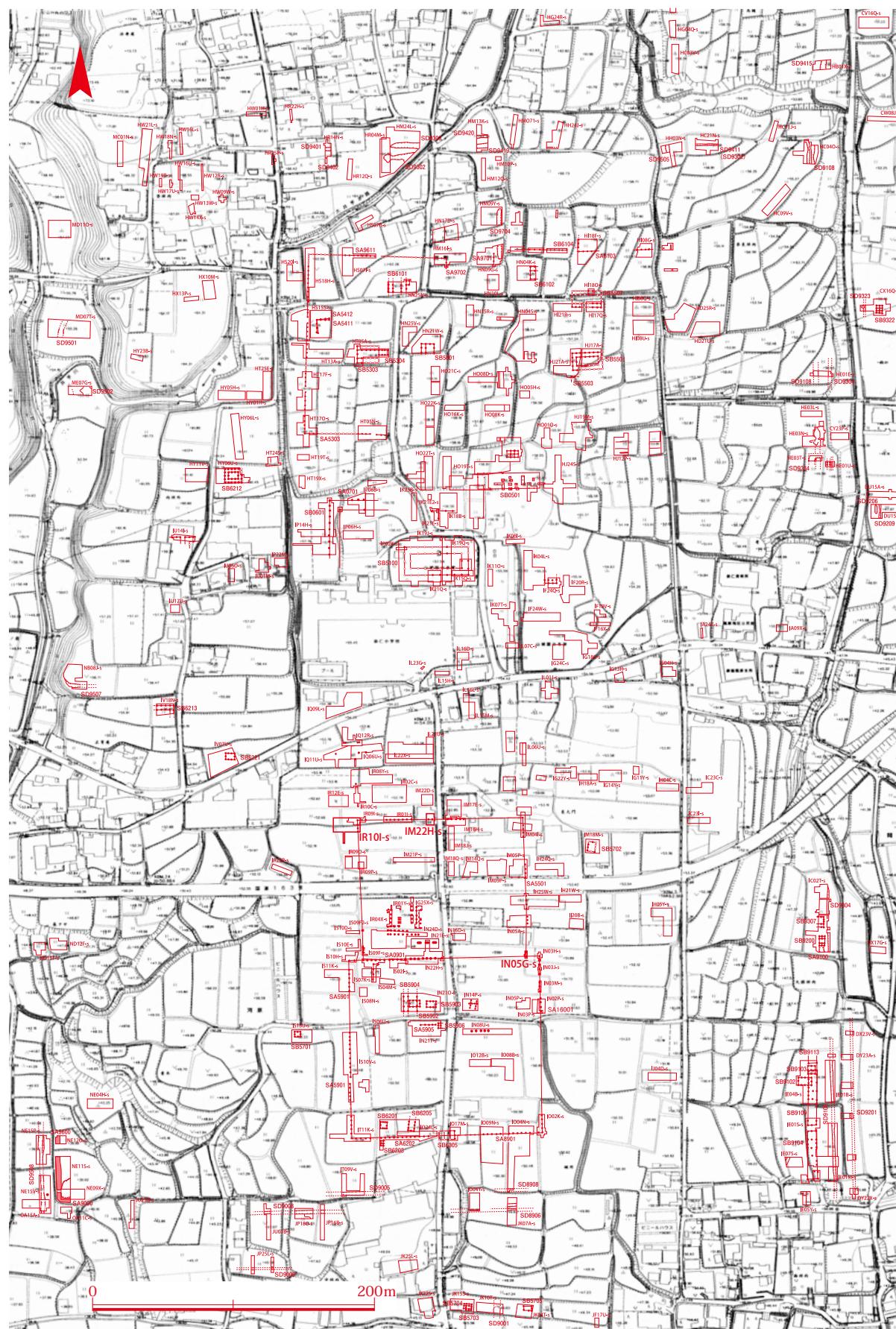
平成4年度から平成8年度に実施した調査によって、宮の四至が南北約750m、東西約560mであることが確定した。その後も、恭仁宮跡の保存活用を検討する上で、必要な資料を得ることを目的として継続的に調査を進めている。宮跡主要地区での調査成果の概要は下記のとおりである。

### 内裏地区

平成9年度の調査により、大極殿院の北方に、東西に並ぶ2つの区画施設の存在を確認した。他の宮都では、内裏が存在する位置にあるこれらの区画施設については、現時点ではその性格等の把握が十分ではないため、暫定的に両者を含め「内裏地区」とし、両者を区別する場合には、「内裏西地区」、



第2図 調査地位置図（トーンは調査地、1/4,000）



第3図 恭仁宮跡主要遺構図 (1/4,000)

「内裏東地区」とそれぞれ呼称している。

「内裏西地区」は、東西約 97.9 m（約 330 尺）、南北約 127.4 m（約 430 尺）の範囲を掘立柱塀で区画するものである。区画内部の建物配置は、中心建物と思われる四面庇の東西棟建物 S B 5303 のほかに 2 棟の存在を確認している。

「内裏東地区」は、中心建物と見られる 2 棟の東西棟庇付き建物が南北に並び、東・西・南の 3 面を築地、北面を掘立柱塀で区画する。東西約 109.3 m（約 370 尺）、南北約 138.9 m（約 470 尺）の規模に復元することができる。

#### 大極殿院地区

大極殿院地区では、昭和 51 年度に大極殿基壇 S B 5100 を調査し、13 基の礎石痕跡と階段等を検出し大極殿の規模が確定した。また、昭和 53 年度には、大極殿の東方で南北に 2 列に並んだ柱列 S A 5301・5302 を検出し、回廊構築に伴う足場杭列と判断した。しかし、これら以外には、大極殿院地区に係る施設（築地回廊や後殿の配置等）についての手がかりは得られていなかった。

こうした中、平成 15 年度から大極殿院回廊の解明を目的とした新たな調査に着手し、平成 17 年度の大極殿院北東部における調査において、掘立柱建物 S B 0501 を検出した。南北 4 間、東西 10 間の総柱建物で、南北 11.34 m、東西 42.75 m を測る。この建物は、恭仁宮の仮設的な建物あるいは山城国分寺の僧坊などの関連施設と想定している。また、平成 18・19 年度に大極殿の西北側で実施した調査で、大極殿院築地回廊の西北隅付近を確認した。両年度の調査では、大極殿院西面築地回廊に係る礎石抜取り痕跡を計 10 基 9 間分、北面築地回廊に係る同様の礎石抜取り痕跡を 5 基検出した。さらには北・西面の外側を廻る雨落溝を検出し、西北隅部を明らかにすることができた。この成果により、大極殿院の東西幅は 480 尺（141.5 m）で設計されたと判断でき、北面築地回廊（S A 0701）南側柱と大極殿基壇北端の間に約 28.1 m（約 95 尺）の空閑地が存在していたことが判明した。

大極殿院回廊の南北長を明らかにするため、平成 22 年度から平成 24 年度にかけて調査を行ったが、確実な遺構は検出できず、確定には至らなかった。

#### 朝堂院・朝集院地区

朝堂院の区画は、平成 21 年度調査によって、西面と南面をそれぞれ S A 0902、S A 0901 として確定することができた。この成果によって、大極殿の中心から朝堂院区画南面の S A 0901 までの距離は、約 280 m（約 940 尺）と判明した。平成 26 年度調査では朝堂院南門の痕跡を検出し、平成 24 年度調査では総柱建物跡を検出した。この建物は平成 25・26 年度の調査で南北 2 棟が重複する東西棟の掘立柱建物であることが判明した。平成 29 年度調査では朝堂院区画東面掘立柱塀北端の柱穴を検出し、平成 30 年度調査では朝堂院北面掘立柱塀のうち東側の S A 18001 を検出した。令和元年度調査では朝堂院区画の北西隅を検出し、北面掘立柱塀のうち西側の S A 19001 を検出した。また、朝堂院区画内の中心的建物の検出を目指したが、遺構を検出することはできなかった。

朝集院の区画については、西面が S A 5901、南面が S A 6202 であることが確定している。また、朝集院南門 S B 6305 の存在も確認している。平成 28 年度の調査で北東隅を確認したことで、朝集院の四至が確定し、規模は南北が 420 尺、東西は 450 尺の設計であると判明した。

### 3 第101次調査

令和2年度の調査は、大極殿院区画南西隅と朝堂院区画南東隅の確認を目的とした。9月28日から調査区設定地点の測量などを実施し、10月1日から掘削作業を開始した。10月3日には山城郷土資料館事業として恭仁宮跡探検隊として体験発掘などを行い、10月13日には恭仁小学校児童を対象とした体験発掘を実施した。恭仁宮跡調査専門家会議は11月24日に開催し、調査成果の検討を行った。12月4日に報道発表を行ったが、例年実施している現地説明会は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため中止せざるを得なかった。12月18日に埋め戻しを含めた現地での作業をすべて完了した。調査面積は217m<sup>2</sup>で、瓦や土師器片などコンテナ21箱分の遺物が出土した。

#### (1) 既往の調査成果と今年度の調査トレーニングの位置（第2・3図）

朝堂院区画では、平成20年度に南西隅、平成29年度に北東隅、令和元年度に北西隅の掘立柱を検出し、<sup>(注1)</sup>北・西面の規模が確定していた。一方で、朝堂院区画と大極殿院との接続状況が不明なままであったため、今年度の調査では、大極殿院回廊との接続方法の解明を目的に、令和元年度調査区を拡張する形でI R 10 I -s 調査区を設定した。

朝堂院区画の北面中央では、平成30年度調査で検出した柱穴の位置関係から、門のない通路状の空間を想定していたが、宮の中軸を挟んだ西側の様相が不明のため確定していなかった。<sup>(注4)</sup>そのため、朝堂院区画北面中央の構造解明を目的にI M 22 H -s 調査区を設定した。また、朝堂院区画の四隅のうち、確定していなかった南東隅の確定を目的にI N 05 G -s 調査区を設定した。

#### (2) 基本層序（第4図）

令和2年度調査区の基本層序は第4図のとおりである。I R 10 I -s・I M 22 H -s 調査区の層序は基本的に共通しているため、I R 10 I -s 調査区の層序を提示する。

I・II層は表土・床土で、III層は古代の遺物が多い中世包含層である。IV層は古代の包含層で、黒色土器等を含む平安時代の包含層である。V層は、I R 10 I -s 調査区に分厚く堆積する土層であるが、I M 22 H -s 調査区では確認できない。V層は、令和元年度調査で時期の分かる遺物がなく、国分寺造営段階の整地土と想定していた。今年度はV層上半で9世紀の灰釉把手付壺（第10図8）が出土したため、少なくともV層上半の最終的な埋没は9世紀以降であるといえる。VI層は恭仁宮遺構面直上に堆積する砂層で、令和元年度調査区をはじめ広範囲で検出できる層であるが、今年度は検出していない。VII層は恭仁宮期の整地土で、上面がS A 19001など恭仁宮期の遺構が検出できる第2面である。なお、I N 05 G -s 調査区は、削平によりIII～VI層に相当する層が全て失われている。

#### (3) I R 10 I -s 調査区（第5・6・7図）

調査対象地は4つの耕作地にまたがっており、南北で大きな段差のある地形であった。一段低い南側はIII層が削平され、II層直下がIV層となる。なお、調査区の南端近くでは、多量の瓦を埋め込んだ



第4図 基本層序 (IR101-s北壁、1/40)

東西方向の暗渠がある。瓦の大半は近現代瓦であるが、一部含まれる恭仁宮と国分寺の瓦を取上している。

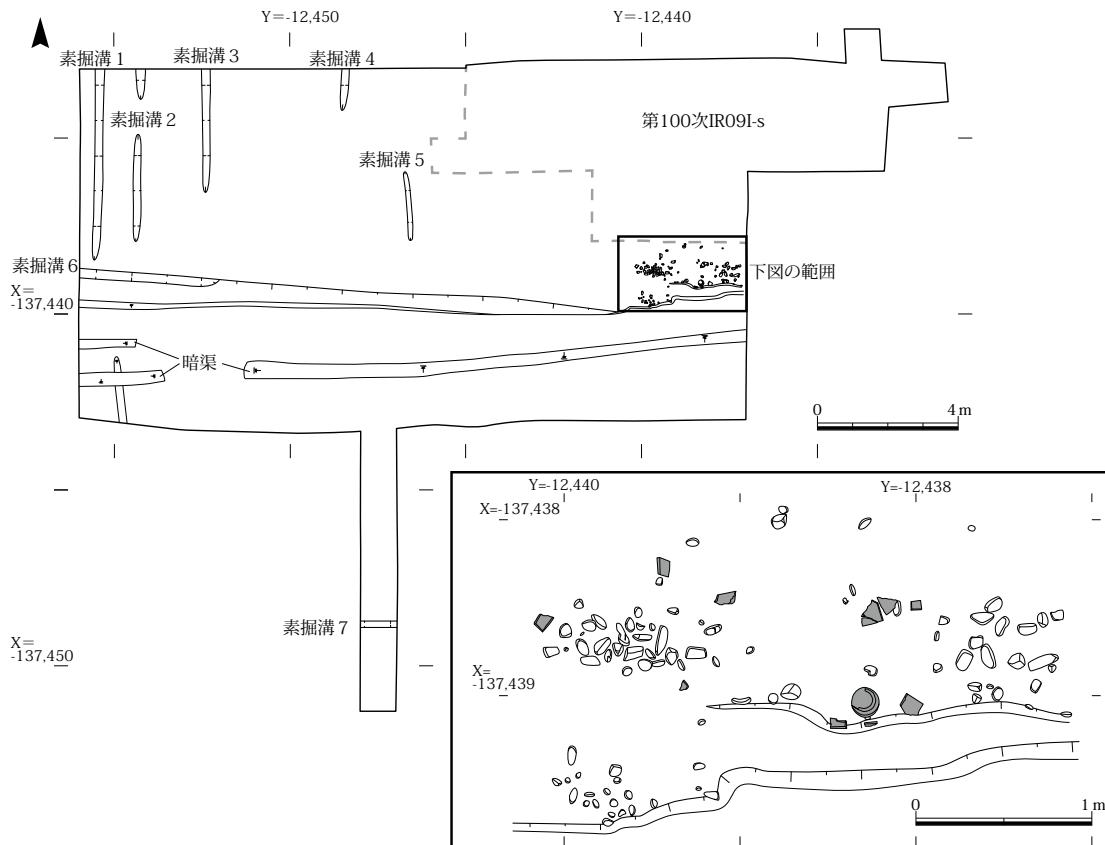
地表面下約0.3mのV層の検出面上（第1面）からは南北方向に5条、東西方向に2条の素掘溝を検出し、調査区東端中央では瓦を含む円礫の集石を検出した（第5図）。素掘溝1からは第10図3、素掘溝6からは第10図4が出土しているが層位からみて中世の素掘溝である。集石はV層の直上に位置し、中世遺物を含まない（第5図右下）。瓦は国分寺所用瓦KM05（第10図15）をはじめとして、全て国分寺所用の瓦である。円礫には多少のまとまりがあるものの、明確な掘方は確認できない。

分厚い第V層を除去すると、地表面下0.8～1.2mの深さで恭仁宮期の遺構を検出した。遺構面の検出高は、調査区の北西隅が標高52.4mで最も高く、南東隅が標高51.5mで最も低い。西から東へ傾斜しつつ、北から南にも緩やかに傾斜する。遺構は、朝堂院区画西面SA0902、令和元年度に検出した南北溝SD19105・06の延長、SD19105と重複する南北溝SD20103等を検出した。

**SA0902** SP19101・19104・20101・20102を検出した。SP19104は、令和元年度調査で北半を検出しており、東西方向に長い柱穴と認識していた。柱穴の全体を検出したところ、東半が柱穴で、西半は南北方向の溝（SD20103）と判明した。SP19104上半に堆積する黄褐色粗砂はSD20103の埋土と同一であり、令和元年度に黄褐色粗砂を取り除く深さまで半裁している。黄褐色粗砂と下層のオリーブ黒色シルトは土質が大きく異なり、堆積時期に差があることを示している。オリーブ黒色シルトの上面で柱痕跡を確認できることから、オリーブ黒色シルト以下が柱抜取後の埋め戻し土であるといえる。つまり、SP19104は柱抜取後に完全な埋め戻しがなく、SD20103とともに開口しており、両者が同時に黄褐色粗砂で埋没したことがわかる。なお、SP19104のオリーブ黒色シルト上面では恭仁宮所用軒丸瓦KM01が出土した（第10図14、図版第5（1））。

SP20101・02はどちらも、SP19104と同じく黄褐色粗砂で埋没している。なおSP20102は調査区の南東隅で縁辺部をわずかに検出したのみである。

**SD20103** SA0902の西側で検出した南北溝である。今回の調査区内における恭仁宮期の遺構面の中で、最も標高の低い地点にある。遺構の北端はSP19104の西側にあり、埋土は前述のとおりSP19104・20101・20102の検出時埋土と共通する。そのため、SD20103とSA0902の抜取痕はともに開口していたことが分かる。調査区南端で断割を行い、最下層（9層）と中層（7層）に砂層を含むことが分かる（第7図南壁）。これは溝内に流水があったことを示している。最上層（5層）



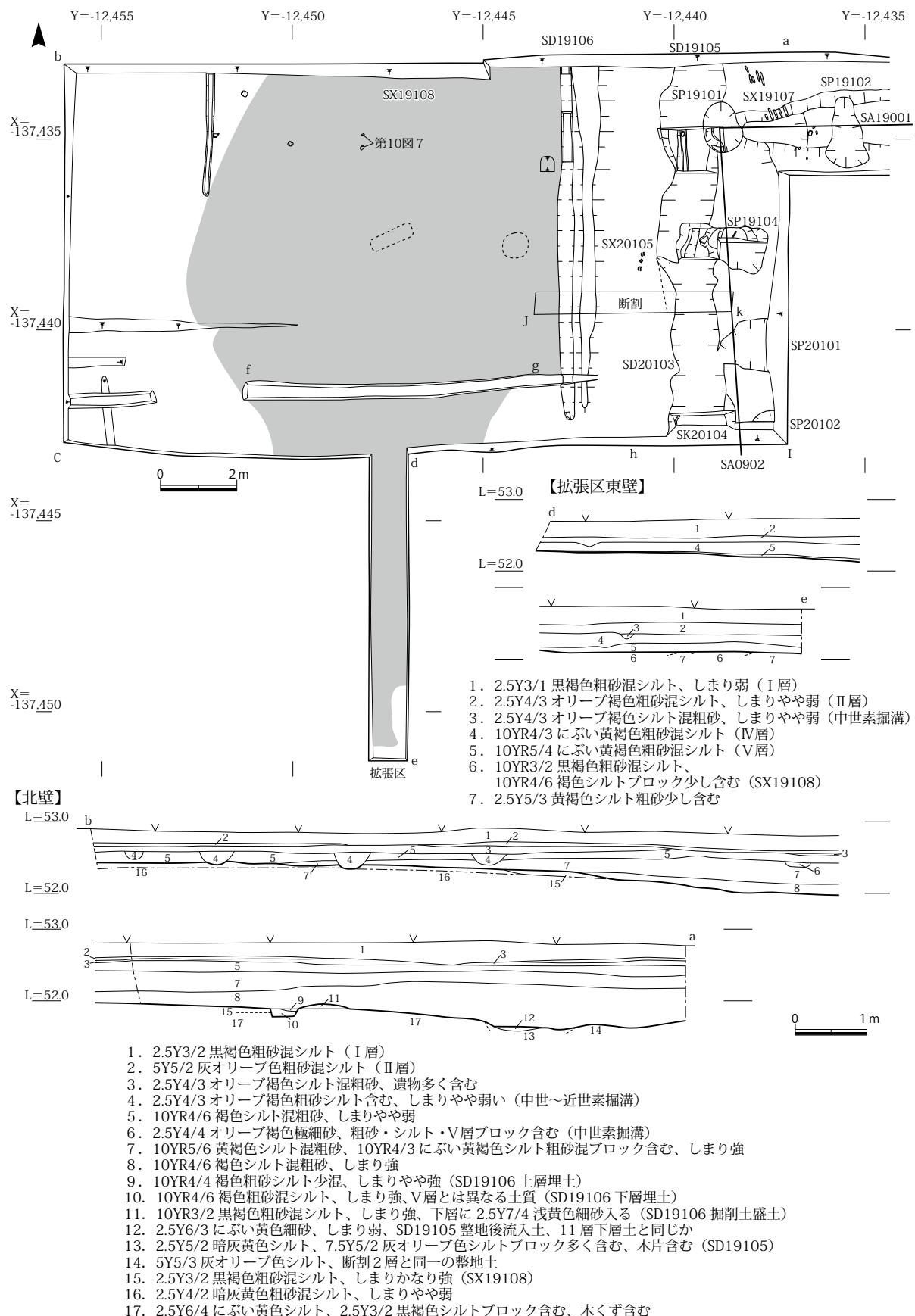
第5図 IR 101-s 第1面遺構平面図（全体1/200、集石拡大1/40、網掛けは瓦）

はV層と近似した土層である。出土遺物がなく遺構の時期は不明であるが、最上層の土質からみて、最終的な埋没はV層の堆積と近似した時期であるといえる。ただ、当初の掘削時期は恭仁宮機能時まで遡る可能性もある。

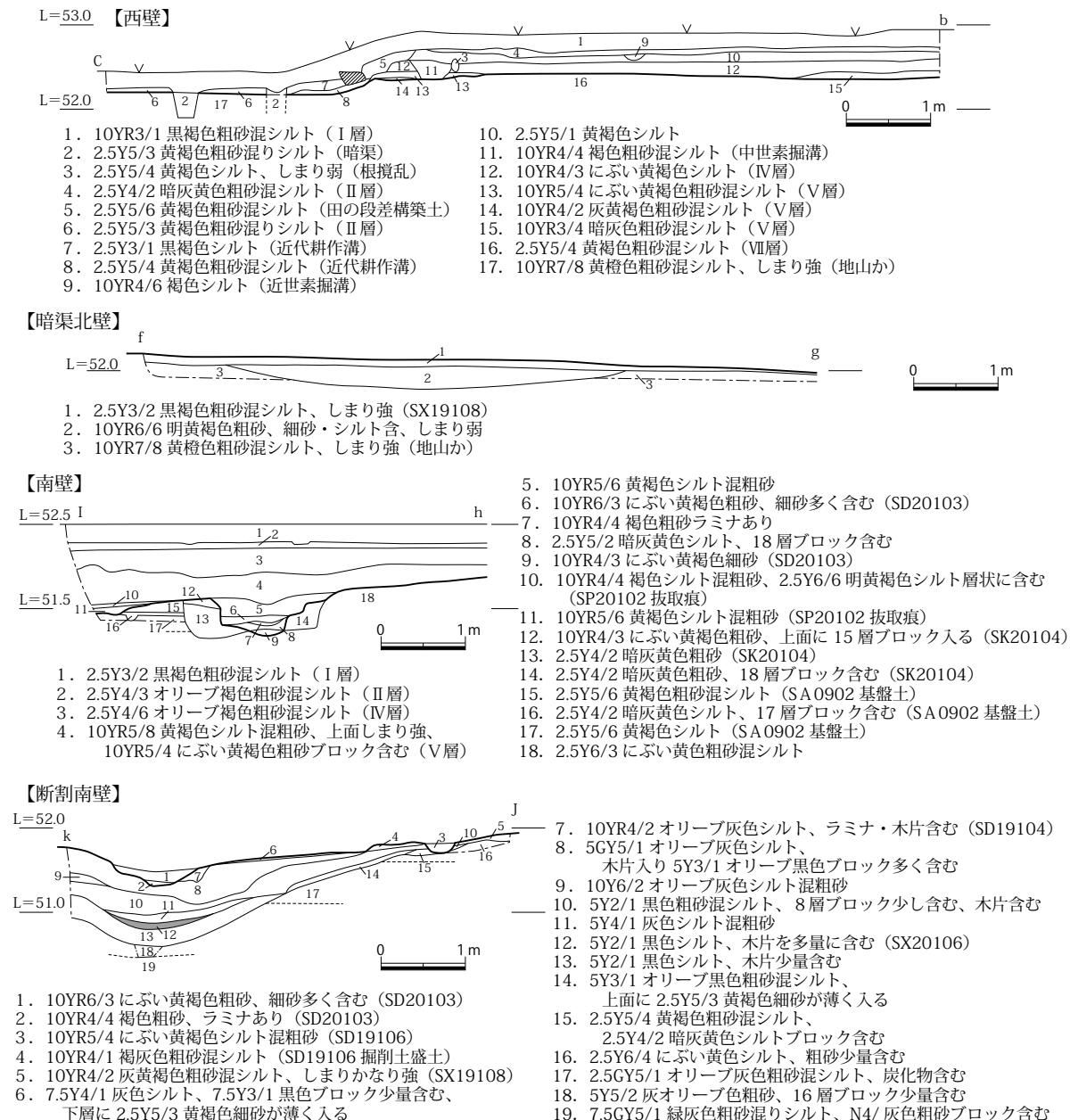
**S K 20104** 調査区の南東隅でS D 20193と重複して検出した土坑である（第7図南壁）。調査区南壁の断割で認識した遺構である。出土遺物は須恵器と土師器片のみである。S A 0902の基礎となる整地土（15・16・17層）から掘りこんでおり、最上層（12層）には15層由来のブロック土による整地を施す。S A 0902の柱穴のように、抜取後に開口していた痕跡がないことから、恭仁宮造営期に掘削・埋め戻された遺構であると判断できる。

**S X 20105** S D 20103の西側で検出した偶蹄目の足跡である。足跡は3つ検出しており、長さ約10cm強で蹄が分かれている。足跡の形状と大きさから、牛の足跡の可能性が高い。蹄の形状から南に歩いたことが分かる。足跡検出面は、断割南壁の8層上面で、恭仁宮造営時にあたる（第7図断割南壁）。恭仁宮造営の運搬に用いた牛の足跡である可能性が高い。

**整地土断割とS X 20106** 恭仁宮整地土の様相を確認するための断割を、S P 19104・20101の中間地点から西側に長さ5m、幅0.5mで設定した。断割の結果、S X 19108がS D 19106より東側に続かないことを確認し、木片を多量に含む層がS D 20103の下層に厚く堆積することが判明した（第7図断割南壁8～13層）。この木片を多量に含む落込みをS X 20106（第7図断割12層）とする。S X 20106検出地点は、朝堂院北面区画で最も標高が低い。周辺から集まる水を処理するために、排水



第6図 IR 10 I-s 第2面遺構平面図、北壁・拡張区東壁断面図（平面1/150、断面1/80）



第7図 IR 10 I -s 西・暗渠北・南・断割南壁断面図 (1/80)

溝として機能した可能性がある。木片を含む層の中でも、12層は土より木片が多い層であり、木簡や斎串等の多くの木片が出土した（第11図23～32）。12層の木片には、木簡や斎串以外にも木札状の加工木を多く含み、大工仕事に由来する木屑が少ない。一方で、8層の黒色土ブロックから出土の木片は、大工仕事に由来する木屑を多く含む。8層の木片はブロック土からの出土であり、二次的に移動した木屑と評価できる一方で、12層の木片は一括して投棄したものである。また、12層には、加工木以外に土師器小片と自然木をわずかに含むのみである。つまり、12層には加工木を選択的に投棄した可能性が高い。斎串を含むことから祭祀行為である可能性と、沈下防止の敷粗朶であった可能性がある。いずれにしても、恭仁宮の整地行為の一端を示すものと評価できる。

S D 19101 S A 0902 の西側で検出した溝で、大半は令和元年度に検出していた。南半は S D

20103 と重複しており、断割断面で確認できる（第7図断割南壁7層）。S D 20103 上面は整地土の6層が覆うため、断割地点より南側では平面的に検出できない。

**S D 19106** 調査区中央東よりで検出した南北溝である。溝の規模は、幅0.35～0.4m、検出長9.24m、検出面からの深さ約0.1～0.16mである。調査区南壁近くで南端となり途切れる。方位はN -0.984° -W、断面は台形で、出土遺物はない。埋土は褐色粗砂混シルトで、V層と似るが明瞭に分かれる。また、流水の痕跡は確認できない。溝の東側は畦状の高まりとなっている。畦の構築土は溝部分の基盤土と近似しており、S D 19106 の掘削土を東側に積み上げて畦を構築した可能性が高い。溝底部の標高は、北から51.9m（北壁）、51.6m（令和元年度南壁）、51.7m（整地土断割）、51.8m（南端）であり、令和元年度南壁地点が最も低い。南に緩やかに傾斜する調査地の地形と、溝底の標高差とは一致しない。藤原宮朝堂院では、朝堂造営に伴う排水または水準のための素掘溝を設けており、<sup>(注6)</sup> S D 19106 も同様に上部構造物の造営に伴う遺構の可能性がある。なお、S D 19106 を境界として西側にS X 19108 が広がることから、両者は一体として構築されたと判断できる。

**S X 19108** S D 19106 の西側に広がる黒褐色粗砂混シルトの分布範囲をS X 19108 としている。令和元年度調査で部分的に検出していたが、今回東西幅を確定し、調査区を南に8m拡張することで南端も確認した（第6図拡張区）。他の整地土とは色調も締りも異なり、上面は固く締まっている。標高は、西ほど高くなる。部分的に黒色が強い柱穴状の地点が2箇所あり断割を行ったが、遺構とは認識できなかった。調査区南端近くの暗渠の断面を観察すると、黒褐色粗砂混シルトの厚みが約0.1mで、下層に明黄褐色粗砂層、さらに下層が地山状の黄橙色シルト層であることがわかる（第7図暗渠北壁）。S X 19108 の時期は、検出面で恭仁宮期の遺物（第10図7）が出土したことから、恭仁宮期の遺構といえる。今回の調査区の北側、平成30年度第98次I R 12 E -s 調査区でも、今回同様の固く締まる黒色土層を検出している（第13図）。S X 19108 は、S D 19106 と一体で構築され、重量物にも耐えうる締まりの固さであり、さらに朝堂院区画北西隅が近接する位置関係であることから、大極殿院回廊の基礎地業である可能性がある。

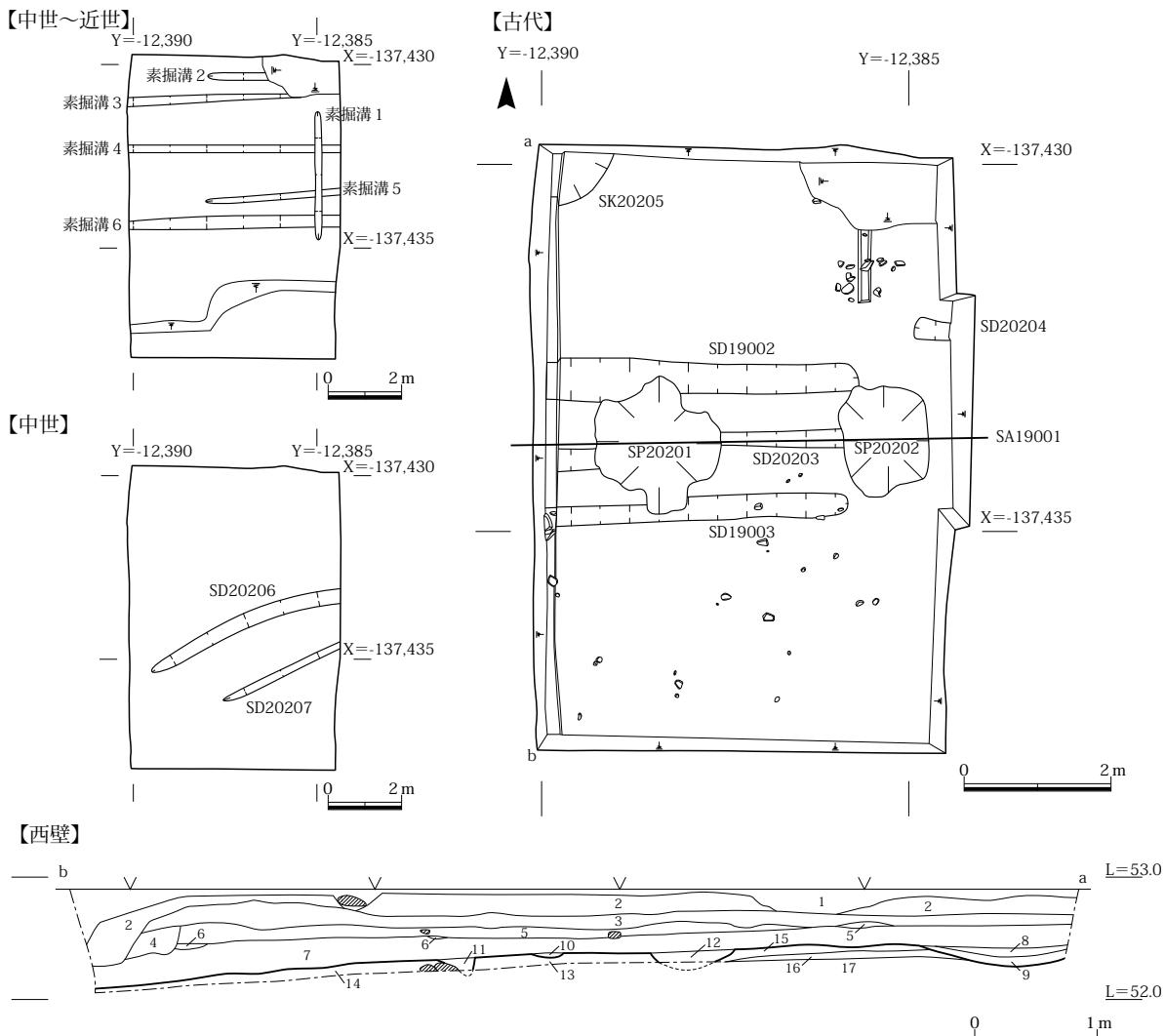
#### （4）IM 22 H -s 調査区（第8図）

朝堂院区画北面中央部西側に設定した調査区である。令和元年度まで民家が建っていた土地であるが、遺構面への影響はほとんどなかった。

表土下約0.3mで中近世の素掘溝群を検出し、地表面下約0.4mで北東から南西に斜行する溝S D 20206・207を検出した。出土遺物はなかったものの、埋土は令和元年度I R 01 I -s 調査区で検出した瓦器片を含むS D 13101 と近似した灰黄色粗砂であることから、中世の遺構と判断できる。

地表面下約0.5～0.8mで恭仁宮期の遺構面を検出し、朝堂院区画北面掘立柱塀などの各種遺構を確認した。恭仁宮期の遺構面は、調査区北端で標高52.5m、南端で標高52.1mであり、北から南に傾斜している。

**S A 19001** S P 20201・202 の2基の柱穴を検出した。朝堂院区画北面掘立柱塀である。平面は直径1.2～1.7mの不整形で、柱穴間の距離は約3m（約10尺）である。平面形が不整形なのは、柱抜



1. 2.5Y3/2 黒褐色粗砂混シルト (I層)
2. 2.5Y3/1 黒褐色粗砂混シルト (I層旧耕作土)
3. 2.5Y4/2 暗灰黃色粗砂混細砂、シルトブロック含む (II層)
4. 2.5Y6/2 灰黃色粗砂、シルト少量含む、(田の段差構築土)
5. 2.5Y5/2 暗灰黃色粗砂混シルト (III層)
6. 2.5Y6/2 灰黃色粗砂、しまり弱 (SD20206・207)
7. 10YR5/6 黄褐色粗砂混シルト (IV層)
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混シルト (SK20205)
9. 10YR5/8 黄褐色シルト (SK20203)

10. 10YR5/6 黄褐色粗砂混シルト、13層ブロック含む (SD20001)
11. 10YR6/6 明黄褐色粗砂混シルト (SD19003)
12. 10YR5/6 黄褐色シルト、粗砂少量含む (SD19002)
13. 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂混シルト (SA19001 基礎)
14. 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂少混シルト、13層よりしまり強 (VII層)
15. 2.5Y5/6 黄褐色シルト、粗砂少量含む (VII層)
16. 2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂 (VII層)
17. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト、粗砂少量含む (VII層)

第8図 IM 22 H-s 遺構平面図、西壁断面図（中世・中世～近世1/200、古代1/100、断面1/60）

取痕が柱掘方よりも大きいためで、同様の抜取痕は朝堂院・朝集院区画で共通している。なお、S P 20202 の北側約 2.1 m に円礫が集まる地点がある。S P 20202 と関わる礎石根石の可能性があるため断割を実施したが、明確な掘方は確認できず、礫が整地土内に埋没した状況であった。そのため、整地土中に含まれる円礫であると判断した。

**S D 20203** S P 20201・202 の間と S P 20201 の西側に続く溝である。S P 20202 の東側には続かない。幅は約 0.2 ~ 0.3 m、深さは西壁で 0.04 m である。柱穴間を繋ぐ位置にあることから、塀の地覆の可能性が高い。同様の遺構は、朝集院南面西側の調査 (I T 11 K-s, I O 24 L-s) でも検出されており、朝堂院・朝集院区画とも同様の掘立柱塀の構造であったことがわかる。<sup>(注7)</sup>

**S D 20204** S P 20202 の北東約 1.5 m で検出した東西溝である。柱穴か溝か確定するため、調査

区を東へ0.3m拡張したところ、東に延びる溝であると確認した。溝心はS A 19001の中心軸から北に約1.5m（約5尺）である。位置関係からみて、門の基壇痕跡ないし雨落溝である可能性が高い。

**S D 19002** S A 19001の北側に平行する溝で、S P 20202の西側で途切れる。溝の幅は約0.4～0.6m、深さは0.2m以上ある。S D 19003とともにS A 19001に伴う基壇ないし雨落溝の可能性がある。

**S D 19003** S A 19001の南側に平行する溝で、S P 20202の西側で途切れている。溝の幅は約0.2～0.3m、深さは0.2m以上ある。整地土由来の円礫を埋土に含む。

**S K 20205** 調査区の北西隅で検出した土坑状の落ち込みである。断面はレンズ状の堆積を示す（第8図西壁8・9層）。出土遺物はなく、詳細な時期は不明であるが、恭仁宮の整地土と近似した堆積土であることから、恭仁宮期の遺構である可能性が高い。

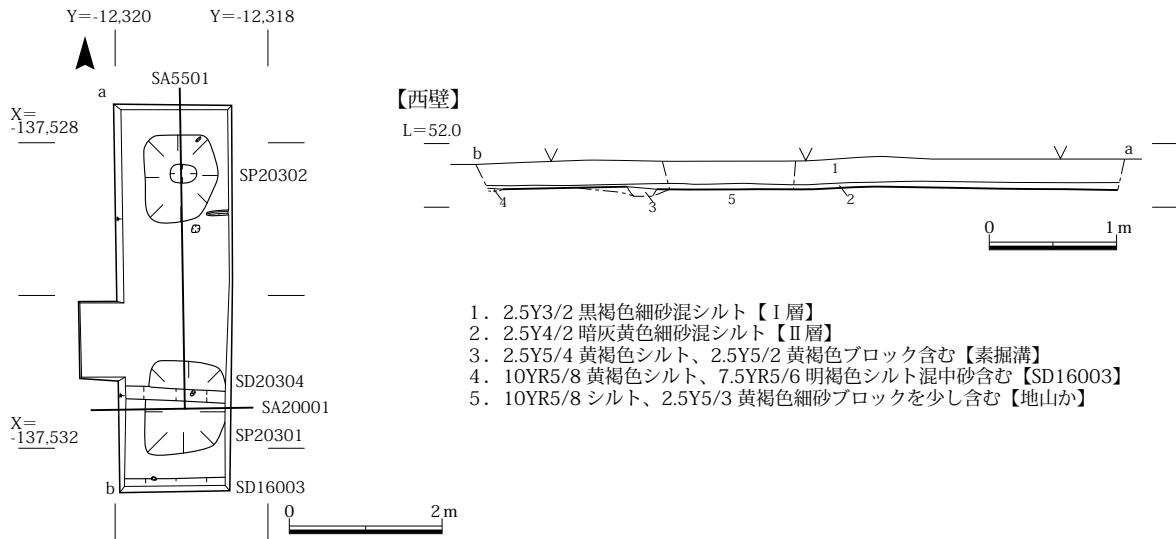
**朝集院区画北門** 平成30年度98次I M 17 E-s調査区S P 18401とS P 20202は、約10.4m（約35尺）の距離がある（第13図参照）。また、S A 19001とS D 20204の南北間距離は約1.5m（約5尺）である。さらに、S D 19002・003は、S P 20202の西側で途切れている。以上の遺構検出状況からみて、S P 20202・18401は朝堂院区画の北門を構成している可能性が高い。S P 20202・18401間には、10-15-10尺間隔で柱が建ち、15尺の中央間が門扉となる三間門を想定できる。S D 20204が門の基壇痕跡ないし雨落溝であれば、距離の短さから控柱を持たない棟門形式であるといえる。S P 20202の南側には同様の溝が確認できないが、遺構検出面がS P 20202の南側で標高が低くなることから、削平された可能性が高い。また、朝集院区画北面掘立柱塀に伴うS D 19002・003がS P 20202の西側で途切れるのは、S P 20202から東側が一段高い基壇であるためと考える。本調査区の遺構面上からは、原位置をとどめない塙の破片が複数出土している（第10図20）。これらの塙を門の基壇外装や基壇上面に用いた可能性がある。朝堂院区画の南門にあたる平成27年第94次I N 22 H-s調査区でも、今回と同様に掘立柱塀両側の溝が門の西側で途切れ、塙の破片が複数出土し、棟門形式の三間門を想定している。<sup>(注8)</sup>そのため、朝堂院区画の南北面中央の門は、いずれも棟門形式の三間門である可能性が高まったといえる。

## （5）I N 05 G-s調査区（第9図）

朝堂院区画南東隅に設定した調査区である。水田耕作されている土地を借地して調査を実施した。

朝堂院区画南西隅は朝集院区画の北西隅から柱間3間内側で接続するため、南東隅も朝集院区画の北東隅<sup>(注9)</sup>から3間内側で接続することが期待できた。ただ、平成9年第54次I N 05 A-s調査区で検出の朝堂院区画東面を延長すると、朝集院区画の北東隅から2間内側で接続する可能性もあった。まず、朝集院区画の北東隅から3間内側で最小限の面積で調査区を設けたところ、朝堂院区画の南東隅を検出することができた。出土遺物は、耕作土から近世遺物がわずかに出土したのみである。

恭仁宮期の遺構面は、耕作土下0.25mで検出した。床土の直下で遺構面を検出しており、恭仁宮期の包含層は皆無であった。遺構面は標高約51.6mでほぼ水平である。朝集院区画北東隅を検出した平成28年第96次I N 03 H-s調査区の遺構面と比べると0.2m低く、耕作等のために遺構面が削平されていることがわかる。恭仁宮期の遺構は、朝堂院区画東面掘立柱塀S A 5501、朝堂院区画南



第9図 IN 05 G-s 遺構平面図、西壁断面図（平面1/100、断面1/60）

面かつ朝集院区画北面掘立柱塀 S A 20001、S D 16003 を検出した。

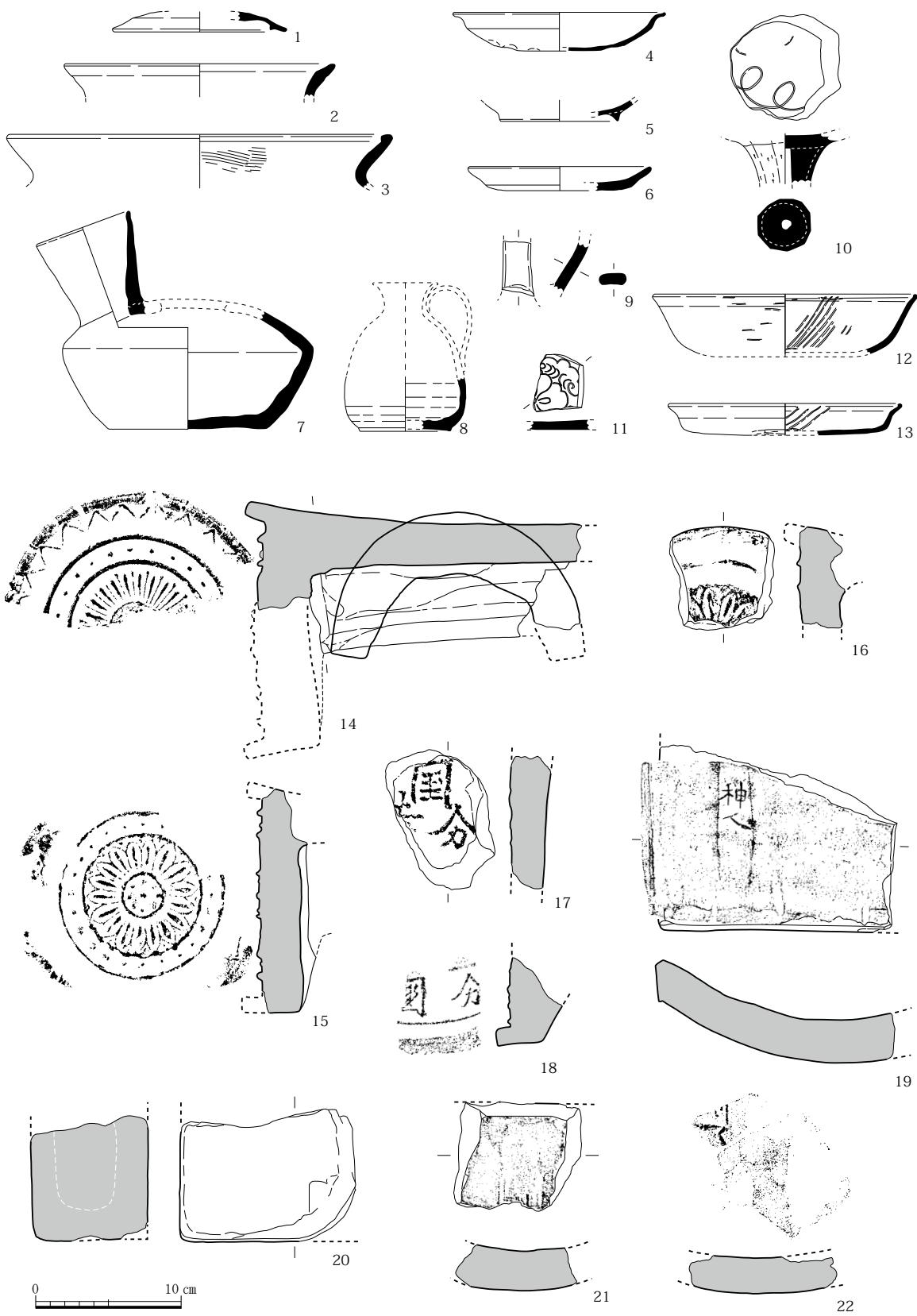
**S A 5501** S P 20301・302 を検出した。朝堂院区画東面掘立柱塀である。S P 20301・302 の柱穴間は約 3 m (約 10 尺) で、他の朝堂院区画掘立柱塀と同じ間隔である。柱穴はいずれも平面隅丸方形であり、S P 20302 は中央に楕円形の柱抜取痕跡が確認できる。S P 20301 の中央北よりには柱穴よりも新しい東西方向の素掘溝が重複する。S P 20301 の正確な柱位置は不明であるが、柱穴中央の座標は X = -12319.2、Y = -137531.4 である。S P 20301 と朝堂院区画北東隅の柱穴 S P 17301 の座標から、朝堂院区画東面の規模は、98.727 m (約 333 尺)、方位は N -1.335° - W となる。S A 5501 の過去の調査区と今回の調査区を合成したものが第 14 図である。今回の調査区の北側では、IN 05 A-s 調査区で掘立柱塀が検出されている。今回検出の S P 20301 と朝堂院区画北東隅 S P 17301 を結ぶと、IN 05 A-s 調査区で検出の柱穴列は想定線から東側にずれるが、その原因は不明である。

**S A 20001** 朝堂院区画南東隅の柱穴である S P 20301 が兼ねる。S P 20301 は、朝集院区画北東隅 S P 16701 から西に約 8.8 m (約 30 尺) の位置にあたる (第 14 図参照)。P 16701 との間には 2 基の柱穴を想定できることから、朝堂院区画南西隅と同様に 3 間西で朝堂院区画が接続することとなり、東西で対称の構造であることが判明した。

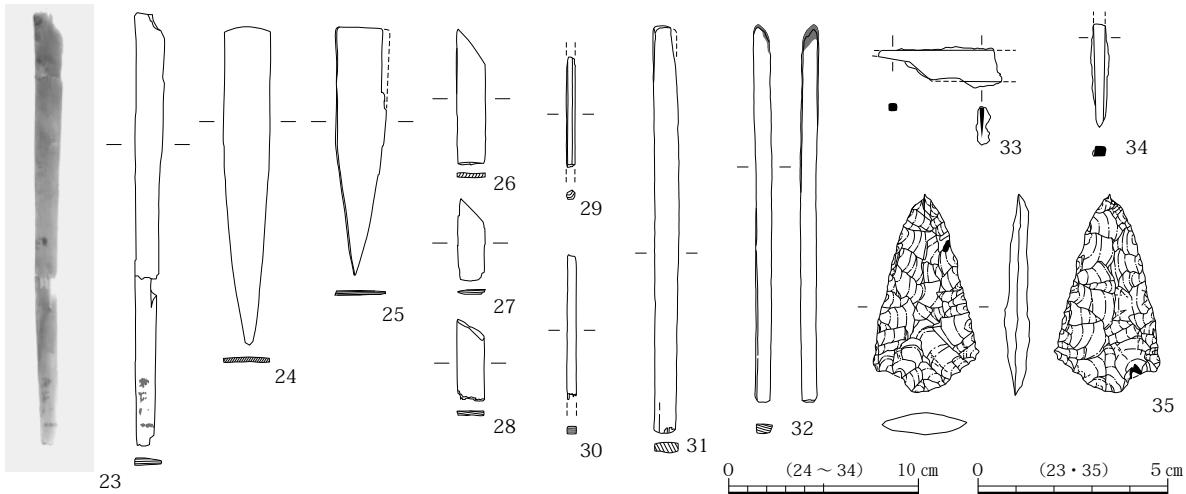
**S D 16003** SA20003 の南側に平行する溝である。溝は削平が著しいが、わずかに溝埋土が残存する。溝の北肩を検出したのみで、溝の幅は不明である。なお、本来ならば S A 20003 を挟んで北側に、S D 16003 に対応する S D 16002 が存在していたはずである。そのため、調査区を西に 0.5 m 拡張し、さらに朝堂院・朝集院区画の掘立柱塀両側の溝の接続方解明を目指したが、削平のため遺構を確認することができなかった。

#### (6) 出土遺物 (第 10・11 図)

今回の調査では、コンテナ 21 箱分の遺物が出土した。1～13 が土器、14～22 が瓦類、23～35 が木製品・金属製品・石器である。1～10・14～19・23～35 が I R 10 I-s 調査区、11～13・20



第10図 出土遺物実測図（土器・瓦類 1/4）



第11図 出土遺物実測図（木製品・金属製品1/4、木簡・赤外線写真・石器1/2）

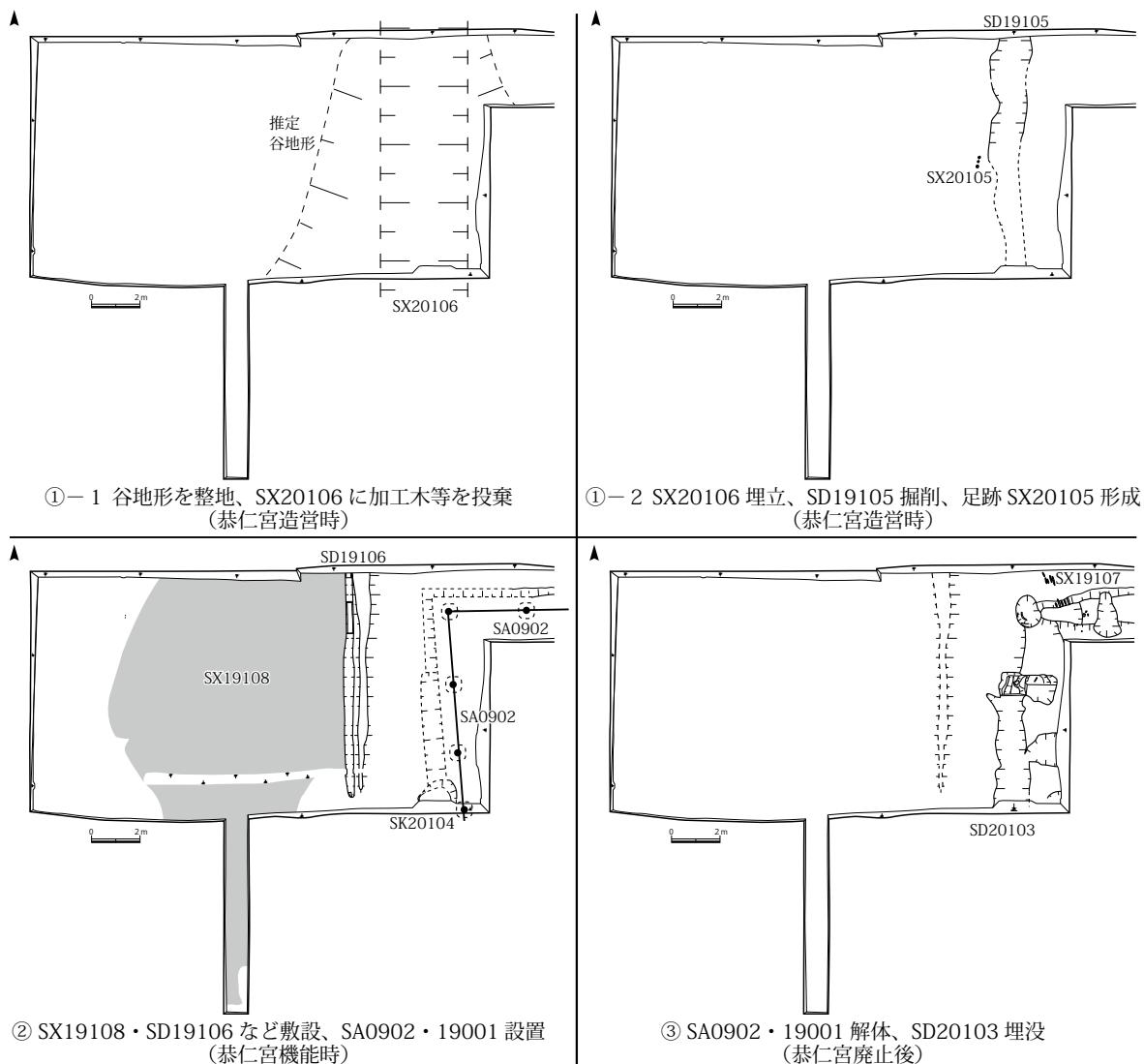
～22がIM22H-s調査区出土で、IN05G-s調査区からは図化できる遺物の出土がなかった。

1・2はIR10I-s調査区整地層断割からの出土で、1が第7図断割南壁10層、2が8層出土である。1は須恵器杯G蓋で、内側に返りをもつ7世紀後半のものである。2は土師器の甕で、口縁端部内側に強いナデ調整を施す。3は素掘溝1出土の土師器の甕で、いわゆる都城形甕である。4は素掘溝6出土の9世紀中葉の土師器杯である。5はIV層から出土した黒色土器A類である。6はIII層出土の鎌倉時代の土師器皿である。7はSX19108検出面出土の須恵器平瓶である。細かな破片が調査区北端を中心に散在して出土した。8は調査区南東隅のV層上半出土の灰釉把手付瓶である。9世紀の猿投窯産である。9はIV層出土の灰釉陶器の把手で、下部が広がる形態からみて、水注の把手の可能性がある。10は調査区南端のIV層から出土した土師器高杯である。脚部は芯棒作りで、杯底部に円弧状の暗文を施す恭仁宮期の高杯である。

11は、IM22H-s調査区素掘溝4出土の猿投窯産の綠釉陶器である。内面の見込に陰刻花文を施し、9世紀後半の黒窓90号窓式に該当する。12・13はいずれもIV層から出土した土師器である。12は土師器杯で、見込に円弧状暗文、立ち上がり部内面に放射状暗文、口縁内側に連弧状暗文、外面に横方法のミガキ調整を施す。13は土師器皿で、見込に円弧状暗文、立ち上がり部内面に放射状暗文、底部外面にケズリ調整を施す。いずれも恭仁宮期の土師器である。

14は、IR10I-s調査区SP19104出土の軒丸瓦である。恭仁宮所用のKM01で、保存状況が良好なため、燻された表面に光沢がある。15は、V層上面で集石とともに出土した国分寺所用のKM05である。16～19は、調査区南端の暗渠出土である。16は国分寺所用のKM05である。17は、13世紀前半の国分寺修理瓦のKM12である。KM12は山城国分寺でのみ確認できる軒丸瓦で、これまでの出土総数が10数点程度の軒丸瓦である。18は、KM12と組み合うKH11である。これまでに出土したKH11と比べて「国」の縦棒が部分的に欠損し、「分」のうち「刀」の左への突出が短い。元の范を修正したものであろう。19は恭仁宮式文字瓦KJ09A「神人」である。

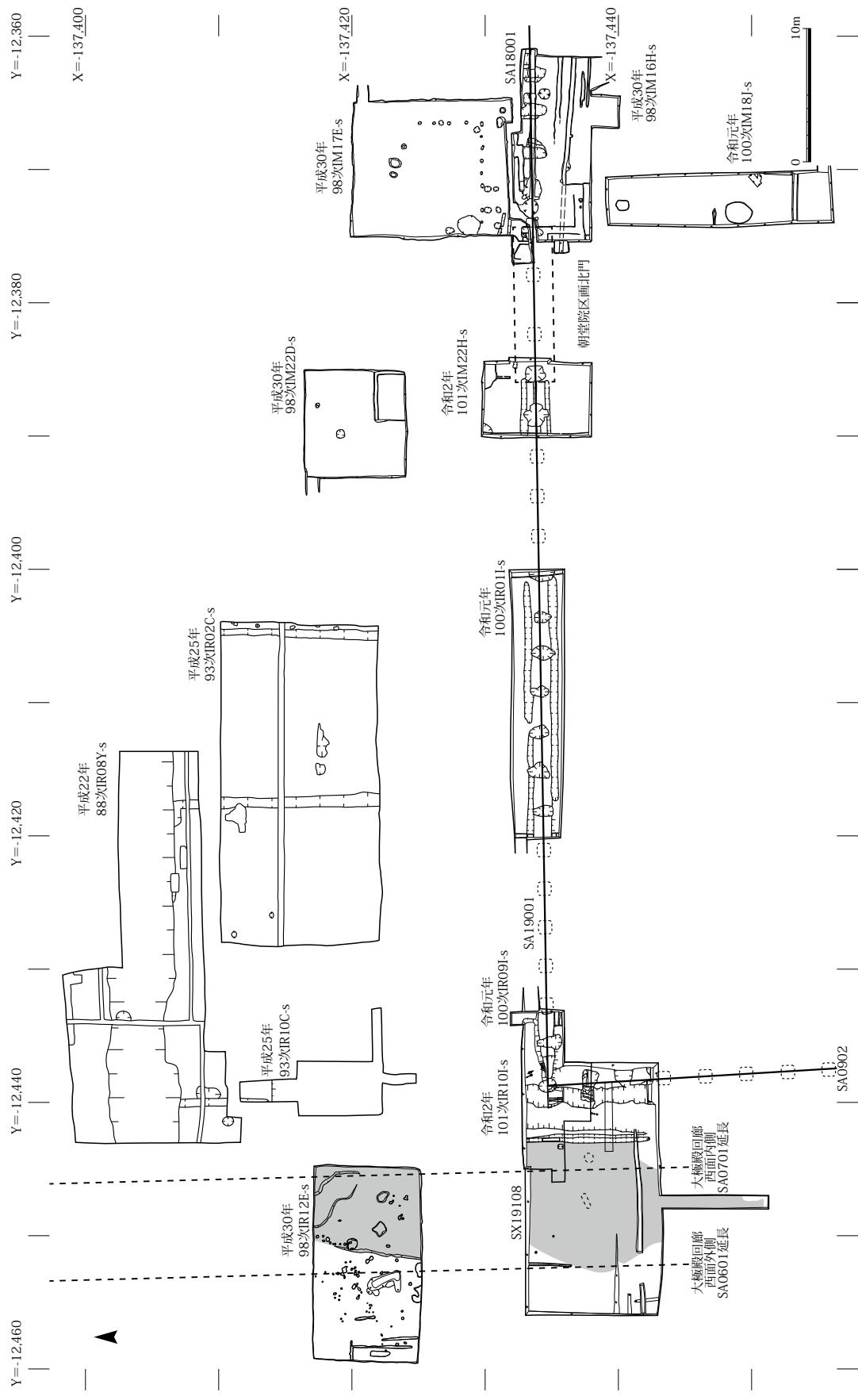
20は、IM22H-s調査区IV層出土の壇である。外面と中心部で胎土が明瞭に分かれる。IM22H-s調査区では他にも壇の破片が3点出土している。21・22は、いずれも恭仁宮式文字瓦KJ01B



第12図 IR 10 I -s 遺構変遷想定図 (1/300)

「刑部」である。

23～32は、IR 10 I -s調査区の断割（第7図断割南壁12層）出土の木製品である。23は、長さ11.4cm、幅0.3～0.7cmの木簡である。周囲は割り裂かれた状態で元の形状は不明である。独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の協力により赤外線カメラによる判読を行ったところ、文字として読むことは困難だが、墨痕であることは間違いないとのご教示をいただいた。なお、赤外線写真は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所からの提供である。恭仁宮跡では、これまでに墨痕のみを含めて7点の木簡が出土している。この7点は、恭仁宮跡の周囲を区画する大垣南西隅で出土したものである。そのため、今回の木簡は、恭仁宮中心部から出土した初の木簡である。24・25は、下端をとがらせた斎串である。24は柾目で上端を円頭形に加工し、25は板目で上端を直線的に加工する。25～28は上端を斜めに加工し、下端を直線的に切った木片である。長さは短いがこれらも斎串の可能性がある。24～28は、23と同様に赤外線カメラによる確認をしたが、いずれも墨痕は確認できなかった。29は断面を多角形、30は断面を方形に加工した細い棒状製品である。29は箸の可能



第13図 I R 10 I -s・I M 22 H -s周辺遺構検出状況図 (1/450)

性が高い。31は、上下左右とも加工のある板状製品で、形状からみて籌木の可能性が高い。ただし、小口面の加工はやや粗い。32は、上端が炭化した棒状製品で、いわゆる燃えさしである。

33・34は、IR 10 I-s調査区で出土の金属製品である。33は、廃土から表採の鉄製刀子である。34はⅢ層から出土した鉄釘である。断面方形の鍛造品である。

35は、IR 10 I-s調査区の近世以降の盛土から出土した有舌尖頭器である。材質はチャートで、両面を丁寧な押圧剥離で仕上げており、素材の剥離面は残らない。形状からみて縄文時代草創期の石器である。

## 4 まとめ

今年度は、各調査区とも大きな成果を上げることができた。中でもIR 10 I-s調査区では、恭仁宮造営時から恭仁宮廃止後までの変遷過程を追うことができる。変遷過程は、恭仁宮造営時、恭仁宮機能時、恭仁宮廃止時の3段階に分かれ、恭仁宮造営期はさらに2段階に分かれる（第12図）。

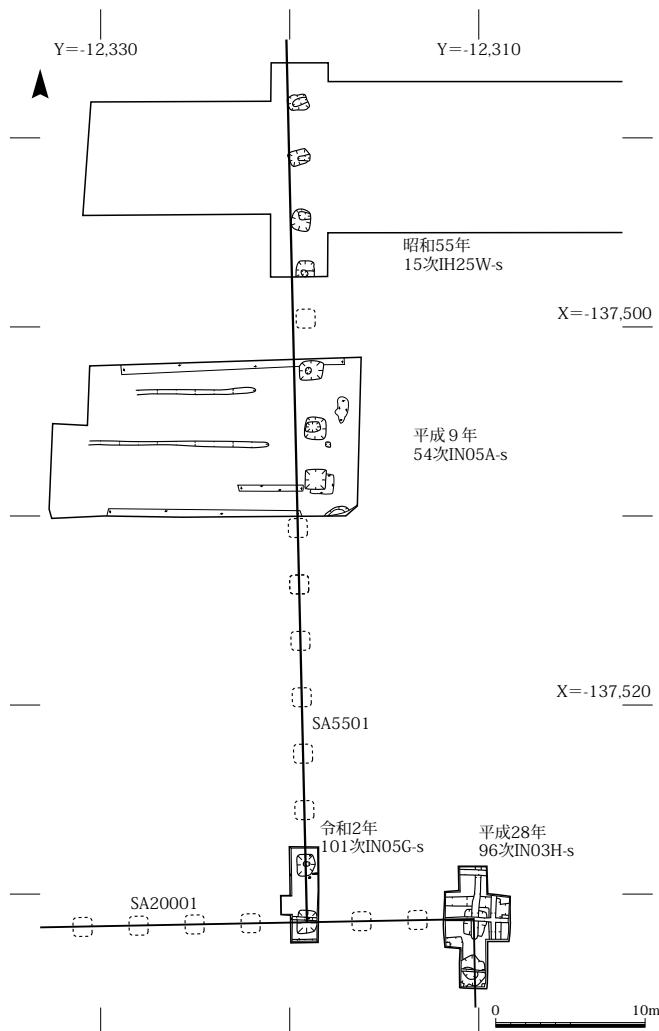
①-1〔恭仁宮造営時〕自然の谷地形を整地し、SX 20106を形成する。整地土の断割調査では、SX 20106の下層でも地山が確認できず、大規模な造成の様相がわかる。SX 20106には木簡や斎串を含む多量の加工木等を投棄する。

①-2〔恭仁宮造営時〕SX 20106埋立て後、排水溝としてSD 19105を掘削する。SD 19105の最上面には整地を施していることから、整地途中の一時的な排水溝である可能性が高い。

②〔恭仁宮機能時〕整地の最後にSD 19106とSX 19108を敷設する。さらに朝堂院区画SA 19001・0902を設置する。SA 0902の西側は、この段階でも周辺より標高が低く、何らかの排水施設を設けていたことは確実であろう。SD 19106が上部構造物造営に関わる溝であり、SX 19108が基礎地業であるならば、今回の調査区内に大極殿院回廊の南西隅が存在した可能性が高まる。SD 19106の南端とSK 20104の位置は東西に並んでおり、さらに西側ではSX 19108の幅が狭くなりはじめる地点にあたる。これは状況証拠的に大極殿院回廊の南限を示している可能性がある。ここに大極殿院回廊が朝堂院区画と接続する場合、SA 0902西側の排水施設は暗渠化する必要がある。位置関係からみて、SD 20103が暗渠を解体した痕跡で、SK 20104が暗渠の出口に関わる遺構である可能性がある。

③〔恭仁宮廃止後〕SA 19001・0902を基壇ごと解体する。掘立柱の抜取後は十分に埋め戻さないまま、SD 20103とともに開口しており、最終的に黄褐色粗砂で埋没する。その後、9世紀代に多量のV層の土が投入されることで、恭仁宮造営以前からの谷状地形は完全に埋没する。谷地形の埋没後は、昨年度に鋳造関係遺物が出土していることから、国分寺に関わる生産活動を行う場へと変化したことがわかる。

今年度の調査では、朝堂院区画南東隅を検出したことで、これまでの調査と合わせて朝堂院区画の四隅を全て検出したこととなった。朝堂院区画の規模は、北・南面の平均値が約116.9m（約395尺）、東・西面の平均値が約98.8m（約333尺）となる。東・西面は335尺で設計している可能性がある。



第14図 IN 05 G-s周辺遺構検出状況図(1/400)

朝堂院区画北面中央で検出した北門の規模が東西約10.4m(約35尺)であることから、5尺分は門の中央間として設定している可能性がある。そのため、東・西面が335尺で設計しているならば、同様に15尺幅の門を設定している可能性がある。東面では、16次IM 05 P-s調査区で15尺幅の柱間を1箇所検出しており<sup>(注11)</sup>、これが東面の門である可能性がある。

大極殿院回廊の南限についても、その端緒となる成果を上げることができたといえる。さらに、恭仁宮全体で8点目、宮中心部では初となる木簡が出土したことでも重要な成果である。ただし、当初目的とした大極殿院回廊の明確な遺構は検出できていない。今後も調査を継続し、恭仁宮中心部の構造解明を進めが必要がある。

(中居和志)

(注)

- (1) 京都府教育委員会 2009『京都府埋蔵文化財調査報告書(平成21年度)』
- (2) 京都府教育委員会 2017『京都府埋蔵文化財調査報告書(平成29年度)』
- (3) 京都府教育委員会 2019『京都府埋蔵文化財調査報告書(令和元(平成31)年度)』
- (4) 京都府教育委員会 2018『京都府埋蔵文化財調査報告書(平成30年度)』
- (5) 奈良文化財研究所の浦蓉子氏のご教授による。また独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 2020『木屑を考える』を参考にした。
- (6) 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 2003「朝堂院東第二堂・東面回廊の調査－第120次』『奈良文化財研究所紀要2003』
- (7) 京都府教育委員会 2000『恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ』
- (8) 京都府教育委員会 2015『京都府埋蔵文化財調査報告書(平成27年度)』
- (9) 京都府教育委員会 2016『京都府埋蔵文化財調査報告書(平成28年度)』
- (10) 加茂町教育委員会 1998『恭仁宮(京)跡発掘調査概要』
- (11) 京都府教育委員会 1982『京都府埋蔵文化財調査概報(1982)』

## 2 府営農業農村整備事業関係遺跡 令和2年度発掘調査報告

京都府教育委員会では、府農林水産部が進める府営農業農村整備事業に係る埋蔵文化財の取扱いについて同部農村振興課と協議を行い、埋蔵文化財の保護と同事業との調整を図っている。事業着手前には、事業地内における埋蔵文化財包蔵地に対し、試掘・確認調査を実施して遺構・遺物の広がり等の詳細な内容を把握するとともに、やむを得ず本調査の必要な部分については、それぞれ関係する府及び各市町埋蔵文化財所管部局と協力して、発掘調査を実施している。

令和2年度の府営農業農村整備事業に係る発掘調査は、京都府教育委員会及び綾部市教育委員会が実施した。その内訳は、本調査3件である（付表1）。

令和2年度の調査組織及び関係機関は以下のとおりである。調査期間中に協力いただいた関係機関及び関係者の方々には記して感謝したい。

### 《調査組織》

調査主体 京都府教育委員会

調査責任者 京都府教育府指導部文化財保護課長 森下 衛

調査担当者 京都府教育府指導部文化財保護課記念物係 主幹兼係長 石崎 善久

副主査 中居 和志

技師 北山 大熙

技師 川崎 雄一郎

調査事務局 京都府教育府指導部文化財保護課

調査協力 京都府農林水産部農村振興課

また、現地調査、ならびに整理作業に当たっては、多数の方々の協力を得た。心より感謝したい。

付表1 令和2年度調査遺跡一覧

#### 1 京都府教育委員会が実施した調査

遺跡名	所在地	現地調査期間
上ヶ市遺跡（第3次）	福知山市川北地内	令和2年7月27日～令和2年7月30日
梅ノ木原遺跡（第1次）	綾部市位田町地内	令和2年11月2日～令和2年12月18日
北野台遺跡（第1次）	綾部市位田町地内	令和2年11月2日～令和2年12月18日

#### 2 その他の機関が実施した調査

遺跡名	所在地	調査機関
北野台遺跡（第2次）	綾部市位田町地内	綾部市教育委員会

## [ 1 ] 上ヶ市遺跡（第3次調査）

### 1 はじめに

上ヶ市遺跡は、福知山市字川北に所在する。府営農業農村整備事業が実施されることから、関係部局との調整を経て、今年度は事業予定地の中で遺跡に影響が及ぶ水路部分に4箇所のトレンチを設定し、発掘調査を実施した。調査期間は令和2年7月27日から同7月30日で、調査面積は16m<sup>2</sup>である。

### 2 位置と環境

上ヶ市遺跡の所在する福知山市川北は、福知山盆地の西側、由良川右岸に位置する。周辺には南側に由良川、北側に山地があり、そこに挟まれるような形で遺跡が立地している。第1次調査では、弥生時代の円形周溝墓や奈良時代から平安時代後期の掘立柱建物群が検出され、寛治5（1091）年に天田郡前貫主丹波兼定が京都の松尾神社に寄進したとされる雀部荘における在地領主の居館跡と考えられている。<sup>(注1)</sup>近年、包蔵地内では場整備事業が計画され、平成28年度<sup>(注2)</sup>及び同29年度<sup>(注3)</sup>、令和元年度<sup>(注4)</sup>に福知山市教育委員会によって発掘調査が行われ、包蔵地内で土師器や瓦器碗を含む包含層が確認されている。隣接する川北遺跡においても発掘調査が行われ、中世の包含層が確認されており<sup>(注5)</sup>、中世に人々が活動していたことが明らかになっている。



第15図 調査地周辺の遺跡（国土地理院「福知山東部」1/50,000）

### 3 調査の概要

#### 第1～4トレンチの調査（16・17図）

水路部分の掘削に合わせて2m×2mの調査区を4箇所に設定し、バックホーによる掘削を行った。耕作土を除去し、表土下0.2～0.6mまで掘削したところで、安定基盤を確認した。遺構・遺物は確認できず、過去のは場整備等によって、遺構面は掘削されていた可能性がある。また、調査中、第3トレンチ付近にて、弥生土器を表採した。

### 4 まとめ

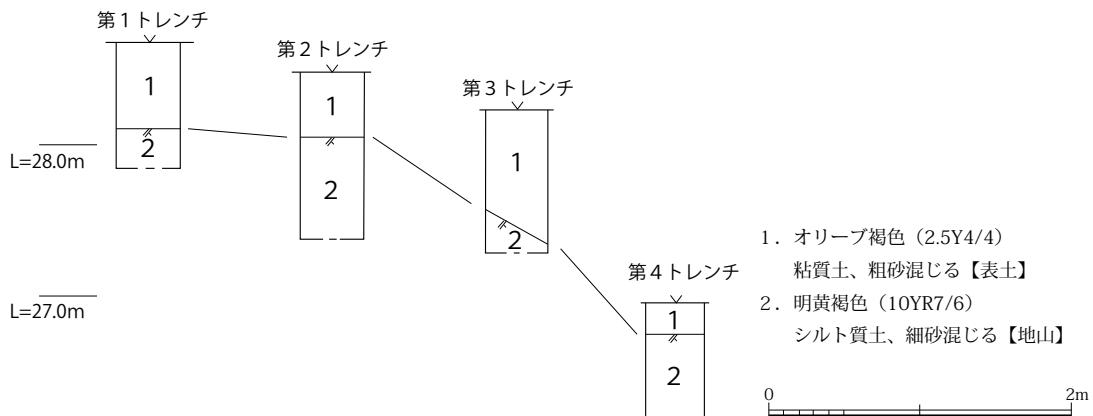
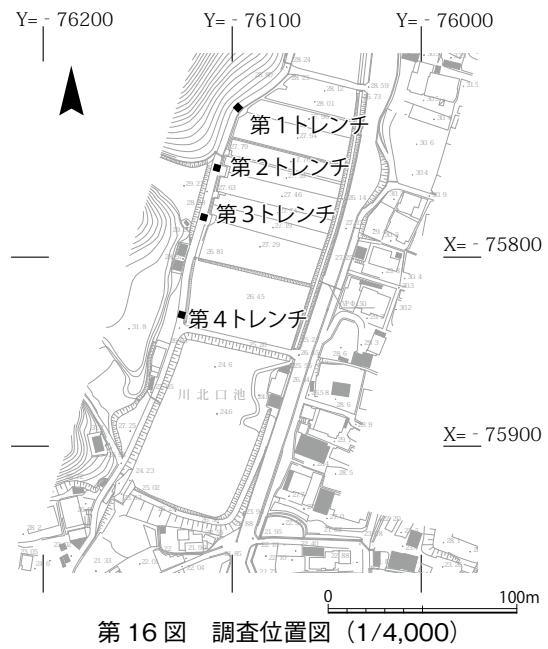
本調査では調査範囲が限られ、各トレンチで遺構・遺物を確認できなかったが、トレンチ付近で、弥生土器を表採することができた。これまでの調査で包蔵地の東部にて周溝墓も検出されており、それらと同時期のもの可能性がある。

以上のように、平成28年度から継続的に行われてきた上ヶ市遺跡の調査によって、これまで不明とされてきた遺跡の様相が次第に明らかになってきた。今後、これらの成果をもとに上ヶ市遺跡の実態を解明することが期待される。

なお、次年度以降もは場整備が計画されており、必要な箇所については調査予定である。

(注)

- (1) 福知山市教育委員会 1993「上ヶ市遺跡」『福知山市文化財調査報告書』第21集
- (2) 福知山市教育委員会 2017「川北遺跡」『福知山市文化財調査報告書』第63集
- (3) 福知山市教育委員会 2018「川北遺跡（第2次調査）」『福知山市文化財調査報告書』第67集
- (4) 福知山市 2020「上ヶ市遺跡（第2次調査）」『福知山市文化財調査報告書』第71集
- (5) 京都府教育委員会 2020「[1]川北遺跡（第3次調査）」『京都府埋蔵文化財調査報告書（令和元（平成31）年度）』



第17図 各トレンチ柱状図 (1/50)

## [2] 梅ノ木原遺跡・北野台遺跡（第1次調査）

### 1 はじめに

令和2年度の調査は、綾部市位田町内にて実施した。第1次調査では、3m四方の正方形のグリッド調査区を設定し、発掘調査を実施した。調査期間は令和2年11月2日～令和2年12月18日である。トレンチは18箇所（第18図）で、調査面積は計162m<sup>2</sup>である。調査期間・整理期間等の関係から、詳細は次年度以降に報告することとし、今年度の報告では調査の概要のみを記す。

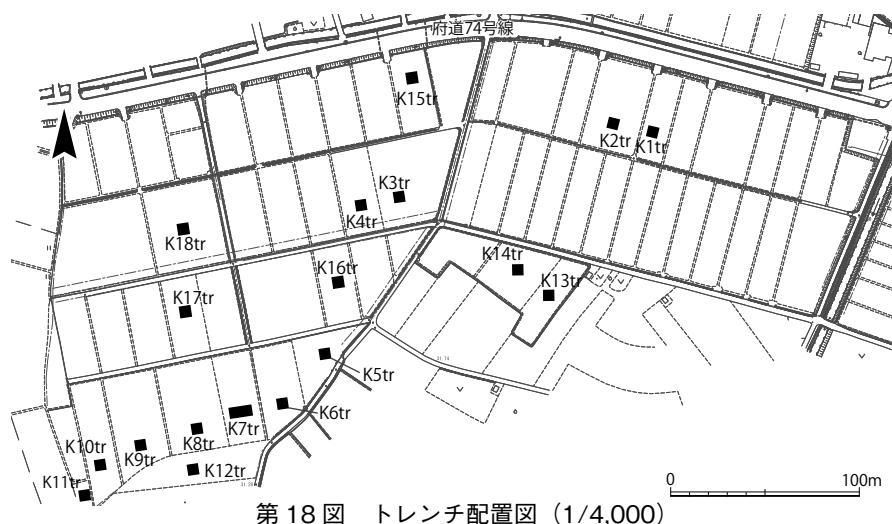
### 2 調査の概要

グリッド調査では3m四方の調査区を調査の同意を得られた耕作地に設定して行った。耕作土を重機で除去した後、床土以下を人力にて掘削し、遺構面の検出を進めた。また、調査区の壁面に沿って、約40cm幅の断割を掘削し、さらなる下位の遺構面の有無や層序の把握に努めた。多くの調査区では、近世の包含層のみが確認され、一部のトレンチについては、中世の包含層を検出することができた。中世の包含層には、瓦器碗や土師器の破片などが含まれていた。

### 3 まとめ

本調査によってこれまで散布地として不明な点の多かった梅ノ木原遺跡・北野台遺跡について、遺構を検出することができなかったものの、全面で近世の包含層が確認でき、一部ではあるが、下層より中世の包含層が確認できた。包蔵地内に中世の生活面が広がっているものと想定される。また、検出面の高低差によって現在のような区画に整備される以前には、微高地として機能していたことが明らかとなった。位田町内における土地利用の変遷について考える重要な成果を得ることができた。

（北山大熙）



### 3 国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」 関係遺跡平成30年～令和2年度発掘調査報告

亀岡盆地の中央を流れる桂川（大堰川）の右岸で、近畿農政局による国営緊急農地再編整備事業が計画された。対象となったのは、亀岡市千代川町、大井町、本梅町、曾我部町、余部町、稗田野町、追分町にまたがる農地である。事業対象地では、多くの埋蔵文化財が調査対象となることが予想されたことから、近畿農政局、京都府、京都府教育委員会、亀岡市、亀岡市教育委員会の間で協議を重ね、切土施工等によりやむを得ず影響を受ける部分について、発掘調査を実施することで合意に達している。

平成26年度には、平成27年2月12日付けで近畿農政局、京都府知事、亀岡市長の3者間において『国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」における埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書』を交換した。今年度は、この覚書に基づき、令和2年4月1日付けで近畿農政局長、京都府教育委員会教育長、亀岡市長の3者間において『令和2年度国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」における埋蔵文化財の発掘調査に関する協定書』を締結した上で、京都府教育委員会、亀岡市教育委員会、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの3機関において発掘調査を分担して実施することになった。

平成30年～令和2年度の調査組織及び調査機関は以下のとおりである。調査期間中、調査に参加していただいた方々、ご協力をいただいた関係機関の方々及び土地所有者の皆様には記して感謝したい。  
《調査組織》

平成30年度～令和元（平成31）年度

調査主体 京都府教育委員会

調査責任者 京都府教育庁指導部理事 文化財保護課長事務取扱 磯野 浩光（平成30年5月まで）  
文化財保護課長 森下 衛（平成30年6月から）

調査担当者 京都府教育庁指導部文化財保護課記念物担当副課長 石崎 善久  
主査 奈良 康正  
副主査 中居 和志  
技師 北山 大熙  
技師 川崎 雄一郎

令和2年度

調査主体 京都府教育委員会

調査責任者 京都府教育庁指導部文化財保護課長 森下 衛

調査担当者 京都府教育庁指導部文化財保護課記念物係 主幹兼係長 石崎 善久  
主査 奈良 康正  
副主査 中居 和志  
主任 岡田 健吾

技師 北山 大熙

技師 川崎 雄一郎

調査事務局 京都府教育庁指導部文化財保護課

調査協力 亀岡市教育委員会、亀岡市経済部国営事業推進課、亀岡市千代川町自治会、

千代川町圃場整備委員会、近畿農政局、京都府農林水産部農村振興課、

京都府南丹広域振興局、京都府南丹教育局、

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

また、現地調査、ならびに整理作業に当たっては、多数の方々の協力を得た。心より感謝したい。

今年度は、平成30年度から令和元（平成31）年度に実施した法貴峰20号墳の測量調査および第1次調査の成果を報告する。

なお、平成30年～令和元（平成31）年度に実施した余部遺跡第14・16次調査及び、令和2年度に実施した千代川遺跡第33次調査の成果は、現在整理作業中であるため令和2年度調査の概略のみを報告することとし、詳細は次年度以降に報告することとした。

#### 付表2 平成30年～令和2年度調査遺跡一覧

##### 1 京都府教育委員会が実施した調査（平成30年～令和2年度）

遺跡名	所在地	現地調査期間
余部遺跡（第14・16次）	亀岡市余部町塞又地内	平成30年11月1日～平成31年2月13日 令和元年5月27日～令和元年8月31日
法貴峰古墳群（測量・第1次）	亀岡市曾我部町中地内	平成31年1月28日～平成31年2月28日 令和元年10月1日～令和元年12月20日
千代川遺跡（第33次）	亀岡市千代川町地内	令和2年12月1日～令和3年2月26日

##### 2 その他の機関が実施した調査（令和2年度）

遺跡名	所在地	調査機関
法貴峰古墳群（第2次）	亀岡市曾我部町中地内	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
犬飼遺跡（第8次）	亀岡市曾我部町犬飼地内	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
金生寺遺跡（第7・8次）	亀岡市曾我部町法貴地内、中地内	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
春日部遺跡（第4次）	亀岡市曾我部町春日部地内	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
井手遺跡（第5次）	亀岡市本梅町井手地内	亀岡市教育委員会



第19図 調査対象遺跡及び周辺遺跡 (1/60,000)

## [1] 平成30・令和元（平成31）年度の調査

### （法貴峠古墳群第1次）

#### 1 はじめに

法貴峠古墳群は、亀岡市曾我部町に位置する20基の円墳で構成される古墳群である。これまで発掘調査は行われていないが、亀岡市教育委員会などで分布調査や測量調査が実施してきた。国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」に伴って、現地協議の際に、今回報告する20号墳が新規で確認され、現地での地表面観察の結果、小規模の前方後円墳である可能性が考えられた。そのため記録保存調査の是非も含め、検討資料を得るため、平成30年度に測量調査を行い、令和元（平成31）年度に発掘調査を実施した。これまでの調査成果の報告を併せて行う。

#### 2 位置と環境

##### 地理的環境

法貴峠古墳群は、亀岡盆地南西部に位置する亀岡市曾我部町中地区に所在する。亀岡市域の中心部となる亀岡盆地は、中生代三疊紀末からジュラ紀末に形成された丹波帯に位置する。丹波帯は、堆積岩である泥質岩、砂岩、チャート、緑色岩類によって構成され、一部に石灰岩を含む。亀岡市域ではこれに、中生代白亜紀以降に形成された火成岩類が加わる。この火成岩によって、盆地の北西に位置する半国山、行者山、また南西部に位置する靈仙ヶ岳等、盆地周辺の山地が形成される。盆地を取り囲む山地は、北西が若丹山地、南西が摂丹山地と呼称される。盆地中央部には北西から南東へ大堰川（桂川）が流れおり、京都盆地を介して淀川に合流する。

古墳群が立地する曾我部町域は大堰川の右岸に位置し、摂丹山地に周囲を囲まれた低位段丘および扇状地に現在の集落が立地する。低位段丘は犬飼川、法貴谷川、曾我谷川の古い合成扇状地が、河川の侵食作用によって形成されたものである。現地形はこの低位段丘と新たに形成された扇状地によって構成される。町域の北部は亀岡盆地の中心部と接するものの、東西と南の三方を山地に囲まれた曾我部町域は、亀岡盆地内でも地形的に独立した一つの地域と見ることができるだろう。法貴峠古墳群は、町域の東に所在する靈仙ヶ岳南東斜面裾に位置し、眼前には法貴谷川と曾我谷川によって形成された低位段丘と扇状地が広がっている。

##### 歴史的環境

法貴峠古墳群の歴史的環境を考える上で、まず、亀岡盆地全体および古墳群が所在する曾我部町周辺の様相から確認していく。

現時点において亀岡市域で確認されている最古の遺物は、鹿谷遺跡の槍先形尖頭器と楔形石器であり、その時期は縄文時代草創期とされる。しかし、亀岡盆地内における縄文時代草創期から前期にかけての活動の痕跡は希薄であり、遺構に伴わない遺物の出土が中心となる。縄文時代中期以降は、土

器の出土数が増加し、遺構も確認される。大淵遺跡では縄文時代晚期の土器棺墓が検出されている。また、遺物の出土量や時期幅から、千代川遺跡では、縄文時代早期から晩期にかけて断続的に集落が営まれていた可能性がある。しかし、現時点では集落構造が判明する調査事例はなく、曾我部町域も例外ではない。曾我部町域では曾我谷川右岸の南条遺跡から縄文時代早期の土器が出土している。

縄文時代晚期以降、低地部での活動が確認されるようになり、水稻耕作を前提とした集落立地への移行が伺える。弥生時代前期の土器は、太田遺跡や千代川遺跡、余部遺跡などから出土している。太田遺跡は弥生時代前期には墓域が展開し、中期には環濠集落が形成される。また、弥生時代中期前葉から中葉にかけて、余部遺跡では、玉作りに関する遺物が出土し、周辺地域の中心となる集落と目される。千代川遺跡は、弥生時代前期から後期にかけての土器が出土し弥生時代を通じて断続的に集落が営まれていたものと推定される。特に畿内Ⅲ・Ⅳ様式段階の竪穴建物や掘立柱建物、方形周溝墓などが確認されており、弥生時代中期中葉から後葉にかけての集落の一端が明らかにされている。墓域としては、千代川遺跡や余部遺跡、天川遺跡、南金岐遺跡などで方形周溝墓群が確認されている。これらの遺跡はいずれも、大堰川西岸地域に所在する。一方、東岸地域では、池尻遺跡や時塚遺跡で前期の遺物を伴う溝状遺構や土坑が検出されているほか、時塚遺跡では中期の集落跡や墓域が検出されている。また、蔵垣内遺跡や河原尻遺跡で後期の竪穴建物が確認されるなど、各地に集落が点在していたようである。以上のように大堰川を挟んで、盆地内の広範囲に当時の集落が展開していたことが明らかになっている。

亀岡盆地における古墳の築造は、古墳時代前期中葉の篠町向山古墳に始まる。この後、糠塚古墳や池尻古墳群、穴太古墳群の一部など、盆地内に前期古墳が築造されるものの、前方後円墳の築造は中期以降に遅れる。一方、亀岡盆地の北に位置する園部盆地では、園部垣内古墳や中畷古墳などの前期の前方後円墳が集中する。古墳時代中期に入ると、盆地の東南部を中心に有力な方墳が複数築造される。亀岡市史編纂に伴い発掘調査が行われた大井川東岸馬路町に所在する坊主塚古墳はその典型例とされる。葺石、埴輪、周濠を有する一辺約38mの方墳であり、組合せ式木棺内部からは四神四獸鏡や、三角板銅留短甲、横矧板衝角付冑、鉄劍、鉄鎧等の豊富な武器・武具が出土している。また中期に入ると、亀岡盆地でも、保津車塚古墳をはじめとした前方後円墳が築造される。

古墳時代後期は、大堰川東岸の千歳町に亀岡盆地で最大規模の前方後円墳である千歳車塚古墳が築造される。その一方、盆地を取り囲む丘陵の各地に小型の円墳等で構成される群集墳が多数築造される。有力古墳の分布に地域的な偏りがあった中期以前とは大きく様相が異なり、被葬者層の性格や、葬送に関する意識にも大きな変化があったものと推察される。盆地の北西部に位置する拝田古墳群や鹿谷古墳群では、石棚や石障を有する横穴式石室が複数確認され、地域的特徴を示している。曾我部町周辺では、靈仙ヶ岳の北方に伸びる尾根上に、前期古墳を含む穴太古墳群が所在する。穴太古墳群では、筒形銅器が出土しており、周辺では最も早い古墳の築造例となる。中期古墳としては、一辺11.5mを超える方墳である南条3号墳が挙げられ、副葬品から5世紀末の築造と推定されている。後期に入ると、曾我部町域を取り囲む揖丹山地の斜面一帯に群集墳が築造される。特に法貴古墳群は総数66基を数え、亀岡市域においても最大規模の群集墳の一つである。曾我部町域で後期段階に活発

化した古墳の築造は7世紀前半まで続くが、6世紀末以降は小規模な無袖式横穴式石室の例が増加し、全体的に小規模化していくとされる。集落遺跡としては、春日部遺跡で古墳時代中期と後期の竪穴建物が検出されており、平地部に群集墳築造の母体となる集落域が展開していたものと考えられる。

古代において、仏教文化の流入と律令制の導入により、古墳の築造が下火になる一方、全国的に地域支配の拠点となる官衙や、信仰の拠点となる寺院が各地に出現する。亀岡盆地内では6世紀末に築造された曾我部町中西山1号墳の副葬品に金属器模倣の台付鉢が含まれるなど、仏教文化の一部が散見される。亀岡盆地で最古となる白鳳期の素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土した桑寺廃寺は桑田郡の郡寺または丹波国府に付随する国府寺とも推定される。同時期の寺院跡としては觀音芝廃寺、池尻廃寺、興能廃寺があり、この時期、一斉に盆地内で寺院の建立が始まる。奈良時代に入ると大堰川東岸地域に国分寺・国分尼寺が整備され丹波国における仏教政策の拠点が整ったといえよう。曾我部町域は、白鳳期に興能廃寺が建立されるなど、盆地内でも早い時期に寺院が整備された地域の一つである。また寺院の建立だけでなく、興能廃寺の北東に位置する曾我部町南条古墓群では、奈良時代から鎌倉時代にかけての火葬墓が確認されるなど、葬送における仏教文化の浸透も確認される。また、町域の北部には西国三十三所の一つに数えられる穴太寺が所在し、伝承では創建が8世紀に遡るとされる。

一方、官衙的な性格が推定される遺跡は、杉南遺跡や池尻遺跡、千代川遺跡、佐伯遺跡などがある。杉南遺跡では、方形柱穴の有する掘立柱建物跡19棟などが検出され、千代川遺跡では正方位で計画的に配置された掘立柱建物群や墨書き土器が検出されている。両遺跡のほか池尻遺跡、南丹市屋賀遺跡を丹波国府の推定地とする説があるが、現時点で国府所在地を決定づける遺物や遺構は検出されていない。古代の生産遺跡としては、篠窯業生産遺跡群が挙げられる。特に亀岡盆地南部に位置する篠町周辺では7世紀後半以降多数の窯が操業される。9世紀から10世紀にかけて生産のピークを向かえ、平安京へ須恵器や緑釉陶器を供給する国内でも有数の窯業生産地に成長する。

平安京の成立以降、亀岡盆地を含む丹波国は、都に隣接し、山陰道を介して山陰・中国地方とつながる、経済・交通・軍事的な要衝として時の権力者から重要視される。平安時代後期の篠では、須恵器・緑釉陶器の生産が衰退する一方、瓦の生産が始まると、背景には、亀岡盆地内に複数の荘園を有していた藤原氏の影響があり、左大臣藤原頼長領として曾我部の名も確認される。その後、曾我部町域は後白河天皇の後院領を経て皇室領となり、鎌倉時代は院やその御願寺領になったとされる。

院政期においては、丹波国司に有力な院近臣が任命され、鎌倉時代には六波羅探題が丹波国守護を兼任するなど、平安時代以降も丹波国の重要性が伺われる。室町時代においては、足利氏の有力家臣が丹波国守護を務めるが、この間、丹波国内は安定していたわけではなく、丹波衆と呼ばれる有力国人が割拠し、国内の各地で戦乱が続く不安定な状況に置かれていた。そのような状況下で、亀岡盆地の周辺には山城や城館が形成された。特に、市域の北部から南丹市八木町にかけて所在する八木城跡は、丹波国守護代内藤氏の居城として、府内でも最大規模の山城となる。曾我部町域にも、法貴山城跡、犬飼城跡などの山城や、法貴館跡や寺村館跡といった城館が所在する。その後、明智光秀による丹波平定を経て、国内の統一が図られ、亀山城・福知山城が築城されるなど近世社会への基礎が築かれた。

以上のように、曾我部町域では、縄文時代早期から遺跡が確認される。弥生時代の様相は不明確な

がら、低位段丘と扇状地で構成される町域は水稻耕作に適した立地であり、古墳時代前期から中期にかけて、町域北部に穴太古墳群や南条3号墳などの有力古墳が築かれるなど、開発が進められたのであろう。特に古墳時代後期以降の造墓活動は顕著なものであり、亀岡市域でも屈指の規模となる群集墳が築かれるとともに、早い時期に古代寺院が建立されることが特徴である。中世以降も藤原氏の莊園を経て皇室関係の領地となるなど、史料上に地名を散見できることから、曾我部町域では継続的に集落が営まれたようである。これは町域を通る摂丹街道とも無関係ではなく、摂津地域へつながる交通の要衝として亀岡盆地内の重要地の一つと評価できるだろう。<sup>(注1)</sup>

### 3 平成30年度調査の概要

#### 測量調査

平成30年度は、トータルステーションとオートレベルを使用した測量を実施し、墳形および墳丘範囲の確認を行った。調査期間は平成31年1月28日～平成31年2月28日である。

20号墳は曾我谷川が形成した低位段丘の縁に立地する。段丘は西に向かってゆるやかに傾斜し、墳丘の周辺は耕作地、または通路として平坦に造成されている。現況で外表施設は確認できないが、表土の一部に約20cmの角礫が散見され、葺石が存在する可能性がある。

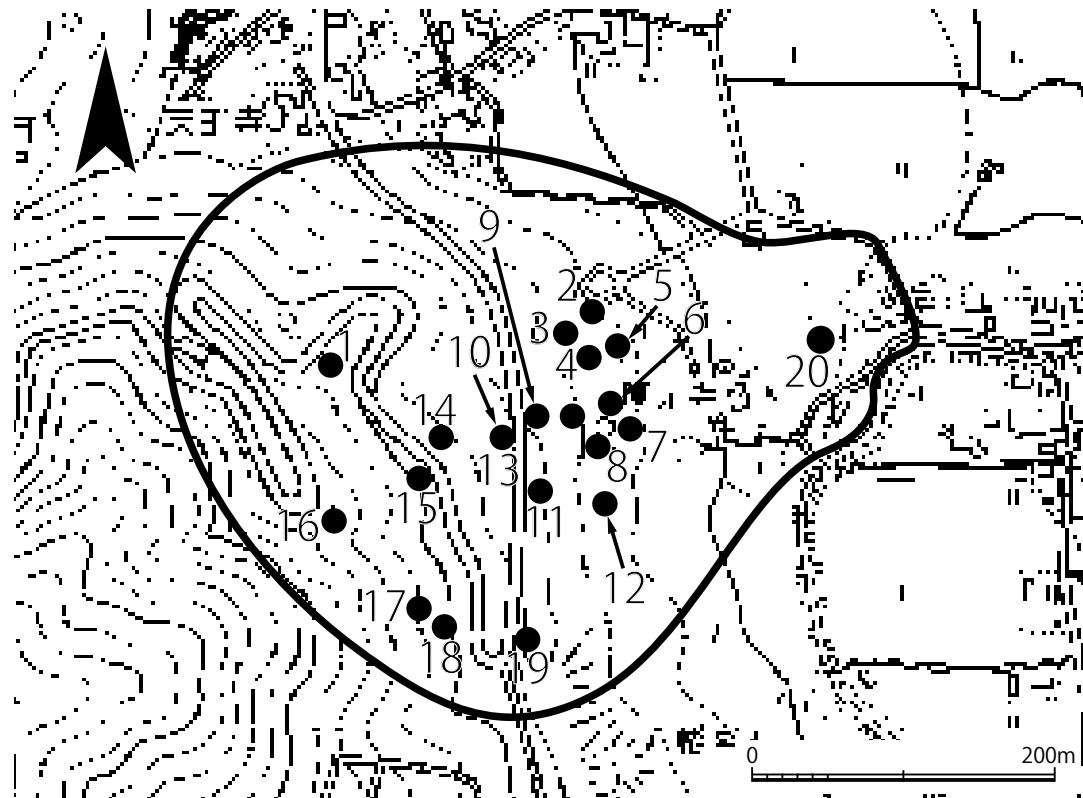
墳丘の北側では標高143.6mのセンターが傾斜変換点となり、標高143.4mのセンターにかけて緩やかに傾斜している。このことから20号墳は2段築成であった可能性が推定される。現況の墳形を確認すると、墳丘裾東側は直線的にセンターが伸びているが、裾部の東から南側にかけては水田区画が間近に迫っており、区画形成の際に地形の改変があった可能性がある。一方、上段の形状は概ね円形に近い。また、墳丘の北東部は、標高143.4mのセンター付近で、南西から北東に向かって突出しており、造出し又は前方部の可能性がある。現況で突出部の上面は全長約3.5m、幅約1.8mである。本来の墳丘部の直径は、約13～15mと推定され、現況の墳丘の高さは約2.1mである。墳頂の標高は現況で約144.2mである。

墳丘の南側では主体部である横穴式石室が露出している。南東方向に開口し、石室の東側壁は良好な状態で遺存しており、約0.5～0.8mの石材が最低3段積まれていることが確認できる。また、東側壁側は袖石が残存しており、片袖式または両袖式であることが確実である。一方、西側壁は損壊しており、現況では確認できない。奥壁もほぼ埋没しており、おおよその位置を特定するにとどまる。羨道入口遺存状況は悪く、一部が崩落している。東側壁を基準に石室の中軸を復元すると、真北に対して西に約45°振っている。推定される石室の全長は約6.2m以上、玄室長は約2.3m以上である。

外表施設としては、葺石の可能性のある石材の散乱は確認できるが、埴輪と周溝は測量の際に、確認できなかった。

#### 小結

測量の結果、法貴峰20号墳は、全長13～15mの円墳か突出部を前方部とする前方後円墳と推定された。墳丘は2段築成で、主体部は袖を有する全長6.2m以上、玄室長2.3m以上の横穴式である



第20図 法貴峠古墳群墳丘位置図 (1/5,000)

ことが判明した。

#### 4 令和元（平成31）年度調査の概要

昨年度の測量調査の結果を受け、法貴峠20号墳の墳形および墳丘規模の確定を目的とした発掘調査を実施した。調査期間は令和元年10月1日～令和元年12月20日である。

調査当初は、前方部または造出しと推定される墳丘北東の突出部の中軸上に、幅40cmのトレンチを設定し掘削を進めた。掘削の結果、突出部は中世以降の盛土であることが確実となったため、本来の墳丘盛土とその範囲の確定のため、石室のある南西方向にトレンチを拡張した。

##### 基本層序

第1層および第2層は表土、およびそれに付随する近代以降の堆積土であり、現況の墳丘斜面に平行するように堆積する。第3層は近世の包含層であり、30cmまでの礫を多量に含む。第4・5層は50cmまでの礫をわずかに含む砂質土である。第1～3層とは異なり、シルトを含む均質な黒褐色砂質土であり、中世の瓦器等を含む。第4層と第5層の土質は非常に似通っているが、第5層の方が締まりが良い。第6層は本来の墳丘盛土である。遺物を含まない無遺物層であり、締まりのやや強い黒色砂質土である。上層の第4・5層と土質は近似するが、第6層は上層に比べて締まりが良い。第4・5層は本来の墳丘盛土が中世段階に搅乱を受け、墳丘上に堆積したものと考えられる。第7層は褐色の砂質土であり、締まりが強く、古墳築造前の整地土であると判断した。

## 墳形

先述のとおり、墳丘北東部の突出部は近世以降に堆積した多量の礫を含む第3層によって形成されていることが明らかになった。つまり、20号墳は突出部を有しない円墳と推定できる。本来の墳丘盛土である第6層の上面は、標高142.9m付近に傾斜変換点があり、標高142.3m付近にかけて緩やかに傾斜する。この部分をテラスと仮定すれば測量調査時の推定通りの二段築成といえる。しかし、第4・5層が本来の墳丘盛土を掘削し再堆積した層であるとすれば、中世段階に大きな地形改変が加えられていることも考えられ、本来の墳丘の形状をそのまま反映するものではない可能性もある。墳丘規模については第6層の北端を本来の墳丘裾と推定すれば全長約13mに復元できる。

## 外表施設

当初、葺石と推定していた礫は近世段階に積まれたものであり、古墳に伴うものではない。ただし、第6層上面には全長30cm程度の礫が北西から南東方向に並ぶように検出された。据付の際の掘方は確認できず、墳丘を構築する際に盛り土に埋め込まれたものと推定できるが、検出範囲が少なく性格は不明である。

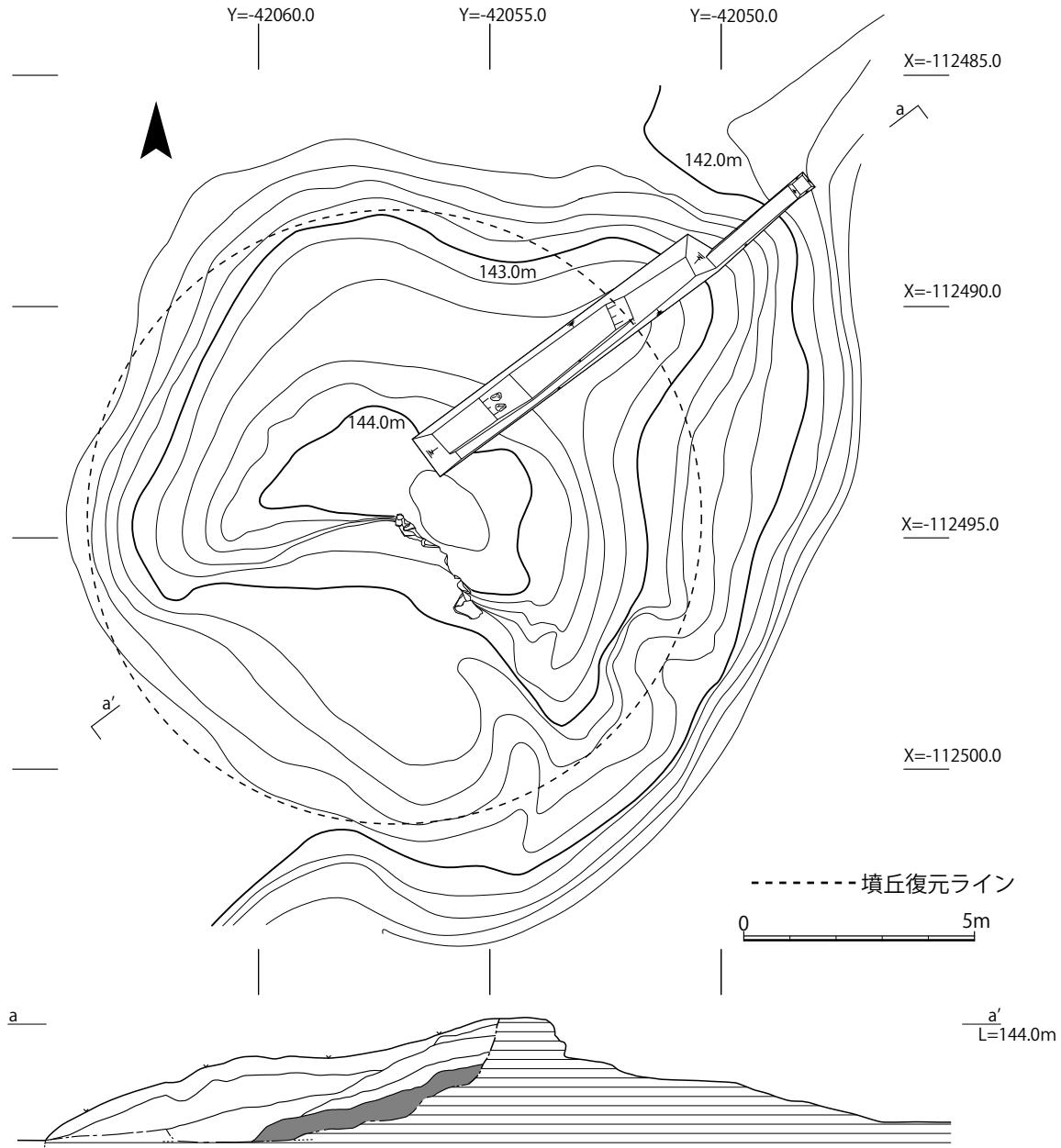
また掘削の過程で埴輪は一切出土しなかったことから、埴輪は伴わないことが確実である。周溝は、今回のトレンチでは確認できなかった。ただし墳丘構築前の整地土である第7層は墳丘裾より北側に続いており、中世の搅乱により墳丘北東側の墳丘が大きく削平されているとすれば、墳丘の北側には周溝が残存している可能性がある。

## 出土遺物

遺物は第1層から第5層で確認された。第6層以下は無遺物層である。1は、土師器の皿である。手捏ねの土師器であり外面は横方向のナデによって調整される。時期は13世紀頃と考えられる。2は布留形甕の口縁部であり、古墳時代前期と判断される。3は須恵器甕の口縁部である。外面に櫛描波状文が施文される。4は須恵器の甕である、櫛描波状文の下に櫛状工具による刺突紋が施される。5は瓦器椀の底部である。高台は退化した三角貼り付け高台であり、内面には暗文が施される。時期は1の土師器皿と同様に13世紀頃と推定する。6は須恵器壺の底部である。外面には自然釉が付着し、底部糸切痕を残す。7は須恵器の高杯の脚部である。透かし孔は確認できず、内面には絞りの痕跡が確認できる。6世紀後半から7世紀初頭と推定される。遺物の時期から3、4、7の須恵器甕と高杯は古墳に伴う可能性があるが、いずれも中世の包含層である第4層より上層からの出土である。

## 小結

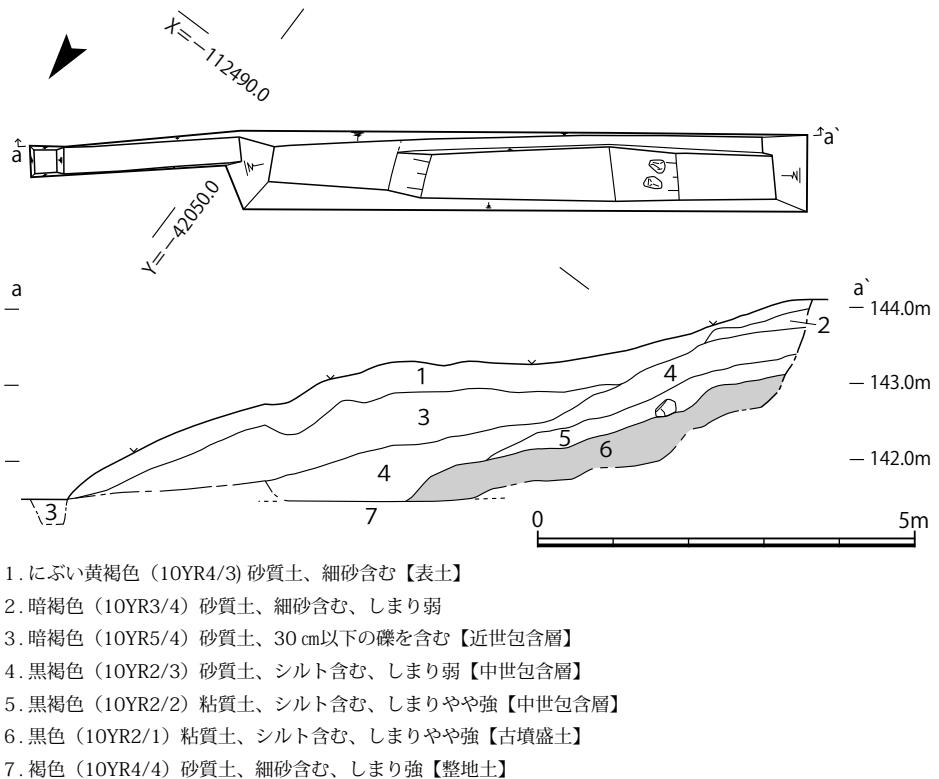
法貴峠20号墳の墳形は、円墳であることが判明した。推定直径は約13mである。墳丘は段丘崖の端に位置し、整地土の上に黒色の砂質土を盛土し、墳丘を構築している。墳丘盛土内には、約30cm程度の礫が含まれ、墳丘内列石等の可能性を指摘できるが、詳細は不明である。墳丘は後世に大きく搅乱を受けており、墳丘北側では、墳丘の流出土、または中世の搅乱土が本来の墳丘上に堆積している。そのため、墳丘の一部が削平されている可能性が高い。埴輪と葺石は存在しないが、周溝については一部残存している可能性がある。出土遺物はいずれも遺存状態が悪く、中世以降の層に含まれるため、古墳の築造または機能時期を直接示すものではない。しかし、波状文のある須恵器甕の口縁や



第21図 法貴峰20号墳測量図 (1/150)

高杯は、本来古墳に伴う遺物であった可能性がある。また、古墳前期の布留形甕や中世の土器が出土したことから、周辺に別時期の遺構が存在する可能性がある。

次に、法貴峰20号墳の位置付けを考えるため、周辺に立地する古墳との比較を行う。まず、比較対象としては、同じ法貴峰古墳群の1号墳および9号墳がある。過去の測量調査で確認された1号墳の直径は18m、高さは3.5mである。主体部は全長10.7m、玄室長3.5m、玄室幅1.5m、羨道長7.2m、羨道幅1mの横穴式石室である。9号墳は直径17m、高さ5mであり、主体部は、玄室長4.7m、玄室幅2.3m、羨道長4.7m、羨道幅1.4mの両袖式横穴式石室である。発掘調査が行われていないため、厳密には比較できないが、1・9号墳に比べて、20号墳の墳丘は小規模であることが確実であろう。しかし、曾我部町域に所在する後期の円墳は、おおむね全長20m以下であり、10mにも満たないものも少なくないことから、法貴峰20号墳は古墳時代後期の同地域においては中規模の円墳であると

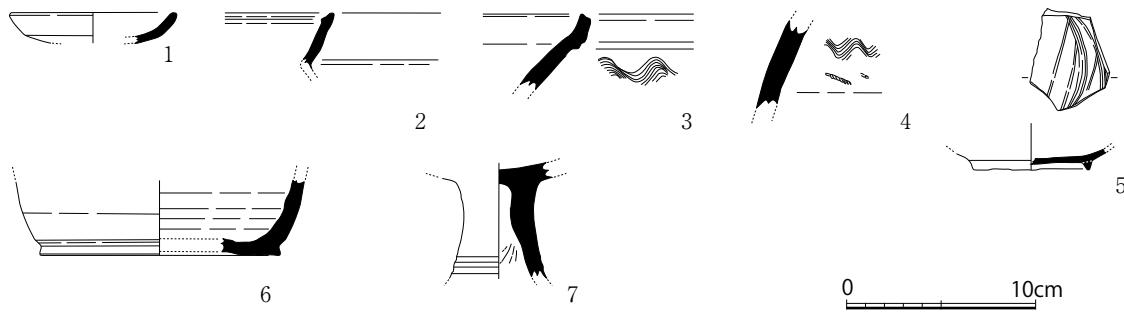


第22図 法貴峰20号墳トレンチ平・断面図（1/100）

言えるだろう。<sup>(注2)</sup>石室構造についても、3基の中では20号墳が最も小規模である可能性が高い。石室を構築する石材については9号墳の石室が全長1～1.5m程度の石材を4段以上積み上げた両袖式横穴式石室であるのに対し、現況で露出している20号墳の石材は、最大1m以下と比較的小振りである。石室の平面プランに関しても、西側壁の袖の有無が不明であるが、1・9号墳に比べ玄室長が短く、20号墳の方がより古い時期の特徴を示しているようである。

次に、法貴峰古墳群と同じく靈仙ヶ岳南東斜面に位置する古墳群の様相を概観する。主な古墳群としては法貴古墳群、中岩山古墳群、中西山古墳群が挙げられる。この中で最も古い特徴を示しているのが法貴18号墳であり、墳丘の全長が9.5m、主体部は片袖式横穴式石室である。一方、中西山1号墳では、無袖式横穴式石室から、須恵器、土師器、金環、鉄鏃が出土している。土器の様相から中西山1号墳の築造は6世紀末であり、7世紀前半に追葬が行われていることが明らかにされた。これまでの調査は断片的であり、周辺古墳群の全容は不明瞭であるが、古墳時代後期を通して靈仙ヶ岳南東斜面に連綿と古墳群が築造されており、遅くとも7世紀前半までは機能していたとされる。

以上のことから、法貴峰20号墳は、法貴峰古墳群においては最大規模ではないものの、曾我部町域に所在する周辺古墳群の中では中規模の墳丘を有する古墳であるといえる。また、袖を有する横穴式石室を持ち、1m以下の小振りな石材によって石室を構築していることから、法貴峰1・9号墳よりは早い時期に築造された可能性が指摘される。また、法貴峰古墳群の中で20号墳のみが段丘の縁に立地することは、20号墳の築造時期が他に先行することを示唆している可能性がある。築造時期や石室構造などの詳細な情報は、今後の調査の進展に期待したい。なお、本調査成果を受け、近畿



第23図 法貴峠20号墳出土遺物実測図(1/4)

付表3 法貴峠20号墳出土遺物観察表

報告番号	種別	器種	出土遺構層位	法量			残存率	胎土	色調	焼成	備考
				口径	器高	底径					
1	土師器	皿	3層	8.5	1.6	—	2/12	密	5YR5/4 明赤褐色	良	雲母少量含む
2	土師器	甕	4層	—	3.0	—	1/12	粗	10YR7/4 にぶい黄橙色	良	長石・石英含む
3	須恵器	甕	表採	—	4.0	—	1/12 以下	密	2.5Y6/1 黄灰色	良	
4	須恵器	甕	4層	—	4.6	—	1/12 以下	やや密	5PB6/1 青灰色	良	1~3 mm 長石含む
5	瓦器	椀	3層	—	—	6.2	4/12	密	N5/ 灰色	良	底部のみ
6	須恵器	甕	3層	—	3.9	12.6	3/12	密	10YR7/2 にぶい黄橙色	良	石英含む、底部糸切痕
7	須恵器	高杯	3層	—	6.1	—	12/12	密	5Y7/2 灰白色	良	

農政局、亀岡市と協議を進め、以降の調査については、周辺部も含め府埋文センターが実施することとなった。

## [2] 令和2年度の調査（千代川遺跡第33次調査）

### 1 はじめに

令和2年度の調査は亀岡市千代川町地内において実施した。

千代川遺跡第33次調査では、事業予定で切土による遺構面への影響が確実な範囲で、なおかつ発掘調査の同意を得られた耕作地に調査区を設定した。調査は平成27~29年度の調査と同様に3m四方の正方形のグリッド調査区を設定し、遺構及び包含層の検出を行った。調査区は千代川町千原、拝田、北ノ庄を中心に、合計99箇所設定し、調査面積は合計891m<sup>2</sup>であった。調査期間は令和2年12月1日~令和3年2月26日である。

詳細は次年度以降に報告することとし、今年度の報告では調査の概要のみを記す。

### 2 調査の概要

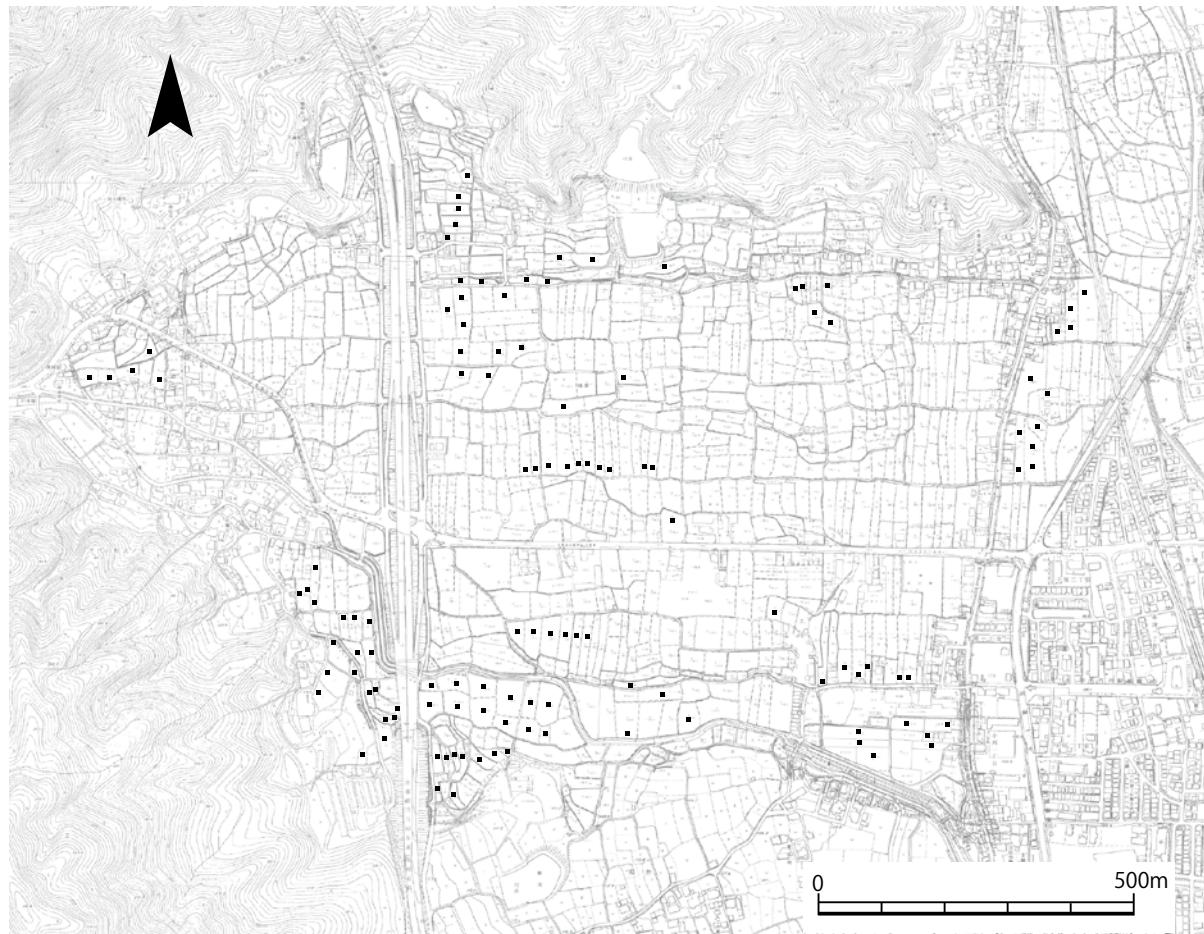
グリッド調査では、原則3m四方のグリッド調査区を、発掘調査の同意を得られた耕作地に設定し、重機によって耕作土の除去を行った。床土以下については人力による掘削にて土砂を除去し、遺構面及び包含層の検出を行った。調査区は来年度以降の作付けが予定されているため、遺構面が確認され

ない場合は、埋め戻しを考慮して調査区全体の掘削を行わず、調査区端に幅40cm程度の断割を行い、下位の遺構面及び層序の確認を行った。断割によって下位の遺構面を検出した場合は、来年度以降の作付けに影響が出ないように、可能な限りの掘削を行い、遺構・遺物の確認に努めた。

これまでの調査で、千代川遺跡は広範囲に中世以前の遺物包含層が広がっていることが確認されている。今年度の調査でも、多くの調査区で中世以前の包含層が検出されている。遺物の多くは、中世の耕作土と推定される砂質土中に含まれることが多く、調査区によっては、その下層で縄文時代～古代の遺構面が検出されている。遺構面は、締まりの良い安定した層位面上で検出される場合もあるが、押田登井谷の調査区では、締まりの弱い黒ボク層の上面で中世の遺構が検出されている。また、北ノ庄桑寺の調査区では、包含層中から古代瓦の破片が複数出土しており、桑寺廃寺の関連施設の存在が示唆される。一方で、平成29年度以前の調査では、包蔵地内に複数の谷状地形が確認されているが、今回も一部の調査区で、谷状地形及び流路を推定させる砂土の堆積が確認された。

### 3 まとめ

今年度の調査では、過去の調査に引き続き、千代川遺跡内の広範囲で包含層の広がりを確認している。令和3年2月時点で確認している遺物は縄文時代から中世にかけての土器、瓦、石器等であり、



第24図 千代川遺跡第33次調査トレンチ配置計画図（1/12,000）

長期間にわたる活動の痕跡が確認された。特に桑寺廃寺に関連すると推定される瓦の検出は、境内地の詳細を明らかにする上で重要な成果であると考えられる。

（川崎雄一郎）

（注）

（1）地理的環境及び歴史的環境は以下の文献を参考にした。

亀岡市史編さん委員会 1995 『新修亀岡市史本文編』 第1巻

亀岡市史編さん委員会 2004 『新修亀岡市史本文編』 第2巻

亀岡市史編さん委員会 2000 『新修亀岡市史資料編』 第1巻

桐井理揮 2017 「南丹地域における縄文・弥生移行期の様相」『第24回京都府埋蔵文化財研究会発表資料 弥生文化出現期前後の集落について』京都府埋蔵文化財研究会

黒坪一樹・浅田洋輔 2019 「5. 春日部遺跡第2次」『京都府埋蔵文化財情報』第135号 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

高橋照彦 2015 「平安時代須恵器の研究現状」『考古学研究会関西例会 200回記念シンポジウム発表要旨集 土器編年研究の現在と各時代の特質－須恵器生産の成立から終焉まで－』考古学研究会関西例会

戸原和人 2003 「(2) 大淵遺跡第4次」『京都府遺跡調査概報』第108冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

（2）周辺の後期古墳で測量調査等で墳丘規模が判明している円墳は、法貴18号墳が全長9.5m、法貴20号墳が12.5m、中西山1号墳が7.2m、南条4号墳が5m、桜峠1号墳が15mである。この他に中西山古墳群で10m以下の円墳が4基、10m以上の円墳が7基あるとされる。また桜峠古墳群は1号墳以外は8～10m程度とされる。

## 4 平成 30 年～令和 2 年府内遺跡等報告

京都府教育委員会では、埋蔵文化財包蔵地内における開発事業に伴い、各事業主体者の協力を得ながら、国庫補助事業府内遺跡として、試掘・確認、分布調査等を実施している。

令和 2 年 1 月から 12 月にかけて当教育委員会では第 25 図、付表 4 に示す総数 27 件の試掘・確認調査及び 1 件の分布調査を実施した。また、併せて、特別史跡・特別名勝鹿苑寺（金閣寺）庭園における京都市との検証発掘調査、並びに昭和 30 年代、高度成長期に発掘を実施したもの、充分整理・報告がなされなかった金比羅山古墳の整理・報告書刊行作業を実施した。

本書では、特別史跡名勝鹿苑寺（金閣寺）庭園、並びに令和 2 年調査分で遺構・遺物の確認された 4 遺跡に加え、平成 30 年度調査の奈具遺跡、令和元年度調査の矢田遺跡について報告を行う。なお、金比羅山古墳については、別途報告書を作成した。

令和 2 年度の調査組織は以下のとおりである。

### 《調査組織》

調査主体 京都府教育委員会

調査責任者 京都府教育庁指導部文化財保護課長 森下 衛

調査担当者	京都府教育庁指導部文化財保護課記念物係	主幹兼係長	石崎 善久
		主 査	奈良 康正
		主 査	吹田 直子
		副主査	古川 匠
		副主査	中居 和志
		主 任	岡田 健吾
		技 師	北山 大熙
		技 師	川崎 雄一郎

調査事務局 京都府教育庁指導部文化財保護課

(岡田健吾)



第25図 令和2年府内遺跡調査位置図（番号は付表4に対応）

付表4 令和2年府内遺跡調査一覧

調査月日	遺跡名称	所在地	概要	調査原因	備考
1 1月 6日	岡安遺跡	福知山市	顯著な遺構・遺物なし	道路拡幅	
2 1月 29日	山崎津跡	大山崎町	顯著な遺構・遺物なし	河川整備	
3 2月 18日	大將軍遺跡	京田辺市	顯著な遺構・遺物なし	自転車道改修	
4 3月 3日	芝山遺跡	城陽市	顯著な遺構・遺物なし	高速道路新設	
5 3月 9日	木津川河床遺跡	八幡市	顯著な遺構・遺物なし	公園施設改築	
6 3月 16日	大徳寺旧境内	京都市	顯著な遺構・遺物なし	府立学校改修	
7 4月 13日	土師遺跡・土師城跡	福知山市	顯著な遺構・遺物なし	府立学校改修	
8 4月 22日	天王山古墳群・上堂古墳群・柏ノ木遺跡	井手町	顯著な遺構・遺物なし	地質調査	
9 4月 27日	下津城跡・長岡京跡	長岡京市	顯著な遺構・遺物なし	雨水施設建設	
10 5月 25日	円満寺遺跡	舞鶴市	顯著な遺構・遺物なし	拘置所施設改修	
11 6月 3日	中館跡	亀岡市	顯著な遺構・遺物なし	溜池改修	
12 6月 4日	瓜生野古墳群	南丹市	遺構・遺物を検出	建物新築	p.108掲載
13 7月 27日	宮ノ背遺跡	八幡市	顯著な遺構・遺物なし	道路改修	
14 8月 3日、 9月 23日	長岡京跡関連遺跡	長岡京市	顯著な遺構・遺物なし	府立学校改修	
15 8月 3日・4日	篠塙業生産遺跡群	亀岡市	顯著な遺構・遺物なし	道路施設新築	p.109掲載
16 8月 7日	境谷南遺跡	舞鶴市	顯著な遺構・遺物なし	道路新設	
17 8月 18日	久々相遺跡	向日市	顯著な遺構・遺物なし	建物撤去	
18 8月 31日～ 10月 21日	特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園	京都市	遺物・遺構を検出	検証発掘	p.41掲載
19 9月 1日	福知山城跡	福知山市	遺構・遺物を検出	道路改修	p.111掲載
20 10月 20日	木津川河床遺跡	八幡市	顯著な遺構・遺物なし	河川整備	
21 10月 28日	犬飼遺跡	亀岡市	遺物を検出	圃場整備	
22 10月 30日	下津城跡・長岡京跡	長岡京市	顯著な遺構・遺物なし	雨水施設建設	
23 10月 12日、 11月 4日	高川原遺跡	福知山市	顯著な遺構・遺物なし	河川整備	
24 11月 9日	長岡京跡	向日市	顯著な遺構・遺物なし	競輪場施設改修	
25 11月 16日	小樋尻遺跡	城陽市	顯著な遺構・遺物なし	道路新設	
26 11月 25日、 12月 17日・21日	木津川河床遺跡	八幡市	遺構・遺物を検出	河川堤防改修	p.113掲載
27 12月 15日	中ノ山遺跡	八幡市	顯著な遺構・遺物なし	府立学校改修	
28 12月 16日	大將軍遺跡	井手町	顯著な遺構・遺物なし	河川整備	
A 1月 21日・22日	老田古墳群ほか	京丹後市	古墳の位置・基數確認 包蔵地外での遺物表探	高速道路新設	

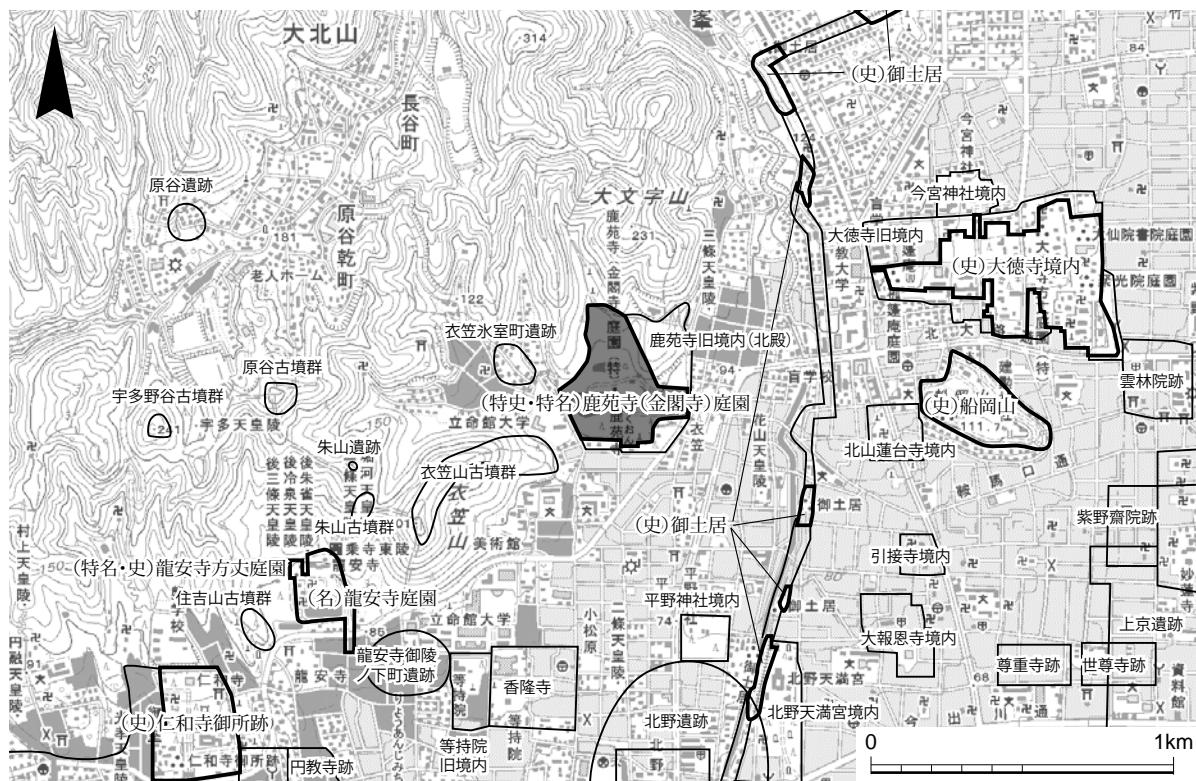
# [ 1 ] 特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園

## (第 25 次調査)

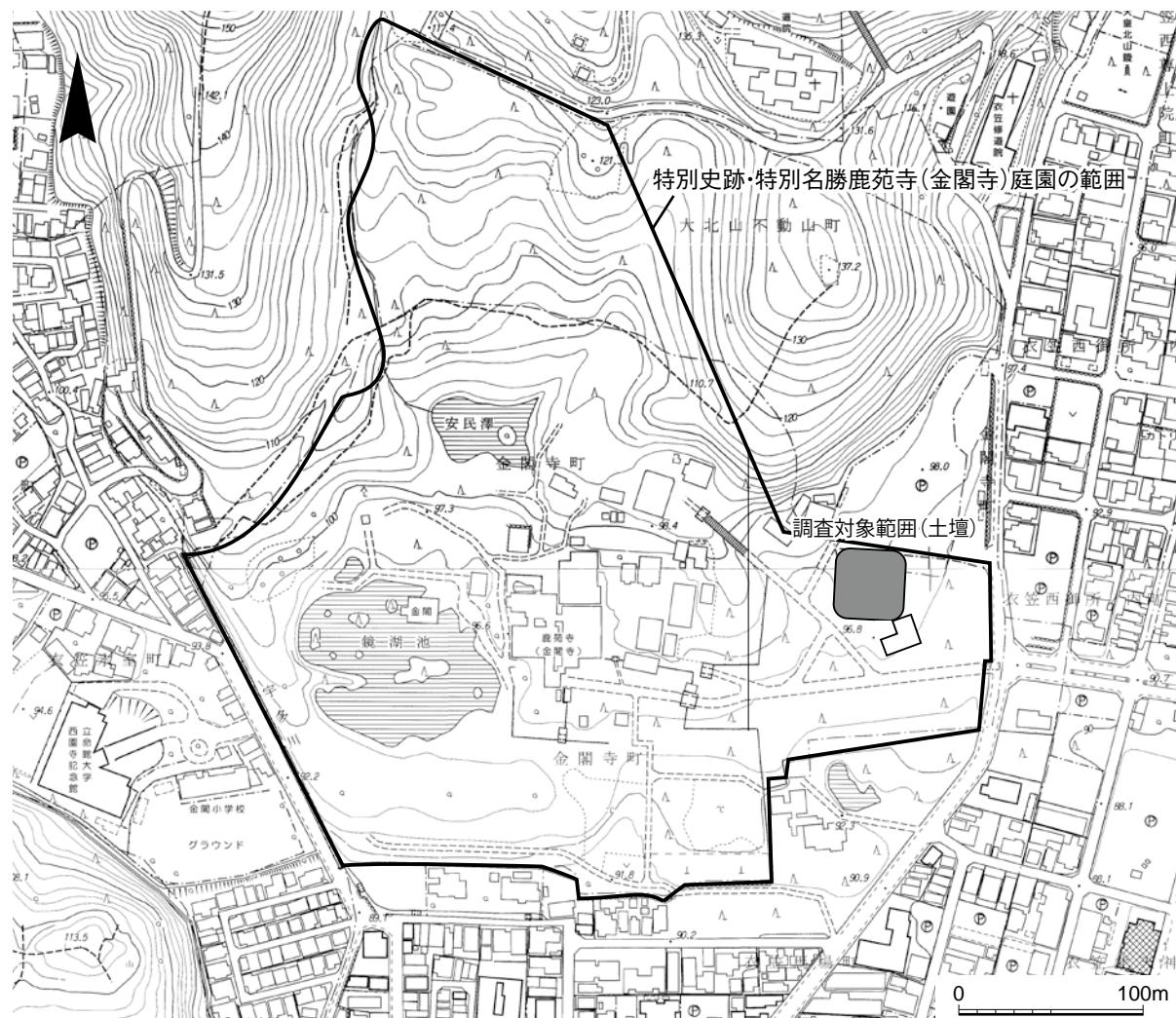
### 1 はじめに

鹿苑寺は、元仁元年（1224）に西園寺公經が建立した西園寺並びに北山第を、応永4年（1397）に足利義満が西園寺家から譲り受けて「北山殿」を営み、応永27年（1420）にこれを足利義持が夢窓疎石を勧請開山として禅寺に改めたものである。大正14年（1925）10月8日、内務省告示第170号で史跡・名勝 鹿苑寺として指定され、昭和27年（1952）10月11日に史跡・名勝 鹿苑寺庭園に名称変更された。昭和31年（1956）7月19日には、文化財保護委員会告示第49号で、特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園に指定されている。指定時の説明には、「本園は足利義満が応永4年（1397）西園寺家の山荘を得て、更にその規模を大にせるものにして同15年（1408）義満は後小松天皇の聖駕を迎えて宴を開くこと数日、世に北山殿行幸といひ、今なおその盛を称す。義満死後遺命により山荘を寺となし鹿苑寺と号すると共にその庭園となれり。庭中有名なる金閣あり、築山林泉あり。近く衣笠山を望み幽雅清邃にして豪宕の景趣を兼ぬ。室町時代の全盛期を代表する名園なり。」とある。

この鹿苑寺庭園で、平成25年（2013）から平成28年（2016）に行われた現状変更は文化庁の許可の範囲を越えて違法行為が為されたものである、とする行政手続法に基づく申出が令和2年（2020）6月29日に文化庁に対してなされた。具体的には、「北山大塔の基壇と推定されている方形の高まり



第26図 特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園位置図（国土地理院『京都西北部』S=1/25,000）



第27図 特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園指定範囲（京都市都市計画地図『原谷』・『衣笠山』 S=1/4,000）

(築山)において、①石垣の築造、②通路の設置、③既存園路、既存広場等の造成等の現状変更は、いずれも文化財保護法にもとづく許可を受けずに、あるいは許可条件に違反して行われた違法な現状変更であるから、速やかに原状回復をはかるなど、必要な是正措置を講ずるよう」、求めたものであった。この申出を受けた文化庁の指導・助言を受けて、京都府教育庁指導部文化財保護課と京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課は協議の結果、事実関係の確認のために調査を実施することになった。調査は、相互に点検が可能な体制を築くこととし、これまで鹿苑寺の現状変更に携わった担当者とは異なる職員を調査担当者に指名して合同で行うこととした。

調査の目的は、申出にある「方形の高まり（築山）」を「土壇」と呼称したうえで、①土壇南東部盛土上の貼石（申出書では「石垣」）が土壇そのものを損壊して施工されたのか、②土壇上に施工された仮設通路（申出書では「通路」）が現状変更許可範囲を越えて土壇を損壊しているのか、③「既存園路、既存広場」と呼称される土壇上の通路等がどの段階で成立したのか、の3点の確認である。

調査の手法として、①、②については検証のための発掘調査により明らかにすることとし、③については発掘調査開始前に詳細な地形測量を実施し、過去の測量図及び発掘調査の成果と照合して、土壇地形が近現代にどのような変遷をたどったのかを検討することにした。

地形測量は、令和2年8月31日から9月3日まで実施した。検証発掘調査は令和2年8月18日付けて文化庁から現状変更許可を受け、令和2年9月7日から10月21日まで実施し、10月6日に報道発表、10月7日には発掘調査箇所の一般公開を行った。発掘調査の面積は、第1トレンチ 30.7m<sup>2</sup>（a区 25.6m<sup>2</sup>、b区 5.1m<sup>2</sup>）、第2トレンチ 3.5m<sup>2</sup>である。

調査期間中、9月17日に独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部の箱崎和久部長、9月18日に京都府立大学文学部の菱田哲郎教授による調査現場の確認及び指導を受けるとともに、文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門の近江俊秀主任調査官、同名勝部門の青木達司調査官の臨検と指導を受けている。

### 《調査組織》

調査主体 京都府教育委員会・京都市文化市民局

調査指導 文化庁

学識経験者 菱田哲郎（京都府立大学文学部教授）

箱崎和久（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部長）

現地調査責任者 京都府教育府指導部文化財保護課記念物係 主幹兼係長 石崎善久

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

課長補佐兼埋蔵文化財係長 馬瀬智光

調査担当者 京都府教育府指導部文化財保護課記念物係 副主査 古川 匠

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課埋蔵文化財係

技師 熊井亮介

調査事務局 京都府教育府指導部文化財保護課

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

調査協力 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・宗教法人鹿苑寺

（石崎善久・馬瀬智光）

## 2 位置と環境

### （1）歴史的環境

鹿苑寺は京都盆地の北西縁辺部の段丘上、北山を構成する左大文字山の南麓に所在しており、東には深い河谷を形成する紙屋川が南北に流れる。

鹿苑寺は足利義満によって建立された御堂御所である北山殿が前身となっており、義満の死後に禅宗寺院鹿苑寺に改められたものである。義満の北山殿の範囲は、北は大北山、東は紙屋川、西は衣笠山、南は一条大路に四至があったとされる。<sup>(注1)</sup>

この範囲は、「北山野」と呼ばれていたようで平安時代前期には皇室御料地であったと想定される。『政事要略』には「北山野」の北限には靈巖寺があったとされ、この所在地については明らかではない

が鹿苑寺の近くに所在していたものと考えられる。<sup>(注2)</sup>また、北山周辺には平安時代後半以降の天皇陵や火葬塚が確認できることから、この地が葬送地と認識されていたことがわかる。さらに『増鏡』の「内野の雪」には、田畠が多く「ゐ中めきたり」という表現が見られることを総合すると、畠や荒地が広がり、その中に塚や寺院などが点在するような、それほど土地利用が活発ではない状況が想像される。<sup>(注3)</sup>

この「北山野」は平安時代末には神祇伯家の領地となったものの、承久の乱以降は権勢をふるった西園寺公經の所領となり、西園寺が建立された。文献によると、本堂である「西園寺」、「せむしやく院」、「功德藏院」、「妙音堂」、「不動尊」、「五たい堂」、「成就心院」、「ほす院」、「けす院」、「無量光院」、「北の寝殿」といった多くの建築物が存在したことが知られ、その様相は法成寺よりも優れていたとさ<sup>(注4)</sup>れる。

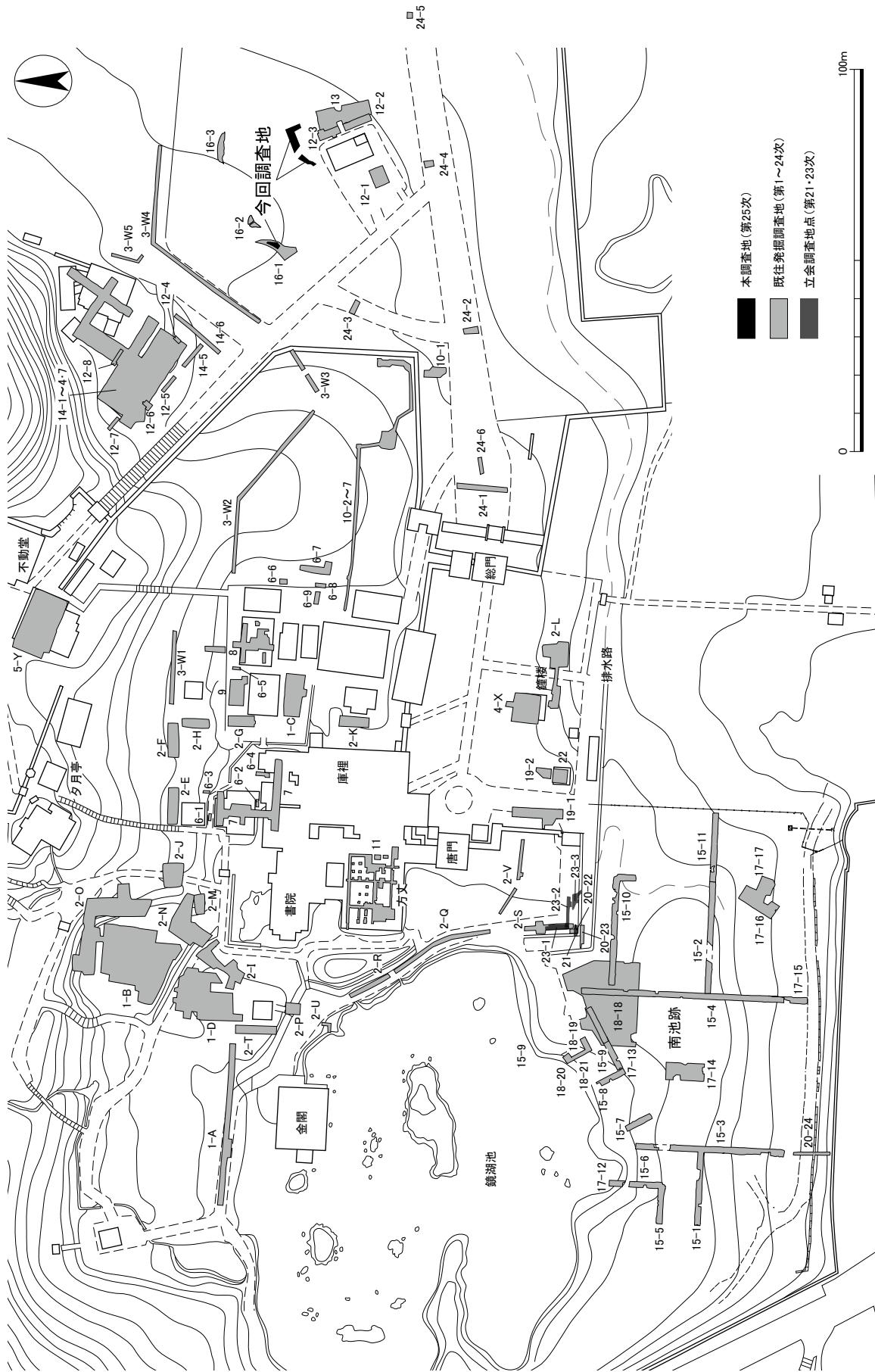
室町時代に入ると、西園寺家より足利義満がこの地を譲り受け、応永4年（1397）に北山殿を造営する。この際、西園寺伝来の堂舎の幾つかが引き継がれている。文献からは、金閣や護摩堂、懺法堂、紫宸殿、天鏡閣、仏殿、泉殿、書院などがあったことが知られている。<sup>(注5)</sup>

義満が応永15年（1408）に没した後、菩提を弔うために夢窓疎石が開山となり禪宗の鹿苑寺が創建され、以降は寺院として今日まで存続している。しかし義満の死後、応永26年（1419）に義満の夫人であった日野康子（北山院）も亡くなると、義持は北山殿の建物の一部を取り壊して南禅寺や建仁寺に寄進しており、わずかに残った金閣と護摩堂が鹿苑寺として引き継がれた。また、応仁の乱では兵火を受け一部の建物が焼失し、その後に再建・新築がなされている。また、乱の兵火を免れた金閣も昭和25年（1950）に焼失している。

本調査地は鹿苑寺境内の東部にあたり、黒門の北西約70mに所在する一辺40m四方の土壇状の高まりである。近世以降、鹿苑寺の境内を描いた絵図がいくつか確認できるが、いずれもこの土壇付近は林もしくは何の表記もなく特段の注意は払われていなかったようである。しかし、この土壇は、後述する周辺調査事例より北山大塔の遺構の可能性が指摘されている（東2001）。北山大塔については、『看聞日記』や『醍醐寺文書』などに記述が見られ、応永23年（1416）に開眼供養直前に落雷によって焼失した記録が見られるものの、位置や規模などに関する詳細な情報はほとんどなく、その実態を考える上での課題が多い。<sup>(注6)</sup>この土壇状遺構は北山殿の一部とも言える「八町柳町」を南北に貫く道祖大路の延長線上を中軸線として、金閣とほぼ左右対称の位置にあることが指摘されている点は注目される。<sup>(注7)</sup>

## （2）周辺調査事例

特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園では、これまでに本調査を含め25次に及ぶ考古学的調査が実施されている。おおよそ南北300m、東西250mの範囲で調査が実施されており、各調査地によって確認された遺構・遺物が多岐にわたることから、ここでは本調査地近辺の調査事例についてのみ取り上げる。



第28図 周辺調査事例 (S= 1/1,500) (付表5文献13掲載図に加筆)

付表5 周辺調査事例一覧（第28図に対応）

次数	種別	面積	調査期間	調査概要	文献
1次	発掘	600m <sup>2</sup>	1988.10.25 ～1989.04.03	室町時代の建物・廊・池・石組・溝・土坑、江戸時代の溝。	1 6
2次	発掘立会	722m <sup>2</sup>	1989.07.04 ～1990.03.13	平安時代の築地・建物、鎌倉時代の石組、室町時代の建物・石組・石列・溝。	2 6
3次	発掘	148m <sup>2</sup>	1990.05.24 ～1990.07.31	平安時代の土師器皿埋納、室町時代の建物・池。	3 6
4次	発掘	57m <sup>2</sup>	1992.11.25 ～1992.12.18	平安時代中期の土坑・遺物包含層、室町時代の溝、江戸時代の溝・土坑。	4 6
5次	発掘	200m <sup>2</sup>	1994.08.23 ～1994.10.21	室町時代の建物・柵列、桃山時代の整地層、江戸時代の石組溝・集石・落込み。	5 6
6次	試掘	42m <sup>2</sup>	1997.11.07 ～1997.12.27	室町時代の井戸・池・整地層、江戸時代以降の整地層。鎌倉時代の土師器・瓦。	7
7次	発掘	115m <sup>2</sup>	1999.03.03 ～1999.04.05	室町時代の礎石建物・溝・池、江戸時代の礎石建物・井戸・溝・暗渠。	8
8次	発掘	64m <sup>2</sup>	2001.04.23 ～2001.05.24	室町時代の柱列・柱穴・溝・土坑・堀、江戸時代以降の肥溜め・薬研堀・土塁。	9
9次	発掘	21m <sup>2</sup>	2002.01.25 ～2002.02.05	室町時代の土坑、江戸時代以降の柱穴・溝・土蔵基礎・廃棄土坑。	10
10次	発掘	246m <sup>2</sup>	2003.08.18 ～2003.10.10	平安時代の柱穴・鎌倉時代の柱穴・集石・溝・整地層、室町時代の礎石建物・柱穴・土坑・溝・整地層、江戸時代以降の溝。	11
11次	発掘	300m <sup>2</sup>	2005.08.03 ～2006.02.27	鎌倉時代の整地面、室町時代の礎石建物・柱穴・溝・集石・埋納土坑・整地面、江戸時代の礎石建物・躊躇・石列・溝・集石・土坑・土器埋納・化粧面・整地面。	12
12次	発掘	64m <sup>2</sup>	2012.12.17 ～2013.02.01	平安時代から室町時代の整地層、室町時代の井戸・土坑、江戸時代の道路状高まり。	13
13次	発掘	65m <sup>2</sup>	2013.08.01 ～2013.09.07	平安時代の溝・土坑・ピット、鎌倉時代から室町時代の整地層、江戸時代の土坑。	13
14次	発掘	447m <sup>2</sup>	2015.04.01 ～2015.07.21	平安時代の土坑群、鎌倉時代の基壇状高まり・落込み、室町時代の高まり・池・瓦窯。	13
15次	発掘	352m <sup>2</sup>	2016.06.01 ～2016.12.09	中世の整地層・礎石・溝・瓦溜・島状高まり・堤構築土・造成土。	－
16次	発掘	37m <sup>2</sup>	2016.11.01 ～2016.11.21	鎌倉・室町時代の被熱層(被熱面)・造成土・整地層。	14
17次	発掘	134m <sup>2</sup>	2017.05.08 ～2017.07.06	中世の堤構築土・造成土、近世の護岸石・溝・水門跡。	－
18次	発掘	36m <sup>2</sup>	2017.09.25 ～2018.03.30	中世の堤構築土・造成土・礎石建物・硬化面・たたき、近世の護岸・土坑・水門跡・堤構築土。	－
19次	発掘	48m <sup>2</sup>	2018.02.14 ～2018.03.12	室町時代の落込み・整地層、江戸時代の路面・整地層、明治以降の土塙。	15
20次	発掘	15m <sup>2</sup>	2018.06.04 ～2018.08.03	室町時代の礎石建物、江戸後期の土塙。	－
21次	立会	—	2019.07.23 ～2019.07.24	近現代の土塙。	－
22次	発掘	15m <sup>2</sup>	2019.10.02 ～2019.10.17	近世後期の土壇・石組基壇。	－
23次	立会	—	2019.10.11 ～2019.10.16	室町時代の景石。	－
24次	発掘	38m <sup>2</sup>	2020.06.22 ～2020.08.04	室町時代の整地層、江戸時代の路面・整地層。	－
25次	測量 発掘	34m <sup>2</sup>	2020.08.31 ～2020.10.21	本報告	本書

※『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-9(文献13)の表1を  
加筆・調整

## 文献一覧（付表5の文献番号と一致）

- 1 前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 2 前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 3 前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 4 前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 5 前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 6 前田義明ほか『特別史跡特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園 防災防犯施設工事に伴う発掘調査報告書』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第15冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 7 東 洋一「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 8 南 孝雄「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 9 東 洋一「第8次調査」『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-9 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 10 鈴木久男「第9次調査」『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-9 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 11 高橋 潔『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 12 小檜山一良『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-17 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 13 丸川義広ほか『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-9 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年
- 14 布川豊治『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-13 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2017年
- 15 鈴木康高『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017-11 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2018年

※第15・17・18・20~24次調査については、令和3年に報告書刊行予定。

第3次調査では、土壇の北側と西側で5箇所の調査区が設けられている。このうちW-2区の東半部からW-4区の西半部にかけて池状遺構を確認している。W-4区では攪乱のため肩口を確認することができなかったものの、W-2区では池の西肩口を確認しており、肩部には摩耗した石英の玉石を敷き

州浜を形成している。また、池の底には白色粘土が貼られていたと報告されているが、池の堆積を示すような腐植土層は確認されていない。また、W-2～4区では、池の下層で平安時代中～後期のピットと包含層を確認している。W-4区の屈折部付近では、室町時代の建物23を確認している。ただし、調査区の規模や埋設管などにより、確認できたのは礎石2基のみで建物の規模や性格については不明である。この建物23のすぐ東側では同じく室町時代の池28が確認されている。確認できる東西長は10mほどで、州浜や護岸の施設は確認されていないが、東肩口ではチャートの景石らしき石材が確認されている。埋土からは多量の瓦が出土しており、瓦で池を埋めたような状態と報告されている。なお、出土した瓦には被熱痕跡は確認されていない。

第10次調査では厚い整地層が堆積していることが確認されており、これらは西園寺期や義満期の造成に伴う可能性が想定される。また、この調査成果より境内の東半には鹿苑寺以前の遺構が良好に遺存していることが明らかとなった。

第12・13次調査は、土壇の南側で実施された。江戸時代のものと思われる道路状の高まりや室町時代以降の土坑の他、義満期と考えられる室町時代の造成土と西園寺期と考えられる鎌倉時代の造成土を確認している。また、これらの造成土の下の地山上面では平安時代中期から後期にかけて形成されたと推定されるピットや土坑が確認されている。

第14次調査は土壇の北側、第3次調査区よりも更に北側に調査区が設けられた。室町時代の基壇状の高まりや池、溝、瓦窯などが確認されている。特に溝3から大型の金銅製塔宝輪の破片が出土している点は注目される。

第16次調査では、部分的にではあるが今回の対象である土壇の上面で発掘調査が実施されている。調査の結果、被熱面と造成土を確認した。造成土からは、鎌倉時代から室町時代にかけての遺物が少量ながら出土しており、この土壇は室町時代以降に構築されたものと推測されている。

第24次調査は土壇の南側の現参道部分で発掘調査が実施された。調査の結果、江戸時代の路面と室町時代の整地層を確認しており、現参道が江戸時代に成立したことが明らかとなった。

鹿苑寺（金閣寺）庭園では、1988年に発掘調査が開始されて以来、調査成果が蓄積され境内東半にも室町時代の遺構が展開することが明らかとなっている。しかしながら、その実態は必ずしも明らかではなく課題も多く残されている。

（熊井亮介）

### 3 地形測量

#### （1）新規に実施した地形測量

調査にあたっては、最初に調査対象地である土壇とその周辺の詳細な地形測量を新規に実施した（第29図、「測量図A」とする）。測量図Aの作成にあたっては、客観的なデータを取得するために光波測距儀を用いて無作為に地表面を細かく計測し、各測点の座標値から、コンピューターで地形の起伏を計算し図化した。土壇上面は凹凸があり、凹んだ地形の上面は通路（園路）及び広場として近年まで使用され、砂利が敷かれた状態である。地表には樹木が散在し、部分的に苔が生えているが、

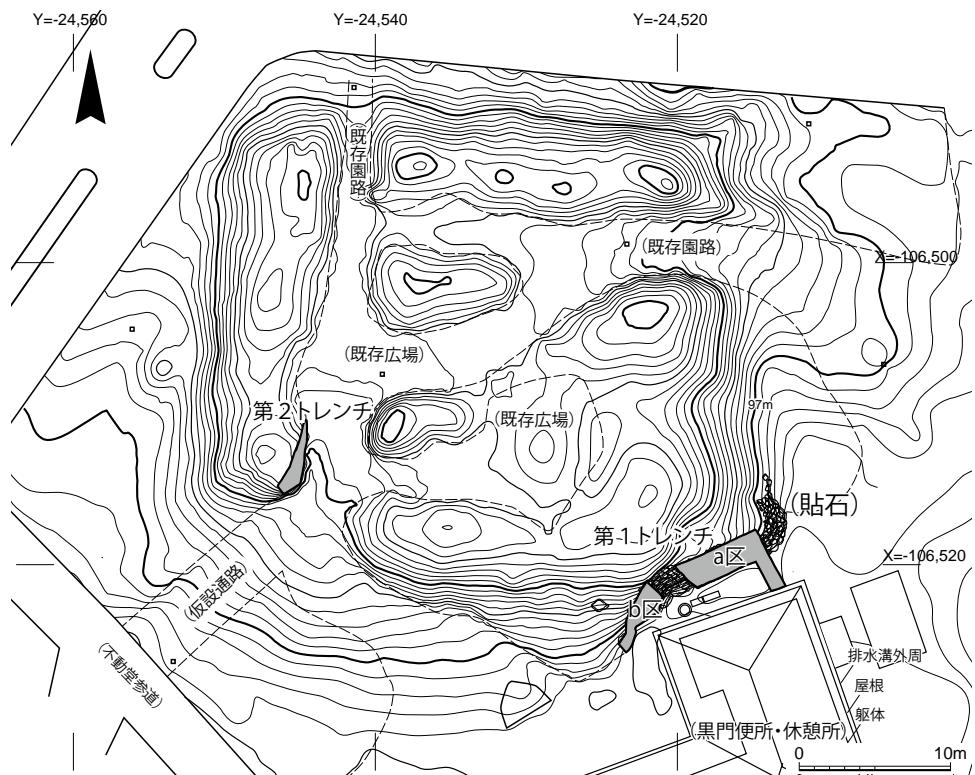
それ以外の箇所は表土がほとんど形成されていない。全般に中世以降の地形改変が進んでいるが、平面形態はほぼ整美な正方形で、規模は、仮に北辺を等高線の97.5m、南辺97.0 m、東辺96.9 m、西辺97.1m ラインとすると一辺約40 mの正方形となり、主軸は座標北からわずかに東に振る。丁寧な測量と設計の元で施工された土壇と考えられる。また、現況の土壇最上面の標高は約99.0 mである。土壇裾をどの等高線と捉えるかで高低差は変動するが、現況地形では概ね2 m程度の高さがある。

なお、地形測量の段階では、土壇南辺東部には近年施工された貼石があった。そしてその南に隣接して売店・トイレ棟（以下、「黒門便所・休憩所」とする）が建てられている。

第30図には調査トレンチの位置も併せて記載している。貼石及び黒門便所・休憩所工事による土壇地形への影響を検討するため土壇南東部斜面に設定したのが第1トレンチ、土壇上の「仮設通路」の工事による土壇への影響を確認するために土壇上面に設定したのが第2トレンチである。



第29図 鹿苑寺（金閣寺）庭園 土壇測量図 A (S=1/400 京都府・京都市作図・電子測量)



第30図 測量図A トレンチ設定位置図 (S=1/500)

## (2) 過去の地形測量図

### ①測量図B

土壇の地形を表現した図面は、今回新たに作図した測量図A以外に、二種類の地形測量図が過去に製作された。このうちの一つが、金閣寺が測量会社に委託して作図した「鹿苑寺（金閣寺）現況平面図」（第31図、「測量図B」とする）で、昭和63年12月に測量、平成元年1月に作図された地形図である。0.5m間隔の等高線で土壇の地形を表現しており、従来の発掘調査報告書や研究論文等でたびたび引用されてきた測量図である。

### ②測量図C

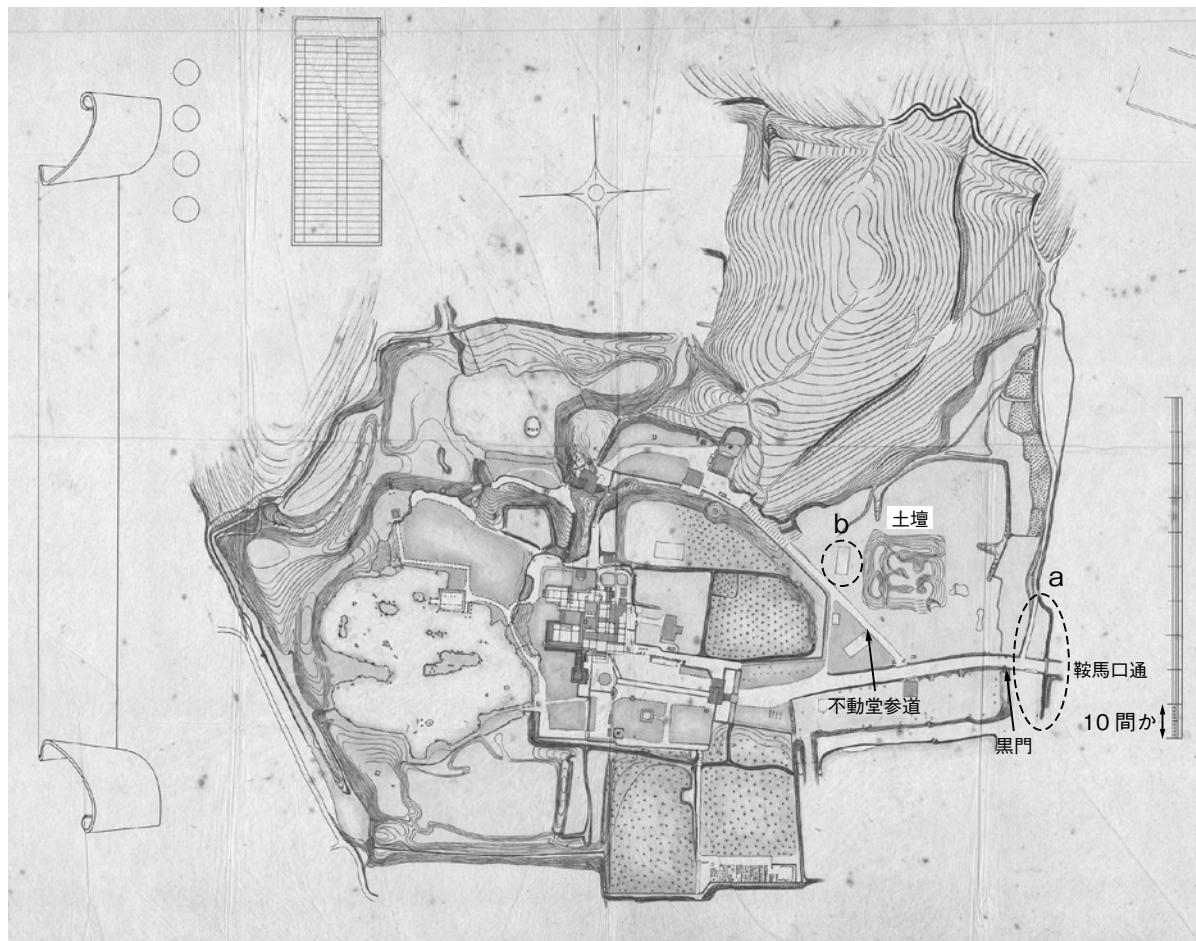
もう一つが、作図者不詳の、京都府文化財保護課が所蔵する測量図（第32図、「測量図C」とする）で、これまで公開されていなかった資料である。美濃紙にインクで清書されているが、美濃紙は経年のため変色し劣化しており、作図から相当期間を経ている。作図年代が古いため、当然、測量精度は近年作図された測量図A、Bよりは粗い。ただし、土壇地形を含む鹿苑寺境内の地形の特徴が丁寧かつ明確に表現されているのが特徴である。

測量図Cは一部が彩色されるが、完成途上のようにも見受けられる。図左上の表が未記入で、さらに、左端の題名欄と思われる箇所も空白であるためである。また、右側のスケールバーの数値も記載されていない。

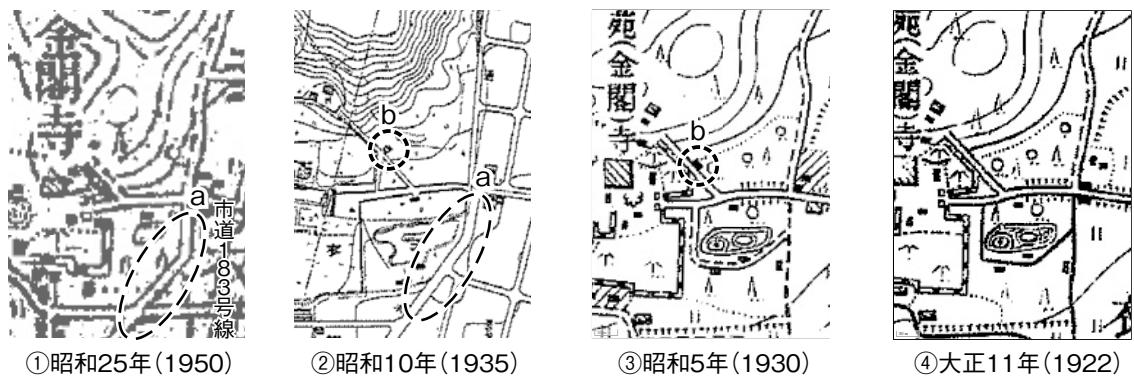
測量図Cのスケールバーの全長は18.0cmで、幅1.8cmの大目盛りで十等分され、さらに大目盛り



第31図 鹿苑寺（金閣寺）庭園 土壇測量図B（部分）（原図縮尺200分の1・鹿苑寺所蔵）



第32図 鹿苑寺（金閣寺）庭園 土壇測量図C（原図縮尺1,000分の1・京都府所蔵）



第33図 昭和25・昭和10・昭和5・大正11年地図 ①、③、④「京都西北部」国土地理院・大日本帝国陸地測量部 ②「船岡山」 京都市都市計画地図

は幅0.18cmの小目盛りで十等分されている。測量図Cと測量図B（第31図）の参道の長さを比較したところ、測量図Cの縮尺は1,000分の1と推定された。その場合、スケールバーの全長がメートル法換算で約180m、大目盛りが約18m、小目盛りが約1.8mという半端な数値となる。しかし、大目盛りの幅を10間（約18.18m）、最小の目盛りを1間（約1.818m）と仮定すると、スケールバーの全長が100間となり、目盛りが全て整数値となる。したがって、本図はメートル法ではなく、尺貫法<sup>(注8)</sup>で作図されたと判断される。

測量図Cの正確な作図年代は不明であるが、年代を推定するため、戦前から戦後の地図（第33図）と測量図C（第32図）を比較すると、第32図a地点では鹿苑寺（金閣寺）の黒門から発して東に延びる太い道路（鞍馬口通）と、北に延びる細い道路だけが表現される。第33図の昭和25年（1950）地図及び昭和10年（1935）地図にある、南に延びる市道183号衣笠宇多野線（同図a地点）はまだ開通していない。したがって、測量図Cの年代が昭和10年（1935）以前であることは確実であろう。

また、第32図b地点には、土壇と西側の不動堂参道の間に建物が描かれる。第33図の昭和10年（1935）、昭和5年（1930）地図には、この建物と同一と考えられる建物が不動堂参道の東に隣接して描かれる（同図b地点）が、大正11年（1922）地図には無い。したがって、測量図Cの作図年代は、大正11年（1922）から昭和5年（1930）の間に限定することも十分に可能である。鹿苑寺庭園が国指定文化財となったのが大正14年（1925）であることも考慮すると、測量図Cは文化財指定を契機にした詳細測量によって、大正末期から昭和初期の間に作成されたものと判断する。

（古川 匠）

#### 4 第1トレンチの調査

調査着手前は、黒門便所・休憩所の北に隣接する土壇の南東隅部に貼石が施工された状態であった（第34図、第35図）。検証のために貼石を一部残し、東にa区、西にb区を設定し（第36図）、黒門便所・休憩所建設工事及び貼石工事に伴って土壇が削られていないか確認するために調査を実施した。

なお、事前の測量調査では、黒門便所・休憩所の屋根軒先ライン、軸体の位置を測量し、当該建物の建設に伴って事前に調査された第12・13次調査トレンチの位置と照合した（第36図）。調査の対

象となったのは、新規建築範囲である建物東半部であるが、躯体の位置は両トレンチの位置とほぼ合致しており、発掘調査後の現状変更許可範囲外での設計変更等は為されていないと判断される。また、第1トレンチa区の北側斜面上には小規模な平坦面が存在し、過去の地形改変が想定される。

### (1) トレンチ調査

#### ① a区（第37図・第38図）

調査前は貼石が斜面を覆う状態であった（第34図）。貼石を除去し、貼石の裏に堆積する柔らかい表土（第38図東壁第1～3層・北壁第1層・西壁第1～3層）を除去したところ、少量のビニール片やガラス片及び木片を含む現代盛土層（第38図東壁第9～21層、北壁第2'～7'層・第2～17層、西壁第4～10層）を検出した。現代盛土層の層厚は約0.6～1.0mである。

現代盛土層の一部を検証のためにトレンチ中央部のみ残して除去したところ、トレンチ南端で東西方向の埋設塩ビ管掘方SX101を検出した（第38図東壁第8層・西壁第11層）。SX101の中心には直径0.08mの塩ビ管が通り、掘方の幅は約0.4m、掘削深度は約0.4m、トレンチ内で検出した長さは約5.0mである。SX101の掘削に伴い、中世盛土層の南裾部と中世整地層が掘削されている。また、SX101と重複する位置で、塩ビ管の敷設以前の搅乱SX102を検出した（第38図北壁第18層）。

さらに、土壇を形成する中世盛土層（第38図北壁第8'・21・22層、西壁第12層、東壁第22層）及び中世整地層（第38図北壁第23～25層、西壁第13～18層）を検出した。中世整地層の土質および上面の標高は、南に隣接する第12・13次調査で、室町時代とされる整地層と一致する。また、中世盛土層は中世整地層の直上に形成され、土質も中世整地層と近似する。したがって、中世整地層と中世盛土層は一連の作業工程の中で形成された可能性が高い。

なお、中世盛土層が形成する土壇は建物基壇の可能性があるため、基壇外装施設や外周の雨落ち溝の検出を目的としてトレンチ南東部を南に拡張したが、消火施設等に伴う電気設備を含む地下埋設管掘方SX103を検出しただけで、中世に遡る遺構は確認されなかった。

#### ② b区（第37図・第39図）

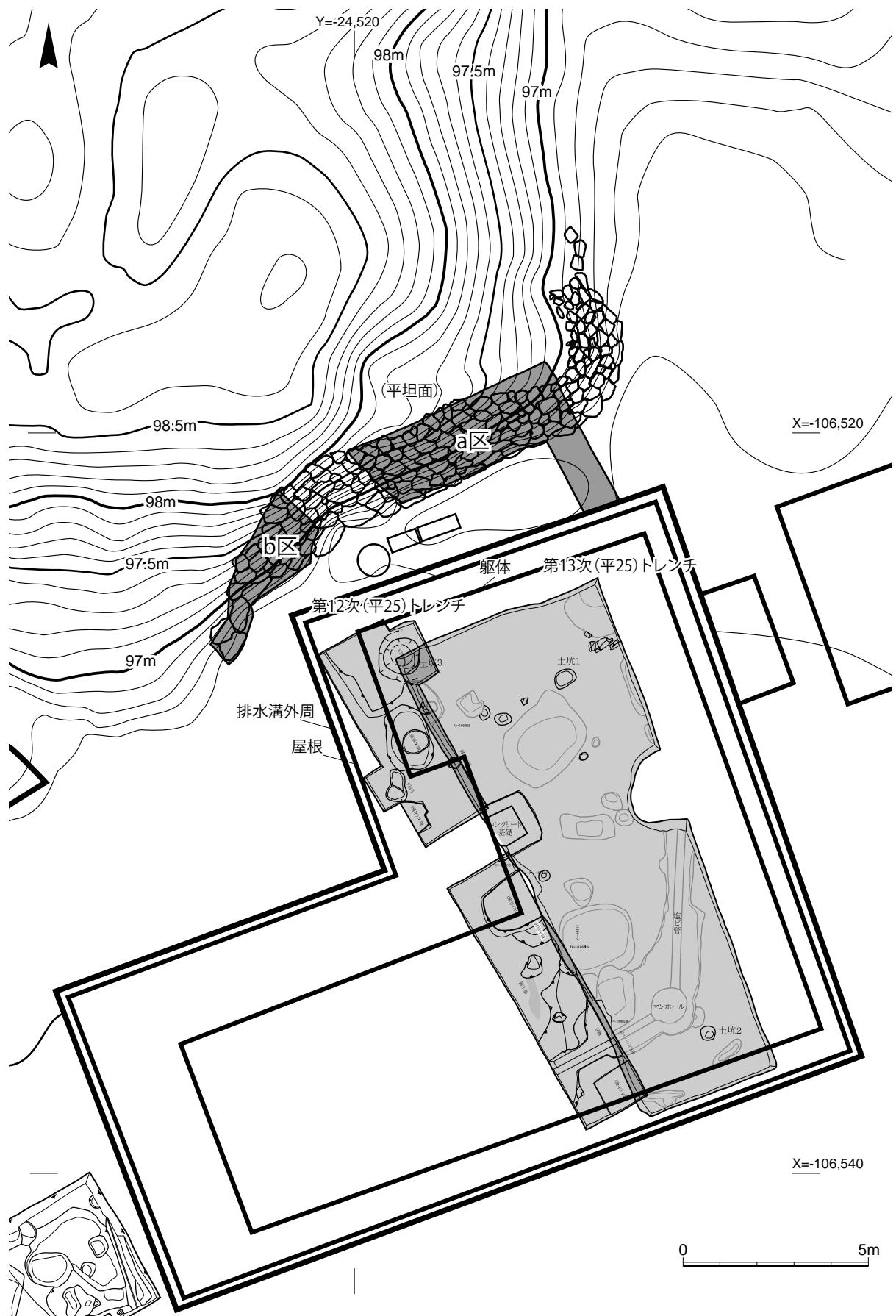
斜面表面の貼石を除去したところ、a区と同様に、ビニール片やガラス片等を包含する現代盛土層を検出した（第39図北壁第3・4層、西壁第3層）。現代盛土層の層厚は約0.1～0.5mで、a区より



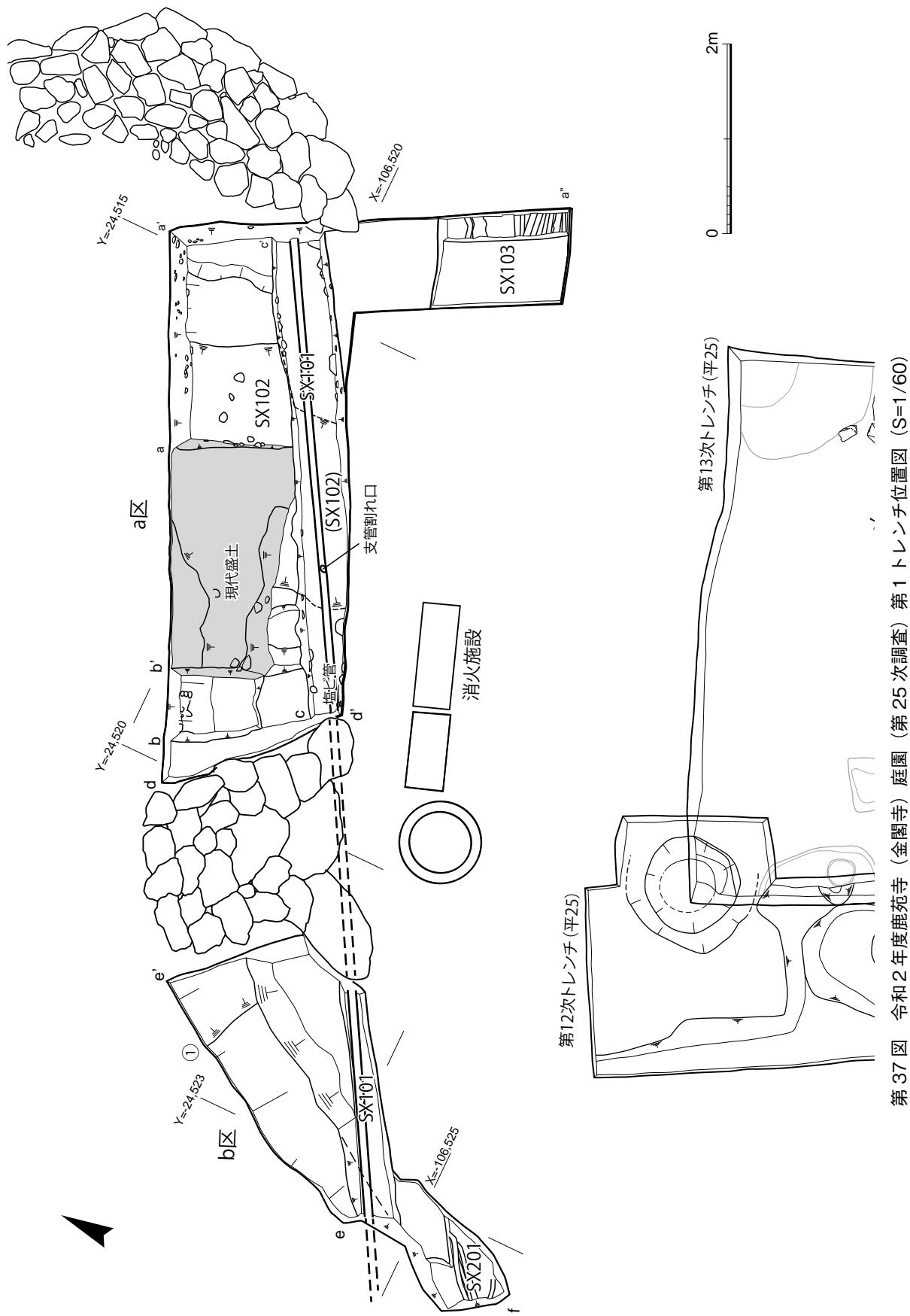
第34図 第1トレンチa区 調査着手前（南東から・令和2年（2020）8月26日）



第35図 第1トレンチb区 調査着手前（東から・令和2年（2020）9月23日）

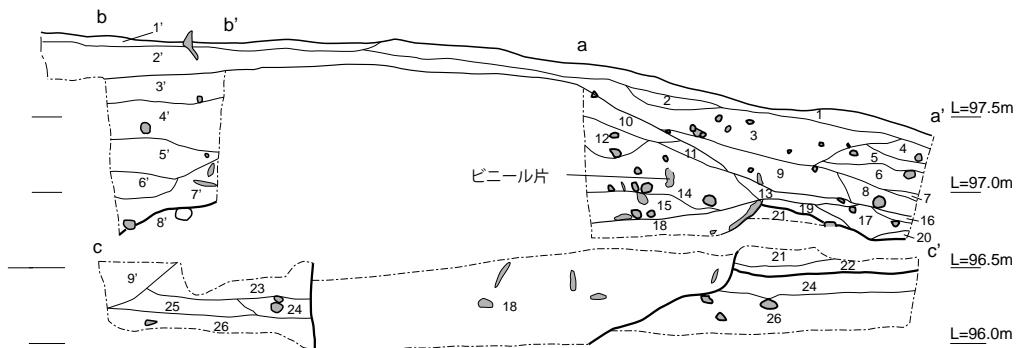


第36図 令和2年度鹿苑寺（金閣寺）庭園（第25次調査）第1トレンチ位置図（S=1/150）



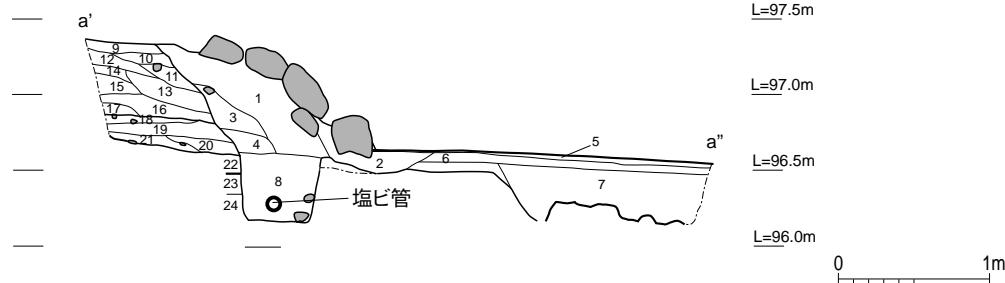
第37図 令和2年度鹿苑寺（金閣寺）庭園（第25次調査）第1トレーンチ位置図（S=1/60）

【北壁】



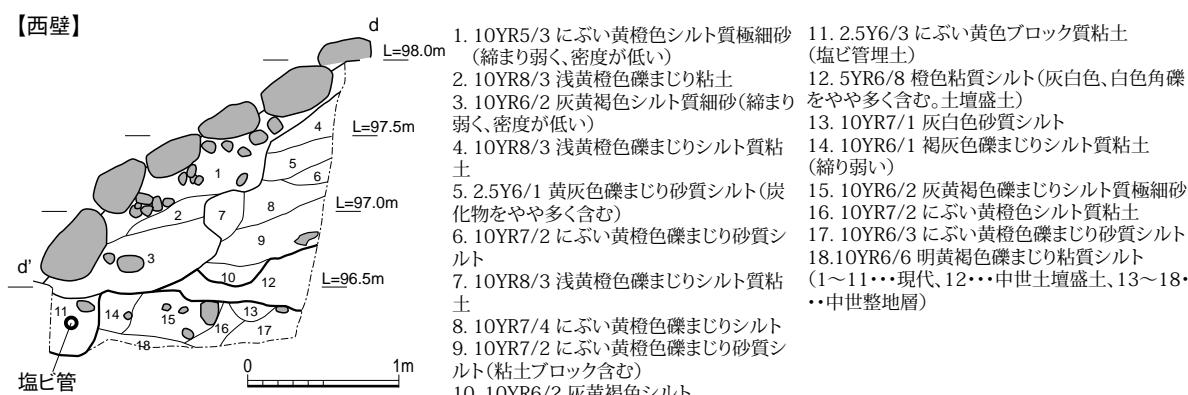
- |                              |   |
|------------------------------|---|
| 1. 2.5Y5/2 暗灰黄色礫まじり砂質シルト(表土) | 15. 2.5Y5/3 黄褐色礫まじりシルト  |
| 2. 10YR7/3 にぶい黄橙色粘質シルト       | 16. 5PB5/1 青灰色砂質シルト(ビリ砂利)   |
| 3. 2.5Y6/4 にぶい黄色礫まじりシルト      | 17. 5PB5/1 青灰色シルト質粘土  |
| 4. 10YR6/8 暗黄褐色シルト質粘土        | 18. 2.5Y5/4 黄褐色粘質シルト(SX102埋土)   |
| 5. 10YR6/4 にぶい黄橙色礫まじり粘質シルト   | 19. 2.5Y6/2 灰黄色シルト  |
| 6. 10YR6/4 にぶい黄橙色礫まじりシルト     | 20. 10YR7/1 灰白色礫まじり砂質シルト  |
| 7. 10YR6/4 にぶい黄橙色礫まじりシルト     | 21. 7.5YR7/8 黄橙色礫まじり粘質シルト   |
| 8. 10YR6/6 明黄褐色シルト質粘土        | 22. 2.5Y7.5/8 黄色シルト(粘土ブロック混じり)  |
| 9. 2.5Y5/3 黄褐色礫まじり砂質シルト      | 23. 7.5YR6/6 橙色礫まじり粘質シルト  |
| 10. 2.5Y5/1 黄灰色礫まじり砂質シルト     | 24. 10YR5/6 黄褐色礫まじり粘質シルト  |
| 11. 10YR6/2 灰黄褐色シルト          | 25. 10YR6/1 褐灰色礫まじりシルト質粘土(締り弱い)   |
| 12. 2.5Y6.5/3 にぶい黄色礫まじりシルト   | 26. 10YR6/6 明黄褐色礫まじり粘質シルト   |
| 13. N5/ 灰色粘質シルト              | (1~20...現代、21,22...中世土壤盛土層、<br>23~26...中世整地層)   |
| 14. 2.5Y6/3 にぶい黄色礫まじりシルト     | 1'. 2.5Y4/1 黄灰色シルト(表土)<br>2'. 2.5Y6/4 にぶい黄色礫まじりシルト<br>3'. 2.5Y5/1 黄灰色礫まじり砂質シルト<br>4'. 2.5Y6.5/3 にぶい黄色礫まじりシルト<br>5'. 2.5Y6/3 にぶい黄色礫まじりシルト<br>6'. 2.5Y6/4 にぶい黄色礫まじりシルト<br>7'. 2.5Y5/3 黄褐色礫まじり粘質シルト<br>8'. 5YR6/8 橙色粘質シルト(灰白色、白色<br>角礫をやや多く含む。土壤盛土)<br>9'. 10YR6/1 褐灰色礫まじりシルト質粘土<br>(締り弱い)<br>(1'~7'...現代、8'...中世土壤盛土層、<br>9'...中世整地層) |

【東壁】

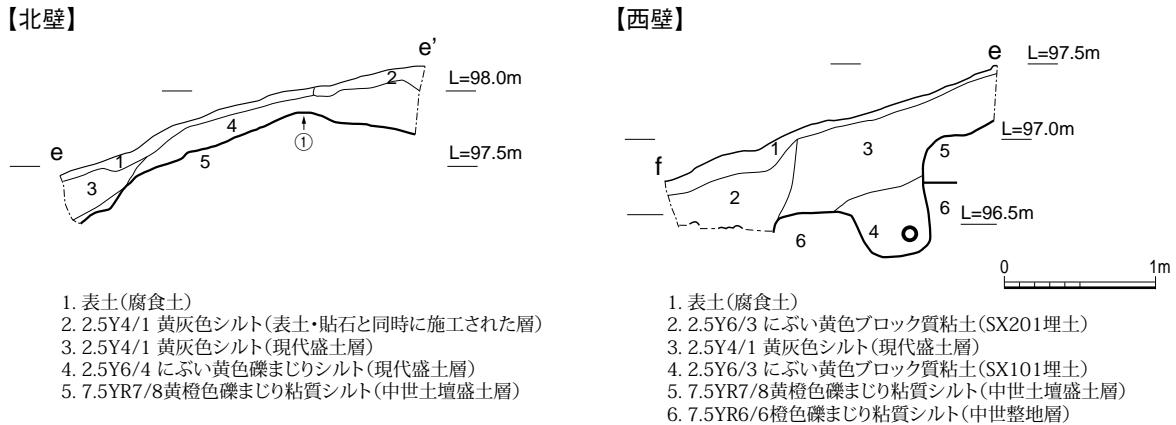


- |                                       |                              |  |
|---------------------------------------|------------------------------|--|
| 1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色礫まじり砂質シルト<br>(密度が低い) | 10. 10YR7/3 にぶい黄橙色礫まじりシルト質粘土 | 19. 北壁第17層と同一層                             |
| 2. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト                  | 11. 10YR6/6 明黄褐色礫まじりシルト質粘土   | 20. 2.5Y7/4 浅黄色シルト                         |
| 3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト                  | 12. 北壁第4層と同一層                | 21. 北壁第20層と同一層                             |
| 4. 2.5Y6/2 灰黄色礫まじり粘土                  | 13. 10YR7/3 にぶい黄橙色礫まじり粘質シルト  | 22. 北壁第22層と同一層                             |
| 5. 5PB5/1 青灰色砂質シルト(ビリ砂利舗装)            | 14. 北壁第5層と同一層                | 23. 北壁第24層と同一層                             |
| 6. 10YR4/4 褐色粘質シルト(固く締まる)             | 15. 北壁第6層と同一層                | 24. 北壁第26層と同一層                             |
| 7. 10YR5/4 にぶい黄褐色ブロック質粘土(SX103埋土)     | 16. 北壁第7層と同一層                | (1~21...現代、22...中世土壤盛土層、<br>23~24...中世整地層) |
| 8. 2.5Y5/3 黄褐色ブロック質粘土(SX101埋土)        | 17. 北壁第8層と同一層                |  |
| 9. 北壁第1層と同一層                          | 18. 北壁第16層と同一層(ビリ砂利舗装)       |  |

【西壁】



第38図 第1トレーナチa区土層断面図 (S=1/50)



第39図 第1トレント b区土層断面図 (S=1/50)

も全体的に薄い。また、西端では盛土施工後の地下埋設管掘方 S X 201（第39図西壁第2層）を検出した。

さらに盛土を除去したところ、a区で検出された塩ビ管 S X 101の延長と、土壇を形成する中世盛土層（第39図北・西壁第5層）・中世整地層（第39図西壁第6層）を検出した。塩ビ管掘方 S X 101の規模はa区と同様に、幅0.4m、深さ0.4mの線掘が検出された。トレント内の中は2.4mで、さらに西に延びる。S X 101は中世盛土層と整地層を削平して施工される。特に、トレント南西部では中世盛土層の南裾が長さ約1m、幅最大0.4m、高さ0.4mの範囲で削られていた。

中世盛土層の検出標高はa区よりも高いが、第39図北壁①地点を頂点として、東側と南西側に傾斜が下がる。南西に向かって傾斜が下がるのは、土壇地形の本来の形状の反映と考えられるが、東側のa区にかけても傾斜が下がるのは不自然である。したがって、中世から現在までのいずれかの段階で、b区からa区にかけて中世盛土層が削られていると考えられる。

## (2) 過去の写真・図面記録との照合

中世盛土が削られた時期や、塩ビ管の敷設、現代盛土の施工時期といった土地改変履歴の詳細を検討するため、過去の写真・図面記録等と照合することとした。

第40図は、平成25年8月に撮影された、鹿苑寺（金閣寺）庭園第13次調査トレントの作業風景である。第13次調査トレントは本報告第1トレントから数メートル南に位置する。奥に写る土壇斜面の下半部が第1トレント設定地点である。この写真には、第13次調査終了後の黒門便所・休憩所建設工事に伴って伐採され現在は存在しないクスノキが中央奥にある。また、第1トレントの調査で検出された現代盛土層は確認されず、盛土工事以前の撮影と考えられる。

中央奥のクスノキの根元は、向かって左の西側が斜面に埋没し、そして、根の生え方が西から東に向かって下がることから、西から東にかけての下り勾配であったと考えられる。また、樹木の東側には発掘道具類が置かれる平坦面が斜面中腹に存在している。樹木の東側は西側よりも地形改変を受け、標高が低くなっていたようである。

なお、第40図で道具が置かれている平坦面は、令和2年に作図した測量図Aの等高線分布から、

第1トレンチa区の北隣に位置する平坦面(第36図)と同一と考えられる。第1トレンチ設定地点は、この写真では伐採された木が積まれており、道具が置かれる平坦面よりさらに一段低くなっていたことが分かる。

第41図は、平成25年12月13日に撮影された、埋設塩ビ管S X 101の掘削開始直前の状況である<sup>(注10)</sup>。施工業者への聞き取りによると、塩ビ管の埋設は同日中に終了したという。写真中央部の白線が塩ビ管埋設予定箇所で、左側に写る根が、第40図のクスノキの根に該当する。この段階でクスノキは伐採されている。この写真は第1トレンチa区と同一地点を撮影しているが、右側の重機の位置と比較すると、左側の中世土壇の地形は令和2年現在の現況よりもかなり低い。そして、削られた斜面には太い樹木が生え、地表面には木の根が張り苔も生えていることから、地形改変から数十年以上の年月を経ていることがわかる。

この地形改変の時期を検討するため、第1トレンチの周辺について、測量図A、B、Cの位置を合わせて合成したのが第42図である。昭和63年作図の測量図B(赤色)の等高線97mラインは、第



第40図 第13次調査トレンチ  
(南から・平成25年  
(2013) 8月)

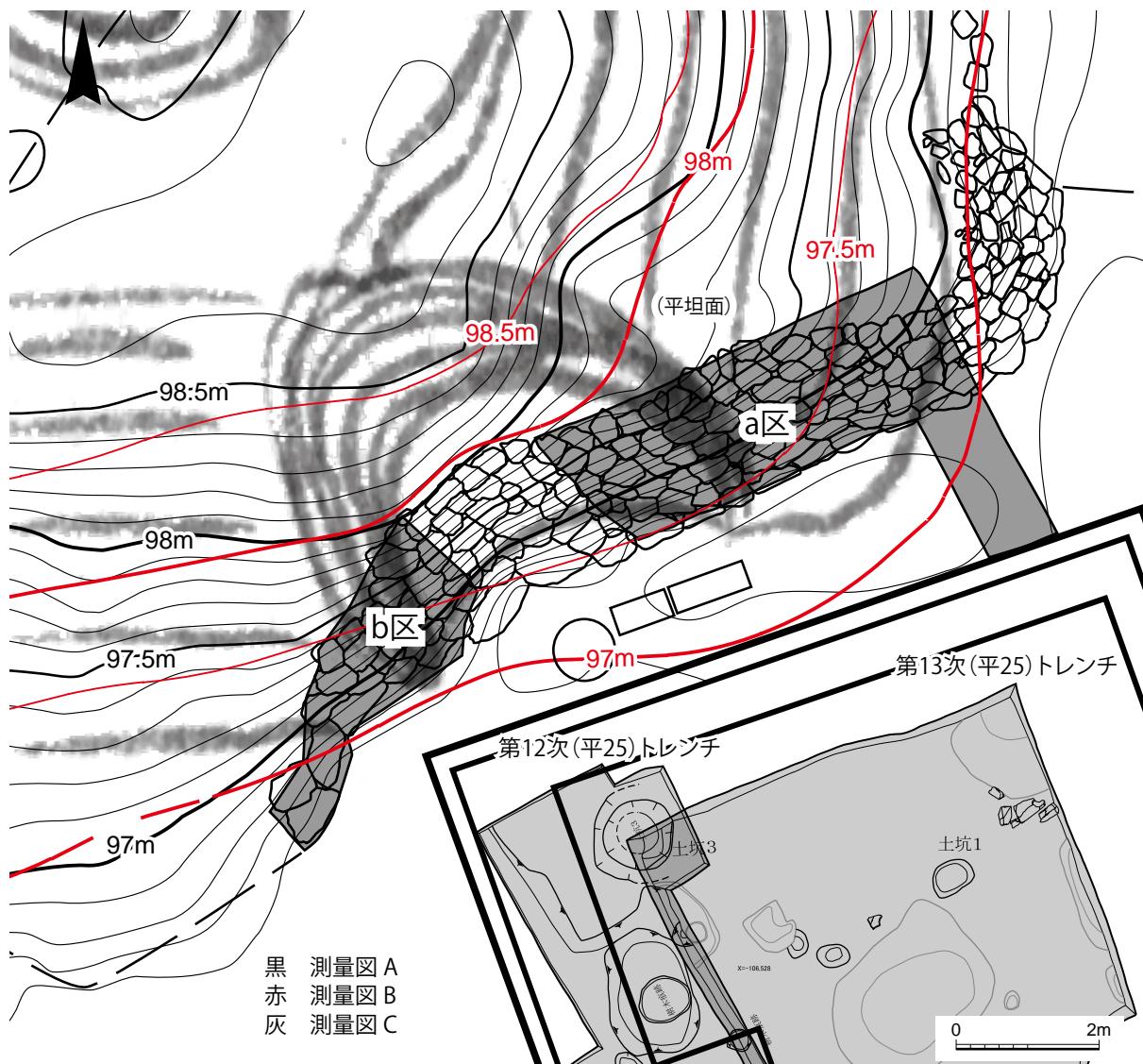


第41図 第1トレンチa区塩ビ  
管101掘削開始 (西から・平成25年 (2013)  
12月13日)

1トレンチ付近で現況の測量図Aよりも大きく南東に張り出している。この描画表現だけを見れば、昭和63年から平成25年の間に土壇が削られたとする解釈も可能である。

しかしその一方で、大正末期から昭和初期の作図である測量図C（灰色）には、第1トレンチ設定地点に、横穴状の凹みと思われる表現がある。この凹みは昭和63年に作図された測量図Bの等高線98mライン（赤色）でも表現されている。令和2年作図の測量図A（黒色）では、現代盛土と貼石によって埋まっているが、貼石の位置と等高線の形状を見ると、測量図Cの凹み中央部に重複する位置で、土壇内側に向かってわずかに屈曲している。測量図Aの段階の地形にも、凹みの痕跡が反映されているようである。

第1トレンチの位置と照合すると、凹み西肩の位置は、b区中央部東寄りに該当する。b区の調査では、中世盛土層が第39図北壁①地点を頂点として東に向かって傾斜が下がると想定したが、測量図Cに表現される凹みの中央部に向かって傾斜が下がる状況を示すとすれば、発掘調査成果と新旧の測量成果を整合的に理解できる。平成25年に撮影された第40図、第41図が示す土壇地形の残り



第42図 測量図A・B・C 第1トレンチ周辺 (S=1/100)



第43図 第1トレンチ該当部遠景  
(南西から・平成26年  
(2014) 1月16日)



第44図 第1トレンチ該当部近景  
(南西から・平成26年  
(2014) 1月22日)



第45図 第1トレンチ設定地点(東  
から・平成27年 (2015)  
1月30日)

の悪さも、この凹みを反映するのであろう。

第43図は、平成26年1月16日に撮影された、土壇南隣の黒門便所・休憩所建設工事風景である。写真奥の、工事排土の置き場が第1トレンチ設定地点である。

第44図は、その6日後の平成26年1月22日に撮影された写真で、第43図より近い地点から撮影されている。垂直に立ち上がる塩ビ管支管が写っている（同図a）。この位置が第37図の塩ビ管支管割れ口に該当する。

第45図は、黒門便所・休憩所北側に消火施設が設置された、平成27年1月30日に撮影された写真である。斜面に置かれた排土は、平成26年1月段階よりも斜面にすりつけられた状態になっている。塩ビ管支管も確認できる（同図b）。

第43図～第45図とa、b区のトレンチ調査成果から、平成25年12月または平成26年1月に開始された黒門便所・休憩所建設工事に伴って土壇に置かれた排土は、第1トレンチa、b区の「現代盛土層」と同一と考えられる。

その後、第34図、第35図のように、第45図の現代盛土の上に貼石が施された。正確な貼石の施工日は不明であるが、盛土の流出を防ぐために為されたとすれば、平成27年中に施工されたと考えられる。

### （3）小結

トレンチ調査及び過去の写真と新旧の測量図の照会から可能な範囲で、中世から現代までの第1トレンチの地形変化の履歴を復元する。

まず、中世の段階に、整地及び盛土によって土壇とその周辺の地形が形成された。土師器の小片が盛土から出土しているが、詳細な時期は不明である。近世及び近代の堆積層の形成は確認されなかつた。

そして、近世以降に土壇斜面が横穴状に開削される。この横穴状の凹みは、大正末期から昭和初期に作図された測量図Cに描寫され、測量図Bが作図された昭和63年の段階と、第40図、第41図が撮影された平成25年の段階にもその痕跡は地表に残っていたようである。この横穴状の凹みは明らかに人工的に掘削されたものだが、掘削の目的は不明である。形成年代も不明だが、少なくとも鹿苑寺（金閣寺）庭園の文化財指定段階には既に存在していたようである。

平成25年12月に土壇裾付近に塩ビ管S X 101が埋設され、施工の際に土壇裾が一部削られた。また、塩ビ管設置以前に搅乱S X 102が掘削されている。S X 102の詳細な形成時期は不明であるが、上述の横穴状の凹みの残欠か、平成25年段階に生えていたクスノキの根痕と考えられる。

平成25年12月または翌平成26年1月に土壇南隣で黒門便所・休憩所の建設工事が開始され、工事の排土が斜面凹みに置かれた。平成27年1月に土壇と黒門便所・休憩所の間に消火設備が設置され、その際にS X 103、104が掘削され、地下埋設管が設置された。土壇斜面に置かれていた排土はそのまま固定され、おそらく平成27年中に、さらにその上に土が置かれ、斜面地表には貼石が施された。

（古川 匠）

## 5 第2トレンチの調査

土壇上の南東部の仮設通路の脇の高まりに設定したトレンチである（第30図）。仮設通路工事の事前に実施された平成28年度の第16次1区調査では中世土壇盛土層及び土壇上面の被熱面が検出され、この遺構を保護することを前提に設計を変更して工事が実施されている。第16次調査第1区の範囲内の高まりに本調査の第2トレンチを設定し、平成28年度に保存の対象とした遺構がその後、適切に保存されているかを確認することを主目的に調査を実施した（第46図）。

調査着手前の第2トレンチ設定地点は、上面が苔で覆われ、側面は堰板で土留めが施された状態であった（第47図）。

### （1）トレンチ調査

地表面の苔と側面の堰板を除去したところ、盛土と真砂土で遺構面が覆われ、保護された状況を確認した（第48図）。

さらに、真砂土層の直下で中世の被熱面、土壇盛土層を検出した（第49図）。中世の被熱面及び土壇盛土層は平成28年度第16次調査段階の記録と同一の状態である。

被熱面は硬化し、色調は赤褐色に変色している。火災時の地表面と考えられ、かなりの長時間にわたって火災に伴う高熱を直に受けたようである。被熱が顕著であることから、大規模建造物の火災と考えて矛盾はないであろう。

中世土壇盛土層は、盛土が細かい単位で密に施工されている。現在の盛土層は脆く軟質になっているが、この地点の盛土層断面は土壇上面の地形改変によって長期間露出した状態であったと考えられる。堅固に突き固められた基壇遺構であっても、保存状態が良好でなければ盛土が軟化する事例がある<sup>(注11)</sup>ため、第2トレンチ盛土層が現状で軟質であっても、施工された段階には堅固な堆積層であった可能性はある。

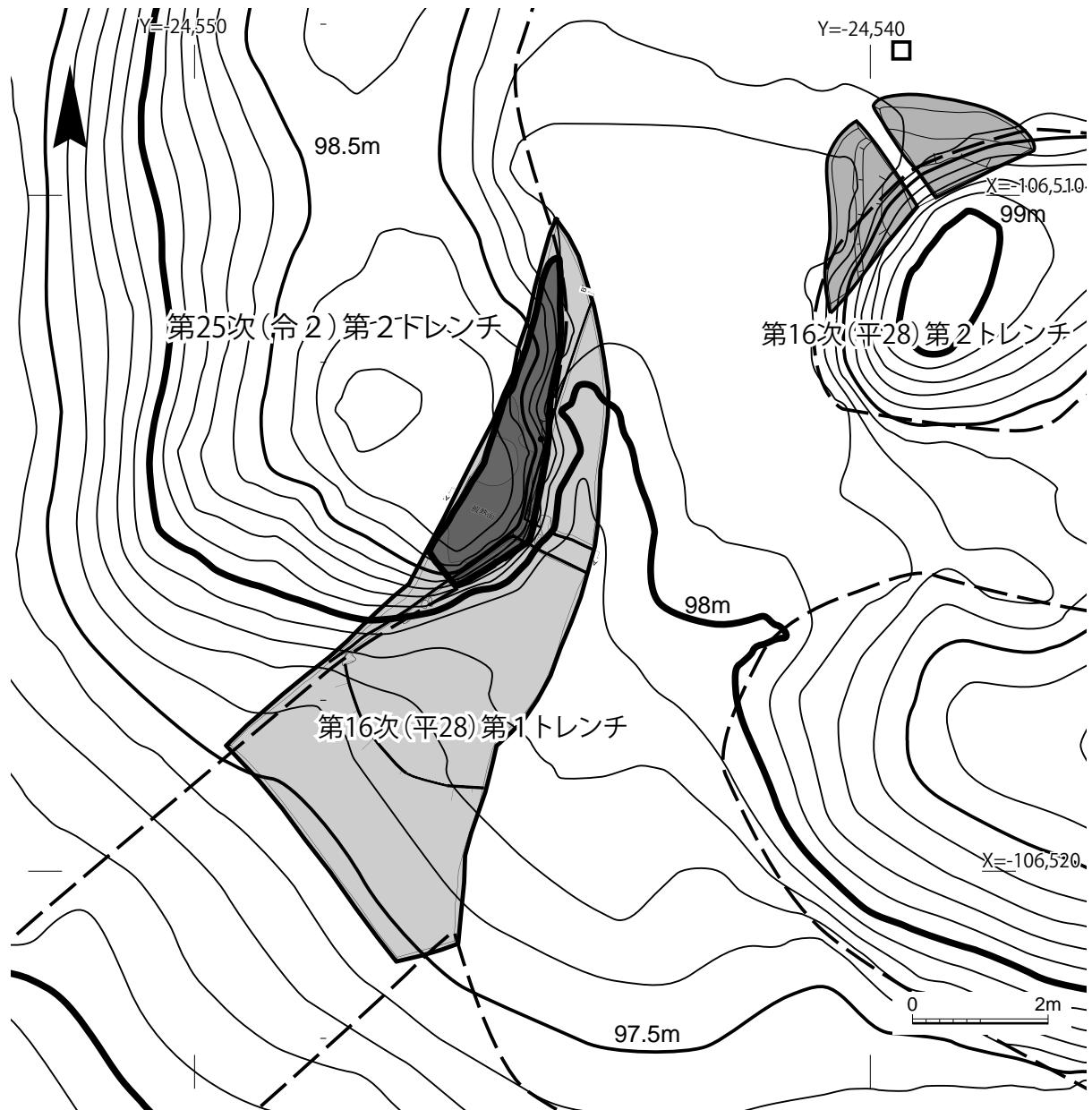
### （2）過去の写真記録との照合

第2トレンチの現在の状況と、平成28年度第16次調査が終了し、被熱層を真砂土で被覆する作業中であった平成28年11月19日撮影の第50図と現在の状態には、違いが認められない。したがって、第16次調査が終了した段階の状態のまま、遺構は保護されていると考えられる。

### （3）小結

第2トレンチの調査の結果、平成28年度第16次調査が終了した段階の状態を保ち、遺構は保護されていたことを確認した。

また、土壇盛土の堆積状況について、外部有識者を含めて検討した。第16次調査報告書（付表5文献14）では、堆積が密ではなく軟質であること等から、「大重量を支える基壇とは考えにくい」と評価されているが、本調査での再検討の結果、堆積はむしろ密で、土質の柔らかさは後世の風化によ



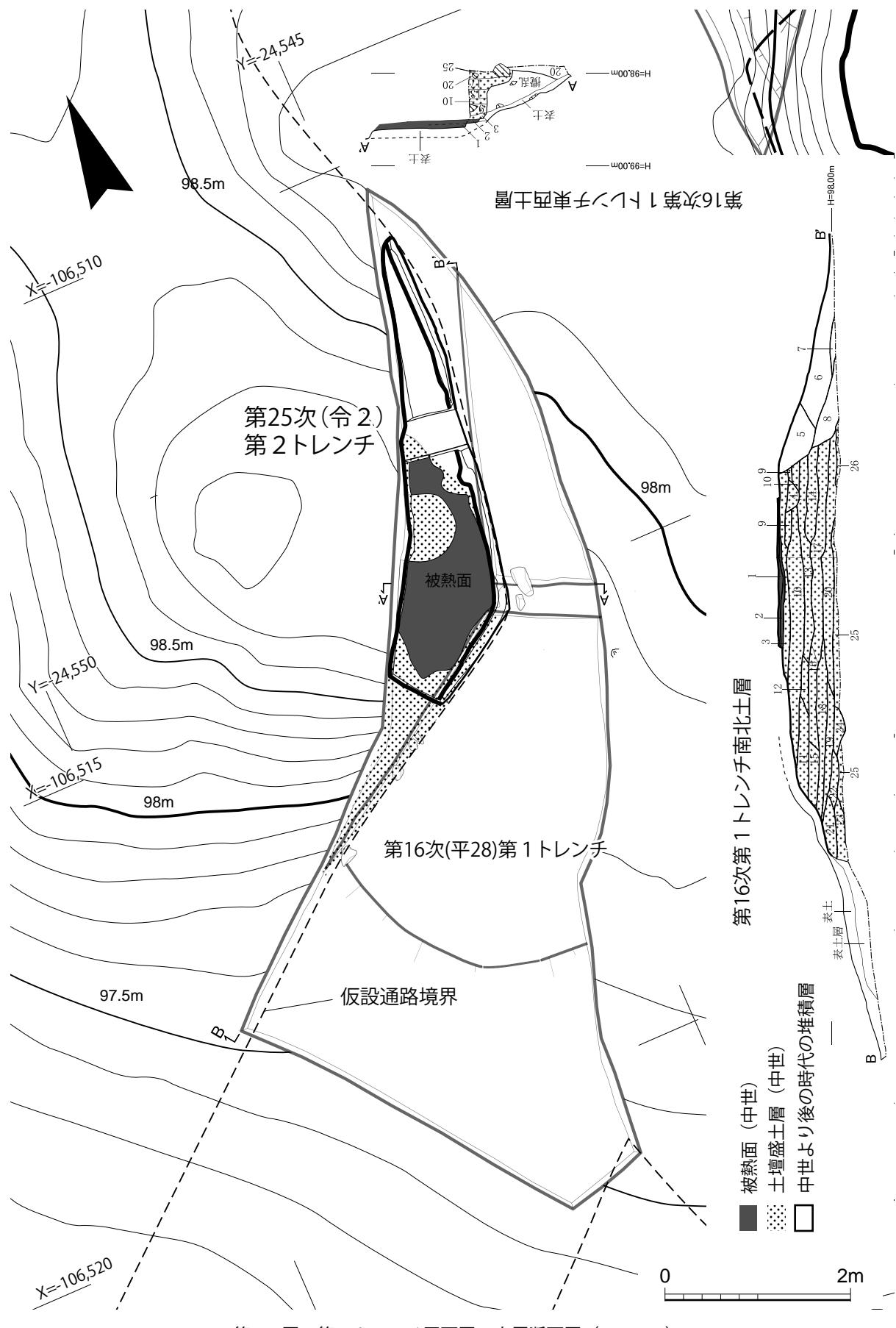
第46図 令和2年度鹿苑寺（金閣寺）庭園（第25次調査）第2トレンチ位置図（S=1/100）



第47図 第2トレンチ設定地点（北東から・令和2年（2020）8月25日）



第48図 第2トレンチ地点 苔・堰板除去状況（南東から・令和2年（2020）9月14日）





第50図 第2トレント地点 平成  
28年度調査終了状況（北  
東から・平成28年（2016）  
11月19日）

るものと判断された。

（古川 匠）

## 6 土壇地形の改変

先述のとおり、今回の調査対象となる土壇の測量図は、A（令和2年作図）、B（昭和63年作図）、C（大正末～昭和初期作図）の3種類が存在する。土壇上面の「既存園路・既存広場」と呼称される通路等がどの段階で成立しているかを検証するため3種類の図面を比較し、近代以降の土壇地形の改変履歴の復元を試みる。

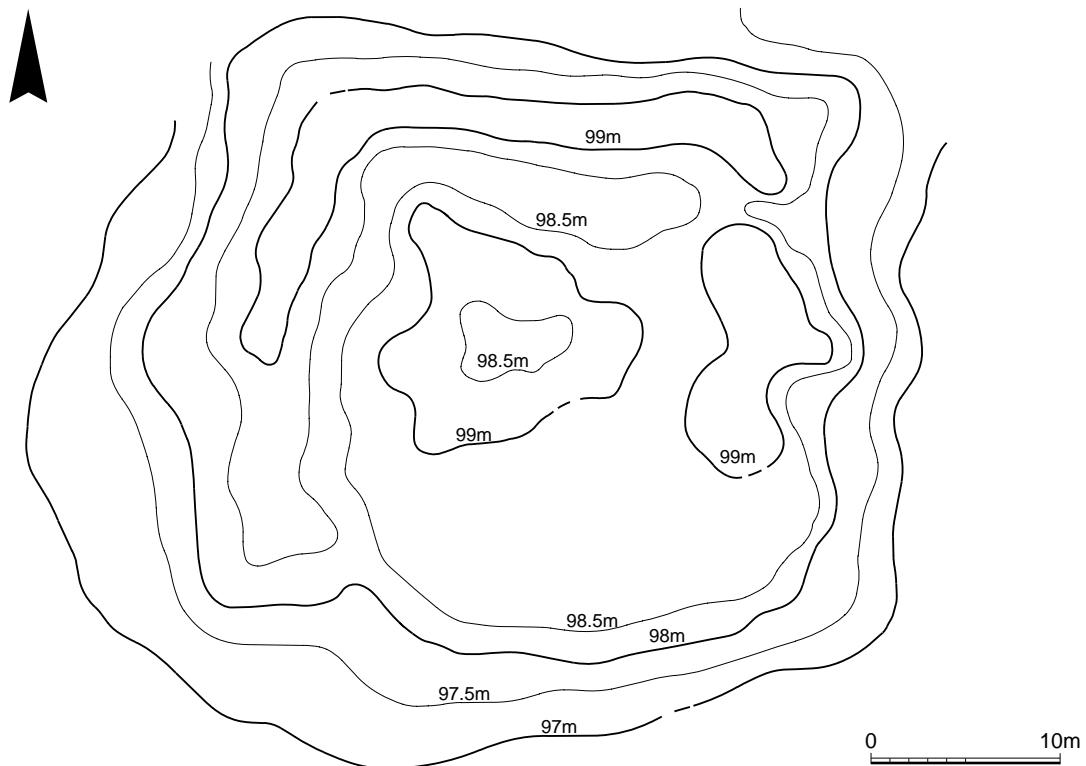
### （1）測量図A・Bの比較（第51図・第52図）

測量図B（第51図）は、0.5m間隔の等高線で作図されている。土壇上面の標高は最も高い等高線が99.0mであるが、中央部西寄りには98.5mの等高線があり、測量図B作図段階には凹みが存在したようである。この凹みについては、明治時代に考古学者某が発掘した痕跡であるという（東2017）。

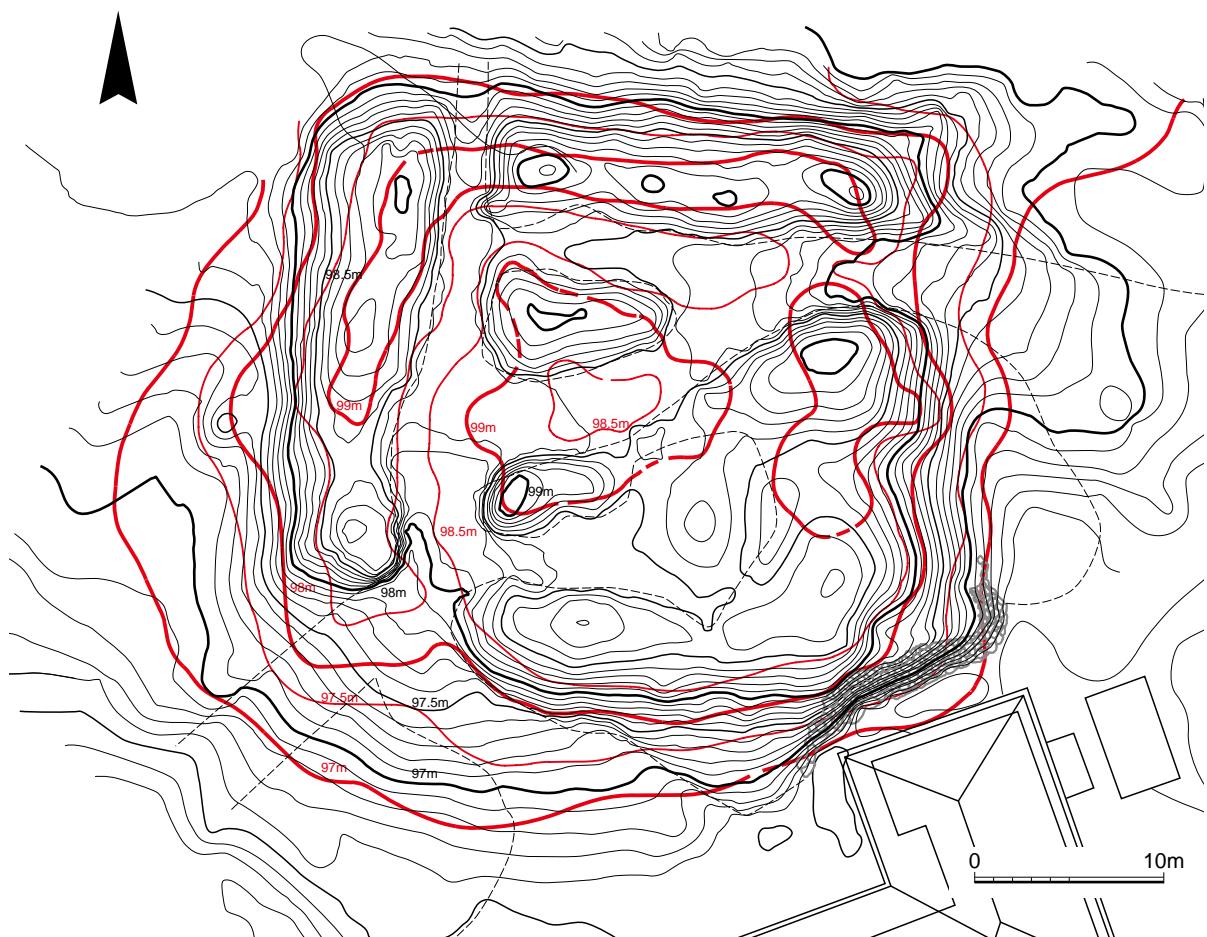
測量図Aと測量図Bを合成し比較する（第52図）と、測量図Aの等高線が0.1m間隔であるのに対し、測量図Bは0.5m間隔であるため、測量図Aに表現される土壇上面南東部の起伏は測量図Bでは表現されていない。測量図Aでは土壇上面北西部に北に抜ける通路が確認されるが、測量図Bには存在しない。測量図Aと測量図Bの等高線は概ね同じ場所に位置するが、土壇南東部に限り、測量図Bは測量図Aよりも明らかに南に張り出している。第1トレントの発掘調査及び過去の写真記録等の照会から、土壇南東隅の実際の裾の位置は、測量図Bの97mラインより北側であったと考えられる。

### （2）測量図A・Cの比較（第53図・第54図）

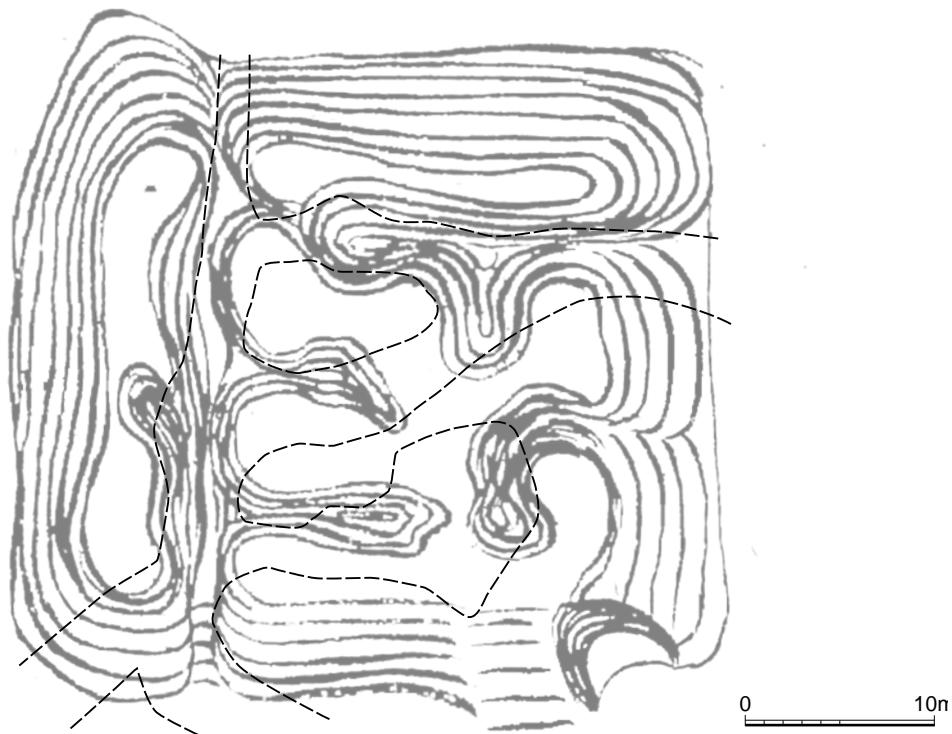
測量図C（第53図）は、測量精度は低く、標高の表示も無いが、土壇地形の起伏と形状を詳細に表現しており、作図者が地形を丁寧に観察していたことが伺い知れる。



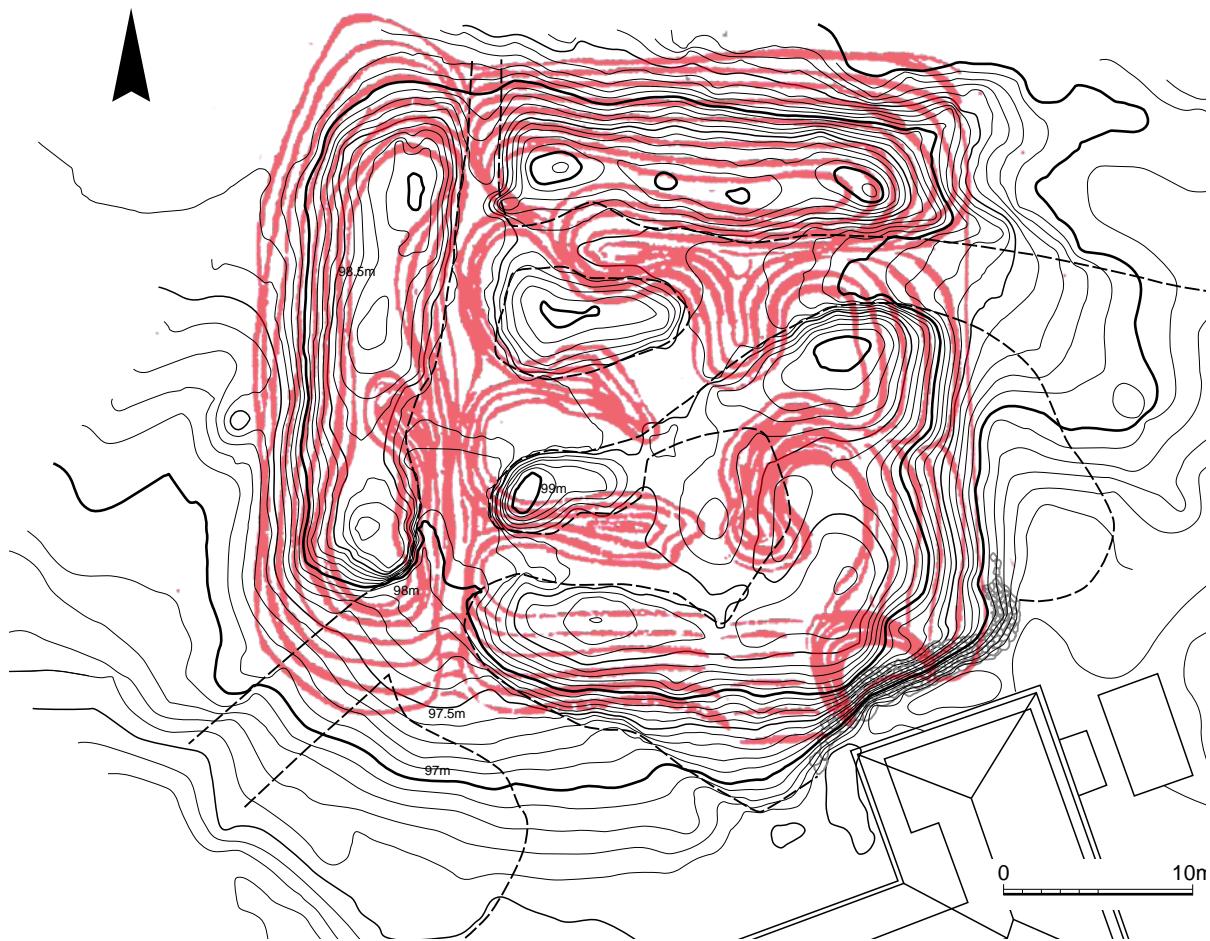
第51図 測量図B 土壇部分 (S=1/400)



第52図 測量図A・B 合成（黒・測量図A 赤・測量図B）(S=1/400)



第 53 図 測量図 C 土壇部分 (S=1/400)



第 54 図 測量図 A・C 合成 (黒・測量図 A 赤・測量図 C) (S=1/400)

測量図 A と比較すると（第 54 図）、測量図 C は、外形を正方形に表現していることが測量図 A と共通する。測量図 C は上面の起伏を丁寧に描写しているが、起伏の位置は測量図 A とほぼ合致する。測量図 B では表現されなかった土壇上面北西部の南北方向の凹みは、測量図 C には表現されている。また、測量図 A、C の比較から、土壇上面に現存する通路や広場の位置は測量図 C の段階に既に存在した起伏の凹部に形成されたことも看取される。さらに、測量図 C は南東隅部に横穴状の凹みを表現するが、第 1 トレンチの発掘調査と写真記録から、この凹みが実在したことが判明している。

測量図 C の作成年代は測量図 A よりも 80 年以上遡るが、光波測距儀による電子測量から作図した測量図 A に表現される微地形を正確に捉えて作図している。

### （3）小結

上記の検討から、測量図 A と測量図 C は微細な地形を捉え、地形表現がほぼ合致するのに対し、測量図 B は境内の建物や通路は詳細かつ正確に描写するものの、土壇の地形把握はやや粗く、微細な地形が表現されていない箇所があると考えられる。

測量図 C の土壇上面には複数の起伏が存在し、起伏の形状は令和 2 年作図の測量図 A と近似した地形であったことが判明した。測量図 C が作図された段階で、すでに土壇上面は大規模な改変を受けていたと考えられる。測量図 C から測量図 A まで 90 年以上の年代差があるため、その間、自然崩落等により起伏が変形している可能性はあるが、土壇上面の通路、広場は、基本的に土壇上面の起伏を利用して作られており、顕著な地形改変は受けていないようである。

（古川 匠）

## 7 遺物

### （1）遺物の概要

本調査では検証発掘という性格を踏まえ、調査中の出土品については時期や遺存状態などによる選別等はせず、そのまま取り上げて遺物として保管することとした。前章の通り、本調査では現代盛土や搅乱の直下で土壇構築土層を確認している。また、土壇構築土については保存を前提として部分的な断割りしか実施していない。そのため、本調査で確認した出土品にはごく少数のみ中世の遺物が含

付表 6 遺物概要表

時代	内 容	コンテナ 箱数	A ランク 点数	B ランク 箱数	C ランク 箱数
鎌倉～室町時代	土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦		土師器2点・須恵器3点 灰釉陶器1点・軒丸瓦1点 中世瓦9点		
近現代以降	コンクリート・スレート・ガラス 塩化ビニール管・陶磁器・瓦等		計121点		
合 計		1 箱	計137点(1 箱)	0 箱	0 箱

まれるが、それ以外の大半は現代を中心とした時期に属する。

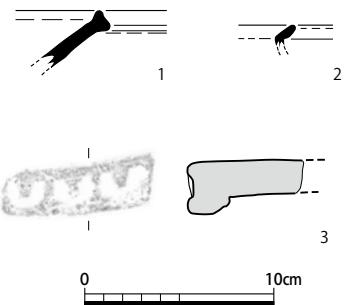
出土量は合計でコンテナ1箱分あり、種類としては土師器・須恵器・瓦のほか、コンクリート・スレート・ガラス・塩化ビニール管・プラスチックなどがある。

## (2) 出土遺物

### ① 第1トレーニング

本調査の出土品の大多数が第1トレーニングより出土した。ほぼ全てが現代盛土や搅乱、埋設管掘方などから出土したものである。これらの中には中世に遡る遺物も一部含まれているものの、図化に耐えうるのは第55図の3点程度しか認められない。なお、小片のため器形・時期などは断定できないが、中世に遡る可能性がある土師器片が第1トレーニングa区の西端に設けた断割りの土壇構築土層より1片のみ出土している。以下、実測した遺物について述べる。

1は東播系須恵器の鉢の口縁部である。小片のため径等は復元できない。第1トレーニングa区の現代盛土層より出土した。2は灰釉陶器の口縁部である。小片のため器形を断定できないが、器壁が薄いことから小型壺などと考えられる。第1トレーニングa区北壁19層より出土した。3は折り曲げ技法で成形された剣頭文軒平瓦である。瓦当面の半分程度が遺存している。鎌倉時代のものと考えられる。第1トレーニングb区の埋設管掘方S X 101より出土した。



第55図 出土遺物実測図 (S=1/4)

### ② 第2トレーニング

平成28年の発掘調査後の埋戻し土や、それ以降の盛土層より染付やビニールなどが少量出土したのみである。

(熊井亮介)

## 8 まとめ

### (1) 課題となった現状変更について

文化庁からの指導・助言により、金閣寺境内の東部に位置する土壇に影響を与えたとされる3つの行為について、今回の検証発掘調査の成果から結論を述べる。

### ① 石垣の築造

石垣の築造とされた行為は、土壇南東部分にある高さ約2m、延長約16mの範囲にわたって一抱えほどの石を敷き並べた行為である(第36図)。本来、石垣とは不同沈下を防ぐために基底部を揃え、崩壊しないように荷重のバランスを考えて石材を据え付け、積み上げていくものであり、石材の後方には排水や崩落防止のために裏込めを、石材相互の隙間には間詰石を詰めていく。しかしながら、今

回指摘された行為は、基底部の不同沈下対策工事がされているわけでもなく、荷重を考えて石材が据えられているわけでもなく、裏込めと呼べるほどのものも詰められておらず、後述する盛土の流出を抑えるために盛土の表面に石を貼り並べたものであり（第38図）、土壇を削って据えたものではないことが明らかとなった。

## ②通路の設置

土壇に設置された通路については、当時施行中であった黒門便所・休憩所の工期短縮と参拝者への安全対策の必要性により、迂回路として計画されたものであり、平成28年6月29日付けで宗教法人鹿苑寺代表役員から、通路面積約202.65m<sup>2</sup>、竹柵約130m、盛土の最大厚約0.4mで申請され、京都市が許可している。しかし、平成28年10月18日付けで、土壇上にある既設通路の幅が狭く、参拝者の安全確保が難しく、車いすが通れないことから、勾配を1/15以下、幅を5m以上確保する計画がなされた。その際、盛土だけによる施工はできないため、土壇の一部で切土（10.57m<sup>3</sup>）が発生せざるを得なくなり、文化庁の承認を得るために計画変更書が提出されたものである。この現状変更に伴う発掘調査により、被熱面と土壇状の盛土が確認されたことから、被熱面を保護するために通路幅を5mから3.8mに縮小された上で施工されている（第47図）。

今回の検証発掘調査により、発掘調査終了時と全く同じ状況であり（第48図）、発掘調査終了後の仮設通路設置に伴い計画以上に土壇が破壊されていないことがわかった。

## ③既存園路

既存園路とは、平成28年の現状変更申請時に土壇上に存在した「既存広場」「既存通路」「既存園路」をまとめた申請図面上の呼称である。問題はこれが無許可で土壇を削って造られたものなのかどうかであるが、少なくとも昭和10年（1935）以前で、大正11年（1922）から昭和5年（1930）の間に概ね限定することが可能である測量図Cに描かれた土壇部分の等高線の谷部分と、これらの施設の位置が概ね一致すること（第53図）から、測量図C時点の旧地形を利用して、園路の体裁が整えられたものと考えられる。

## （2）土壇に影響を与えた現状変更について

### ①埋設管による現状変更

今回の発掘調査により、現状変更許可申請がなされていなかった排水管敷設工事を確認した。この未申請の現状変更は、平成25年9月10日付けで宗教法人鹿苑寺代表役員から申請された建物の付帯工事に伴うものであった。この現状変更許可申請は、同日付けで申請された黒門便所・休憩所の建替えに伴い、施設の閉鎖が長期間に及ぶことから、参拝者の利便性を図るために必要最小限の簡単な仮設建物を計画したものであった。仮設建物の構造は、木造・平屋建て・切妻造りで、建築面積は9.9m<sup>2</sup>であった。本来であれば、この仮設建物に伴う電気・ガス・上下水道等の埋設管の管路図等も提出されるべきものであるが、失念していたものである。埋設管敷設時の施工写真によると、土壇裾部を

避けるように経路設定がなされているように見えるが、実際は、土壇の一部を削って設置されており（第37図・第39図）、現状変更申請が適切に行われていれば京都市文化財保護技師が立会調査時に確認できていたと考えられる。

なお、今回の調査区内で確認した排水管は、埋め戻し時に除去した。

## ②黒門便所・休憩所に伴う盛土による現状変更

また、平成25年9月10日付けで宗教法人鹿苑寺代表役員から申請された黒門便所・休憩所の建替えに伴う現状変更申請では、計画に先立ち2回に分けて行われた事前発掘調査成果に伴い遺構の保存を前提としたものであり、次の4つの現状変更が含まれていた。

- ・既存便所・休憩所の除却（木造平屋建て、建築面積53.94m<sup>2</sup>）
- ・黒門便所・休憩所の新築（木造平屋建て、建築面積168.57m<sup>2</sup>）
- ・樹木の伐採・移植
- ・電気系統配管埋設

この現状変更、特に新築工事時の基礎掘削、移植時の根株保護のための掘削、埋設管の掘削によって生じる排出土を場外搬出するのではなく、北側の土壇の元々低平になっていた部分に盛土するという工事が行われていたことを確認した（第37図・第38図）。この盛土の強度は弱く、黒門便所・休憩所と土壇の間には鹿苑寺境内の防災設備が設置されたことからも、修景と防災設備及び黒門便所・休憩所への盛土流出防止も兼ねて貼石がなされた可能性が高い。この行為は直接土壇を破壊する行為ではないものの、土壇の景観に影響を与えており、今後、土壇の保存方法を考えていく必要がある。

## （3）検証発掘調査成果について

以上、今回の検証発掘調査により、申し立てられた①石垣の築造、②通路の設置、③既存園路の三つについて、現状変更許可申請の範囲を超えて土壇に影響を及ぼしていないことを確認した。一方で、現状変更許可申請がなされずに工事が行われた結果、土壇の一部が削られていたこと、平成25年以前にあった土壇の景観に影響を与える盛土がなされていたことを確認した。

今後は、所有者だけでなく維持管理に携わる様々な事業者に対して、史跡・名勝の重要性と現状変更に必要な手続き等の周知をしていかなければならない。

（石崎善久・馬瀬智光）

（注）

- (1) 山田邦和「中世都市京都の変容」『京都都市史の研究』吉川弘文館 2009年
- (2) 『政事要略』弘仁五年十月十日条には、北山野の四至は「東限園地司東大道、南限宮城以北、西限野寺東、北限靈源寺」とある。
- (3) 『増鏡』「第五内野の雪（仁治三年）」（『國史体系』第二十一卷下）
- (4) (3) とおなじ
- (5) 『臥雲日録抜尤』文安五年八月十九日条
- (6) 北山大塔については『大乗院日記目録』応永十一年四月三日や『看聞日記』応永二十三年正月九日条、『醍

醐寺文書』二百一函、『満済准后日記』応永二十三年正月九日条などに記述がみられる。なお、北山七重大塔の造営過程については、早島大祐『室町幕府論』講談社 2010 年で触れられている。

- (7) 丸川義広ほか『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015 – 9 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016 年
- (8) 測量図 C の大目盛りは、現地公開資料では「5 丈」と記述したが、その後の再検討の結果、本文の記述のとおり、「10 間」が妥当と見解を改めた。また、現地公開資料では調査次数を「第 21 次」と表記しているが、その後の調査次数の再整理により、「第 25 次」となった。
- (9) 通常、石材を積み上げて築造した工作物を「石積」あるいは「石垣」と称する（文化庁文化財部記念物課 2014）が、土壇南東部の構造物は、石材が積まれるのではなく、斜面に敷き並べられる構造であった。したがって、上記の「石積」、「石垣」の定義には該当しないと判断される。むしろ、弥生時代の「貼石墓」と近い構造であるため、本稿ではこの遺構を「貼石」と称する。
- (10) 第 41 図は、塩ビ管施工の詳細を調べるために、施工業者から提供を受けた写真である。
- (11) 中世盛土層の堆積状況の評価については、外部有識者の菱田哲郎氏（京都府立大学文学部教授）、箱崎和久氏（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部長）から御教示を得た。

(参考文献)

文化庁文化財部記念物課『石垣整備のてびき』 2014 年

東 洋一「西園寺四十五尺瀑布瀧と北山七重大塔・上」『研究紀要』第 7 号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2001 年

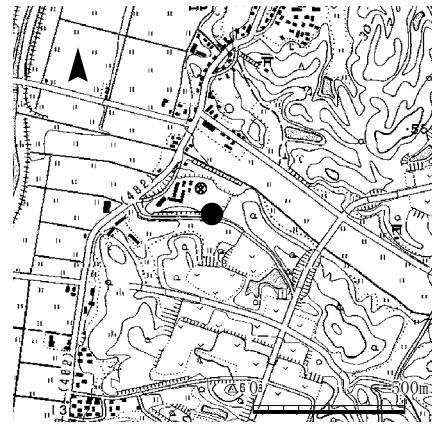
東 洋一「北山七重大塔の所在地について（上）」『洛史 研究紀要』第 11 号 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2017 年

## [2] 奈具<sup>なぐ</sup>遺跡試掘・確認調査（第4次調査）

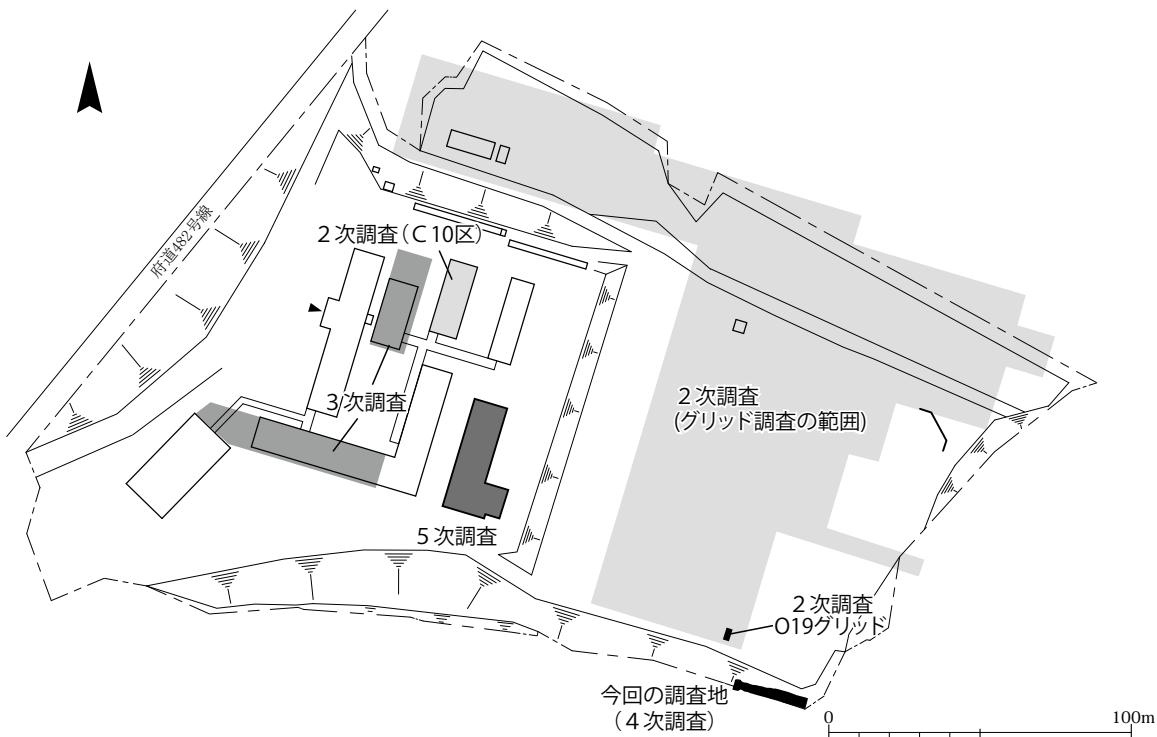
### 1 はじめに

奈具遺跡は、京丹後市弥栄町黒部に位置する弥生時代から古代にかけての複合遺跡である。今回の調査は、急傾斜地の崩落に伴う防災工事として京都府教育委員会が実施する工事に先立って実施したものである。調査地は現在の府立清新高等学校の南東隅の斜面にあたる。

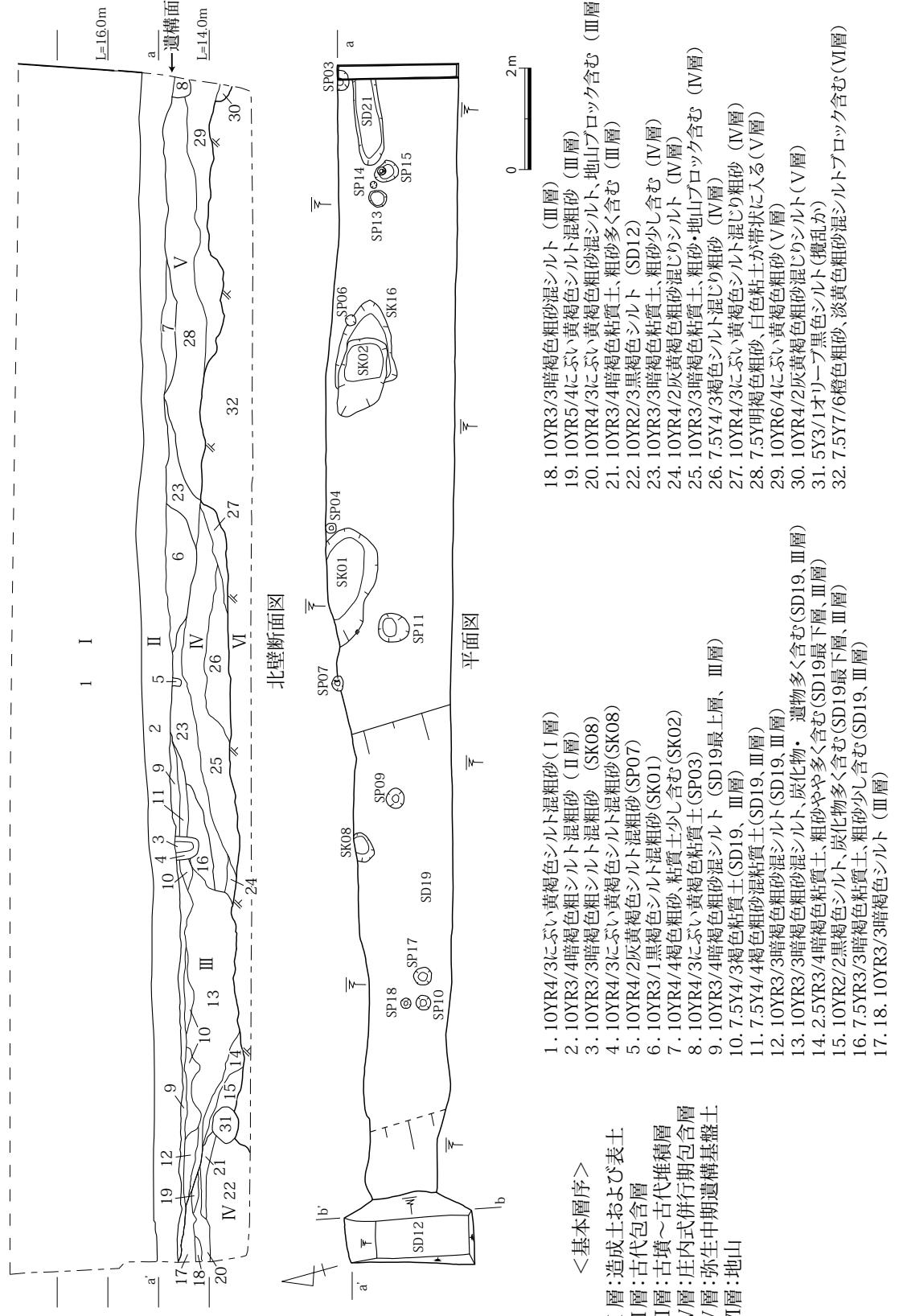
調査経過は以下の通りである。平成30年5月23日に工事前の詳細分布調査として工事対象範囲の西端を部分的に調査したところ、多量の土器が出土し、自然崩落に伴う土砂除去工事範囲全体の調査を行う必要性が明らかとなった。改めて日程調整を行い、対象範囲内の掘削は5月30日から開始した。調査の緊急性から、掘削・精査・作図等は当課職員で行うこととし、京丹後市教育委員会からも協力をいただいた。調査にあたっては斜面崩落の危険もあり、十分な調査期間をとることができなかつた。遺構掘削以外



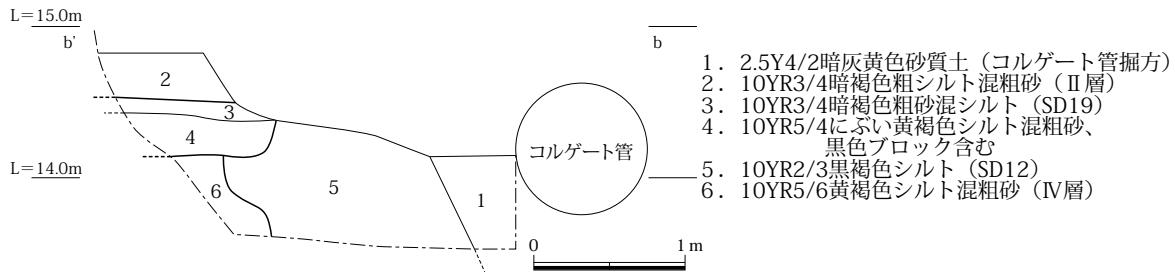
第56図 奈具遺跡位置図（国土地理院  
1/25,000「網野」「峰山」）



第57図 調査地位置図 (1/2,500)



第58図 奈良遺跡第4次調査区平面・北壁断面図 (1/120)



第59図 奈具遺跡第4次SD 12断面図(1/50)

の掘削は基本的に重機によって行い、適宜遺物の回収を進めた。調査は天候等による中断等を挟みつつ、6月8日にすべての作業を終了した。

現地調査にあたっては、京丹後市教育委員会、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、府立峰山高等学校弥栄分校の方々のご指導とご協力をいただいた。また、出土遺物の分析にあたっては、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の廣瀬覚氏、脇谷草一郎氏にご協力いただいた。ここに記して感謝申し上げる。

## 2 遺跡の位置と環境

奈具遺跡は、丹後半島最大の河川である竹野川の右岸に形成された河岸段丘上の丘陵端部に位置する。奈具遺跡周辺の遺跡群は、丹後を代表する弥生時代の集落として著名である。奈具遺跡周辺には、弥生時代前・中期の集落である奈具岡遺跡、奈具谷遺跡をはじめ、弥生墳墓である奈具墳墓群、陶質土器を副葬品とする奈具岡北1号墳等がある。中でも、奈具岡遺跡では、緑色凝灰岩製管玉、ガラス玉、水晶玉、鉄器等各種の手工業生産が行われていたことが判明し、玉作関係資料は一括して重要文化財に指定されている。<sup>(注1)</sup>

奈具遺跡は、明治44年に付近の耕地整理の際に、多数の弥生土器、石器が出土したことで知られるようになった。<sup>(注2)</sup>昭和37年の府立峰山高校弥栄分校建設工事に伴う第1次調査では、丘陵の北斜面を中心<sup>(注3)</sup>に弥生土器を中心とする遺物が採集されている。昭和46年の学校施設改築工事に伴う第2次調査では、弥生時代中期と古墳時代中期の竪穴建物、弥生時代中期後葉を中心とする遺物が多数出土<sup>(注4)</sup>した。第2次調査の中でも、今回の調査区に近いO19グリッド(第57図)では、弥生土器に土師器と須恵器の混じる分厚い包含層が検出されている。昭和55年の校舎増築に伴う第3次調査では、丘陵北斜面を中心<sup>(注5)</sup>に調査が行われ、中世前期の溝やピットが検出された。平成30年の校舎増築に伴う第5次調査では、時期不明の竪穴建物状遺構や奈良時代の遺構が検出された。今回の調査は奈具遺跡の調査としては第4次の調査となる。

(中居和志)

### 3 調査の成果

#### (1) 調査状況と基本層序

調査地は南向きの丘陵の斜面部に当たっており、調査を実施したのは斜面の裾に近い部分である。調査面積は57m<sup>2</sup>である。後述のように複数の遺構や層序の堆積を確認しながら掘り下げを行ない、標高13.5～14.0m付近で地山を確認した。最終的に、工事の掘削の及ぶ標高13.2m付近まで掘削を行なった。

土層の堆積は概ね北から南に向かって傾斜していることが現地で確認できた。一方で、東西方向に閑しては、南北方向ほどは傾斜した土層の堆積は認められなかった。このことから、調査地の土層の堆積は、丘陵上面である北側から谷部である南側に向かって土砂が流れ込むことによって形成されたと考えられる。今回の調査原因も斜面の崩落であり、同様の崩落が歴史上何度も発生して、徐々に土層が堆積していったと推測される。このような堆積状況ゆえに、各層位に包含されている遺物も丘陵上面から流れ込んだ2次堆積によるものが多くを占める。

調査地の基本層序は、第58図に示したとおりである。I～VI層に大別することができる。調査は標高14.8m付近から開始した。丘陵の上面までは5m程度の高さがあるが、標高14.8mより上層がI層にあたり、崩落土除去の復旧作業によりすでに失われていた。昭和46年の第2次調査の報告書掲載の写真によると、丘陵の斜面には段々畠が営まれており、現在よりも緩傾斜であったことがわかる。そのため、現状の斜面が昭和46年以降の大規模な盛土の結果形成されたものであり、I層は学校建設時の盛土であると判断できる。II層は約0.5mの厚みがあり、出土遺物からみて古代の包含層である。II層を除去した下層が遺構面である。遺構面からは、土坑やピット、溝などの遺構を検出した。出土遺物からこの遺構面は古代に形成されたと考えられる。古代の遺構面を形成する層のうち、最も新しいのがIII層である。調査中は谷地形として判断していたSD19をIII層として扱う。埋土中には多量の土器を含んでいる。出土遺物の時期から、III層の最終的な埋没は古代である。SD19の基盤層となるのがIV層である。IV層は庄内式新段階までの包含層やSD12を含む。なお、少量の須恵器の混入があるが、上層の遺構由来の可能性が高い。弥生時代中期の遺構の基盤層となるのが、無遺物のV層で、弥生時代中期以前の堆積土である。さらに下位のVI層は地山である。

#### (2) 検出遺構

S K 01 調査区中央部で検出した楕円形の深い土坑である。大きさは長軸で約2.4mを測り、深さは約0.6mである。弥生時代中期の壺(1)・高杯(2)、古墳時代初頭の甕(6)などの遺物が多いが、古墳時代後期の須恵器杯身(9)があることから、古墳時代後期以降の遺構である。

S K 02 調査区東寄りで検出した不定形の深い土坑である。SK16と重複しており、SK02が新しい。大きさは長軸で約1.6mを測り、深さは約0.2mである。弥生時代後期の広口壺(10)や器台(15)などの遺物が多いが、平安時代の黒色土器杯(20)出土したことから、平安時代の遺構であると判断できる。

**S K 08** 調査区中央部で検出した土坑である。直径約 0.6 m、深さ約 0.5 m を測る。柱痕跡状の土層状況であることから、柱穴の可能性が高い。組み合う柱穴が見つかっておらず、建物の展開は不明である。出土遺物は土師器と須恵器の小片が出でているが、時期は確定できない。

**S K 16** 調査区東寄りで検出した不定形の土坑である。S K 02 と重複しており、切り合い関係から S K 16 が古い。大きさは長軸で約 1.7 m を測り、深さは約 0.3 m である。土坑埋土が上下に分かれており、遺物を分けて取り上げたが、上下層の遺物の時期差はない。出土遺物には、鼓形器台（46）や有段口縁をもつ小型器台（47）がある。一部弥生時代中期の遺物（21）を含むが、大半は古墳時代初頭のものである。遺構の時期は、鼓形器台の形態が山陰地域の編年で草田 6 新相に該当し、布留式古段階古相併行期である。<sup>(注7)</sup>

**S D 12** 調査区西側で検出した溝状遺構である。遺構の底部や西肩は検出していないが、埋土の堆積状況からみて北西から南東に傾斜する溝の可能性が高い。S D 19 の下層に存在することから、それより古い遺構である。調査区外に延びていることから全容は不明であるが、幅 2.5 m 以上、深さ 0.8 m 以上を測る。弥生時代中期の土器もやや多く含む（78～91）が、山陰型甌形土器（116・117）や擬凹線文のない形骸化しつつある有段口縁甌（96～99）があることから、庄内式中段階から新段階併行期の遺構である。

**S D 19** 調査区西側で検出した谷状の落ち込みである。幅は 9 m 以上あり、深さは最大で約 1.2 m を測る。落ち込みが完全に埋没した上面が古代の遺構面となっており、そこに S K 08、S P 09、S P 10 などの遺構が掘削されている。埋土は複数の層に分かれているが、斜面の崩落等によって埋没していったと考えられる。層位は最上層、中層、最下層に大別でき、出土遺物の多くは中層からの出土である。出土遺物の量は多く、今回の調査で出土した土器の大半を占める。最上層では土師器杯（136）など古代の遺物が出土しているが、最下層では器壁の厚い布留形甌（210）や小型丸底壺（208）が出土している。S D 19 は、重複関係と遺物の時期からみて、布留式中～新段階併行期に形成され、最終埋没する古代まで比較的長時間にわたって開口していたと考えられる。

**S P 07** 調査区中央部の壁際で検出したピットである。直径約 0.2 m、深さ約 0.2 m を測る。遺構内からは底部糸切痕のある須恵器杯（222）が出土した。遺物の時期からみて、平安時代の遺構である。

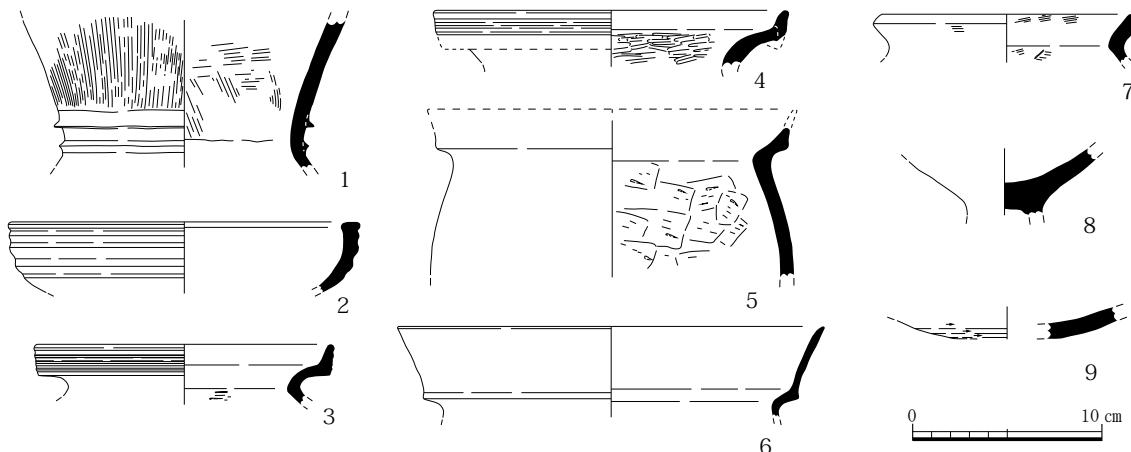
**S P 15** 調査区東側で検出した楕円形のピットである。大きさは長軸で約 0.5 m を測り、深さは約 0.2 m である。遺構内からは、口縁部の完存する広口壺が口縁部を下にした状態で出土した。意図的に口縁部を埋納した遺構である可能性が高い。遺物の時期からみて、弥生時代中期後半の遺構である。

なお、ピットについては S P 07・15 以外にも複数確認したが、いずれも建物を復元することはできなかった。

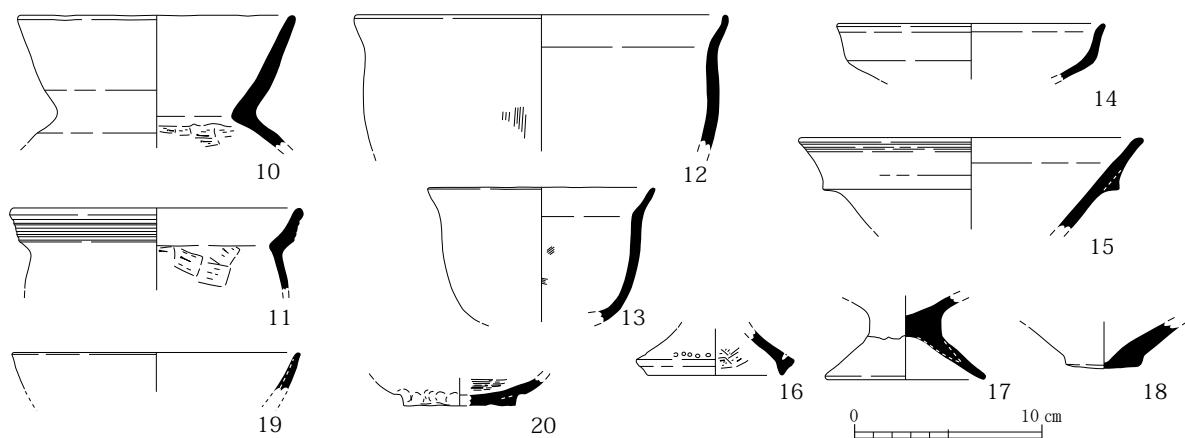
（岡田健吾）

### （3）出土遺物

今回の調査では、コンテナ 36 箱分の出土遺物があった。調査面積に比べて遺物量が多い。遺物の詳細は別表のとおりであり、特徴的な遺物について出土遺構別に述べていく。なお、今回の出土遺物の時期の主体を占める弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器編年には、高野氏の編年を用い、



第60図 奈具遺跡第4次SK 01出土遺物(1/4)



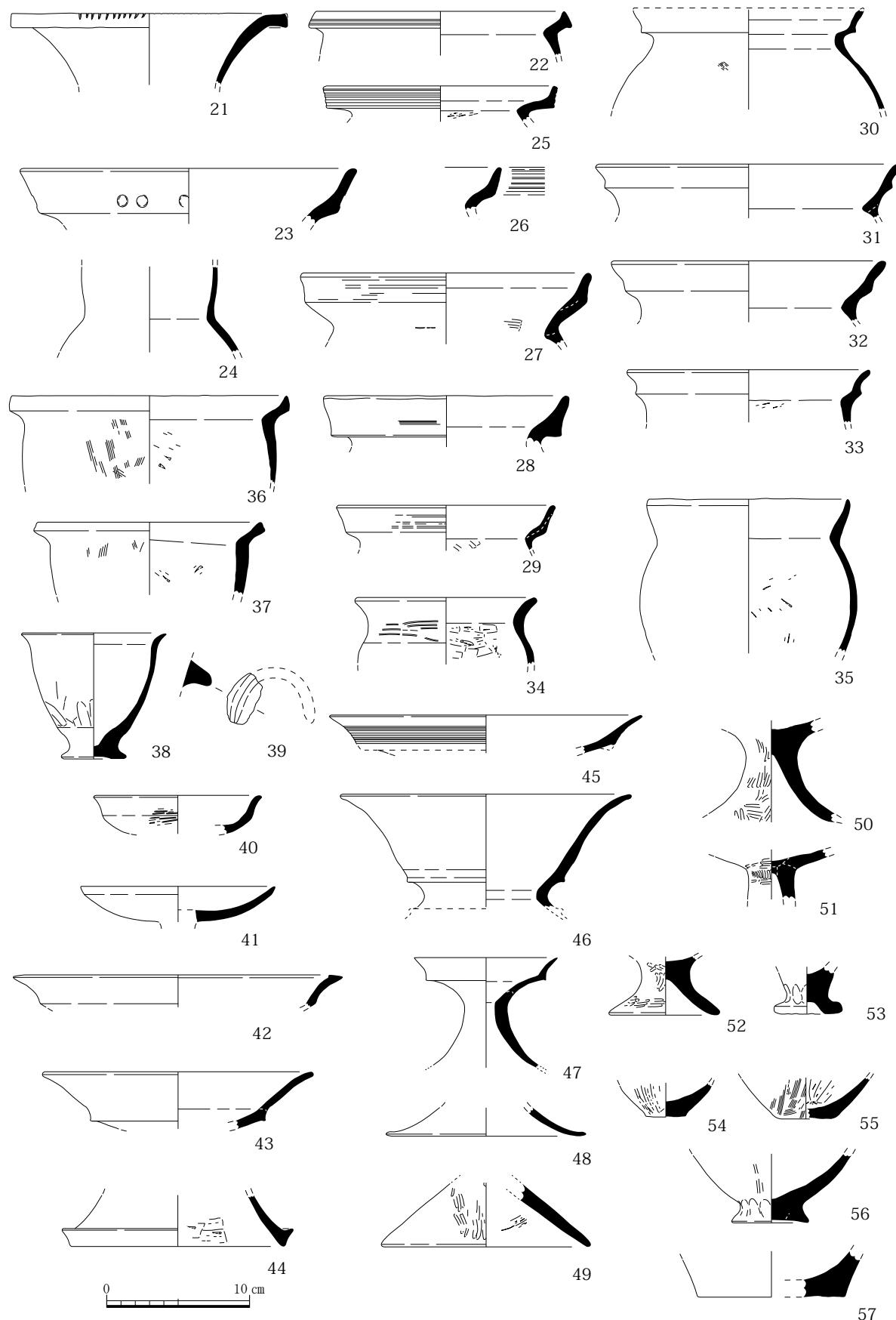
第61図 奈具遺跡第4次SK 02出土遺物(1/4)

他地域との併行関係には桐井氏の案を用いることとする。<sup>(注8)</sup> おおまかな時期区分としては、弥生時代後期前葉が三坂神社式、弥生時代後期中葉が大山式、弥生時代後期後葉から庄内式古段階が西谷式、庄内式併行期から布留式古段階古相が浅後谷南式、布留式古段階新相が霧ヶ鼻式となる。

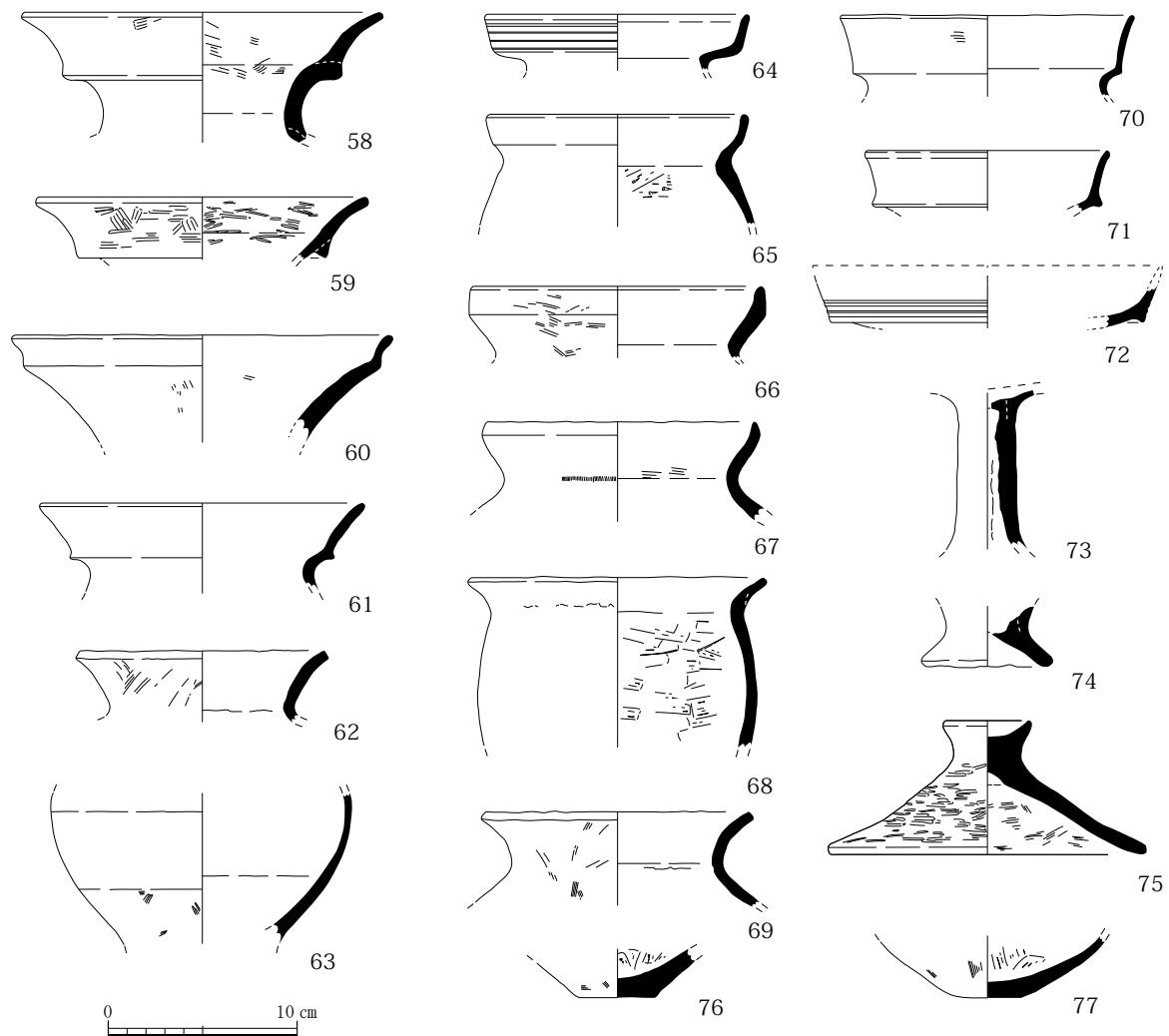
**SK 01** (第60図1～9) 1・2は弥生時代中期の土器である。1はⅢ様式新段階の広口壺、2は凹線文の入るⅣ様式の高杯である。3～8は弥生時代後期から庄内式併行期の土器である。6は山陰系有段口縁甕であり、浅後谷南式期に丹後地域で在地化する甕である。9は須恵器の杯身ないし杯蓋で、外面に回転ヘラケズリを施すことから古墳時代中～後期のものであろう。

**SK 02** (第61図10～18) 16が弥生時代中期、10～15・17・18が弥生時代後期の土器である。14は有稜高杯の杯部で、立ち上がり部が短い大山式の高杯である。15は器台で、口縁部外面に擬凹線を施す丹後地域に特有の器種である。擬凹線は弱く、有段部は口縁部の拡張ではなく外面貼り付けになるなど、擬凹線を施す器種が形骸化しつつある浅後谷南式のものである。17は低脚の高杯脚部で、上半部と脚端部が異なる粘土を用いる。脚柱部の胎土は砂礫が多く黄褐色の胎土なのにに対し、脚端部は精良で灰白色の胎土である。19は古代の須恵器杯、20は平安時代の黒色土器杯の底部である。

**SK 16** (第63・64図21～77) 21～57が上層、58～77が下層出土である。21・44・57が弥生時代中期、23～43・45～56・58～77が弥生時代後期から古墳時代前期の土器である。21は弥生時



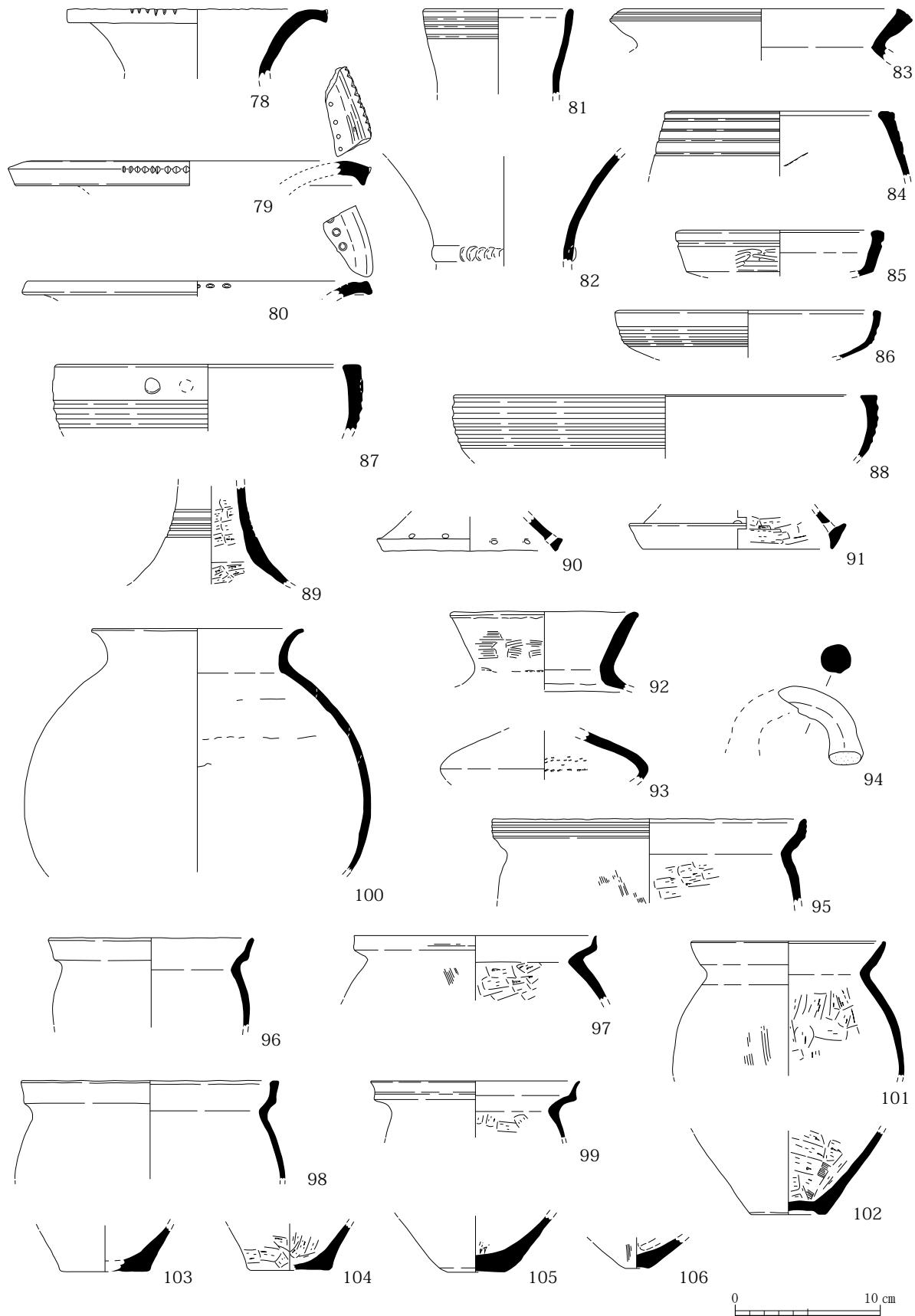
第62図 奈具遺跡第4次SK 16上層出土遺物 (1/4)



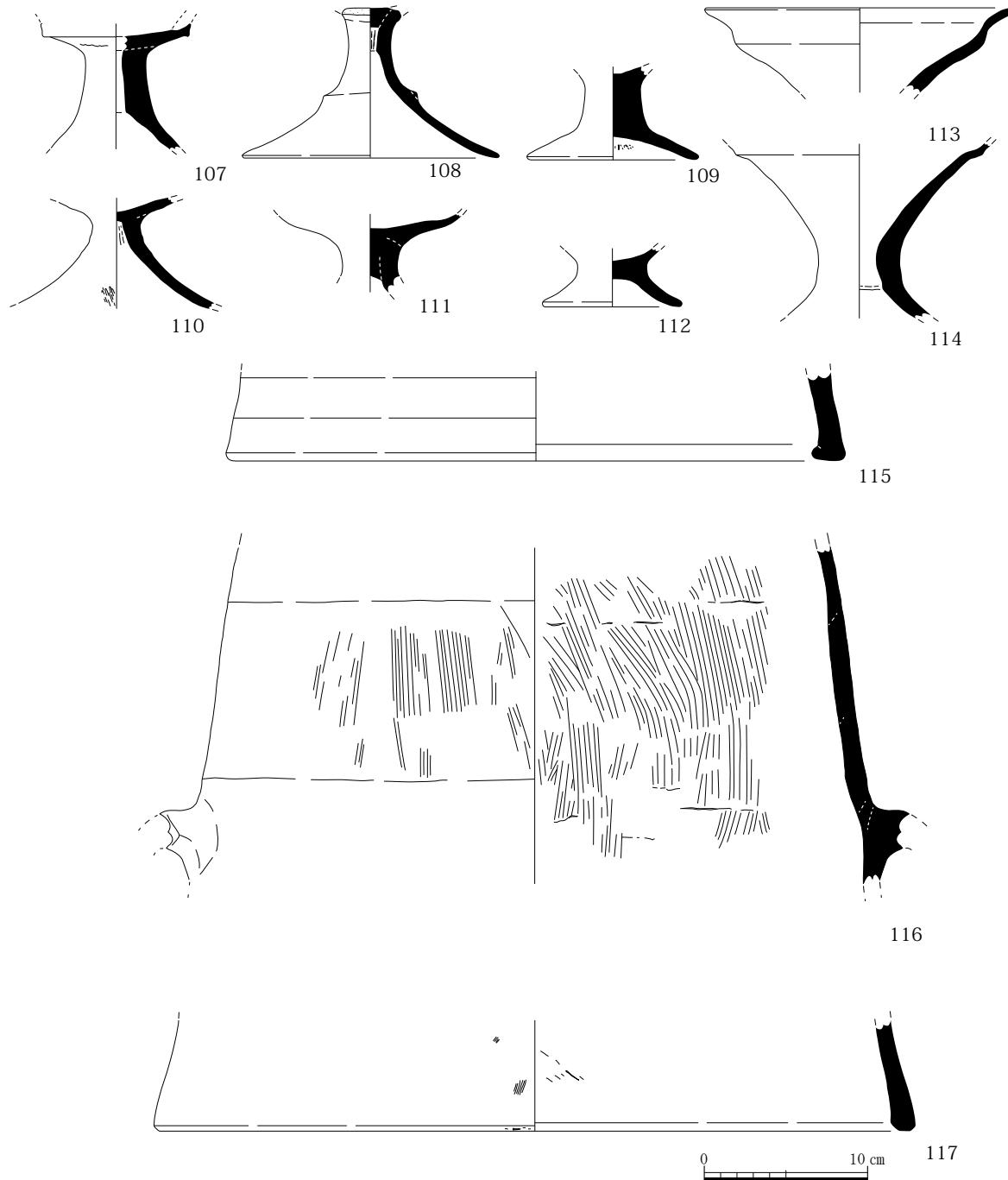
第63図 奈具遺跡第4次SK 16下層出土遺物(1/4)

代中期の広口壺、23・24は壺で、23は口縁部外面に円形文を施す二重口縁壺、24は直口壺である。22・25～35は甕で、25～33が有段口縁甕、34・35がくの字状口縁甕である。22は口縁端部を拡張して凹線文を施す甕で、三坂神社式である。30～33は、口縁外面の擬凹線文がなくなった在地系譜の有段口縁甕で、浅後谷南式である。36～38は鉢で、38は脚部が外へ広がる脚台状となる。39は鉢の把手であろう。40～43・48～51は高杯である。42は杯部端部内面が肥厚する大山式の高杯、43は畿内地域で通有の有稜高杯である。45～47は器台である。45は擬凹線文を施す器台、46は山陰地域に系譜をもつ鼓形器台である。46は立ち上がりが高めであり、山陰地域の編年では浅後谷南式に併行する草田6段階に該当する。47は在地系譜を引く器台で、擬凹線文がなくなり小型化の進む最終段階の器台である。同じく浅後谷南式に該当する。

58～64は壺である。58～60は二重口縁壺で、58は一次口縁の上方に二次口縁を付加し、59は外面に粘土を張り付けて有段部を作り出す。59・60は外反度が強いため壺としたが、器台となる可能性もある。61は山陰地域に系譜をもつ有段口縁の壺である。65～71は甕である。有段口縁甕の外面に擬凹線文ではなく、在地化した山陰系有段口縁甕(70・71)がある点も上層と同じ浅後谷南式のものである。72は器台、73は高杯、74は台付鉢の底部である。75はほぼ完形の蓋であり、外面にはミガ



第64図 奈具遺跡第4次SD12出土遺物1 (1/4)

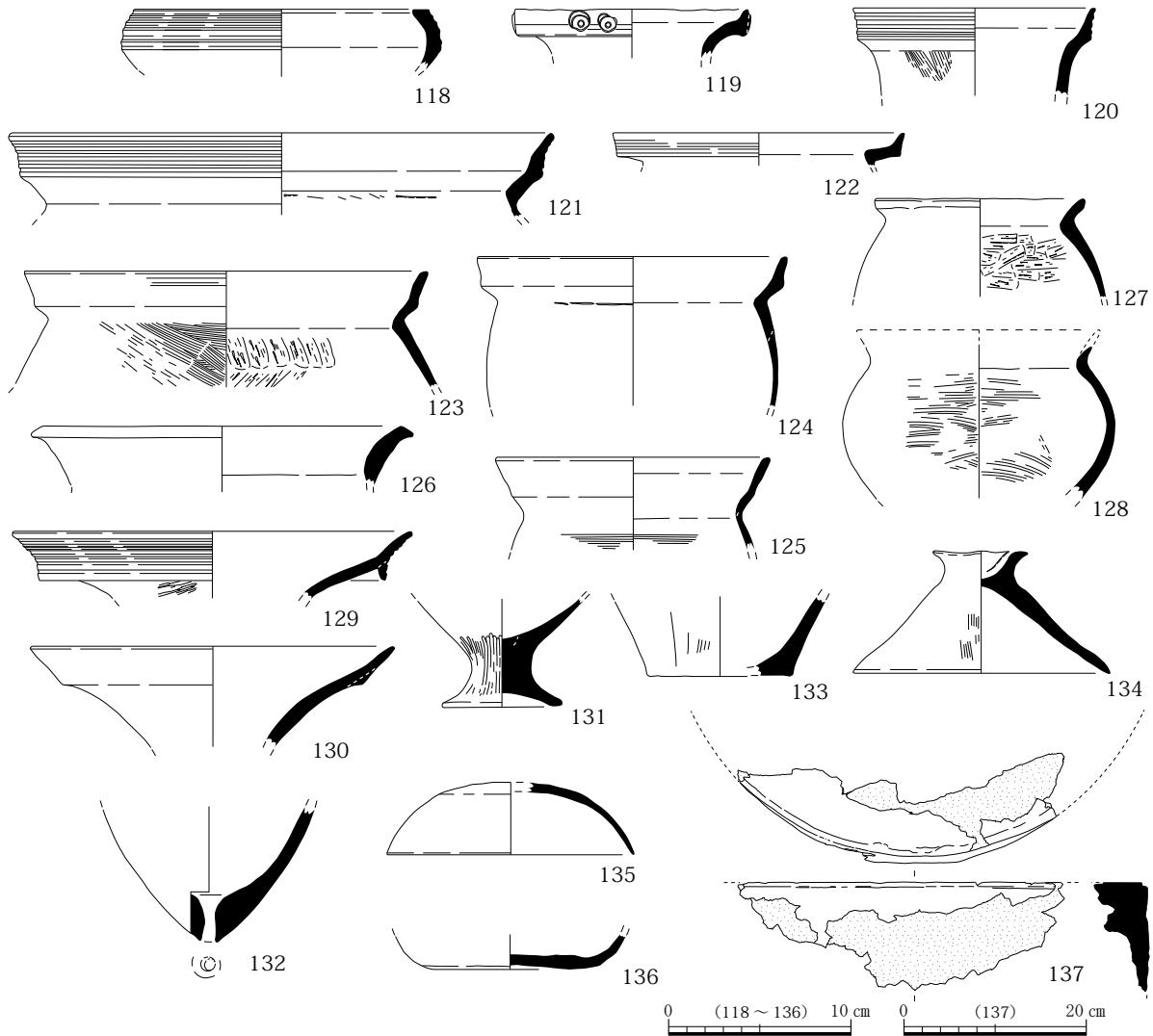


第65図 奈具遺跡第4次SD 12出土遺物2 (1/4)

キ調整を施す。以上のように、SK 16出土遺物は上下層とも最も新しい土器が浅後谷南式に該当する。

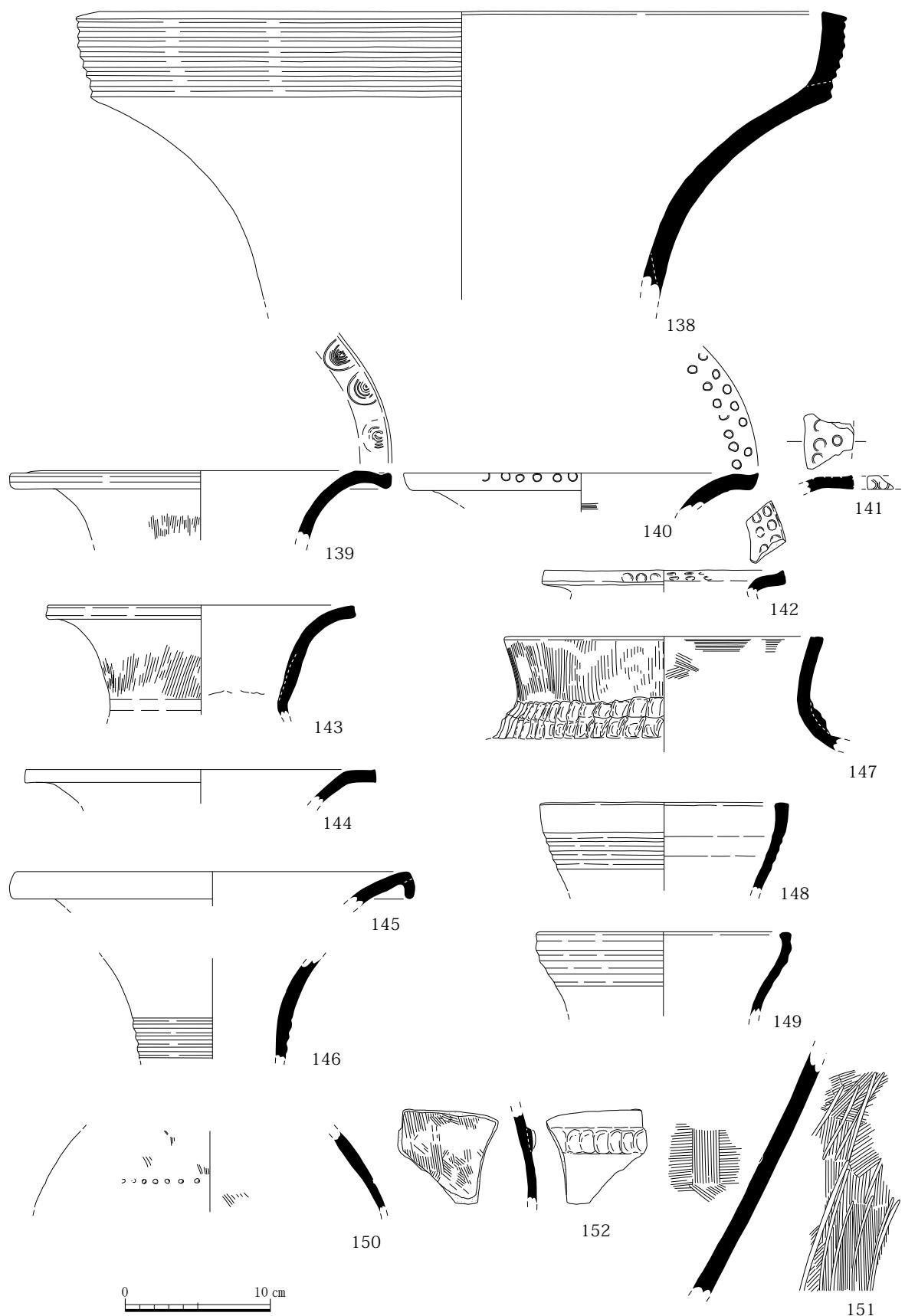
これらの土器群は、時間幅の少ない良好な資料であると評価できる。

SD 12 (第64・65図78~117) 78~91・103・104は弥生時代中期、92~102・105~117は弥生時代後期から古墳時代前期の土器である。78~82は壺で、79・80の口縁部内側には円形刺突文や竹管文を施す。83は甕、84は鉢、85~91は高杯である。87の外面には円形浮文を貼り付ける。以上、いずれも弥生時代中期後半のIV様式に該当する。92~94は壺である。93は細頸壺の肩部で、内面に爪の当たり痕が残る。95~102は甕である。95~99が有段口縁甕、100・101はくの字状口縁甕である。95以外に口縁外面の擬凹線文が確認できることから、浅後谷南式に該当する。100は頸甕。

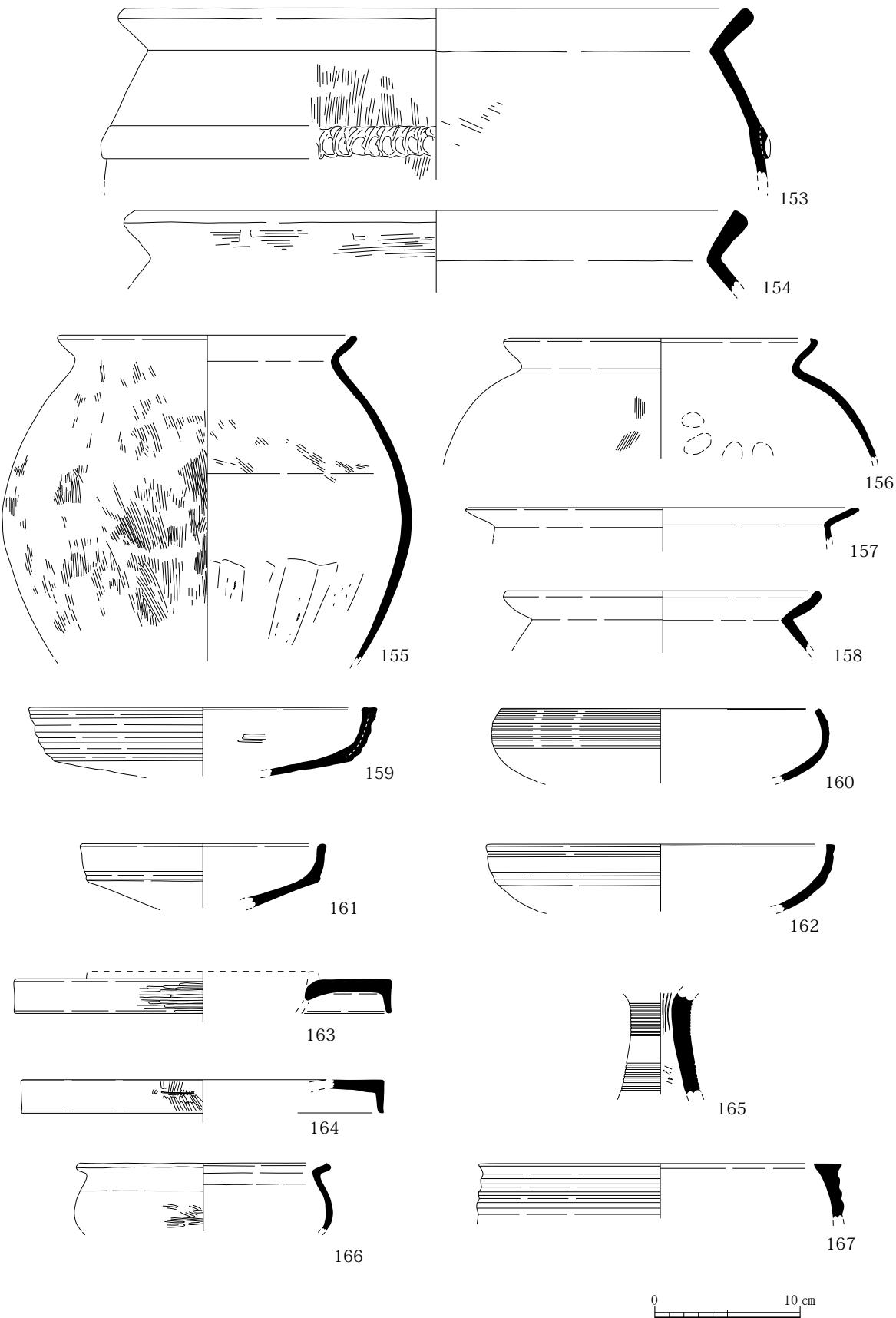


第66図 奈具遺跡第4次SD 19最上層出土遺物 (1/4、137のみ1/8)

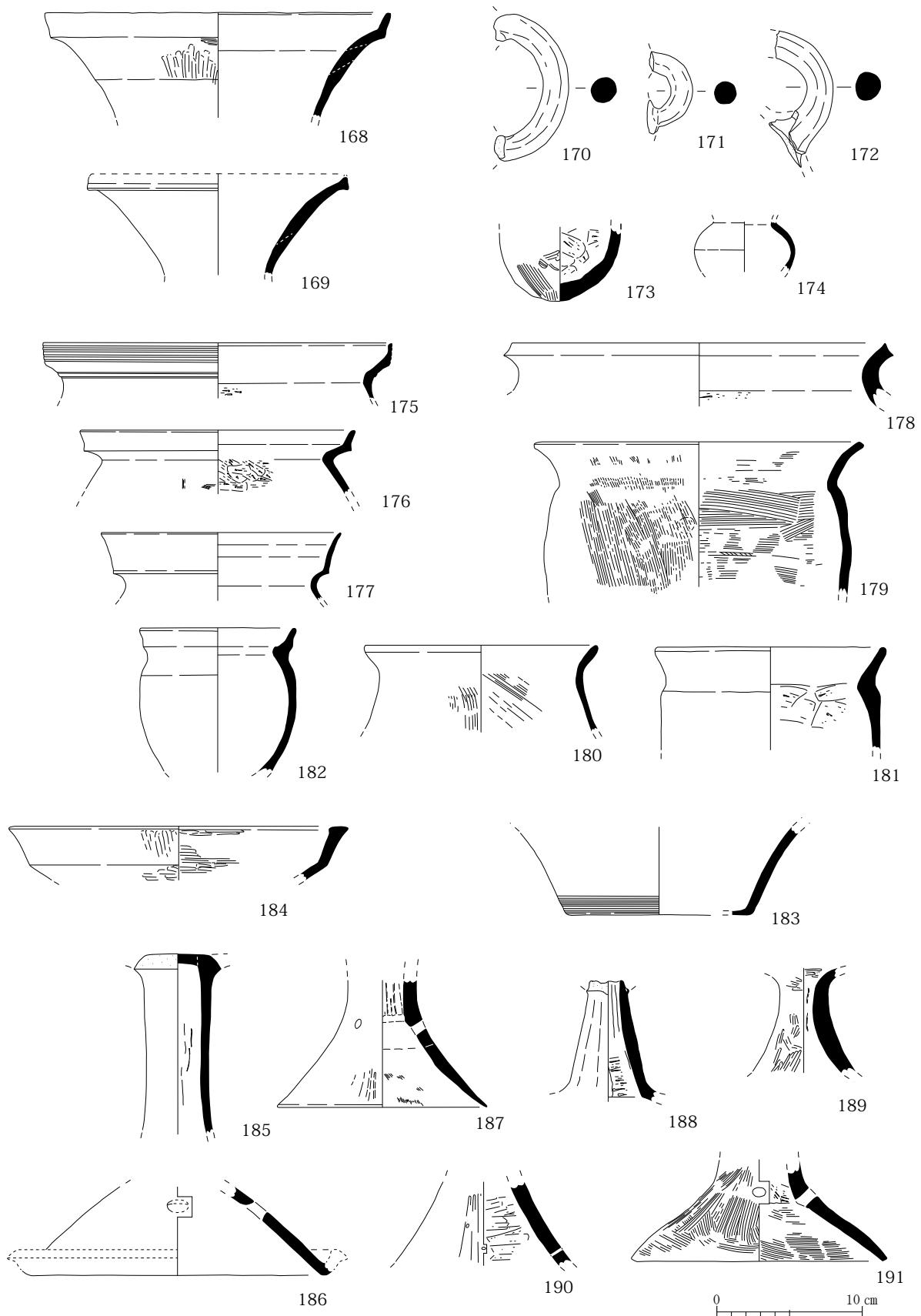
部が通常の甕よりやや締まることから壺になる可能性もある。101・102は、接合点がないものの胎土からみて同一個体である。107～112は高杯である。107は畿内地域に通有の有稜高杯である。108は脚部に稜をもつ高杯で、丹後地域で類例の少ない高杯である。胎土は他の土器と差異がなく、北陸地域の庄内式古段階併行期に類似した高杯があることから、北陸地域の影響を受け在地で製作された高杯の可能性がある。113・114は複合口縁をもつ器台である。複合口縁部分に擬凹線文がなくなる浅後谷南式のものである。115は大型の土製品の脚底部である。脚端部は内側に折り返している。焼成が他の弥生時代中期土器と似ることから台形土器の可能性が高いが、類例と比べて底部径が大きい。116・117と同様の土器になる可能性もある。116・117は山陰型甕形土器である。両者とも管状混和剤を多量に含む胎土であり、同一個体と判断できる。内外面ともハケ調整で、内面にはススは確認できない。外面には縦方向の把手痕が残る。底部は上部よりもやや厚みがあり、端部はヘラケズリ調整で面取りをしている。山陰型甕形土器は、奈具遺跡群で初の出土である。京都府内では、これまでに古殿遺跡、竹野遺跡、裏陰遺跡（以上、京丹後市）、須代遺跡（与謝野町）から出土しており、全て丹後地域に位置する。<sup>(注9)</sup> 山陰型甕形土器の分布が島根県と鳥取県に集中している中で、丹後地域を代表



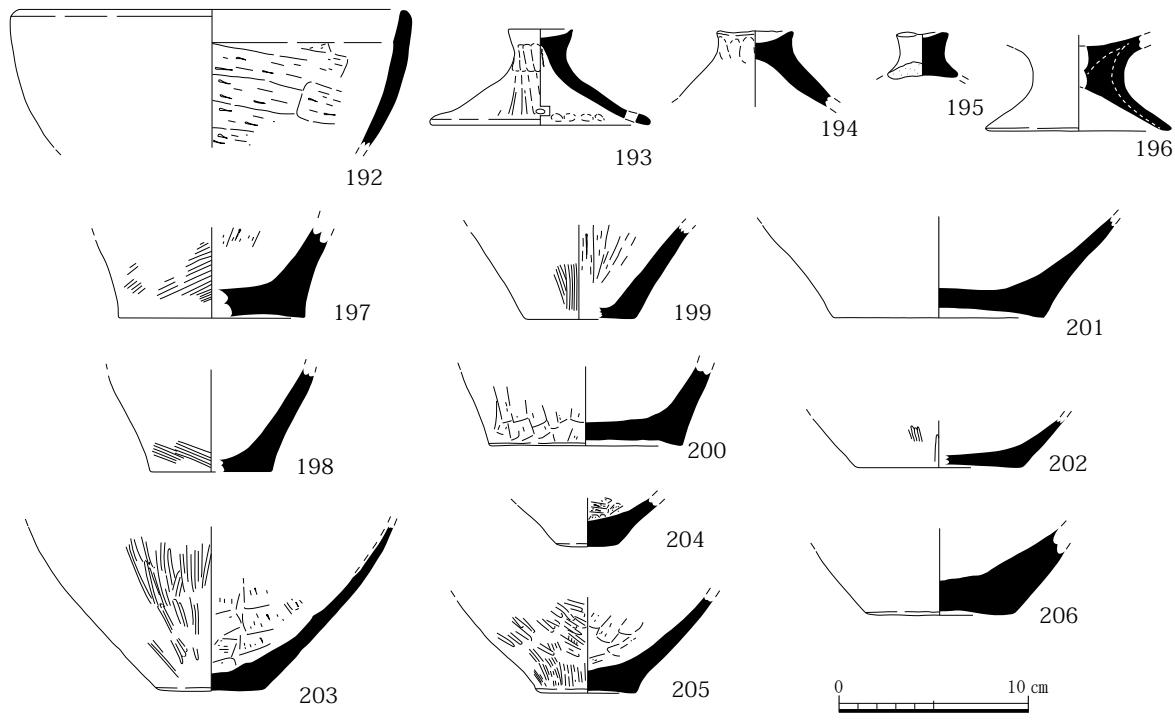
第67図 奈具遺跡第4次SD 19中層出土遺物1 (1/4)



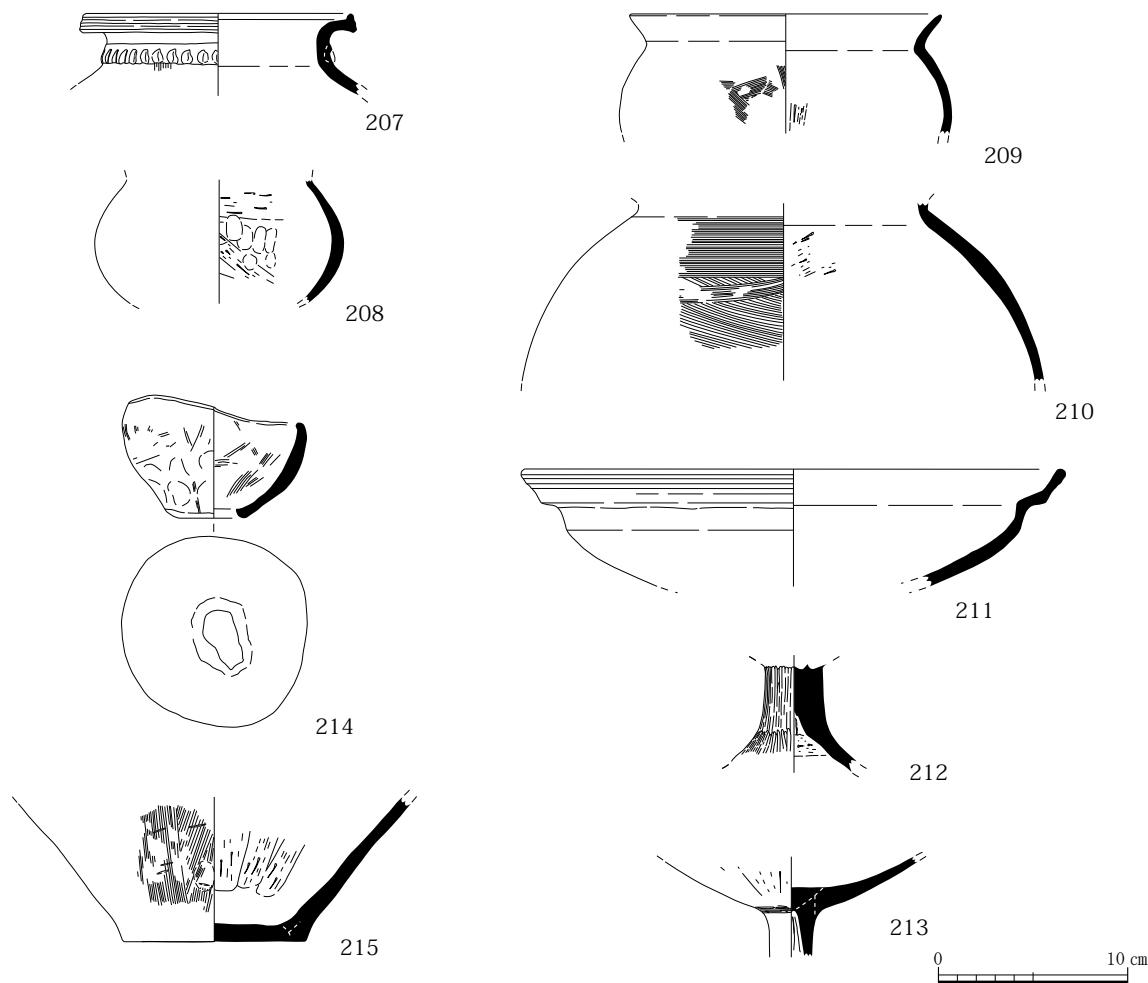
第68図 奈具遺跡第4次SD 19中層出土遺物2 (1/4)



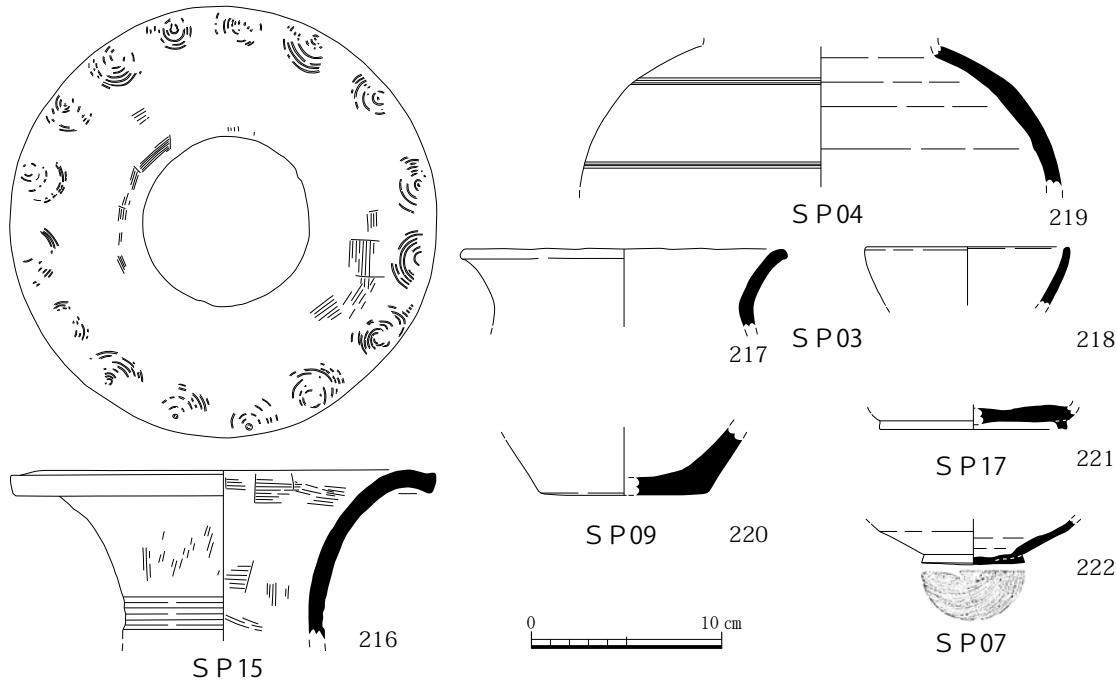
第69図 奈具遺跡第4次SD 19中層出土遺物3 (1/4)



第70図 奈具遺跡第4次SD 19中層出土遺物4 (1/4)



第71図 奈具遺跡第4次SD 19最下層出土遺物 (1/4)



第72図 奈具遺跡第4次ピット出土遺物 (1/4)

する弥生時代の遺跡群である奈具遺跡群で新たな資料を確認できたことは意義深い。なお、今回の調査区に近い奈具遺跡第2次調査の報告では、O 19 グリッド（第57）から円筒埴輪片が出土したとの記載がある。出土遺物を実見できていないものの、当資料と同じ山陰型甌形土器を円筒埴輪と誤認していた可能性がある。

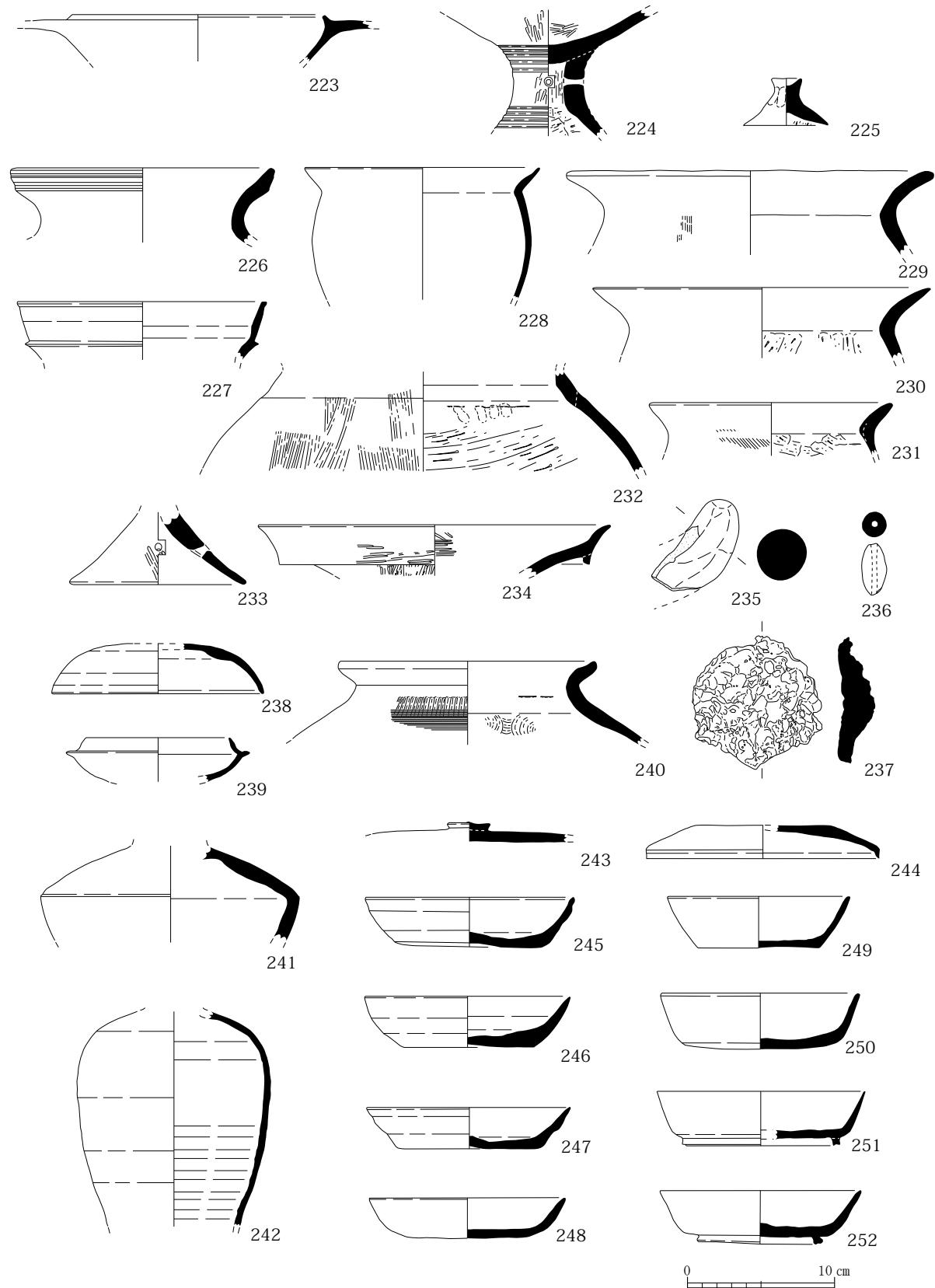
**S D 19** (第66～71図 118～215) 118～137が最上層、138～206が中層、207～215が最下層出土遺物である。最上層出土遺物のうち、118・133が弥生時代中期の土器である。118は凹線文を施した高杯である。119～134は弥生時代後期から古墳時代前期の土器である。119・120は壺である。119は、口縁端部に面をもつ広口壺で、外面に円形浮文を付す。円形浮文の中央には竹管文を施す。西谷式のものである。120は有段口縁をもつ壺で、口縁端部の外面に擬凹線文を施す西谷式のものである。121～128は甌である。121～125は有段口縁甌、126～128はくの字状口縁甌である。127・128は擬凹線文を施さない浅後谷南式の有段口縁甌で、128は有段部が緩やかである。129・130は器台で、130は擬凹線文を施さない浅後谷南式である。131は台付鉢、132は有孔鉢である。134は蓋で、つまみ部分を成形する際のひび割れが顕著である。135は生焼けの須恵器蓋で、摩滅が著しい。T K 217に該当する。136は土師器杯であり、古代のものである。137は当初石製品として認識していた遺物である。石枕や石臼の可能性を考慮して独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所で分析を依頼した。分析の結果、石英と炭酸カルシウムが主成分として検出され、近現代のモルタル製品であると判明した。S D 19 掘削時には近現代の搅乱を確認しておらず、調査地周辺からの混り込みも考えにくい状況ではあるが、客観的な事実として掲載することとする。

中層遺物のうち、138～167・197～200は弥生時代中期、IV様式の土器である。128～151は壺である。138は、口縁外面に凹線文を施す超大型の壺である。同様の壺は、奈具遺跡2次調査や今回の調査地の約70m南側の奈具谷遺跡第5次調査でも出土しており<sup>(注10)</sup>、胎土からみても在地で製作された

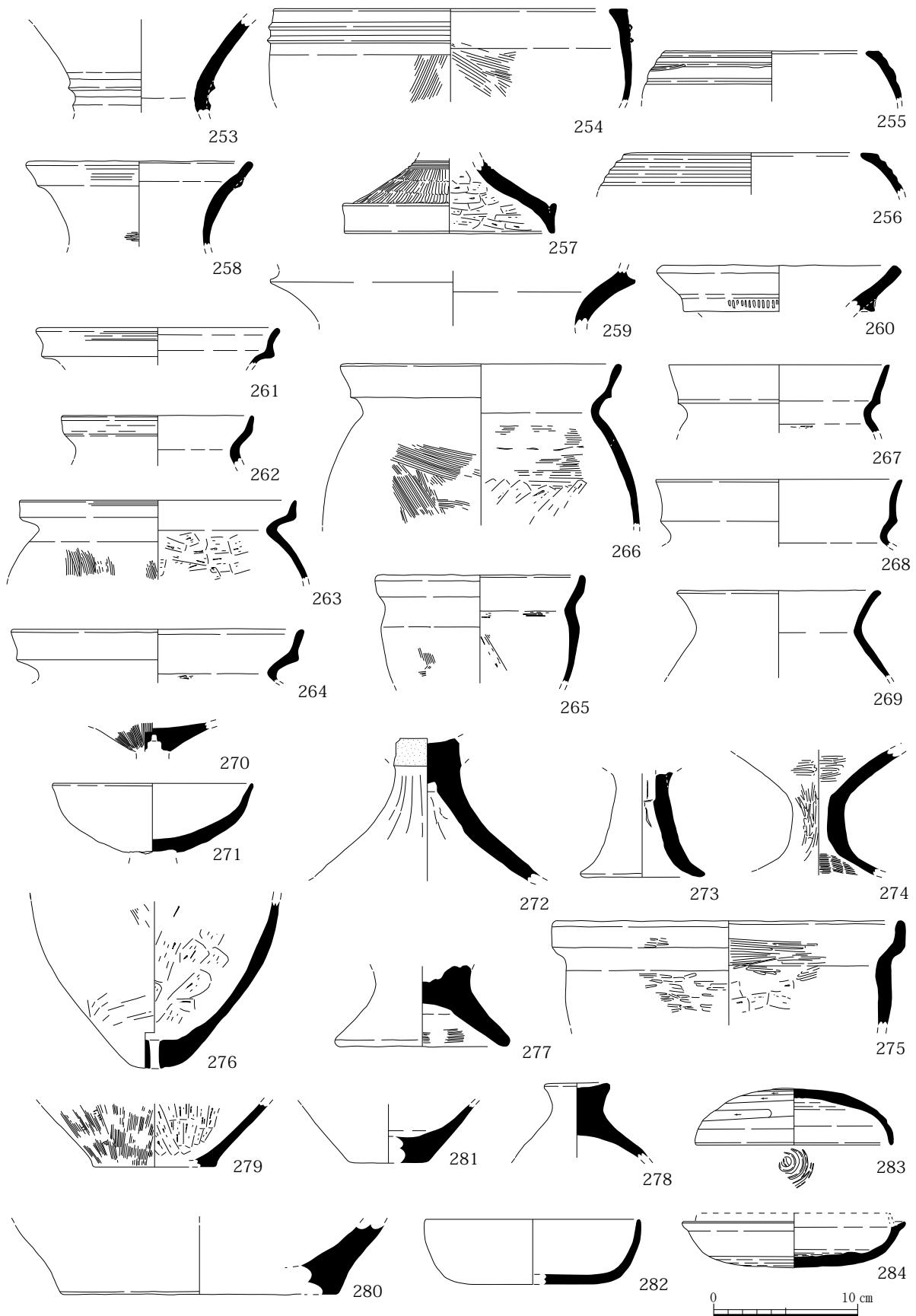
土器である。大きさからみて 151 が体部片である可能性がある。139～146 は広口壺で、139～142 は口縁内部に加飾を施す。139 はクシ状工具を用いた扇状文、140～142 は竹管文を口縁内部と口縁端部に施す。147 は直立する短い口縁部をもち、頸部に指頭圧痕突帯を付す。148 は短頸壺、149 は受口壺でいずれも凹線文を口縁部外面に施す。150 は肩部に細い草本類で円形刺突文を施す。152～158 は甕である。153・154 は大型の甕で、153 の体部には指頭圧痕突帯を付す。155～158 は中型の甕で、155 の内面下半にはケズリ調整を施す。159～165 は高杯である。159～162 は杯部外面に凹線文を施す高杯で、163・164 は水平口縁高杯である。166・167 は鉢である。166 は端部をわずかに摘み上げるくの字状口縁をもち、167 は外面に凹線文を施す。

168～196・201～206 は弥生時代後期から古墳時代前期の土器である。168～174 は壺である。168・169 は広口壺、170～172 は壺の把手、173・174 は小型丸底壺である。168 は拡張した口縁部外面が無文であり、浅後谷南式に該当する。壺の把手は弥生時代中期から存在するが、丹後地域で盛行するのは弥生時代後期である。小型丸底壺は、173 が粗製で 174 が精製に近い。口縁部がないもののいずれも霧ヶ鼻式であろう。175～181 は甕である。175・176 が擬凹線文のなくなった有段口縁甕である。177 は山陰系有段口縁甕である。178～181 はくの字状口縁甕で、それぞれの個体差が大きい。182 は有段口縁甕の形状であるが、胎土は精良でススはなく、煮沸具としては用いていない。甕の時期はいずれも浅後谷南式である。183～186 は高杯である。183 は、大きく外反する杯部をもつ高杯である。杯の稜部外面には擬凹線文を施す。同形の高杯が奈具谷遺跡第 2 次調査で出土しており、<sup>(注11)</sup> 弥生時代中期の土器として報告されている。しかし、稜部外面は線刻の浅い擬凹線文であり、杯部の形態も弥生時代中期とはいえないことから、弥生時代後期の高杯とする。184～186 は西谷式の高杯であるが、いずれも別個体である。184 は杯部端部が肥厚する。185 は柱状の長い脚部をもち、下方で緩やかに外反する。186 はやや内湾気味の脚部で、脚端部が上方に跳ね上がる部分で剥離している。186 の形態の高杯脚部は、直線的な柱状脚に接合するため、185 のような外反する脚とは接合しない。187・190・191 は高杯または器台の脚部である。190 は直径 2mm 以下の孔をもつ。188 は屈折脚高杯で、霧ヶ鼻式である。189 は器台の脚部である。192 は鉢で、内面をケズリ調整とする。同様の調整を施す有孔鉢は浅後谷南式に多く、192 も同様に有孔鉢になる可能性がある。193～195 は蓋である。193 は端部に 1 つの孔をもち、頸部はユビオサエ調整でくびれを作り出す。つまみ部はやや有段口縁状となる。194 は、つまみ部が大きく弥生時代後期の中でも古い形態である。196 は接合痕が明瞭に残る台付鉢の脚部である。接合痕から、脚柱部を最初に作り、次に脚部の外面に粘土を追加し、最後に鉢底部に粘土を充填する製作過程がわかる。201～206 は壺と甕の底部である。

最下層遺物のうち、207・215 は弥生時代中期、208～213 は弥生時代後期から古墳時代前期の土器である。207 は、口縁端部に凹線文を施し、頸部に指頭圧痕突帯を貼り付ける壺である。器形は在地のものであるが、焼成が断面黒色で表面灰白色である点は特徴的である。こうした焼成方法は滋賀県野洲川流域の土器と類似する。前述の奈具谷遺跡第 5 次の溝 4 には、搬入の可能性の高い受口状口縁甕が存在することから、野洲川流域と人的な交流があったことがわかる。207 はこうした交流の結果である可能性がある。208 は小型丸底壺である。209・210 は甕で、210 は布留形甕である。210 は口



第73図 奈具遺跡第4次Ⅱ層出土遺物（1/4）



第74図 奈具遺跡第4次IV層出土遺物（1/4）

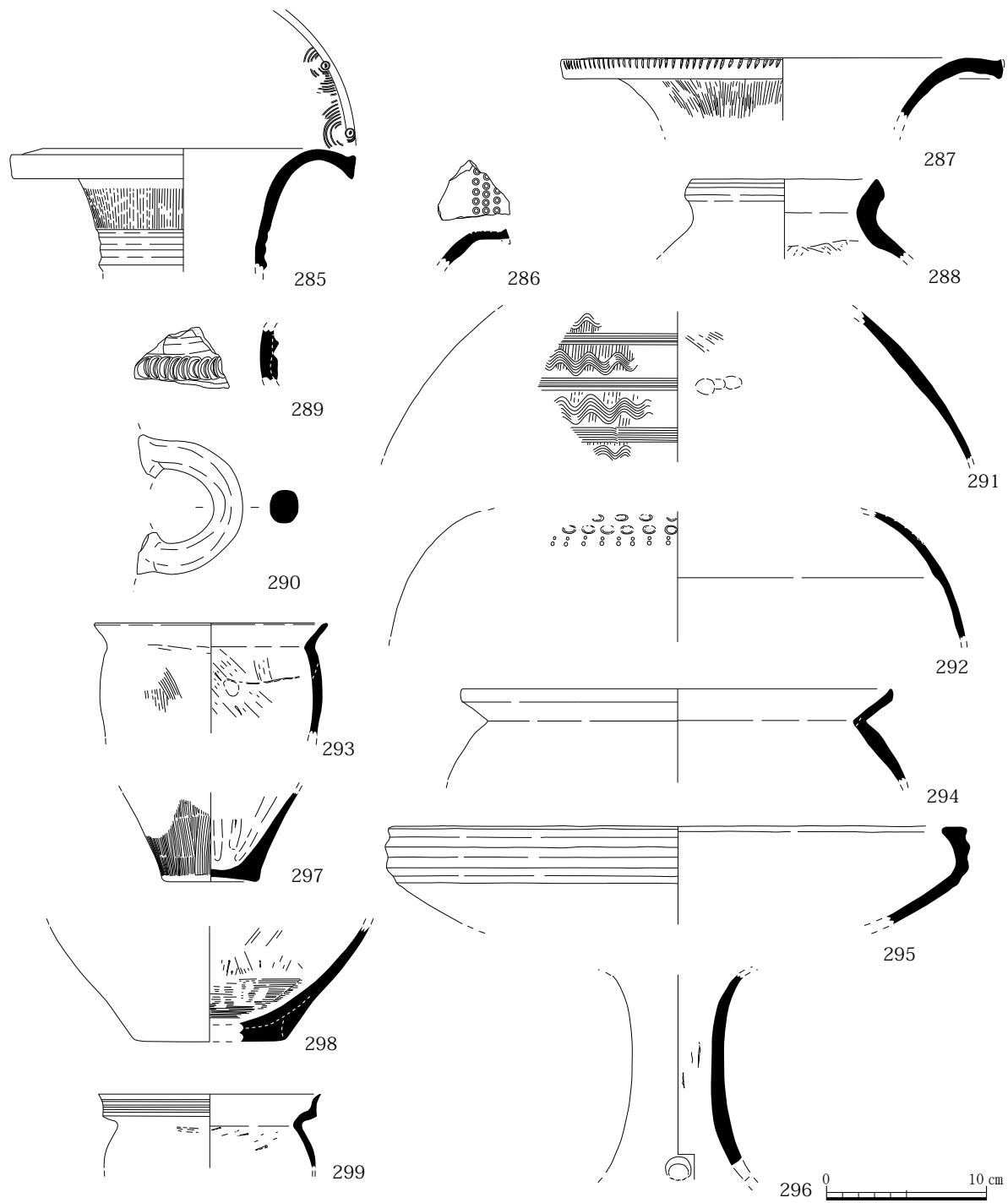
縁部を欠損しているものの、器壁が厚い点から霧ヶ鼻式に該当する。最下層中で最も新しい時期の遺物であり、SD 19 の形成時期を示している。211～213 は高杯である。211 は西谷式の高杯で、杯部端部外面に擬凹線文を施す。213 は細い脚柱部をもつ畿内地域由来の高杯である。霧ヶ鼻式に該当する。214 は不整形な鉢で、底部に焼成後の穿孔を施す。

ピット（第 72 図 216～222） 216 は SP 15 出土の口縁部が完存する広口壺である。口縁部内面にはクシ状工具による扇形文を 16 箇所施し、頸部には凹線文を 3 条施す。弥生時代中期後半のものである。217・218 は SP 03 出土で、217 は弥生時代後期から古墳時代前期のくの字状口縁甕、218 は古代の須恵器杯である。219 は SP 04 出土の須恵器壺の肩部である。220 は SP 09 出土の弥生時代中期の壺ないし甕の底部である。221 は SP 17 出土の古代の須恵器杯 B である。222 は SP 07 出土の須恵器杯で、底部に糸切痕のある平安時代のものである。

包含層ほか（第 73～76 図 223～301） 223～252 は II 層出土遺物、253～284 は IV 層出土遺物、285～299 は IV 層と SD 19 最下層の混在遺物、300・301 は廃土より採集した遺物である。

223・224 は弥生時代中期の高杯で、223 は水平口縁高杯、224 は高杯の脚柱部である。225～234 は弥生時代後期から古墳時代前期の土器である。225 は蓋であるが、かなり小さいことからミニチュア土器である。226 は口縁部外面に擬凹線文を施す壺である。口縁部の立ち上がりが低いことから浅後谷南式に該当する。227～231 は甕で、227 は山陰系有段口縁甕である。形態からみて、在地化した霧ヶ鼻式の甕である。混和剤に透明度の高い水晶片を多量に含んでいる点が特徴的である。228～231 はくの字状口縁甕である。229 は、混和剤に円摩度のかなり高い砂礫を用いており、搬入品の可能性が高い。232 は口縁部を欠損しているものの、調整の特徴から布留形甕である。器壁が厚く、肩部ヨコハケ調整がない点から、霧ヶ鼻式のものである。233 は高杯脚部、234 は器台である。235 は甕の把手で、古墳時代中～後期のものである。236 は管状土錘である。紐ずれの使用痕が確認できる。237 は鉄滓である。形状からみて鍛冶に伴う椀形滓である。なお、図化していないが鉄滓は複数あり、銅滓も 1 点出土している。238～247・249～252 は須恵器である。238・239 は須恵器杯身・杯蓋で、238 が TK 217、239 が TK 209 に該当する。240 は須恵器甕である。241・242 は須恵器壺で、241 は長頸壺、242 は長胴の短頸壺であろう。243～247・249～252 は須恵器蓋と杯でいずれも飛鳥・奈良時代のものである。248 は土師器の杯である。器壁が摩滅して暗文等は確認できない。

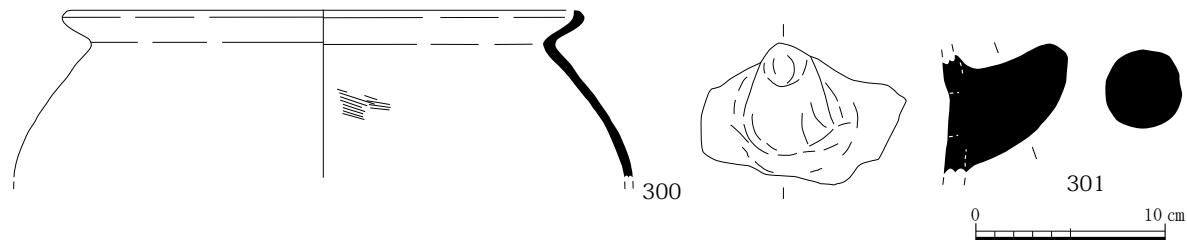
253～284 は IV 層出土遺物である。253～257・279・280 は弥生時代中期の遺物、258～278 は弥生時代後期から古墳時代前期の遺物である。253 は広口壺、254～256 は鉢である。254 は口縁端部外面に突帯を 2 条貼り付ける。257 は高杯脚部である。258～260 は壺である。258 は有段口縁壺で弱い擬凹線文を施す。259・260 は二重口縁壺で、259 は一次口縁の上部に拡張部を付し、260 は外面に粘土を張り付けて有段部を作り出す。260 の有段部には長方形の工具による刺突文を施す。261～269 は甕で、261～265 が在地の有段口縁甕である。外面の擬凹線文がほぼ消滅した浅後谷南式のものである。266～268 は山陰系有段口縁甕で、266 は浅後谷南式でも古相の形態である。269 はくの字状口縁甕である。270～273 は高杯である。270 は杯部と脚部の接合部に下方からの刺突痕がある。274 は器台である。275 は鉢、276 は有孔鉢である。277 は台付鉢の脚台、278 は蓋である。282 は土



第75図 奈具遺跡第4次IV層・SD 19最下層出土遺物 (1/4)

師器杯で古墳時代末ごろのものである。283・284は須恵器蓋・杯である。いずれもTK 209に該当する。283の天井部にはタタキ板の当具痕がある。なお、今回報告をしないSD 19最上層出土須恵器片にも同様の当具痕が確認できる。

285～299はIV層とSD 19最下層を掘削中に混在した状態で出土した土器である。285～292・294～295は弥生時代中期の土器である。285～292は壺である。285は口縁内面にクシ状工具による扇形文、頸部に凹線文を施す。139・216と同形同大の広口壺である。286は口縁内部に竹管文を3



第76図 奈具遺跡第4次廃土採集遺物（1/4）

列にわたって施す。287は口縁端部にヘラ状工具による刻目文を施す。288は短頸壺で外面に弱い凹線文を施す。289は壺の頸部で上段に無文の突帯、下段に指頭圧痕突帯を付す。290は壺の把手である。前述のとおり壺の把手は弥生時代後期に盛行することから、290も後期の可能性がある。291・292は加飾壺の肩部で、291はクシ状工具による直線文・波状文、292は上段に竹管文、下段に円形刺突文を2列ずつ施す。294・297は甕、295は高杯である。

293・296・299は弥生時代後期の土器である。293は内面のケズリ調整を頸部まで施すくの字状口縁甕である。西谷式から浅後谷南式に該当する。296は脚部が長いことから西谷式の器台である。299は擬凹線文を施す有段口縁甕で、西谷式に該当する。

300・301は廃土中から採集した土器である。300は弥生時代中期の甕、301は古墳時代中～後期の甕の把手である。301は器壁に穿孔して把手を附加する接合痕が明瞭に残る。

(中居和志)

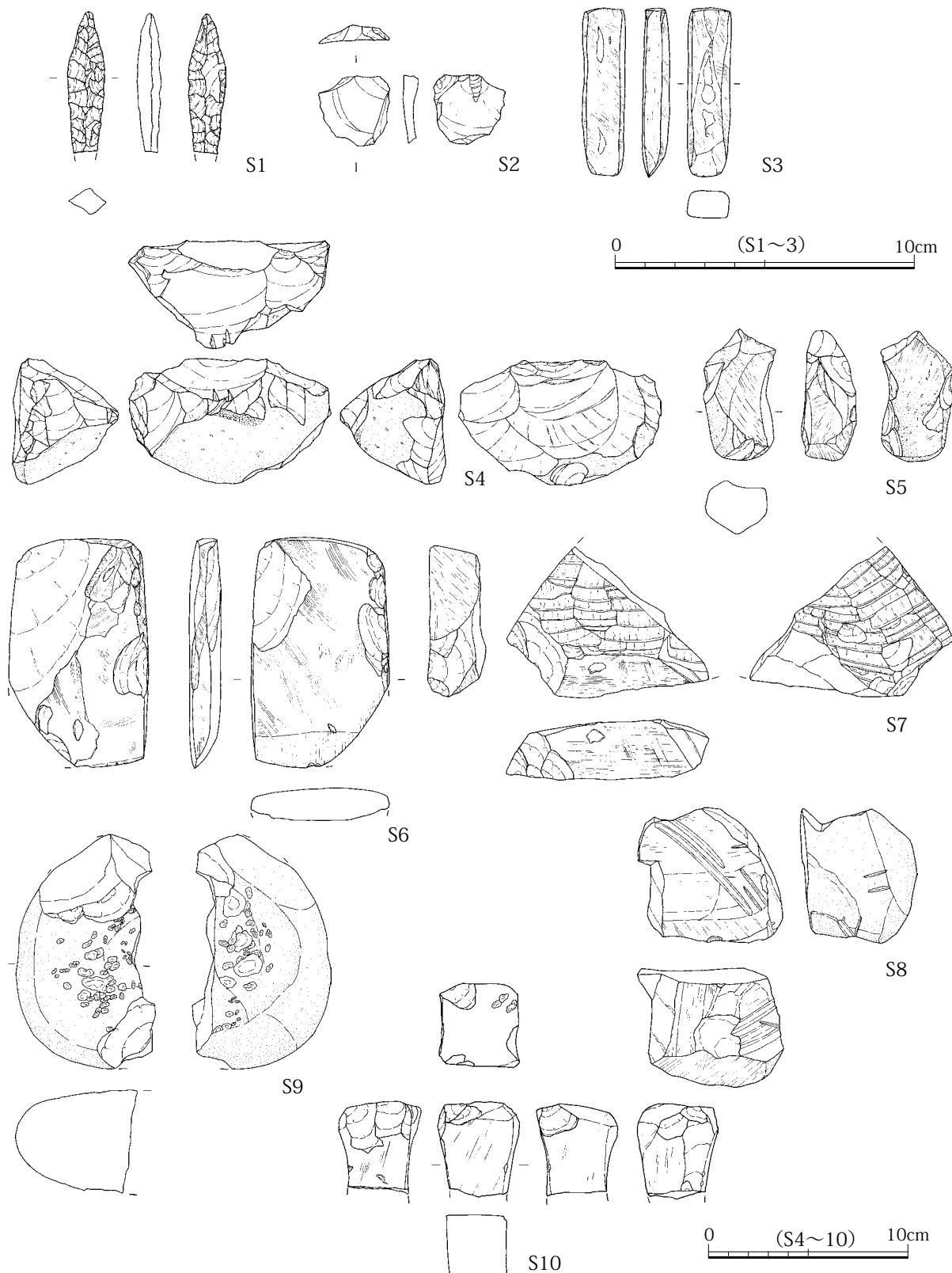
#### 石器類（第77図 S 1～S 10）

S 1～3・6は製品、S 4は石核、S 5・7・8・10は砥石、S 9は台石である。出土地点は付表7を参照されたい。

S 1は、打製石鏃である。平面形は紡錘形であり、基部の一部が欠損する。安山岩とみられる硬質の石材を使用する。S 2は、水晶の剥片である。水晶製の玉類の製作過程で出た剥片の可能性がある。S 3は、鑿形石斧である。凝灰岩とみられる軟質石材を使用した片刃石斧である。刃部は使用と研ぎ直しを行ったと推定され、やや丸みを帯び、微細な剥離が確認される。S 6は扁平片刃石斧である。比較的大型の部類に属するもので、側面・基端部にいたるまで全面を丁寧に研磨する。刃部には、使用痕と推定される短い擦痕が残る。石材はS 3の鑿形石斧に近似する。

S 4は石核である。S 1の打製石鏃と同じ硬質の石材の円礫を素材とし、一部に風化した礫面を残す。剥離面を打面とし、横長剥片をはぎ取っていたと考えられる。

S 5は軽石とみられる軟質の石材を使用した砥石である。小型で、強く湾曲した不規則な砥面を有することから、持ち砥石として使用された可能性がある。S 7は砥石である。本来は、別の石製品もしくはその未成品であったと推定され、最終的に砥石として転用されたものである。元来は、表裏両面を刃幅30mm程度の工具で研って板状に加工されていたものと推定される。S 8も砥石である。粒子の粗い花崗岩を用いた不定形の砥石であり、一部に礫面を残す。幅5mmと幅2mm程度の断面U字形の溝状の使用痕がある。S 10は花崗岩製の砥石である。断面は正方形に近い定形的な砥石である。S 8よりも粒子の細かい花崗岩が使用される。S 9は台石である。自然礫をそのまま使用した



第77図 奈具遺跡第4次石製品など (S1~3:1/2, S4~10:1/3)

ものであり、表と裏の両面に敲打による潰れが確認される。

(川崎雄一郎)

## 4 まとめ

### (1) 遺構について

今回の調査は、面積が限られることから検出した遺構は限定的で、遺構面の広がりに不明な点が多い。それでも、多くの遺物が出土したことから時代ごとの変遷はある程度追うことができる。

VI層の地山は凹凸のある地形であり、急斜面の崩落を何度も重ねていた可能性がある。地山上には、調査区東半で無遺物のV層を検出した。V層は人の活動以前に斜面の崩落によって成立した層の可能性がある。V層を基盤土として弥生時代中期後半の遺構が展開する。この段階では、今回調査地の南70mでは木道や水田（奈具谷遺跡第5次）、東80mでは導水遺構（奈具谷遺跡第2次）<sup>（注12）</sup>が作られており、さらに南の丘陵上では奈具岡遺跡が最盛期を迎えていた。丘陵上から谷底まで遺構が展開する状況から、奈具遺跡の丘陵上にも同時期の遺構が広がっていた可能性が高く、今回検出した遺構はその一端であると評価できる。遺構に伴わない多量の弥生時代中期の土器があることも、調査区北側に同時期の遺構が広がることの傍証となる。

弥生時代後期に入ると人の活動痕跡は減少する。弥生時代後期前葉の三坂神社式期の遺構は確認できないが、遺物が少量あることから無人状態ではないようである。次に活動が活発化するのは弥生時代後期後葉の西谷式期以降である。西谷式期から庄内式併行期の浅後谷南式期にかけてSD12が掘削・埋没し、IV層が堆積する。

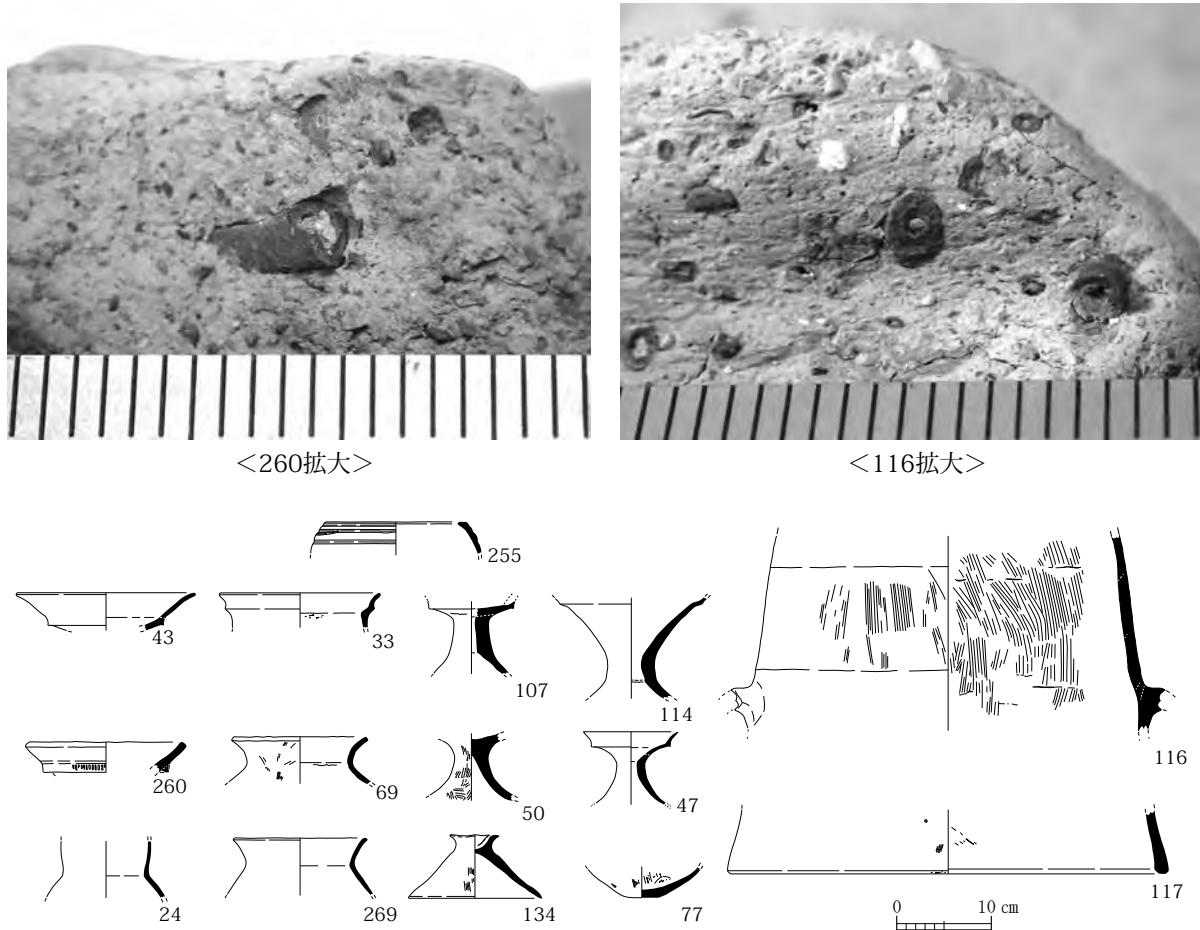
IV層を基盤として、SD19が開口していたのが布留式中～新段階併行期の霧ヶ鼻式期以降である。SD19は遺構の肩部が緩やかであり、底部に人工的な加工がないことから、IV層が堆積する中で自然に形成された谷状の落込みであるといえる。SD19の埋土には多量の土器を含むが大半は霧ヶ鼻式期以前の土器であり、二次的な堆積であることがわかる。霧ヶ鼻式期以降の人の活動は減少するが、SD19堆積土に古墳時代中～後期の遺物を少量含むことから、少なくなりながらも活動が続いていることが分かる。

SD19が古代に完全に埋没すると安定面となり、古代の遺構が展開する。古代の包含層であるII層から鉄滓や銅滓、砥石類が出土していることから、当地で鉄や銅の生産・加工をしていたことがわかる。鉄生産は、奈具遺跡群だけではなく、遺跡群北東側の丘陵に広がる黒部製鉄遺跡や、北西約3kmに位置する遠所遺跡をはじめ、丹後半島全体で古代から中世にかけ活発化する点が重要である。奈具遺跡もこうした生産遺跡の一旦を担っていたことが判明した。

### (2) 遺物について

今回の調査地で遺構・遺物量が集中するのは、弥生時代中期、弥生時代後期から古墳時代前期、古代の3時期である。SK16以外の多くの遺物が二次的な堆積土出土であり、一括性は高くない。そのため、遺物の変遷を出土遺構から検討する意義はあまり大きくない。そこで、ここでは特徴的な胎土をもつ一群についてまとめてみることとする。

出土遺物の整理を進める中で、土器の混和剤に赤色で管状の粒子（第78図上段以下、管状混和剤）



第78図 管状混和剤と土器（写真下の目盛りは1mm、土器1/8）

を含む一群が存在することが判明した。管状混和剤は、直径約1～2mmで中央に孔がある。色調はシャモットと同様に赤化している。掲載した土器全点について確認したところ、第78図の15点の土器に管状混和剤を含むことが確認できた。管状混和剤の含有量には差があり、山陰型甌形土器の116・117が特に多い。管状混和剤を含む土器は、弥生時代中期後半の255以外は全て布留式古段階古相併行の浅後谷南式であり、まとまりがある点が注目できる。管状混和剤は大きさからみて人工的に製作したとは考え難く、自然に生成されたものと判断される。管状混和剤の正体としては、高師小僧かウニの棘の可能性がある。ただ、高師小僧であるならば、細さと表面の滑らかさが合致しない。ウニの棘であるならば、赤色となる確証に欠ける。現時点では不明な点が多いが、両者の可能性を提示しておきたい。いずれにしても、混和剤として意図的に含有していることは確実であり、その意図や類例について、今後の検討が必要である。

以上のように、今回の調査では、小面積にもかかわらず大きな成果を上げることができた。こうした成果を積み上げていくことで、奈具遺跡だけにとどまらず地域の新たな歴史像を示していくことが可能となるであろう。

(中居和志)

(注)

- (1) 増田孝彦・田代弘 1993 「(1) 奈具岡遺跡」『京都府遺跡調査概報』第55冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター  
河野一隆・野島永 1997 「(2) 奈具岡遺跡」『京都府遺跡調査概報』第76冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- (2) 京都府竹野郡役所 1915 『竹野郡誌』
- (3) 梅原末治 1919 「深田村字黒部彌生式土器遺跡」『京都府史蹟勝地調査会報告』第1冊 京都府
- (4) 釋龍雄・林和広 1972 『奈具遺跡発掘調査報告書』弥栄町文化財調査報告第1集 弥栄町教育委員会
- (5) 注4に同じ
- (6) 長谷川達・大槻真純 1980 「奈具遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-1)』京都府教育委員会
- (7) 桐井理揮 2019 「奈具遺跡第5次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第177冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- (8) 松山智弘 2015 「山陰『前期古墳編年を再考する』Ⅱ 中国四国前方後円墳研究会  
桐井理揮 2020 「擬凹線文土器様式の解体－浅後谷南式の再検討－」『京都府埋蔵文化財情報』第138号 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- (9) 高野陽子 2006 「丹後地域」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター  
桐井理揮 2019 前掲論文
- (10) 長川加奈子 2001 「山陰型甌形土器」『神女大史学』第18号  
西垣遼 2016 「いわゆる“山陰型甌形土器”的再検討－変遷と分類案の再整理及びその分布について－」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』18
- (11) 柴暁彦 1997 「(1) 奈具谷遺跡」『京都府遺跡調査概報』第76冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- (12) 田代弘 1994 「(4) 奈具谷遺跡」『京都府遺跡調査概報』第60冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

付表7 奈具遺跡第4次 出土遺物観察表

掲載番号	種類	器種	遺構・層位	法量(cm)			残存率	胎土	焼成	色調	備考
				口径	器高	底径					
1	弥生土器	壺	SK01	-	7.8	-	2/12	やや粗	やや軟	5YR6/8 橙	Ⅲ様式新
2	弥生土器	高杯	SK01	17.4	3.7	-	1.5/12	やや粗	やや軟	10YR8/1 灰白	
3	弥生土器	甌	SK01	15.5	3.2	-	1/12	やや粗	やや軟	2.5Y8/1 灰白	
4	弥生土器	甌	SK01	18.3	3.0	-	1/12	粗	良	10YR5/1 褐灰	
5	弥生土器	甌	SK01	18.4	7.9	-	1.5/12	粗	軟	2.5YR6/8 橙	
6	土師器	甌	SK01	22.4	4.8	-	1/12	やや密	軟	10YR8/2 灰白	搬入か
7	弥生土器	甌	SK01	13.0	2.6	-	1/12	やや密	良	N3/0 暗灰	
8	弥生土器	高杯	SK01	-	3.5	-	9/12	やや粗	やや軟	5YR6/6 橙	
9	須恵器	杯身	SK01	-	1.7	-	1/12	やや粗	堅緻	5PB5/1 青灰	
10	弥生土器	壺	SK02	14.5	7.1	-	6/12	やや粗	やや軟	2.5YR5/8 明赤褐	赤色斑粒多
11	弥生土器	甌	SK02	15.2	4.4	-	2/12	やや粗	軟	2.5Y7/3 浅黄	
12	土師器	甌	SK02	19.6	7.3	-	1/12	やや粗	軟	10YR7/1 灰白	
13	土師器	鉢	SK02	12.0	7.2	-	2/12	粗	軟	2.5YR5/6 明赤褐	
14	弥生土器	高杯	SK02	14.1	3.0	-	1.5/12	やや密	軟	10YR7/3 にぶい黄橙	
15	弥生土器	器台	SK02	18.0	4.9	-	1/12	やや粗	軟	10R6/4 にぶい赤橙	
16	弥生土器	高杯	SK02	-	2.5	8.4	1/12	やや密	良	N4/0 灰	
17	弥生土器	高杯	SK02	-	4.5	8.6	4/12	粗	軟	2.5YR5/8 明赤褐	粘土継足し
18	弥生土器	壺	SK02	-	2.5	4.0	12/12	やや粗	やや軟	7.5YR6/4 にぶい橙	
19	須恵器	杯	SK02	15.2	2.1	-	1/12	密	良	5PB6/1 青灰	
20	黒色土器	碗	SK02	-	1.5	6.0	4/12	やや密	やや軟	N3/0 暗灰	

掲載番号	種類	器種	遺構・層位	法量(cm)			残存率	胎土	焼成	色調	備考
				口径	器高	底径					
21	弥生土器	広口壺	SK16	-	5.0	19.4	1/12	やや粗	やや軟	5YR6/6 橙	
22	弥生土器	甕	SK16	17.3	3.1	-	2.5/12	やや粗	軟	5YR6/4 にぶい橙	スス付着
23	弥生土器	壺	SK16	23.0	3.9	-	1.5/12	やや粗	やや軟	7.5YR8/4 浅黄橙	
24	弥生土器	壺	SK16	9.5	6.2	-	2.5/12	やや粗	軟	2.5YR5/8 明赤褐	管状混和剤
25	弥生土器	甕	SK16	16.0	2.5	-	1.5/12	やや密	良	10YR7/2 にぶい黄橙	
26	弥生土器	甕	SK16	-	3.0	-	1/12 以下	やや粗	やや軟	10YR8/3 浅黄橙	
27	弥生土器	甕	SK16	20.0	5.0	-	1.5/12	粗	やや軟	5YR7/6 橙	
28	弥生土器	甕	SK16	16.7	3.5	-	1/12	粗	やや軟	10YR7/3 にぶい黄橙	
29	弥生土器	甕	SK16	15.0	3.2	-	2.5/12	やや粗	軟	7.5YR7/3 にぶい橙	粘土継足し
30	弥生土器	甕	SK16	16.0	7.0	-	1/12	やや粗	軟	7.5YR7/4 にぶい橙	
31	弥生土器	甕	SK16	21.0	3.8	-	1.5/12	粗	軟	5YR7/4 にぶい橙	
32	弥生土器	甕	SK16	18.7	4.2	-	1/12	やや粗	良	7.5YR7/4 にぶい橙	外面黒斑
33	弥生土器	甕	SK16	16.7	3.7	-	2/12	粗	軟	2.5YR5/8 明赤褐	管状混和剤
34	弥生土器	甕	SK16	12.5	4.7	-	1.5/12	粗	やや軟	2.5YR4/6 赤褐	スス付着
35	弥生土器	甕	SK16	13.9	10.8	-	1/12	やや粗	軟	5YR6/6 橙	
36	弥生土器	鉢	SK16	19.2	6.2	-	1/12	粗	軟	5YR6/4 にぶい橙	
37	弥生土器	鉢	SK16	15.5	5.1	-	1.5/12	粗	軟	5YR5/6 明赤褐	スス付着
38	弥生土器	鉢	SK16	10.0	8.8	-	3/12	やや粗	やや軟	7.5YR6/4 にぶい橙	
39	弥生土器	把手	SK16	-	-	-	1/12 以下	やや粗	やや軟	10YR7/3 にぶい黄橙	
40	弥生土器	高杯	SK16	11.5	2.7	-	1/12	やや密	やや軟	7.5YR7/4 にぶい橙	
41	弥生土器	高杯	SK16	13.5	2.5	-	2/12	密	軟	5YR6/8 橙	
42	弥生土器	高杯	SK16	21.2	1.9	-	1/12	密	軟	7.5YR8/3 浅黄橙	
43	弥生土器	高杯	SK16	18.7	4.0	-	2.5/12	粗	軟	2.5YR5/8 明赤褐	管状混和剤
44	弥生土器	高杯	SK16	-	3.6	16.2	2/12	粗	やや軟	2.5Y6/1 黄灰	
45	弥生土器	器台	SK16	21.7	2.7	-	1/12	やや密	軟	5YR7/4 にぶい橙	
46	弥生土器	鼓形器台	SK16	20.0	7.9	-	2/12	やや粗	軟	5YR7/4 にぶい橙	赤色斑粒多
47	弥生土器	器台	SK16	10.0	7.7	-	6/12	やや粗	良	5YR7/4 にぶい橙	管状混和剤
48	弥生土器	高杯	SK16	-	2.0	14.0	1.5/12	やや密	軟	7.5YR7/6 橙	
49	弥生土器	高杯	SK16	-	4.5	14.6	1.5/12	やや密	やや軟	10YR7/3 にぶい黄橙	
50	弥生土器	高杯	SK16	-	7.1	-	12/12	粗	やや軟	2.5Y5/8 明赤褐	管状混和剤
51	弥生土器	高杯	SK16	-	3.5	3.3	4/12	やや粗	軟	5YR6/6 橙	
52	弥生土器	台付鉢	SK16	-	4.1	7.8	12/12	密	やや軟	7.5YR7/4 にぶい橙	
53	弥生土器	台付鉢	SK16	-	3.3	3.8	11/12	やや粗	やや軟	5YR6/6 橙	
54	弥生土器	壺	SK16	-	2.4	2.8	6/12	やや粗	良	7.5Y5/1 灰	
55	弥生土器	甕	SK16	-	2.9	4.0	4/12	やや粗	やや軟	10YR4/2 灰黄褐	スス付着
56	弥生土器	台付鉢	SK16	-	4.8	5.4	10/12	粗	軟	10R6/2 灰赤	
57	弥生土器	甕	SK16	-	3.2	10.4	4/12	粗	やや軟	2.5Y6/1 黄灰	
58	弥生土器	二重口縁壺	SK16 下層	18.8	6.9	-	2/12	粗	やや軟	7.5YR7/4 にぶい橙	
59	弥生土器	二重口縁壺	SK16 下層	17.2	3.3	-	1.5/12	やや粗	やや軟	7.5YR5/4 にぶい褐	
60	弥生土器	二重口縁壺	SK16 下層	19.7	5.7	-	1.5/12	粗	軟	5YR7/6 橙	
61	土師器	二重口縁壺	SK16 下層	17.0	4.7	-	1/12	粗	やや軟	7.5YR7/4 にぶい橙	
62	弥生土器	広口壺	SK16 下層	12.9	3.8	-	2/12	やや粗	軟	2.5YR5/8 明赤褐	スス付着
63	弥生土器	壺	SK16 下層	15.8	8.0	-	2/12	やや粗	軟	2.5YR6/6 橙	
64	弥生土器	壺	SK16 下層	13.7	3.0	-	1.5/12	やや密	軟	5YR5/6 明赤褐	
65	弥生土器	甕	SK16 下層	13.6	5.9	-	1/12	やや粗	やや軟	10YR7/2 にぶい黄橙	
66	弥生土器	甕	SK16 下層	15.3	3.8	-	1.5/12	やや粗	やや軟	5YR6/4 にぶい橙	
67	弥生土器	甕	SK16 下層	14.1	5.2	-	3/12	やや粗	やや軟	5YR6/8 橙	スス付着
68	弥生土器	甕	SK16 下層	15.4	9.0	-	2/12	やや粗	やや軟	5YR4/6 赤褐	スス付着
69	弥生土器	甕	SK16 下層	13.8	5.0	-	2.5/12	やや粗	軟	2.5YR5/8 明赤褐	管状混和剤
70	土師器	甕	SK16 下層	15.3	4.3	-	2.5/12	やや密	やや軟	7.5YR8/4 浅黄橙	
71	弥生土器	甕	SK16 下層	12.6	3.2	-	1/12	良	やや軟	7.5YR7/4 にぶい橙	
72	弥生土器	器台	SK16 下層	17.4	2.8	-	1/12	やや粗	軟	10YR7/2 にぶい黄橙	
73	弥生土器	高杯	SK16 下層	-	8.2	-	4/12	やや粗	軟	10R6/3 にぶい赤橙	
74	弥生土器	台付鉢	SK16 下層	3.2	7.0	-	8/12	粗	やや軟	10YR7/4 にぶい黄橙	
75	弥生土器	蓋	SK16 下層	16.5	7.1	-	4/12	やや粗	軟	5YR5/4 にぶい赤褐	スス付着
76	弥生土器	甕	SK16 下層	-	2.6	4.0	12/12	粗	やや軟	10YR7/4 にぶい赤橙	スス付着
77	弥生土器	甕	SK16 下層	-	3.3	3.6	12/12	やや粗	軟	10YR5/2 灰黄褐	スス付着、管状混和剤
78	弥生土器	広口壺	SD12	17.6	4.8	-	1/12	やや粗	軟	7.5YR7/4 にぶい橙	

掲載番号	種類	器種	遺構・層位	法量(cm)			残存率	胎土	焼成	色調	備考
				口径	器高	底径					
79	弥生土器	広口壺	SD12	21.5	1.7	—	1/12	やや密	良	5YR6/4 にぶい橙	
80	弥生土器	広口壺	SD12	23.2	1.1	—	1/12	やや粗	やや軟	2.5Y8/1 灰白	
81	弥生土器	細頸壺	SD12	9.9	5.9	—	1.5/12	やや粗	やや軟	10YR7/3 にぶい黄橙	
82	弥生土器	壺	SD12	—	7.6	—	2/12	粗	軟	2.5Y8/1 灰白	
83	土師器	甕	SD12	18.8	3.6	—	1/12	やや粗	やや軟	10YR6/1 褐灰	
84	弥生土器	鉢	SD12	14.0	4.5	—	1/12	やや密	良	10YR8/3 浅黄橙	
85	弥生土器	高杯	SD12	13.6	3.2	—	1/12	密	良	N2/0 黒	
86	弥生土器	高杯	SD12	17.5	3.3	—	1.5/12	やや粗	軟	10YR8/3 浅黄橙	
87	弥生土器	高杯	SD12	20.8	4.6	—	2/12	粗	やや軟	7.5YR8/4 浅黄橙	
88	弥生土器	高杯	SD12	27.0	4.4	—	1/12	やや粗	やや軟	N3/0 暗灰	外面黒色化
89	弥生土器	高杯	SD12	—	6.8	—	3/12	粗	軟	10YR7/3 にぶい黄橙	
90	弥生土器	高杯	SD12	—	2.4	12.8	2/12	やや密	やや軟	5YR6/6 橙	孔2ヶ所
91	弥生土器	高杯	SD12	—	2.7	15.0	1.5/12	やや粗	やや軟	10YR7/2 にぶい黄橙	孔1ヶ所
92	弥生土器	広口壺	SD12	12.4	5.4	—	2.5/12	粗	軟	N2/0 黒	
93	弥生土器	壺	SD12	—	4.6	—	1.5/12	やや粗	やや軟	10YR8/2 灰白	内面爪痕
94	弥生土器	壺把手	SD12	—	—	—	1/12 以下	やや粗	軟	7.5YR8/2 灰白	
95	弥生土器	甕	SD12	21.4	5.8	—	1/12	やや粗	やや軟	5YR7/4 にぶい橙	
96	弥生土器	甕	SD12	14.0	6.2	—	1.5/12	粗	軟	2.5YR5/8 明赤褐	
97	弥生土器	甕	SD12	—	4.3	—	1/12	やや粗	軟	7.5YR7/4 にぶい橙	
98	弥生土器	甕	SD12	17.5	6.8	—	1.5/12	やや粗	軟	N3/0 暗灰	外面黒斑
99	弥生土器	甕	SD12	14.3	3.9	—	2/12	やや粗	やや軟	10YR8/2 灰白	
100	弥生土器	甕	SX12	14.2	16.8	—	3/12	粗	軟	2.5YR7/4 淡赤橙	
101	弥生土器	甕	SD12	13.2	9.3	—	2/12	粗	やや軟	2.5YR5/8 明赤褐	内面黒色化
102	弥生土器	甕	SD12	—	5.8	5.0	12/12	粗	軟	2.5Y4/1 黄灰	
103	弥生土器	甕	SD12	—	3.2	6.0	8/12	やや粗	軟	5YR5/3 にぶい赤褐	外面黒斑
104	弥生土器	甕	SD12	—	3.2	5.7	3/12	やや粗	良	10R6/4 にぶい赤橙	
105	弥生土器	甕	SD12	—	3.9	4.0	12/12	粗	軟	10YR4/2 灰黄褐	
106	弥生土器	甕	SD12	—	2.1	1.6	12/12	粗	良	10YR4/2 灰黄褐	内面黒色化
107	弥生土器	高杯	SD12	9.1	7.7	—	5/12	やや粗	やや軟	7.5YR8/3 浅黄橙	管状混和剤
108	弥生土器	高杯	SD12	—	8.8	15.8	12/12	やや粗	軟	5YR7/6 橙	
109	弥生土器	高杯	SD12	—	5.7	10.6	12/12	粗	やや軟	10YR5/1 褐灰	
110	弥生土器	高杯	SD12	—	6.8	—	9/12	やや粗	軟	5YR5/6 明赤褐	
111	弥生土器	高杯	SD12	—	4.8	—	3/12	やや密	やや軟	7.5YR7/4 にぶい橙	
112	弥生土器	台付鉢	SD12	—	3.6	8.6	2/12	やや粗	軟	7.5YR8/3 浅黄橙	
113	弥生土器	器台	SD12	18.5	7.4	—	1/12	やや密	やや軟	5YR8/3 淡橙	
114	弥生土器	器台	SD12	—	10.6	—	6/12	粗	軟	5YR8/4 淡橙	管状混和剤
115	弥生土器	台形土器	SD12	35.8	5.4	—	1/12	やや粗	良	2.5Y8/1 灰白	
116	土師器	甑形土器	SD12	—	20.6	—	1.5/12	やや粗	良	5YR6/6 橙	管状混和剤
117	土師器	甑形土器	SD19 最上層	—	6.8	46.0	1/12 以下	やや密	やや軟	10YR3/1 黒褐	管状混和剤
118	弥生土器	鉢	SD19 最上層	16.2	3.3	—	1/12	粗	軟	2.5YR7/6 橙	搬入か
119	弥生土器	壺	SD19 最上層	13.0	2.7	—	1/12 以下	やや密	軟	2.5YR5/8 明赤褐	
120	弥生土器	壺	SD19 最上層	13.4	3.9	—	2/12	粗	良	2.5YR5/4 にぶい赤褐	
121	弥生土器	甕	SD19 最上層	29.4	4.5	—	1.5/12	やや粗	良	7.5YR7/6 橙	スス付着
122	弥生土器	甕	SD19 最上層	15.8	1.8	—	小片	やや粗	やや軟	10YR8/2 灰白	
123	弥生土器	甕	SD19 最上層	18.2	6.3	—	3/12	やや粗	やや軟	5YR8/3 淡橙	
124	弥生土器	甕	SD19 最上層	17.0	8.3	—	4/12	やや密	軟	10YR8/4 浅黄橙	
125	弥生土器	甕	SD19 最上層	15.0	5.2	—	4/12	やや粗	やや軟	5YR7/6 橙	スス付着
126	弥生土器	甕	SD19 最上層	21.0	3.6	—	1/12	やや粗	軟	N3/0 暗灰	
127	弥生土器	甕	SD19 最上層	11.4	5.4	—	2/12	密	やや軟	10YR7/3 にぶい黄橙	
128	弥生土器	甕	SD19 最上層	—	8.4	—	4/12	やや密	やや軟	7.5YR6/3 にぶい褐	スス付着
129	弥生土器	器台	SD19 最上層	21.6	3.2	—	1/12	やや粗	やや軟	7.5YR8/4 浅黄橙	
130	弥生土器	器台	SD19 最上層	20.0	5.6	—	4/12	やや粗	軟	10YR6/5 艳橙	
131	弥生土器	台付鉢	SD19 最上層	—	6.6	6.0	8/12	やや粗	やや軟	7.5YR8/4 浅黄橙	
132	弥生土器	有孔鉢	SD19 最上層	—	7.5	—	10/12	粗	軟	5YR7/8 橙	
133	弥生土器	甕	SD19 最上層	—	4.4	8.2	1.5/12	やや粗	軟	10YR5/1 褐灰	
134	弥生土器	蓋	SD19 最上層	14.4	6.7	5.2	4/12	粗	軟	5YR5/6 明赤褐	管状混和剤
135	須恵器	杯蓋	SD19 最上層	13.5	4.0	—	4/12	やや密	軟	N8/0 灰白	焼成不良
136	土師器	椀	SD19 最上層	—	—	8.6	9/12	やや粗	軟	5YR7/4 にぶい橙	
137	モルタル	—	SD19 最上層	—	—	—	—	—	—	—	
138	弥生土器	広口壺	SD19 中層	50.1	19.9	—	1/12	粗	やや軟	5YR8/3 淡橙	

掲載番号	種類	器種	遺構・層位	法量(cm)			残存率	胎土	焼成	色調	備考
				口径	器高	底径					
139	弥生土器	広口壺	SD19 中層	26.4	4.8	-	1.5/12	粗	やや軟	7.5YR8/3 浅黄橙	
140	弥生土器	広口壺	SD19 中層	24.8	2.6	-	1.5/12	やや密	やや軟	10YR8/3 浅黄橙	
141	弥生土器	広口壺	SD19 中層	-	-	-	1/12 以下	やや粗	やや軟	10YR7/1 灰白	
142	弥生土器	広口壺	SD19 中層	16.5	1.5	-	1/12 以下	やや密	やや軟	10YR7/3 にぶい黄橙	
143	弥生土器	広口壺	SD19 中層	20.9	7.7	-	10/12	やや粗	やや軟	10YR6/1 褐灰	
144	弥生土器	広口壺	SD19 中層	24.2	2.4	-	2/12	やや粗	やや軟	2.5YR8/3 浅黄	
145	弥生土器	広口壺	SD19 中層	28.0	2.5	-	1/12	粗	やや軟	10YR8/3 浅黄橙	
146	弥生土器	広口壺	SD19 中層	-	6.7	-	3/12	粗	良	10YR7/4 にぶい黄橙	
147	弥生土器	直口壺	SD19 中層	22.0	7.7	-	1/12	やや密	良	10YR8/4 浅黄橙	
148	弥生土器	短頸壺	SD19 中層	16.0	6.1	-	1/12	やや粗	軟	7.5YR7/4 にぶい橙	
149	弥生土器	受口壺	SD19 中層	16.8	5.8	-	2/12	粗	やや軟	10YR8/2 灰白	
150	弥生土器	壺	SD19 中層	-	5.6	-	1/12 以下	やや密	軟	7.5YR7/4 にぶい橙	
151	弥生土器	壺	SD19 中層	-	17.5	-	1/12 以下	粗	やや軟	7.5Y3/1 オリーブ黒	
152	弥生土器	甕	SD19 中層	-	6.5	-	1/12 以下	やや密	やや軟	10YR7/4 にぶい黄橙	
153	弥生土器	甕	SD19 中層	42.6	11.8	-	1.5/12	やや粗	やや軟	10YR5/1 褐灰	
154	弥生土器	甕	SD19 中層	41.2	5.7	-	2/12	やや粗	やや軟	10YR6/2 灰黄褐	
155	弥生土器	甕	SD19 中層	20.5	22.4	-	4/12	やや密	やや軟	7.5YR5/2 灰褐	
156	弥生土器	甕	SD19 中層	21.6	8.3	-	3/12	やや粗	良	2.5YR8/3 浅黄	
157	弥生土器	甕	SD19 中層	27.0	3.3	-	1/12	やや粗	軟	10YR7/3 にぶい黄橙	スス付着
158	弥生土器	甕	SD19 中層	22.0	4.3	-	1/12	やや粗	やや軟	7.5YR8/3 浅黄橙	
159	弥生土器	高杯	SD19 中層	22.2	4.7	-	1/12	やや粗	軟	10YR8/2 灰白	
160	弥生土器	高杯	SD19 中層	21.8	5.1	-	2/12	やや粗	良	10YR8/3 浅黄橙	
161	弥生土器	高杯	SD19 中層	16.5	4.7	-	1.5/12	やや粗	軟	2.5Y8/1 灰白	
162	弥生土器	高杯	SD19 中層	22.8	4.6	-	1.5/12	やや粗	やや軟	10YR8/2 灰白	
163	弥生土器	高杯	SD19 中層	26.0	2.3	-	1/12	やや密	良	2.5YR7/4 淡赤橙	
164	弥生土器	高杯	SD19 中層	25.0	2.3	-	1/12	やや粗	良	10YR4/1 褐灰	
165	弥生土器	高杯	SD19 中層	-	7.0	-	1/12	やや軟	やや軟	10YR8/2 灰白	
166	弥生土器	鉢	SD19 中層	17.0	4.7	-	2/12	やや粗	やや軟	N3/0 暗灰	
167	弥生土器	鉢	SD19 中層	23.0	3.7	-	1/12 以下	やや粗	良	5Y8/1 灰白	
168	弥生土器	二重口縁壺	SD19 中層	23.4	7.2	-	1/12	粗	軟	7.5YR6/4 にぶい橙	
169	弥生土器	広口壺	SD19 中層	18.0	6.8	-	2/12	粗	軟	2.5YR7/6 橙	
170	弥生土器	壺把手	SD19 中層	-	-	-	1/12 以下	粗	やや軟	2.5YR5/6 明赤褐	
171	弥生土器	壺把手	SD19 中層	-	-	-	1/12 以下	やや密	良	7.5YR7/4 にぶい橙	
172	弥生土器	壺把手	SD19 中層	-	-	-	1/12 以下	やや密	やや軟	10YR8/4 浅黄橙	
173	土師器	小型丸底壺	SD19 中層	-	5.1	-	6/12	粗	良	2.5YR5/6 明赤褐	
174	土師器	小型丸底壺	SD19 中層	-	3.5	-	2.5/12	密	やや軟	10YR7/3 にぶい黄橙	
175	弥生土器	甕	SD19 中層	24.0	3.9	-	2/12	やや粗	やや軟	2.5YR6/3 にぶい橙	
176	弥生土器	甕	SD19 中層	19.0	4.4	-	1.5/12	やや粗	良	10YR8/4 浅黄橙	
177	土師器	甕	SD19 中層	17.0	4.7	-	5/12	密	軟	10YR8/4 浅黄橙	搬入か
178	弥生土器	甕	SD19 中層	25.6	4.4	-	2/12	粗	軟	2.5YR6/6 橙	
179	土師器	甕	SD19 中層	22.8	10.5	-	1.5/12	やや粗	軟	5YR7/3 にぶい橙	
180	弥生土器	甕	SD19 中層	16.0	5.9	-	2/12	やや密	良	7.5YR8/4 浅黄橙	
181	弥生土器	甕	SD19 中層	15.5	7.1	-	1.5/12	粗	やや軟	10YR7/2 にぶい黄橙	
182	弥生土器	甕?	SD19 中層	10.4	9.9	-	1.5/12	密	軟	2.5YR5/8 明赤褐	
183	弥生土器	高杯	SD19 中層	-	6.1	-	1/12 以下	やや密	やや軟	5YR6/8 橙	搬入か
184	弥生土器	高杯	SD19 中層	22.4	3.7	-	1/12	密	良	7.5YR7/4 にぶい橙	
185	弥生土器	高杯	SD19 中層	-	12.4	-	2/12	やや密	やや軟	10R6/3 にぶい赤橙	
186	弥生土器	高杯	SD19 中層	-	6.1	21.4	1.5/12	やや密	やや軟	7.5YR7/4 にぶい橙	
187	弥生土器	高杯	SD19 中層	-	8.8	14.6	3/12	やや粗	軟	5YR7/4 にぶい橙	
188	土師器	高杯	SD19 中層	-	8.1	-	8/12	やや密	良	7.5YR6/3 にぶい褐	
189	弥生土器	器台	SD19 中層	-	7.2	-	9/12	やや粗	やや軟	5YR6/6 橙	
190	弥生土器	高杯	SD19 中層	-	5.8	-	1/12	やや密	やや軟	7.5YR8/3 浅黄橙	
191	弥生土器	高杯	SD19 中層	-	7.0	17.6	3/12	やや粗	良	5YR7/4 にぶい橙	
192	弥生土器	鉢	SD19 中層	21.0	7.3	-	2/12	粗	軟	5YR6/6 橙	
193	弥生土器	蓋	SD19 中層	11.8	5.0	3.4	8/12	粗	やや軟	10YR8/2 灰白	
194	弥生土器	蓋	SD19 中層	-	4.0	-	4/12	粗	やや軟	10YR7/3 にぶい黄橙	
195	弥生土器	蓋	SD19 中層	-	2.5	-	5/12	粗	良	10YR7/2 にぶい黄橙	
196	弥生土器	高杯	SD19 中層	-	5.1	9.8	4/12	やや粗	軟	2.5YR6/6 橙	
197	弥生土器	甕	SD19 中層	-	4.8	10.0	2/12	やや粗	やや軟	10YR7/4 にぶい黄橙	
198	弥生土器	甕	SD19 中層	-	5.4	6.4	3/12	やや粗	やや軟	10YR6/6 赤橙	

掲載番号	種類	器種	遺構・層位	法量(cm)			残存率	胎土	焼成	色調	備考
				口径	器高	底径					
199	弥生土器	甕	SD19 中層	-	4.7	3.0	1/12	やや粗	やや軟	7.5YR7/3 にぶい橙	
200	弥生土器	甕	SD19 中層	-	4.2	10.3	2.5/12	やや粗	やや軟	10YR7/3 にぶい黄橙	
201	弥生土器	壺	SD19 中層	-	11.2	5.4	10/12	粗	やや軟	2.5Y8/1 灰白	
202	弥生土器	壺	SD19 中層	-	2.6	9.0	2/12	粗	軟	10YR8/4 浅黃橙	
203	弥生土器	甕	SD19 中層	-	8.7	6.0	3/12	粗	やや軟	7.5YR4/3 褐	スス付着
204	弥生土器	甕	SD19 中層	-	3.2	2.6	6/12	粗	軟	7.5YR6/3 にぶい褐	
205	弥生土器	壺	SD19 中層	-	5.0	5.1	3/12	粗	やや軟	7.5YR6/3 にぶい褐	
206	弥生土器	壺	SD19 中層	-	8.0	4.6	6/12	粗	軟	10YR6/2 灰黃褐	
207	弥生土器	壺	SD19 最下層	14.0	4.3	-	1/12	やや密	やや軟	10YR8/2 灰白	
208	土師器	小型丸底壺	SD19 最下層	-	6.5	13.2	3/12	粗	良	5YR7/6 橙	
209	土師器	甕	SD19 最下層	14.6	6.0	-	2/12	やや粗	軟	5YR6/6 橙	
210	土師器	布留形甕	SD19 最下層	-	10.0	-	1/12	密	やや軟	7.5YR5/3 にぶい褐	スス付着
211	弥生土器	高杯	SD19 最下層	28.3	6.2	-	1.5/12	やや粗	やや軟	5YR6/6 橙	
212	弥生土器	高杯	SD19 最下層	-	5.7	-	7/12	粗	良	7.5YR7/4 にぶい橙	
213	弥生土器	高杯	SD19 最下層	-	5.3	-	8/12	やや粗	やや軟	7.5YR7/3 にぶい橙	
214	弥生土器	鉢	SD19 最下層	10.1	6.5	-	12/12	やや粗	良	5YR7/4 にぶい橙	底部穿孔
215	弥生土器	壺	SD19 最下層	-	7.3	9.6	4/12	やや粗	やや軟	10YR7/4 にぶい黄橙	
216	弥生土器	広口壺	SP15	22.4	8.9	-	12/12	やや粗	やや軟	10YR8/2 灰白	
217	弥生土器	甕	SP03	16.6	4.1	-	1/12	粗	やや軟	7.5YR7/2 明褐灰	
218	須恵器	杯	SP03	10.5	3.1	-	1/12 以下	密	良	5PB7/1 明青灰	
219	須恵器	壺	SP04	-	7.4	-	1.5/12	やや粗	堅緻	5Y7/1 灰白	
220	弥生土器	壺	SP09	-	3.6	8.8	3/12	やや粗	軟	7.5YR7/4 にぶい橙	
221	須恵器	杯 B	SP17	-	1.3	9.9	1.5/12	密	良	5PB6/1 青灰	
222	須恵器	碗	SP07	-	2.4	5.4	6/12	密	良	5PB7/1 明青灰	底部糸切痕
223	弥生土器	高杯	II層	17.0	3.2	-	1/12 以下	やや粗	やや軟	10YR5/8 黄褐	
224	弥生土器	高杯	II層	-	8.6	-	9/12	やや粗	やや軟	10YR8/2 灰白	
225	弥生土器	蓋	II層	5.8	3.2	2.1	10/12	やや密	良	5YR5/6 明赤褐	ミニチュア
226	弥生土器	壺	II層	18.0	5.1	-	4/12	密	やや軟	5YR5/6 明赤褐	
227	土師器	甕	II層	17.0	3.9	-	2/12	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙	水晶混和剤
228	弥生土器	甕	II層	16.0	8.9	-	2/12	粗	やや軟	2.5YR4/6 赤褐	
229	弥生土器	甕	II層	23.8	5.7	-	6/12	やや粗	やや軟	7.5YR6/3 にぶい褐	搬入か
230	弥生土器	甕	II層	22.0	4.8	-	1/12	粗	やや軟	2.5YR8/3 浅黃	
231	弥生土器	甕	II層	16.0	3.6	-	6/12	やや密	やや軟	7.5YR7/4 にぶい橙	
232	土師器	布留形甕	II層	-	7.7	-	2/12	やや粗	良	7.5YR6/4 にぶい橙	
233	弥生土器	高杯	II層	12.0	4.9	-	10/12	やや粗	やや軟	2.5YR5/6 明赤褐	
234	弥生土器	器台	II層	24.0	3.4	-	3/12	やや密	やや軟	2.5YR5/8 明赤褐	
235	土師器	甕把手	II層	-	-	-	1/12 以下	やや粗	良	5YR5/6 明赤褐	
236	土製品	土錘	II層	0.4	3.5	-	12/12	やや粗	良	2.5Y6/1 灰灰	
237	鉄滓	椀形滓	II層	-	9.1	-	-	-	-	-	重さ 222g
238	須恵器	杯蓋	II層	7.3	3.4	-	3/12	やや粗	良	N7/ 灰白	
239	須恵器	杯身	II層	9.8	3.0	-	1/12	やや密	良	5PB6/1 青灰	
240	須恵器	甕	II層	16.9	5.1	-	5/12	密	良	10YR8/1 灰白	
241	須恵器	長頸壺	II層	-	5.5	-	4/12	やや密	良	N6/0 灰	
242	須恵器	壺	II層	-	14.6	-	2/12	密	良	5PB5/1 青灰	
243	須恵器	杯蓋	II層	-	1.4	-	4/12	やや密	軟	7.5Y8/ 灰白	焼成不良
244	須恵器	杯蓋	II層	16.0	2.3	-	1.5/12	密	良	7.5Y5/1 灰	
245	須恵器	杯 A	II層	14.0	3.4	-	11/12	やや粗	良	5PB5/1 青灰	
246	須恵器	杯 A	II層	13.5	3.5	8.6	6/12	密	軟	5Y8/2 灰白	
247	須恵器	杯 A	II層	14.0	2.8	9.4	3/12	密	良	N7/ 灰白	
248	土師器	杯	II層	13.4	2.7	7.8	3/12	やや粗	軟	5YR4/4 にぶい赤褐	
249	須恵器	杯 A	II層	12.4	3.5	8.6	3/12	密	良	N7/ 灰白	
250	須恵器	杯 A	II層	13.3	3.8	-	9/12	やや密	軟	5Y8/1 灰白	焼成不良
251	須恵器	杯 B	II層	14.2	3.7	5.6	5/12	密	良	5Y7/1 灰白	
252	須恵器	杯 B	II層	13.7	8.6	8.5	7/12	密	やや軟	N8/0 灰白	焼成不良
253	弥生土器	広口壺	IV層	-	6.5	-	1.5/12	やや粗	軟	7.5YR7/4 にぶい橙	Ⅲ様式新
254	弥生土器	鉢	IV層	23.0	6.5	-	1/12	やや密	良	10YR5/2 灰黃褐	
255	弥生土器	鉢	IV層	13.4	3.5	-	1/12	やや密	軟	10YR6/4 にぶい黄橙	管状混和剤
256	弥生土器	鉢	IV層	15.2	2.9	-	1/12	やや粗	軟	10YR8/1 灰白	
257	弥生土器	高杯	IV層	-	5.2	14.2	2.5/12	やや粗	やや軟	10YR8/3 浅黃橙	
258	弥生土器	壺	IV層	15.2	5.9	-	2/12	やや粗	軟	5YR7/6 橙	

掲載番号	種類	器種	遺構・層位	法量(cm)			残存率	胎土	焼成	色調	備考
				口径	器高	底径					
259	弥生土器	二重口縁壺	IV層	25.4	3.8	-	1/12	やや粗	軟	5YR7/4 にぶい橙	
260	弥生土器	二重口縁壺	IV層	16.0	3.2	-	1.5/12	やや粗	やや軟	2.5YR5/8 明赤褐	管状混和剤
261	弥生土器	甕	IV層	16.6	2.6	-	2/12	やや粗	やや軟	2.5YR6/8 橙	
262	弥生土器	甕	IV層	13.1	3.5	-	1.5/12	粗	軟	5YR7/4 にぶい橙	
263	弥生土器	甕	IV層	19.0	5.5	-	1.5/12	やや粗	やや軟	7.5YR5/4 にぶい褐	スス付着
264	弥生土器	甕	IV層	20.0	3.7	-	1.5/12	やや粗	軟	10YR7/2 にぶい黄橙	
265	弥生土器	鉢	IV層	14.1	7.5	-	1.5/12	粗	軟	5YR7/6 橙	
266	弥生土器	甕	IV層	19.1	11.2	-	2/12	粗	やや軟	7.5YR8/4 浅黄橙	
267	土師器	甕	IV層	15.4	4.6	-	2/12	やや粗	良	7.5YR7/6 橙	
268	土師器	甕	IV層	17.0	4.7	-	1/12	やや密	軟	10YR8/3 浅黄橙	搬入か
269	弥生土器	甕	IV層	13.8	6.1	-	2.5/12	やや粗	軟	2.5YR6/8 橙	管状混和剤
270	弥生土器	高杯	IV層	-	2.0	-	1/12	やや粗	やや軟	5YR4/6 赤褐	
271	土師器	高杯	IV層	14.0	4.7	-	3/12	密	やや軟	2.5YR7/4 淡赤橙	
272	弥生土器	高杯	IV層	-	9.9	-	2/12	やや粗	軟	5YR7/6 橙	
273	弥生土器	高杯	IV層	-	7.3	8.8	6/12	やや粗	軟	2.5YR4/8 赤褐	
274	弥生土器	器台	IV層	-	8.7	-	8/12	やや粗	やや軟	2.5YR4/8 赤褐	
275	弥生土器	鉢	IV層	23.9	7.3	-	1/12	やや粗	やや軟	5YR7/6 橙	
276	弥生土器	有孔鉢	IV層	-	11.6	3.8	3/12	粗	やや軟	7.5YR6/4 にぶい橙	
277	弥生土器	台付鉢	IV層	-	12.2	5.6	1/12	やや粗	軟	7.5YR7/4 にぶい橙	
278	弥生土器	蓋	IV層	-	5.2	-	10/12	やや密	軟	5YR5/6 明赤褐	
279	弥生土器	壺	IV層	-	4.4	8.6	2/12	やや密	良	10YR7/3 にぶい黄橙	
280	弥生土器	壺	IV層	-	4.8	19.2	2/12	やや粗	軟	10YR7/4 にぶい黄橙	
281	弥生土器	壺	IV層	-	4.1	5.4	3/12	やや粗	軟	2.5YR6/8 橙	
282	土師器	杯	IV層	15.4	4.5	10.0	3/12	やや粗	良	2.5YR5/8 明赤褐	
283	須恵器	杯蓋	IV層	13.5	3.9	-	8/12	やや粗	良	5B6/1 青灰	当具痕
284	須恵器	杯身	IV層	15.9	3.3	-	2/12	やや粗	良	N5/ 灰白	
285	弥生土器	広口壺	IV層・SD19	21.6	7.7	-	3/12	やや密	良	7.5YR8/4 浅黄橙	
286	弥生土器	広口壺	IV層・SD19	-	1.7	-	1/12 以下	やや密	良	10YR8/2 灰白	
287	弥生土器	広口壺	IV層・SD19	22.8	3.9	-	2/12	やや密	良	5YR8/4 淡橙	
288	弥生土器	壺	IV層・SD19	11.6	5.0	-	2/12	やや密	やや軟	7.5YR8/4 浅黄橙	
289	弥生土器	壺	IV層・SD19	-	3.7	-	1/12 以下	やや粗	軟	2.5YR8/3 浅黄	
290	弥生土器	壺把手	IV層・SD19	-	-	-	1/12 以下	やや粗	軟	7.5YR6/4 にぶい橙	
291	弥生土器	壺	IV層・SD19	37.2	9.1	-	1/12	やや密	良	7.5YR8/3 浅黄橙	
292	弥生土器	壺	IV層・SD19	-	8.1	-	1/12	やや粗	軟	5Y8/1 灰白	
293	弥生土器	甕	IV層・SD19	14.4	7.1	-	2/12	粗	軟	10YR7/4 にぶい黄橙	
294	弥生土器	甕	IV層・SD19	26.8	5.9	-	1.5/12	やや粗	軟	10YR7/3 にぶい黄橙	スス付着
295	弥生土器	高杯	IV層・SD19	34.0	6.1	-	1.5/12	やや粗	やや軟	10YR8/2 灰白	
296	弥生土器	高杯	IV層・SD19	-	12.8	-	8/12	やや密	軟	10YR8/2 灰白	
297	弥生土器	甕	IV層・SD19	-	5.3	6.0	3/12	粗	良	10YR7/3 にぶい黄橙	スス付着
298	弥生土器	甕	IV層・SD19	14.0	4.6	-	1/12	粗	やや軟	5YR6/6 橙	
299	弥生土器	壺	IV層・SD19	-	7.1	9.6	3/12	粗	やや軟	2.5Y8/3 淡黄	
300	弥生土器	甕	廐土中	27.0	8.7	-	1/12	粗	やや軟	5Y8/1 灰白	
301	土師器	甕把手	廐土中	-	6.9	-	1/12 以下	粗	良	7.5YR6/6 橙	

(石器・石製品観察表)

番号	種類	器種	出土地点・層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	石材	備考
S 1	石製品	打製石鎌	SK01	47	12.0	8.0	安山岩	
S 2	石製品	剥片	SD19	23	25.0	5.0	水晶	重さ 2.8 g
S 3	石製品	鑿形石斧	SK16 下層	56	14.0	9.0	凝灰岩	
S 4	石製品	石核	SD12	62	102.0	53.0	安山岩	
S 5	石製品	砥石	II層	64	35.0	28.0	軽石?	
S 6	石製品	扁平片刃石斧	SD19	114	69.0	16.0	凝灰岩	
S 7	石製品	砥石	II層	76	102.0	29.0	緑色凝灰岩	石製品の転用
S 8	石製品	砥石	II層	67	72.0	58.0	花崗岩	
S 9	石製品	台石	II層	117	69.0	51.0	砂岩	
S 10	石製品	砥石	II層	48	41.0	41.0	花崗岩	

## [3] 矢田遺跡試掘・確認調査（第4次調査）

### 1 はじめに

矢田遺跡は亀岡市上矢田町、下矢田町にまたがる散布地として周知されてきた遺跡である。平成30年度には奈良時代末期から平安時代初期頃の掘立柱建物が見つかり、古代の集落跡が展開する可能性が指摘されている。<sup>(注1)</sup>昨年度には、中世の柱穴が多く見つかり、古代から中世にかけての複合集落となる可能性が高まった。周囲には医王谷古墳群などの古墳群が形成されており、中世には矢田城跡、矢田館跡などの遺跡が周知されている。

今回の調査は、府道枚方亀岡線の道路拡幅に伴って行われ、次年度以降、本発掘調査の要否を判断することを目的に実施した第4次調査となる。調査地は亀岡市下矢田町君塚地内で、調査は令和元年12月20日から令和2年1月17日まで行い、調査面積約155m<sup>2</sup>である。調査にあたっては、京都府南丹土木事務所の協力を得た。

### 2 調査の成果

#### (1) 各調査区の概要

本調査において、設定した第1トレンチ及び第2トレンチ、第3トレンチは安定面を含め、3層に分けることができる（第81・82図）。第1層は表土、第2層は近世の包含層である。第3層が安定面となっており、上面に遺構を検出することができた。柱穴は26基、土坑を4基、溝を1条検出できた。多くが第1トレンチから検出されている。また、第2・3トレンチについては遺物を伴う遺構は検出できなかった。

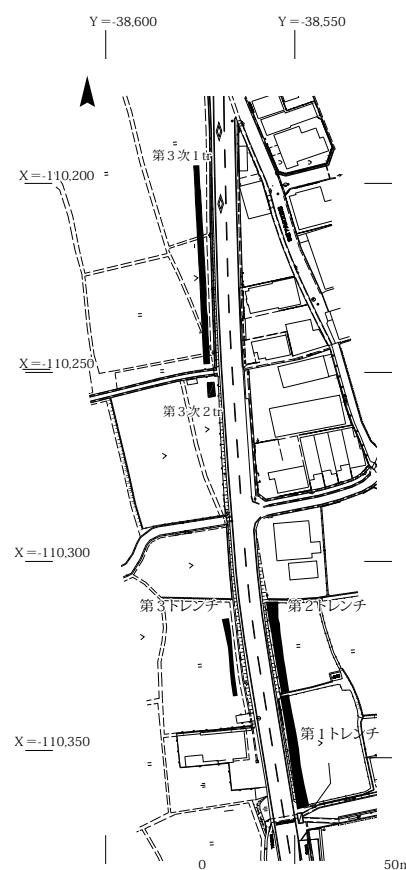
#### 溝SD01（第81図）

第1トレンチ南側にて検出した東西に延びる溝である。幅約5.2m、深さ0.7mを測る。埋土は黄灰・灰色、シルト質土で、最下層には、直径約10cmの礫が混じる。複数回掘削されていることから用水として利用されたと想定できる。埋土からは中世遺物を含んでおり、14～15世紀の遺物（第83図1・2）



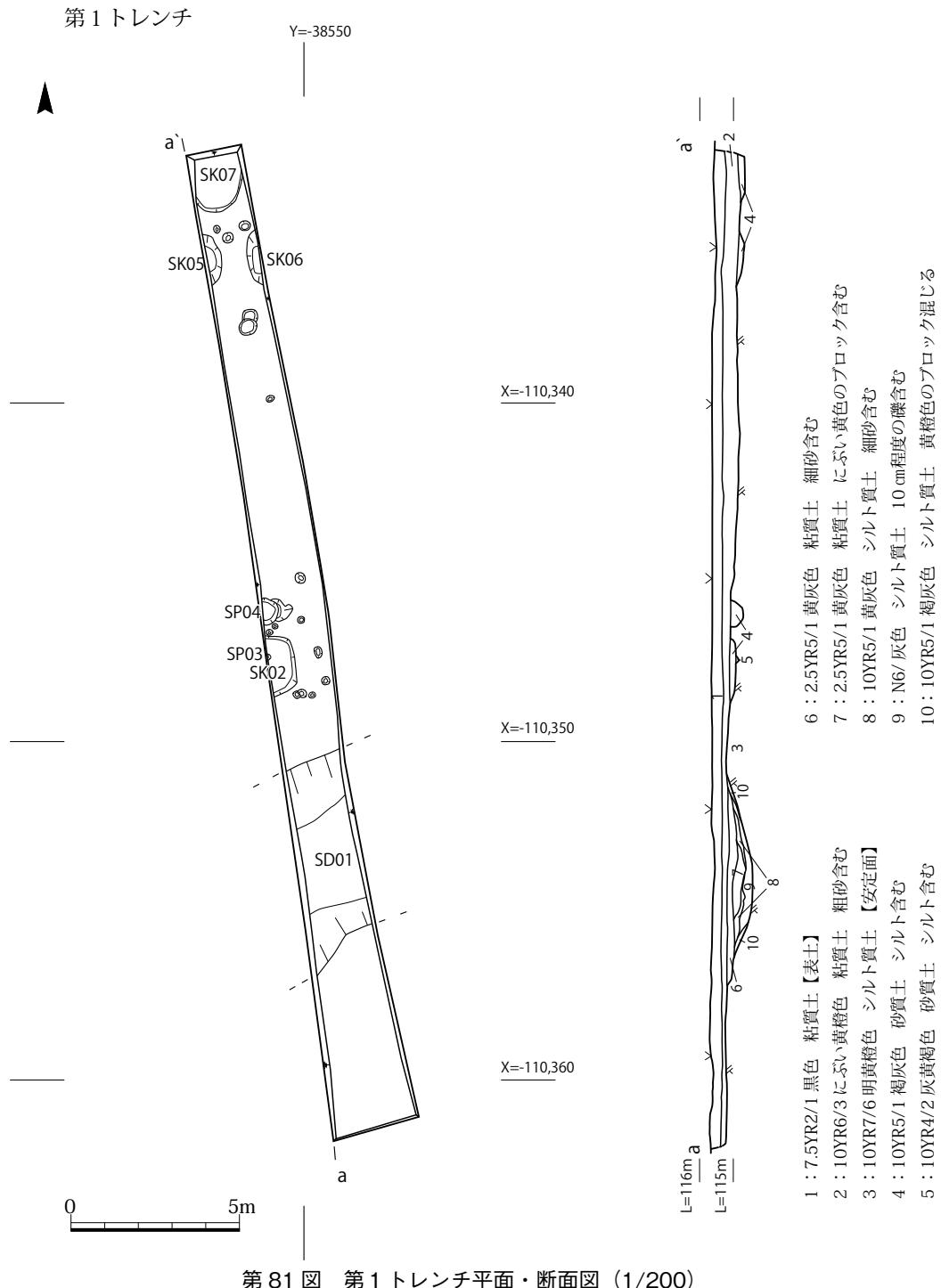
第79図 矢田遺跡位置図（国土地理院）

1/25,000「亀岡・法貴」



第80図 矢田遺跡トレンチ配置図

(1/2,000)



第81図 第1トレンチ平面・断面図 (1/200)

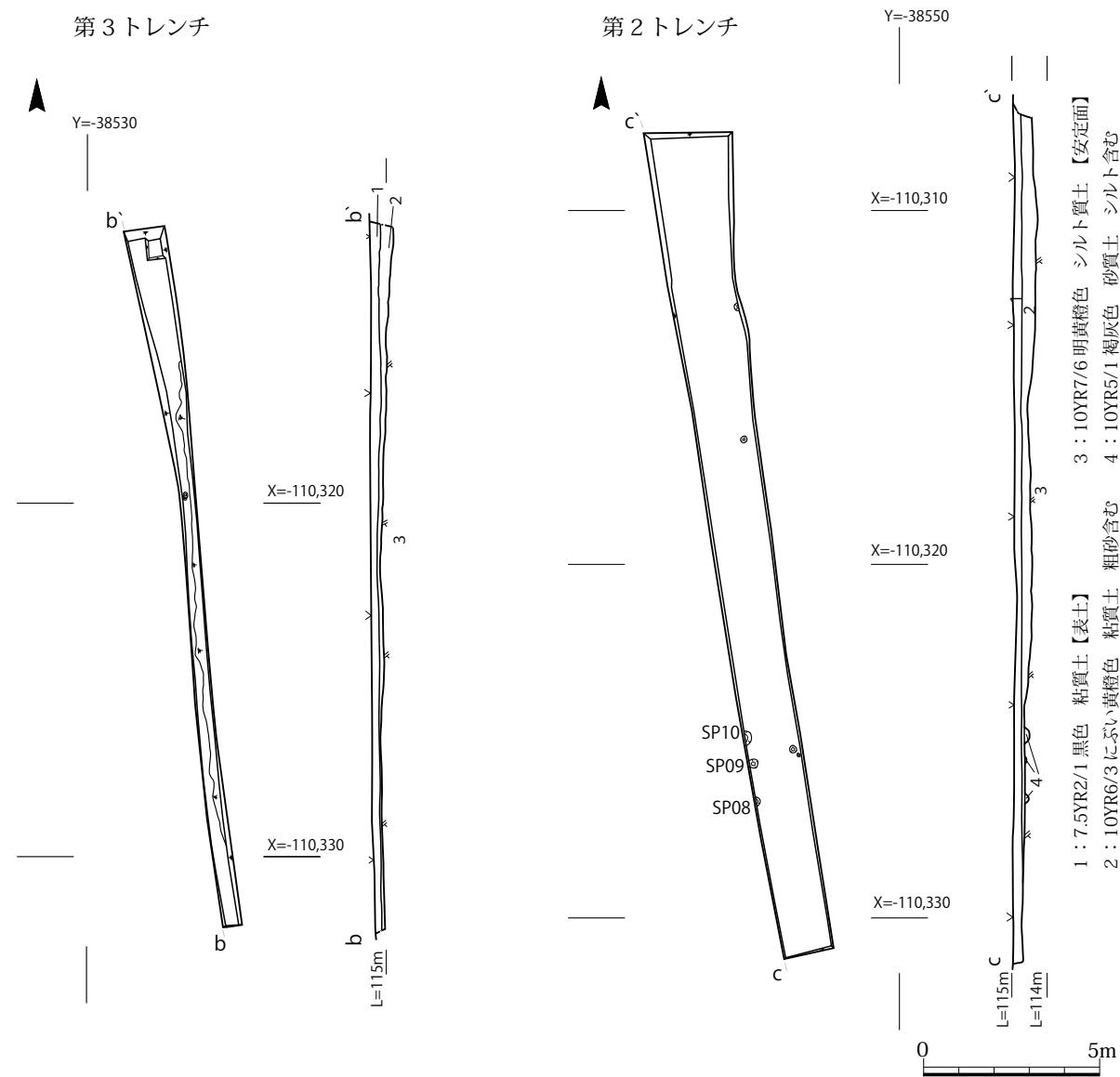
が出土している。

#### 土坑 SK06 (第81図)

第1トレンチ北部で全体の半分が検出された円形の土坑である。南北幅1.6mである。深さ0.2mと浅い。断面形状は、半円形を呈し、ほかの柱穴や土坑と同様に、埋土は、褐灰色、砂質土である。土坑からは土師器皿(第83図3)が出土している。

#### 土坑 SK07 (第81図)

第1トレンチ北端で全体の半分が検出された円形の土坑である。南北幅1.6m以上、東西幅1.7m



第82図 第2・3トレンチ平面・断面図(1/200)

以上である。深さ0.2mである。断面形状は、半円形を呈し、ほかの柱穴や土坑と同様に、埋土は、褐灰色、砂質土である。土坑からは土師器や石臼（第83図4）が出土している。

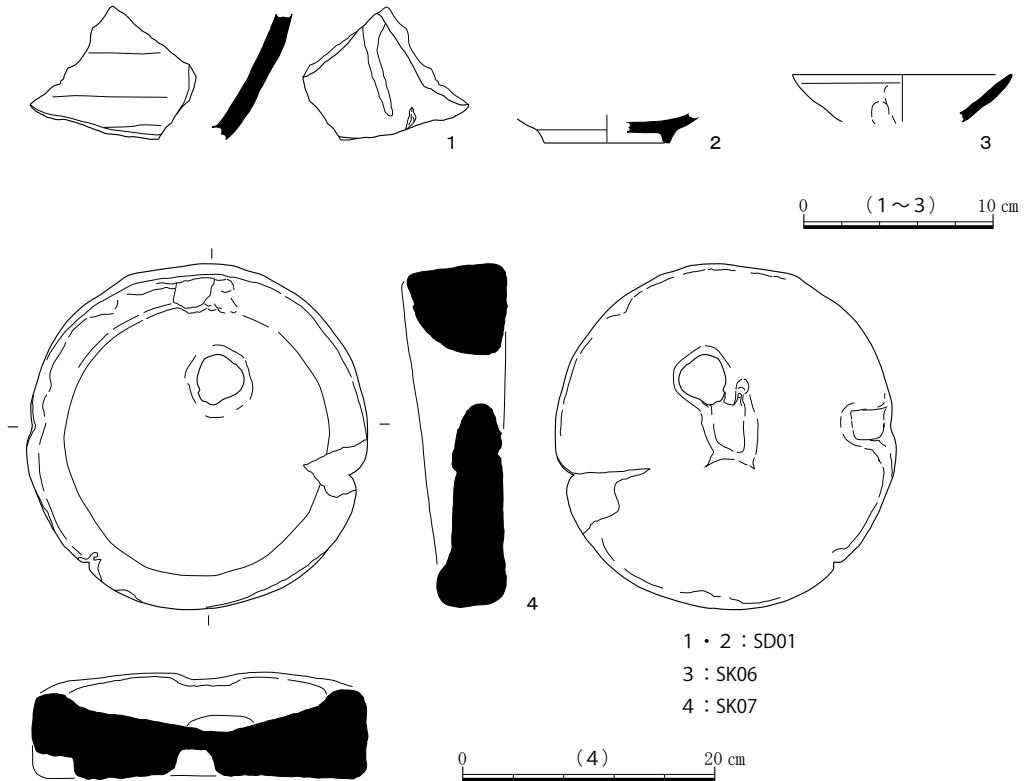
## (2) 出土遺物

今回の調査ではコンテナ1箱分の遺物が出土した。内訳としては、大部分が中世の土器であり、陶磁器が大半を占める。遺物は細片が多いが、図化できるものを示した。

1・2は、SD01から出土したものである。1は、灰釉陶器の壺である。2は、須恵器の杯Bの高台である。

3は、SK06から出土した土師器の皿の口縁部である。手づくねで、厚く、小型の皿である。体部は直線的に立ち上がり、端部は丸く收める。外面には、ナデが見られる。

4は、SK07から出土した石臼である。花崗岩製の上臼で、溝のない、目なし臼である。直径26cm、高さ8.4cmである。供給口と芯棒受けが確認できる。供給口は円形で、約3.6cmをはかる。また、側面に抉りこみが認められ、挽き木は横打ち込み式である。



第83図 矢田遺跡出土遺物実測図（1/4、1/6）

今回の調査で出土した遺物の年代が明確に分かる資料は少ない。しかし、今回の第1・2トレンチで遺構から瓦器類の出土はなく、陶磁器が大半を占める。SK06出土の土師器については、15世紀の遺物と考えられる。

### 3 まとめ

今回の調査では、第1・2・3トレンチで、近世遺物を含む包含層が確認できた。下層より安定面（第3層上面）を検出し、第1トレンチでは、複数の遺構を確認することができた。遺構から15世紀の遺物が出土している。第3次調査では、13世紀中葉～後半の時期の柱列や土坑が検出されており、それより新しい時期のものとなる。矢田遺跡では、鎌倉時代から長期にわたって、人々が活動していたことが分かった。周辺の丘陵や周辺には矢田城跡や矢田館跡などの中世の遺跡が隣接しており、関連する遺構が広がっていると想定される。今後、これらの成果をもとに地域史の復元に努めていく必要がある。なお、次年度以降の工事範囲については本発掘調査が必要である。

（北山大熙）

（注）

- (1) 京都府教育委員会 2019「矢田遺跡試掘・確認調査（第2次調査）」『京都府埋蔵文化財調査報告書 平成30年度』
- (2) 京都府教育委員会 2020「矢田遺跡試掘・確認調査（第3次調査）」『京都府埋蔵文化財調査報告書 令和元（平成31）年度』

## [4] 瓜生野古墳群試掘・確認調査（第2次調査）

### 1 はじめに

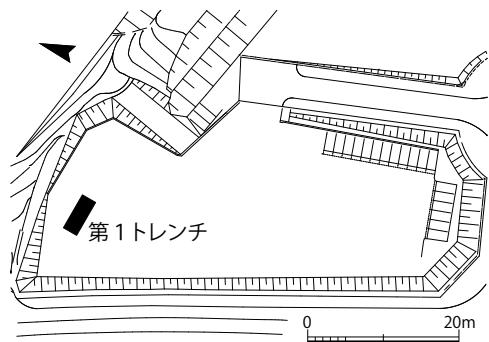
瓜生野古墳群は南丹市園部町瓜生野に所在する古墳群として周知されている遺跡である。独立丘陵上に位置し、今回の調査では瓜生野古墳群の南西部、丘陵の裾部を調査した。周辺地域には狭間墳墓群や今林古墳群など重要な遺跡が多く所在している。狭間墳墓群は弥生時代後期中葉の台状墓であり、近江地域の影響を受けた土器群が出土している。今林6号墳からは舶来鏡や短甲など豊富な副葬品が出土している。このように丘陵上で、弥生時代から古墳時代まで造墓活動が行われ続けていたことが分かっている。<sup>(注1)</sup>建物建築に際し、本発掘調査の要否を判断することを目的に、令和2年6月4日に調査を実施した。面積は10m<sup>2</sup>、調査にあたっては京都府産業立地課の協力を得た。



第84図 瓜生野古墳群位置図（国  
土地理院1/25,000「園部」）

### 2 調査の成果

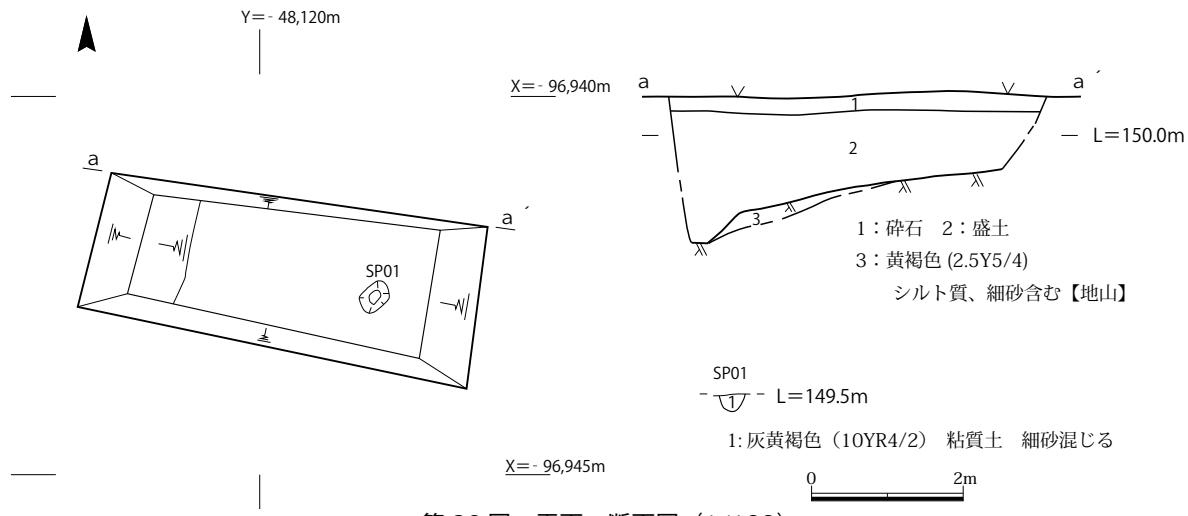
周知の埋蔵文化財包蔵地内で、工事の予定されている地点に約2m×5mの調査区を設定し、遺構・遺物の有無を確認した。基本層序として、駐車場のアスファルトを除去後、0.2m程度の碎石を確認し、さらに下層には現代の盛土が厚く盛られていた。盛土の下層では、現地表下約0.6～2mの深さで地山面を確認し、西側に向かって深くなるように傾斜していた。調査区東部で地山面を切り込むよう柱穴(SP01)を検出した。柱穴は、楕円形で、長辺約20cm、短辺約15cmであった。柱穴の検出面はL=149.5mである。黄褐色の埋土が堆積しており、柱穴からは1点ではあるが、弥生土器片が出土している。調査区西側の地山面は掘削されており、現状の地形から調査区より東部も掘削されているものと想定できる。



第85図 瓜生野古墳群トレンチ位置図  
(1/1,000)

### 3 おわりに

今回の試掘・確認調査では瓜生野古墳群の南西部に位置する地点に調査区を設定した。調査区では、厚い新光悦村造成に伴う現代の盛土が確認され、地山面では、弥生時代の柱穴が検出できた。現状の



第 86 図 平面・断面図 (1/100)

地形からも調査区周辺はすでに掘削され、遺構面は消滅しているものと考えられる。

これまでの調査によって瓜生野古墳群は古墳時代後期の古墳群であり、今回の調査で見つかった遺構は隣接する狭間墳墓群に伴ったものと想定される。周辺の遺構面はすでに消滅しており、当該地点については本発掘調査が必要ないものと判断される。

(北山大熙)

(注)

(1) 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001『京都府遺跡調査概報』第 97 冊

## [ 5 ] 篠窯業生産遺跡群試掘・確認調査

### 1 はじめに

篠窯業生産遺跡は、亀岡市篠町に所在する窯跡である。主な製品は須恵器や綠釉陶器であり、窯の操業は 7 世紀後半に遡る。8 世紀～10 世紀にかけて最盛期を迎える、生産された製品の多くが平安京へと供給された。

今回の調査は、京都縦貫自動車道篠料金所の施設新設に伴い行ったものである。調査地は、亀岡市篠町篠黒岩地内であり、調査区の東方に隣接する尾根には掛ヶ谷 1・2 号窯が所在する。また調査地西側には、小柳 1～4 号窯、黒岩 1～4 号窯が所在する。調査地には元々谷があり、京都縦貫自動車道建設に伴い盛土されているため、窯が埋没している可能性があった。調査期間は令和 2 年 8 月 3 日・4 日である。調査にあたっては、西日本高速道路株式会社の協力を得た。



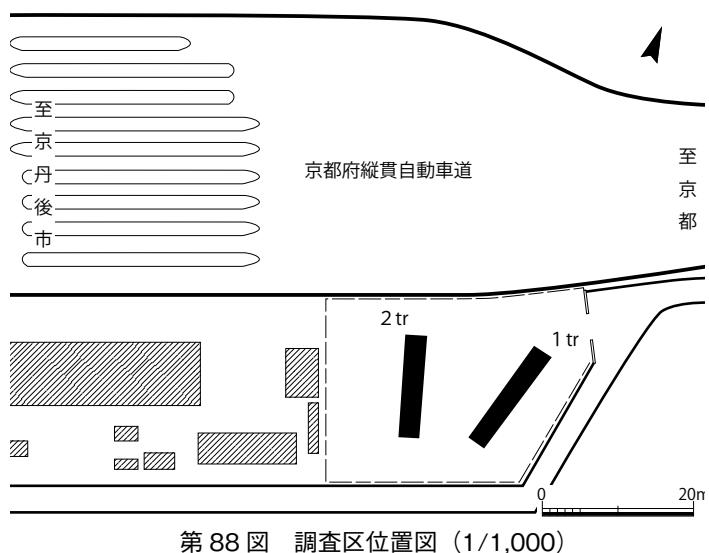
第 87 図 篠窯業生産遺跡群位置図 (国土地理院 1/25,000 「亀岡」)

## 2 調査の概要

調査地は、篠料金所に隣接する駐車場内であり、南から北へと傾斜する丘陵裾を平坦に造成し、アスファルトで舗装している。調査にあたっては、幅約2.6～2.8mの長方形の試掘調査区を2箇所設定した。1 trは全長約15mであり、掛ヶ谷窯跡群が所在する東側の尾根に対し平行に設定した。2 trは、1 trの西側に位置し、全長約13mであり、斜面に対し直行するように設定した。調査面積は、約62m<sup>2</sup>である。以下調査区ごとに概要を説明する。

### 1 tr

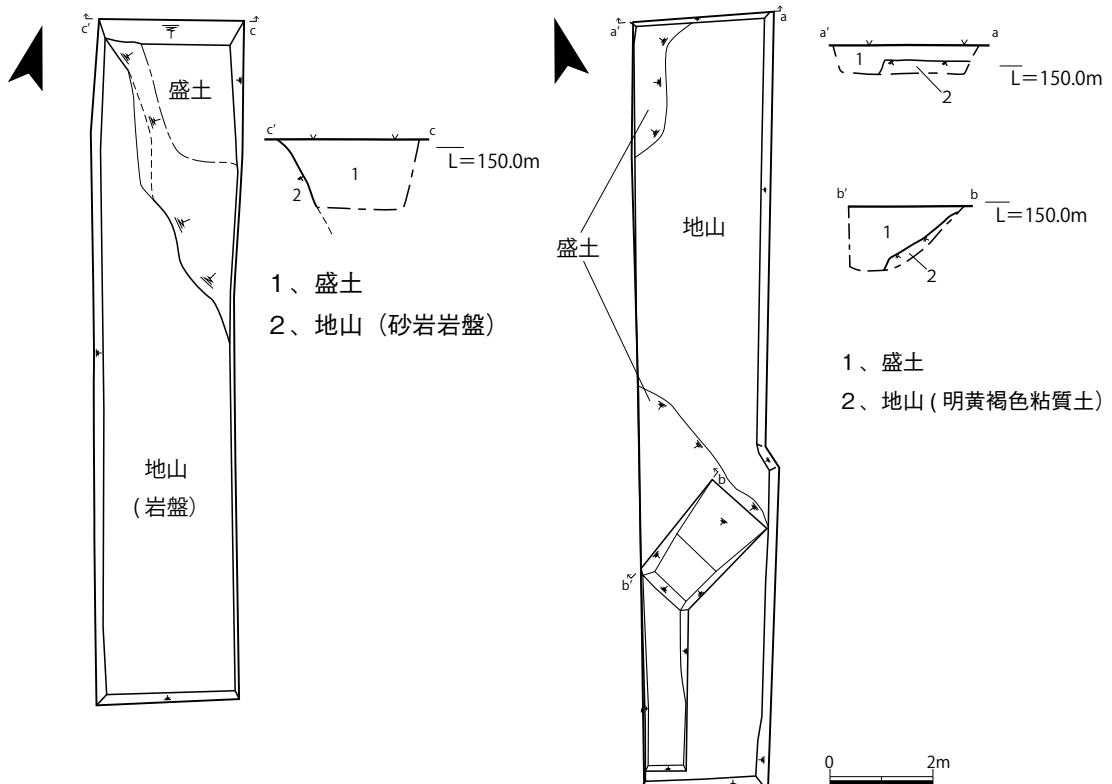
1 trでは、舗装を除去した面から、約0.3mのところで、尾根を形成していた地山を検出した。地山は硬く締まった粘質土であり、それより上層は盛土により造成されている。地山直上で旧表土が検出されなかったことから、過去の造成の際に地山まで削平が及んでいたと推定される。地山は西側に



第88図 調査区位置図 (1/1,000)

### 2 tr

### 1 tr



第89図 平面・断面図 (1/150)

向かって落ち込んでおり、1 tr の西側には谷が入り込んでいるものと見られる。谷は盛土により造成されている。遺構および遺物は検出されなかった。

### 2 tr

2 tr では、舗装の直下に盛土と地山を検出した。地山は砂岩の岩盤であり、トレンチの北東に向かって落ち込んでいる。1 tr 同様に、過去の造成の際に地山まで削平され、東側に隣接する谷は盛土によって造成している。遺構及び遺物は検出されなかった。

## 3 おわりに

今回の調査地は、過去の造成時に地山まで削平された後、盛土により造成されていることがわかった。盛土により 1 tr と 2 tr の間に存在した谷は埋められ平坦に均されたものと見られる。検出された地山は粘土および砂岩の岩盤であり、遺構は検出されなかった。遺物も一切検出されなかったことから、完全に掘削されていることが分かった。今回の試掘調査の結果、工事に伴う埋蔵文化財への影響は無く、本調査の必要も無いと判断した。

(川崎雄一郎)

## [ 6 ] 福知山城跡試掘・確認調査

### 1 はじめに

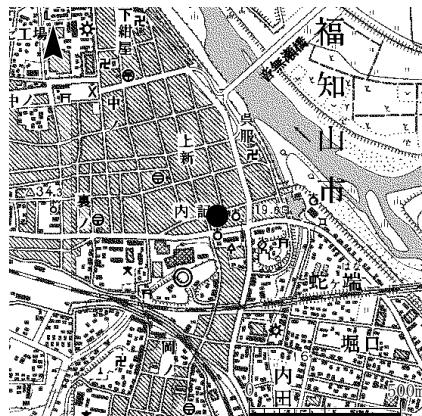
福知山城跡は、福知山市大字内記に所在する中世から近世の城館跡である。今回の調査は、府道 24 号の無電柱化工事に伴って豊坑部分の調査を行い、本発掘調査の要否を判断することを目的に実施した。調査は令和 2 年 9 月 1 日に行った。調査面積は約 20m<sup>2</sup>である。調査に当たっては、中丹西土木事務所の協力を得た。

### 2 調査の概要

工事に伴って地下掘削を行う部分について調査を行った。調査地点は、京都地方検察庁福知山支部の庁舎北側の府道の歩道部分である。この場所は、江戸時代には福知山城の二の丸北側に当たっており、「対面所」が所在した場所に比定されている。

掘削箇所は複数地点あり、各掘削箇所の面積は約 3 ~ 4 m<sup>2</sup>である。ここでは、遺構・遺物を確認した No. 6 (南)、No. 3 (南) 地点について報告する。

No. 6 (南) 地点では、工事の掘削影響深度である現地表面から約 1.8 m まで掘削を行った。3 層

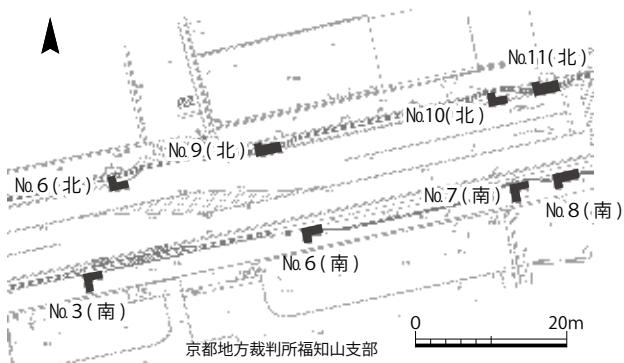


第 90 図 福知山城跡位置図（国土地理院）

1/25,000 「福知山西部」「福知山東部」

までは近代以降の造成土が堆積していたが、地表下約1.6mの5層上面で土坑1基（SK1）を検出した。土坑からは瓦片が出土した。細片のため詳細は不明だが、近世初頭以前のものであるとみられる。また、これより下層からも土師器片が出土しており、下層には中世以前の遺構が存在することが推定される。

No.3（南）地点では地表下約1.6mの7層上面で、近世とみられる整地層を確認した。それ以外の地点では、攪乱や湧水により、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。

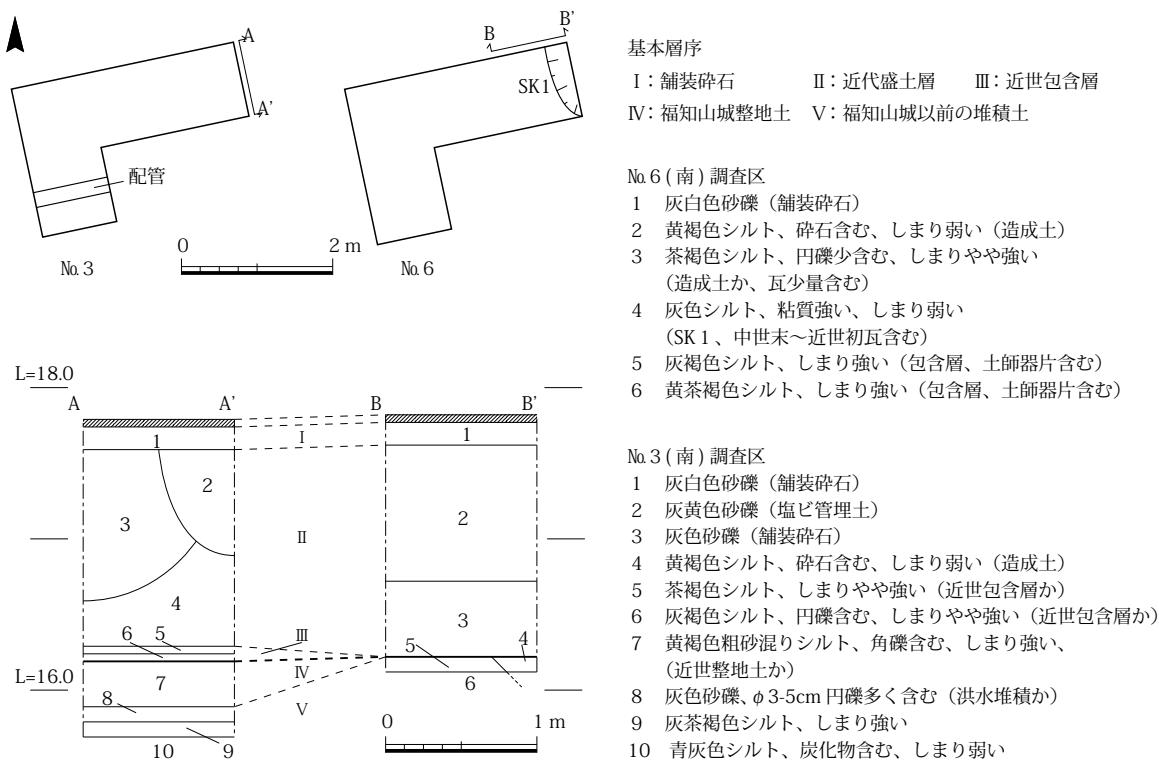


第91図 調査区位置図 (1/1,000)

### 3.まとめ

今回の調査は限られた面積の調査であったが、近世の福知山城以前の遺物が出土した。今後、周辺の調査の進展によって、中世以前の遺構を確認されることが期待される。なお、今回の成果から堅坑は堅杭以外は遺構面に達しないことが判明し、本発掘調査は不要と判断した。

(岡田健吾)



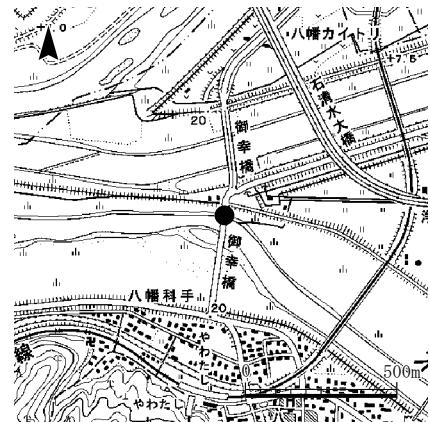
第92図 調査区平面図 (1/100)・断面図 (1/50)

## [7] 木津川河床遺跡試掘・確認調査

### 1 はじめに

木津川河床遺跡は、八幡市から京都市伏見区にかけての広範囲に広がる弥生時代から近世にわたる複合遺跡である。これまでに32次にわたる調査が行われており、各時代とも多くの遺構遺物が検出されている。

今回の調査は、府道13号線御幸橋の橋梁維持修繕事業にかかる木津川の護岸改修に伴い、本発掘調査の要否の判断を行うために実施したものである。調査は、令和2年12月17日を行い、調査面積は約12m<sup>2</sup>、遺物はコンテナ3箱分が出土した。調査にあたっては、京都府山城北土木事務所の協力を得た。



第93図 木津川河床遺跡位置図（国土地理院 1/25,000 「淀」）

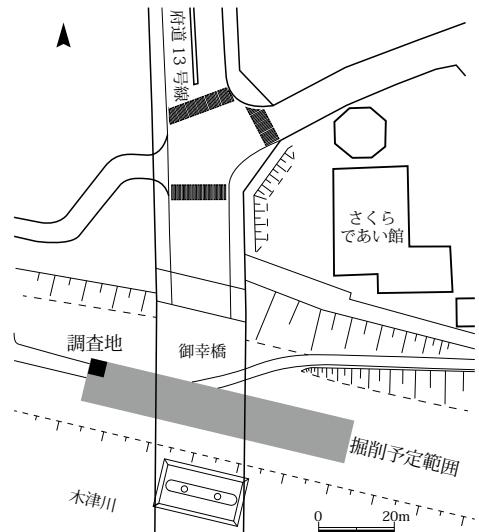
### 2 調査の概要

今回調査を行ったのは、護岸の改修により地盤掘削をする部分にあたり、掘削予定範囲は約10m×80mである。掘削予定範囲の周囲には矢板が打ち込まれていた。調査地は、もともと3m程度の厚さで表土と稀薄な中世包含層が堆積していたが、当課職員が立ち会いのもと、工事に伴い除却済みであった。掘削を開始すると、すぐに多量の古代の土器を含む包含層が現れたため、約4m四方の範囲について精査を行った。その結果、標高約8mで東西方向の溝と落込みを検出した。落込みと溝は重複しており、溝の方が落込みよりも新しい。近隣の調査では、調査地北側の第13次調査において標高約7mで中世墓、御幸橋南側の第20次調査において標高約6.5mで平安時代前期の包含層が

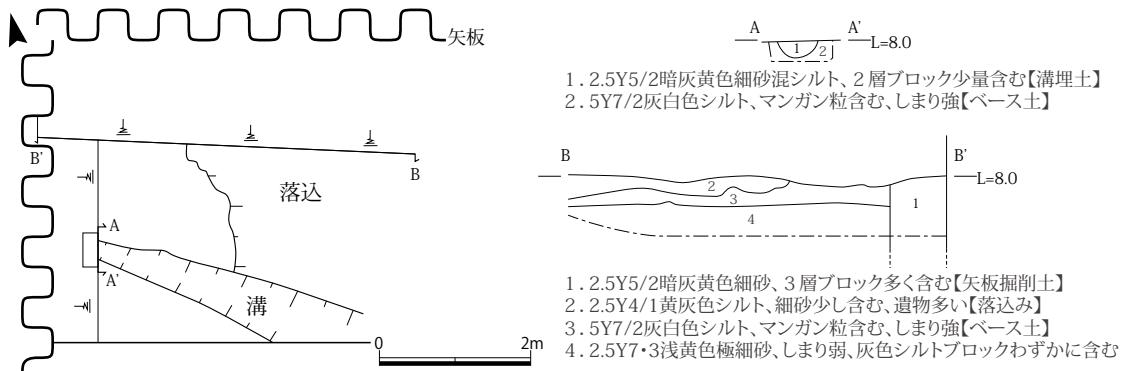
<sup>(注1)</sup> 検出されている。そのため、今回の調査地の遺構面が周囲より高いことがわかる。

包含層と遺構検出面からは、面積に比して多量の土器が出土した。土器の大半は飛鳥時代から奈良時代前半の土師器と須恵器であり、摩滅は少ない。土師器杯には放射状の暗文を密に施す。また、少量の弥生時代後期のタタキ甕や弧帶文を施す字状口縁甕がある。

掘削予定範囲内には遺構検出箇所と同様の包含層が広がっており、遺構も広範囲に広がることが想定できる。そのため、次年度以降、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターによる本発掘調



第94図 調査地位置図 (1/2,000)



第95図 調査区平面・断面 (1/100)

査を実施する予定である。

### 3 まとめ

今回の調査は、限られた面積の調査ながら飛鳥時代から奈良時代の遺構・遺物を検出することができた。これまでの木津川河床遺跡の調査では検出例の少ない時期のものである。今後の本発掘調査で遺構の全体像が解明され、木津川河床遺跡の歴史が明らかになることを期待したい。

(中居和志)

(注)

(1) 高野陽子・岡崎研一 2020「木津川河床遺跡第32次調査」『京都府遺跡調査報告集』第179冊 公益財團法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

伊野近富 2011「木津川河床遺跡第20・21次」『京都府遺跡調査報告集』第145冊 公益財團法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 5 平成 31 年、令和元・2 年における 埋蔵文化財の発掘

### [1] 平成 31 年、令和元・2 年の動向

令和元年度の京都府内における周知の埋蔵文化財包蔵地の件数は約 18,000 件（令和 2 年 4 月 1 日現在）であるが、同年度、埋蔵文化財包蔵地内において実施された土木・建築工事等に際して提出された文化財保護法第 93・94 条に基づく届出・通知は、付表 9 のとおり 3,589（平成 30 年度：3,691）件であった。これは、前年度と比較すると 102 件の減少となっている（前年比約 97%）。法第 94 条に基づく通知は 37 件増加しているものの、法第 93 条に基づく届出はそれを上回って 139 件減少しており、近年の増加傾向から一転、減少となった。

民間の土木・建築工事等に伴う法第 93 条の届出は 3,291（平成 30 年：3,430）件で、減少数は 139 件（前年比約 96%）である。内訳件数は、京都市 1,582 件、乙訓地域 810 件、山城地域 451 件とこの 3 地域が上位を占める。3 地域の届出件数の合計は 2,843 件となり、府内全体の約 86% となる。この 3 地域の内、届出件数が増加しているのは山城地域のみで、京都市及び乙訓地域ではそれぞれ 100 件程減少している。このほか、南丹地域でも 198 件（前年比約 67%）となり、減少が顕著であった。一方、丹後・中丹地域では増加しており、両地域で合わせて 250（平成 30 年：180）件となっており、前年比 39% 増となっている。

一方、公共事業に係る土木・建築工事に伴う法第 94 条の通知は、平成 14 年の 318 件をピークに、平成 20 年度には 177 件とおおむね半減した。平成 24 年度から平成 26 年度にかけては 230 件前後で推移していたが、平成 27 年度に 257 件とわずかながら増加した。平成 28 年度には 236 件と再び減少に転じたが、平成 29 年度は 247 件とわずかながら増加した。平成 30 年度には 261 件となり、令和元年度には 298 件と引き続き増加傾向が続いている、京都市内での事業がおよそ半数近くを占めている。

府内の埋蔵文化財専門職員（公益財団法人調査機関の職員含む）は、平成 7 年の 206 人をピークに市町村合併や、定年退職に伴う新規採用の抑制等により減少傾向にある。令和 2 年 4 月 1 日における府内の専門職員の配置数は 145 名（公益財団法人・嘱託職員等含む）であり、配置は 24 市町（組合）のうち 17 市町（組合）で、配置率はおよそ 71% である。専門職員の配置市町（組合）は前年度からさらに 1 減となり、井手町が無配置となった。その結果、現状で未配置は 7 市町（組合）に及ぶ。府内全体での専門職員は 4 名減員している。市町の埋蔵文化財専門職員は、埋蔵文化財に限らず域内の文化財全般の調査・研究・保存・活用等を担っており、その負担は過大なものと推察される。当該自治体での埋蔵文化財保護を適切に遂行し、保護体制を充実させるためにも必要な人員の適切な配置が

喫緊の課題である。

令和2年度に、文化庁の国庫補助を受け、京都府をはじめとして、府内の19市町において発掘調査等事業が実施されている。事業内容は、域内の埋蔵文化財の範囲内容を確認する詳細分布調査、開発に対応する緊急発掘調査及び史跡等の保存・整備に伴う調査等である。また、同じく国庫補助事業である地域の特色ある埋蔵文化財活用事業は、京都府、向日市、長岡京市において実施されている。京都府では、当課職員の解説により小学校高学年児童を対象に、丹後地域及び乙訓地域の史跡等を巡る「文化財1dayバスツアー」を計画していたが、新型コロナウィルス感染症の感染拡大により事業の中止を余儀なくされた。その他に、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターへの委託事業として、普及啓発事業を実施した。また、同事業を実施している向日市、長岡京市においても、感染拡大防止の観点から不特定多数を対象とする講演会等では事業内容を大幅に見直し、3密状態が発生する恐れのある体験学習等の実施については、規模の縮小や中止など必要な措置が講じられた。埋蔵文化財を通じて地域の歴史・文化財に親しんでいただく機会が大きく損なわれることとなった。

公共放送で放映された大河ドラマ「麒麟が来る」の影響は大きく、府内においても明智光秀に関連する城郭等を活用したイベントが多数開催された。福知山城をはじめ、京都市周山城跡や、亀岡市及び南丹市にかけて所在する八木城跡等、実際に現地への来訪者数は増加することとなった。普及啓発の観点からは喜ばしいことではあるが、一方、無秩序な活用は埋蔵文化財の管理や保存にとって望ましくなく、計画的で適切な活用が必要である。

京都府が設立した公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、設立40年を迎え、設立以来、1,000件以上の発掘調査を実施し、府内の埋蔵文化財の保存と活用に大きな役割を果たしている。令和2年度は、20件の発掘調査等を実施した。丹後地域では一般国道312号大宮峰山道路延伸や、丹後土木事務所が実施する府道の新設等に先立つ調査、中丹地域では一般国道9号夜久野改良事業や中丹西土木事務所が実施する府道の新設等に伴う調査、南丹地域では農林水産省近畿農政局が進める国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」に伴う調査や、南丹土木事務所が実施する府道の新設、河川整備に先立つ調査を実施し、それぞれにおいて重要な成果を得ている。また、山城地域では、国土交通省による国道24号寺田拡幅及び西日本高速道路株式会社が進める新名神高速道路建設事業等の大型公共事業に伴う調査や、山城北土木事務所が実施する府道新設等に先立つ調査を実施しており、多くの成果が得られている。これらの成果については、例年であれば府民に広く還元することを目的に現地説明会を実施してきたが、今年度については、新型コロナウィルス感染症拡大防止の観点から開催することを見送らざるを得なかった。しかし、報道発表は従来どおり実施し、ホームページ等において説明資料を公開した。また、動画共有サイトで発掘現場の動画を配信するなど、新たな取り組みもなされており、今後一層の充実が図られることが強く望まれる。

また、当教育委員会からの委託による「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」として、以下の事業について公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。同センターは令和2年度に設立40年を迎え、設立以来これまでに実施した発掘調査と文化財保護行政の歩みを振り返るとともに、戦国時代から江戸時代にかけての調査成果を中心とした特別展「動乱の世から太平の世へ」を京都府

京都文化博物館において令和2年12月11日から令和3年1月31日にかけて開催すると共に、併せて特別展に伴う図録を作成・配布した。また、同特別展に関連する特別講演会を令和2年12月6日に実施した。そのほかに、勾玉づくりの体験学習を万全の感染拡大防止対策を行った上で実施し、57名の参加が得られた。また、京都府の遺跡をわかりやすく発信するリーフレットを作成し配布した。この他に、発掘調査成果を府民に広く公開し、活用することを目的に埋蔵文化財セミナーを開催しており、令和2年9月に「中世の騒乱と武士の館」をテーマに亀岡市において、また令和3年3月には「恭仁宮と長岡京 その実像に迫る！」と題して京都市で計2回実施され、約230名の参加を得た。

ふるさとミュージアム山城・丹後（京都府立山城・丹後郷土資料館）においても、府内の発掘調査の成果についての講演会や展示などを開催している。山城郷土資料館では、令和3年1月に「舞鶴市満願寺跡の発掘調査からみる中世寺院の実態」、2月に「土人形と京都－考古資料による江戸時代の文化－」と題した文化財講演会を実施した。また、令和2年10月3日には、当課の史跡恭仁宮跡保存活用調査と連携し、山城管内の小学生以上を対象に実施する恭仁宮発掘探検隊を実施した。一方、丹後郷土資料館では、令和2年10月24日から12月13日まで、天橋立を中心とした地域の地理的・歴史的環境の中で丹後国分寺について考える特別展「天橋立と丹後国分寺」を開催した。このほか、令和2年12月に「国分寺造営からみた丹後国“分立”の意義」と題した文化財講演会を実施した。

（奈良康正）

## [2] 府内の主な発掘調査

令和2年1月から12月にかけて行われた主な発掘調査の成果について、時代ごとに概観する。

### ①旧石器時代・縄文時代

福知山市稚児野遺跡では、後期旧石器時代前半である3万6000年前の旧石器が約700点出土し、旧石器時代の遺跡としては府内最多の出土量となった。出土している石器には、ナイフ型石器、削器、搔器、刃部磨製石斧などがある。また、石材には隠岐諸島産の黒曜石や二上山産のサヌカイトが含まれることも重要である。京丹後市上野遺跡においても、稚児野遺跡と同時期の旧石器が150点余り出土し、京都府内では最古の遺跡となった。石器は約3万年前に噴火した始良丹沢火山灰の下層から出土しており、台形石器のほか、鋸歯縁状石器や抉入石器が含まれる。また隠岐諸島産の黒曜石も出土しており、当時の遠隔地交流を考える上で



第96図 稚児野遺跡出土旧石器

重要な資料となる。長岡市伊賀寺遺跡では、縄文時代の掘り込みや土坑が見つかり、縄文土器や石器が出土した。隣接地の調査で見つかっている集落の続きに当たるとみられる。

## ②弥生時代

京都市右京区西京極遺跡では、弥生時代後期の溝が見つかった。溝からは壺・甕・鉢・高坏などの土器や石皿・砥石などの石製品が多量に出土した。過去に隣接地の調査でも同時期の集落跡が見つかっており、その続きに当たるとみられる。向日市長岡京跡左京第627次調査では、弥生時代中期～後期の方形周溝墓、溝、土坑が見つかった。方形周溝墓は2基検出され、1基は1辺約14mを測る。弥生土器壺が出土しており後期に属する。もう一方の方形周溝墓は切り合いかから、それより古いことがわかる。溝や土坑からは中期～後期の土器片が出土している。

## ③古墳時代

城陽市史跡久津川車塚古墳では、前方部西側の下段斜面を確認した。下段の平坦面からは円筒埴輪列が見つかり、4本分の底部が残っていた。同市小樋尻遺跡では、古墳時代前期前葉の自然流路が見つかった。流路は幅約25m、深さ約2.7mを測る。縄文・弥生時代から使われていた流路に手を加えたもので、木樋を使った導水施設や盾・琴などの木製品などが出土した。この流路が一定埋没した後、古墳時代後期には同じ場所に溝が掘削された。溝は幅約11m、深さ約1.8mを測り、敷葉工法による造成が確認された。溝は奈良時代頃まで機能していたとみられ、斎串や人形などが出土している。この溝は『日本書紀』に記された「栗隈の大溝」である可能性が指摘されている。亀岡市金生寺遺跡では4世紀前半から5世紀にかけての灌漑施設が見つかった。自然流路内で井堰や貯水池、水利施設や堤などの遺構が検出され、当時の土木技術の一端が明らかとなった。流路の分水点付近では、祭祀に使われたさまざまな地域の土師器の高坏や壺、甕などまとまって出土した。このような遺構が見つかるることは珍しく、近畿地方では初の事例となった。同市法貴峠20号墳では6世紀後半の横穴式石室が確認された。古墳は直径約20mの円墳で、玄室は玄室長3.1m、玄室幅1.9mを測る。石室の石材は、玄室奥壁が5～6段、玄



第97図 小樋尻遺跡出土導水施設



第98図 法貴峠20号墳主体部

室東側壁が 4～5 段残存しており、非常に残りの良い状態であった。出土品には鉄鏃、ガラス玉、耳環、須恵器などがある。須恵器の年代から 6 世紀末にかけて複数回追葬が行われたとみられる。また、古墳を造る過程で石室の崩れや墳丘盛土の流出を防ぐために墳丘内列石が 2 段分検出された。福知山市池ノ谷 1 号墳<sup>いけのたに</sup>で実施された調査では主体部 2 基が見つかった。第 1 主体部は組み合わせ式木棺直葬で、鉄刀 1 本、刀子 1 本、鉄鏃 32 本が副葬品として出土した。第 2 主体部も組み合わせ式木棺直葬で、刀子 1 本が出土したほか、赤色顔料の広がりが確認された。古墳の規模は直径約 22 m の円墳で外表施設はなく、6 世紀中頃の築造とみられる。

#### ④飛鳥時代・奈良時代

京都市上京区上御靈遺跡<sup>かみごりょう</sup>では、飛鳥時代～奈良時代の掘立柱建物 4 棟と竪穴建物 9 棟が見つかった。竪穴建物からは竈が検出されている。また、同市上京区相国寺旧境内<sup>じょうこくじきゅうけいだい</sup>の調査でも飛鳥時代～平安時代の東西方向の溝が見つかり、須恵器が多量に出土した。いずれも、古代の出雲郷に関連する遺構であると考えられる。同市右京区西京極遺跡<sup>にしきょうごく</sup>では、飛鳥時代の掘立柱建物や柱穴列が見つかった。建物は 2 間×2 間の規模である。また、土師器や須恵器が出土している。向日市宝菩提院廃寺<sup>ほうぼだいいんはいじ</sup>では灰原が見つかり、白鳳期の瓦が大量に出土した。従来知られていた宝菩提院廃寺窯跡からは地点が離れており、未知の窯跡が周辺に存在するとみられる。出土した瓦には鬼瓦や鴟尾などの道具瓦が含まれていることが特徴であり、創建期の宝菩提院廃寺との関係を考える上で重要な資料である。木津川市史跡<sup>くにきゅう</sup>恭仁宮跡では、朝堂院区画の南東隅の柱穴が見つかった。これにより、四隅すべての柱穴が確認され、朝堂院区画の規模が確定した。また、朝堂院区画北辺中央部では、検出された柱穴の間隔から、3 間規模の門があった可能性が考えられる。

#### ⑤長岡京期

向日市長岡宮跡第 533 次調査<sup>ながおかきゅう</sup>では、宮内一条条間北小路と東一坊坊間西小路の各両側溝が見つかった。条坊側溝が良好な状態で検出されたことにより、宮内における道路の施工状況がわかる貴重な成果となった。向日市長岡京跡左京第 627 次調査では、北一条大路の両側溝や掘立柱建物 4 棟、宅地内区画溝、柵列などの遺構が見つかった。北一条大路の側溝は北側が幅約 1 m、南側が幅約 1.65 m と違いが見られた。掘立柱建物 1 棟は南北 2 間、東西 3 間以上の母屋に西側・南側庇が付く規模の大きな建物である。長岡京市長岡京跡左京第 603 次調査では、東一坊坊間大路の路面と両側溝が見つかった。この大路の西側溝が確認された初の事例であり、条坊復原どおりの大路幅で施工されていることが明らかとなった。長岡京市長岡京跡右京第 1205 次調査では、五条大路の北側溝が見つかった。溝は幅約 0.9 m あり、長さ約 50 m 分を検出した。また、10 世紀頃の建物跡も見つかり、柱穴からは軒平瓦が出土した。瓦は仁和寺出土のものと同文とみられ、宇多天皇が滞在したとされる仁和寺別院の「開田院」関連施設であるとみられる。長岡京市長岡京跡右京第 1219 次・第 1220 次調査では、二条大路北側溝、西二坊坊間西小路東側溝が見つかった。二条大路の側溝が長岡京市内で見つかった初の事例となった。また、右京二条二坊十二町域からは土師器や須恵器、瓦が大量に出土した土

坑が見つかった。西二坊坊間西小路の東側溝からは幢幡の垂飾の可能性がある銅製の鈴が出土し、寺院との関連が想起される。長岡京市長岡京跡右京第1221次調査では、西一坊大路東側溝や六条条間小路南側溝が見つかった。西一坊大路東側溝からは多量の土器が出土した。長岡京市長岡京跡右京第1232次調査では、大型柱穴4基が見つかった。3基が東西方向に並び2.7m等間、1基が南北方向に並び柱間3.3mを測る。大型掘立柱建物の一部であると考えられ、周辺の調査成果から二町以上の邸宅が所在した可能性が考えられる。

#### ⑥平安時代

京都市中京区平安京左京二条二坊二町跡では、大炊御門大路の南側溝が延長し、大宮大路を横断している溝状遺構が見つかった。溝は10世紀中頃には埋没しており、堀川と平安宮を結ぶ水路のような機能が考えられる。大路を溝が横切るのは異例で、当時の都市計画を考える上で、重要な成果である。同市中京区平安京左京三条二坊二町跡では、平安時代後期の白磁碗や壺が埋土に大量に含まれる溝が見つかった。また、井戸を埋め戻す際に多量の土師器皿を廃棄した遺構も見つかり、埋戻しに伴う祭祀であると考えられる。同市中京区平安京左京四条一坊一町跡では、朱雀大路の東側溝が見つかった。幅は最大2.5mあり、長さ21.5m分を検出した。出土遺物から15世紀に埋没したとみられる。また調査では、「左」と刻印された瓦が出土しており、修理式所用瓦による補修が周辺で行われていたと考えられる。同市中京区平安京右京三条一坊六町跡では、藤原良相の邸宅跡で9世紀中頃の池跡が見つかった。過去の調査成果と合わせて、池は幅43mの巨大なものであることが判明した。また、今回の調査では池の州浜が17mにわたって良好な状態で検出された。さらに、池に接続する溝も20m分が見つかった。過去の調査で見ついている別の池から48mに及んで水を引いていたと考えられる。同市下京区平安京左京四条四坊十二・十三町跡では、平安時代中期から室町時代後期の富小路の路面と両側溝の遺構が見つかった。複数の遺構面で路面と側溝を確認しており、11世紀の富小路に面する門跡も見つかった。同市下京区平安京左京六条四坊十・十一町跡では、六条坊門小路の両側溝やそれに並行する築地内溝が見つかった。小路の側溝は、10世紀頃から埋没し始めるが、11世紀に補修され、最終的には12世紀後半に完全に埋没することが明らかとなった。同市南区史跡西寺跡では、講堂跡から須弥壇とみられる土壇が見つかった。土壇は東西約17m、南北約6.3mの規模と推定され、東寺の須弥壇よりも規模が小さかったことがわかった。向日市長岡京跡右京1216次調査では、宝菩提院廃寺窯跡の灰原を削り込んで形成された平安時代前期の整地層が見つかった。整地層から緑釉陶器や灰釉陶器を含む土器の破片が大量に出土した。また、整地層を掘り込んで礎石が見つかっており、9世紀前半に礎石建物が造営された可能性が高い。宇治市宇治市街遺跡(川西地区)では、土器溜りや溝などの遺構が検出された。土器溜りからは12世紀の土師器皿が大量に出土した。また、奈良時代頃の須恵器円面硯も出土している。舞鶴市松尾寺遺跡では、松尾寺境内で仁王門修理に伴う発掘調査が実施され、9世紀頃の通路とみられる整地層が見つかった。また、門の南端部では、平安時代後期までの建物の基壇跡や石列などの遺構が見つかった。基壇跡では、礎石の抜き取り痕跡が確認された。

## ⑦鎌倉時代・室町時代

京都市上京区室町殿跡では、15世紀中頃に築かれたとみられる庭園の景石が見つかった。景石は9石見つかり、最大のものは幅約3m、重さ10t近くに及ぶ。9石のうち6石は池に続く滝石組を構成しているとみられ、過去の調査成果から池は南北45m、東西60m以上に及ぶとみられる。足利義政時代の「花の御所」の庭園遺構であると考えられる。同市南区上久世遺跡では、14世紀



第99図 京都新城出土石垣

から15世紀の掘立柱建物6棟や門跡、柵列、土坑、溝などの遺構が見つかった。建物1棟は柱穴に礎板石が伴うものである。また土坑1基は墓とみられ、土師器や瓦器などが出土している。舞鶴市半願寺跡では、昨年度実施された調査で出土した陶磁器の中に、中国の磁州窯産の黒釉白堆線文壺があることがわかり、全国初の出土事例となった。当時の交易を考える上でも重要な成果である。

## ⑧戦国時代

京都市上京区相国寺旧境内では16世紀中頃の礎石建物跡が見つかった。建物は東西12m以上、南北16m以上に及び、建物に沿った溝からは焼けた瓦が出土した。また、建物よりも古い時期の堀跡2条も見つかった。同市上京区平安京左京一条三坊三町跡では、15世紀末頃の堀跡3条が見つかった。これらの堀は「構」の一部であるとみられる。最大の堀は幅約5m、深さ約2mを測り、東西方向に延びている。この堀の南側では布掘りの柱穴列が検出され、櫓などの建物が建っていたことが想定される。同市上京区旧二条城跡では、内郭を囲っていた堀の北西隅部分が見つかった。堀は深さ3m以上あり、底には水が張られていたとみられる。検出状況から、当時のメインストリートである室町通を横切る形で出隅があった可能性が考えられる。同市上京区京都新城跡では、豊臣秀吉が最晩年に築城した京都新城の遺構が初めて確認された。調査では南北8m分の石垣が検出された。石垣は下半分の3~4段分のみが残っており上半分が破壊されていることや、堀が一気に埋められていることから、関ヶ原合戦直前に破壊されたとみられる。調査では桐文の金箔瓦も出土している。

## ⑨近世・近代

京都市上京区相国寺旧境内では、鴨川から取水されて御所まで通じていた「禁裏御用水」の跡が見つかった。水路は石組で、幅約2m、深さ約1.4mあり、長さ25m分を検出した。京都市上京区公家町遺跡では、「禁裏付与力・同心屋敷地」推定地において、邸宅跡が見つかった。近世を通じて少なくとも4回の整地が行われていることがわかった。また、江戸時代後期の漆喰を固めてつくった導水路や貯水施設が見つかった。京都市上京区平安京左京二条二坊二町跡では、京都所司代の上屋敷跡地点で17世紀後半以降の池跡や木樋遺構が見つかった。木樋は池底の下層から全長9.5m分が出

土した。逆サイフォンの原理によって高さが異なる木樋内を水が上下して通っていたとみられる。このような木樋は、江戸城下では複数見つかっているが、地下水が豊富な京都では珍しいという。同市右京区平安京右京一条四坊二町跡では、妙心寺塔頭麟祥院に伴う墓域跡で調査が行われ、複数の墓壙が見つかった。その内のひとつは副葬品として柄鏡や蒔絵櫛を持つ甕棺墓で、没年と被葬者名も判明しており、近世墓の様相を知る上で貴重な例といえる。同市東山区音羽・五条坂窯跡（道仙窯）では、明治時代から昭和時代まで操業していた京焼の窯跡の変遷が明らかとなった。窯は昭和年間に2回造り替えが行われており、最初に窯が拡大され、その後縮小されていたことが判明した。同市東山区鳥部（辺）野隣接地に位置する、本壽寺の境内で調査が実施され、文化9年（1812）創建の納骨堂の建物基礎や地鎮、納骨施設などの構造が明らかとなった。また、下層から中世の塚墓も検出され、東播系須恵器や備前焼甕を藏骨器とする火葬墓が見つかった。舞鶴市松尾寺遺跡では、松尾寺の旧仁王門とみられる基壇が確認され、寛永通宝とともに元禄二朱判金や元禄豆板銀が出土した。舞鶴市内で金銀貨が出土したのは初の事例となった。

（岡田健吾）

付表8 令和元（平成31）年度埋蔵文化財専門職員及び埋蔵文化財包蔵地数市町村別一覧

(令和2年4月1日現在)

年度等 市町村	29				30				31・元				周知の 埋蔵文化財 包蔵地
	職員	嘱託	財団職員	小計	職員	嘱託	財団職員	小計	職員	嘱託	財団職員	小計	
京都府	10		28	38	10		28	38	10		32	42	
京都市	12		45	57	12		45	57	12		37	49	1,393
丹後市	4			4	4			4	3			3	6,248
				0				0				0	19
	1	1		2	1	1		2	1	1		2	1,716
	3			3	3			3	3			3	334
中丹	2	1		3	2	1		3	2			2	875
	3			3	2			2	2			2	1,721
	1			1	1			1	1			1	1,378
南丹	2	1		3	2	1		3	2			2	1,249
	1			1	1			1	1			1	884
				0				0				0	130
乙訓	1		5	6	1		5	6	1	1	5	7	95
	2	1	7	10	2	1	7	10	1	1	8	10	170
	2			2	2			2	2			2	33
山城	4	3		7	4	3		7	3	4		7	305
				0				0				0	9
	2			2	1			1	1	1		2	231
	1	1		2	1	1		2	3	1		4	169
	1			1	1			1	3			3	263
				0				0				0	87
		1		1		1		1				0	103
	3	2		5	3	2		5	3			3	453
		1		1				0				0	105
				0				0				0	23
				0				0				0	7
				0				0				0	10
合計	55	12	85	152	53	11	85	149	54	9	82	145	18,000

※周知の埋蔵文化財包蔵地の件数については、公開された遺跡地図により把握したものである。

※各市町村欄には、市町村単位での周知の埋蔵文化財包蔵地数を示し、合計欄にその総計を示している。

※埋蔵文化財専門職員とは埋蔵文化財に関する専門的な知識や経験をもって、埋蔵文化財行政に係る職務に従事するものを示している。

付表9 令和元（平成31）年度埋蔵文化財関係届出・通知件数市町村別一覧

市町村		土木工事による発掘			埋蔵文化財発掘調査			文化財認定
		届出	通知	計	届出	報告	計	
丹後	京丹後市	20 (1)	8 (2)	28 (3)	4	6	10	8
	宮津市	0	0	0	0	0	0	0
	与謝野町	13 (1)	1 (1)	14 (2)	0	2	2	3
	伊根町	10	1	11	0	2	2	2
	小計	43 (2)	10 (3)	53 (5)	4	10	14	13
中丹	舞鶴市	38	11 (2)	49 (2)	2	2	4	3
	福知山市	140 (1)	37 (4)	177 (5)	2	11	13	7
	綾部市	29	1	30	0	1	1	2
	小計	207 (1)	49 (6)	256 (7)	4	14	18	12
南丹	亀岡市	156	8	164	3	4	7	8
	南丹市	39	2	41	0	0	0	0
	京丹波町	3	1	4	0	0	0	0
	小計	198	11	209	3	4	7	8
乙訓	向日市	285 (6)	21 (1)	306 (7)	21	1	22	18
	長岡京市	418 (14)	20 (1)	438 (15)	19	4	23	13
	大山崎町	107	4	111	0	4	4	4
	小計	810 (20)	45 (2)	855 (22)	40	9	49	35
山城	宇治市	100 (1)	13	113 (1)	1	2	3	2
	久御山町	10	0	10	0	0	0	0
	城陽市	46	9 (4)	55 (4)	3	5	8	8
	八幡市	106	5	111	0	8	8	8
	京田辺市	81	1	82	0	0	0	0
	宇治田原町	13	3 (1)	16 (1)	0	1	1	1
	井手町	3	3	6	0	1	1	1
	木津川市	86	10	96	0	4	4	6
	精華町	6	0	6	0	1	1	0
	和束町	0	0	0	0	0	0	0
	笠置町	0	0	0	0	0	0	0
	南山城村	0	0	0	0	0	0	0
	小計	451 (1)	44 (5)	495 (6)	4	22	26	26
京都都市		1,582 (136)	139 (1)	1,721 (137)	43	144	187	50
合計		3,291 (160)	298 (17)	3,589 (177)	98	203	301	144

※( )内は発掘調査を指示した件数である。

付表10 土木工事等による発掘届出・通知件数一覧

年度 地域	28	29			30			31・元		
		届出	通知	小計	届出	通知	小計	届出	通知	小計
丹後	29	21	5	26	28	10	38	43	10	53
中丹	84	78	28	106	152	31	183	207	49	256
南丹	144	234	5	239	294	4	298	198	11	209
乙訓	733	741	73	814	842	67	909	810	45	855
山城	307	317	29	346	397	30	427	451	44	495
京都市	1,535	1,501	107	1,608	1,717	119	1,836	1,582	139	1,721
合計	2,832	2,892	247	3,139	3,430	261	3,691	3,291	298	3,589

付表11 埋蔵文化財発掘調査届出・報告件数一覧

年度 地域	28	29			30			31・元		
		届出	報告	小計	届出	報告	小計	届出	報告	小計
丹後	13	4	7	11	5	7	12	4	10	14
中丹	9	1	14	15	1	16	17	4	14	18
南丹	5	2	17	19	2	6	8	3	4	7
乙訓	36	32	0	32	24	6	30	40	9	49
山城	28	9	17	26	10	20	30	4	22	26
京都市	176	36	128	164	48	172	220	43	144	187
合計	267	84	183	267	90	227	317	98	203	301

付表12 埋蔵文化財認定件数一覧

年度 地域	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31・元
	5	12	3	3	2	3	2	6	8	10	13
丹後	5	12	3	3	2	3	2	6	8	10	13
中丹	11	4	2	5	2	7	5	2	13	4	12
南丹	8	7	8	5	6	11	4	4	4	2	8
乙訓	42	43	42	38	46	32	46	35	36	27	35
山城	27	25	25	23	25	21	13	18	26	28	26
京都市	98	101	53	61	63	41	39	37	31	44	50
合計	191	192	133	135	144	115	109	102	118	115	144

付表 13 令和2年度埋蔵文化財国庫補助事業一覧

事業主体	発掘調査等		地域の特色ある埋蔵文化財活用事業
	事業名	内容等	事業内容等
京都府	府内調査	各種開発確認、農業基盤整備本調査、保存目的、詳細分布調査等、史跡内内容確認	普及啓発紙作成
京都市	市内調査	各種開発確認、個人住宅、零細企業、保存目的、史跡内内容確認、詳細分布調査等	
向日市	市内調査	各種開発確認、個人住宅、史跡内内容確認、詳細分布調査等、出土遺物保存処理	体験学習、広報資料作成、台帳作成
長岡京市	市内調査	各種開発確認、保存目的、詳細分布調査等、出土遺物保存処理	体験学習、案内板・説明板等設置
大山崎町	町内遺跡	各種開発確認、保存目的、詳細分布調査等	
宇治市	市内遺跡	各種開発確認、保存目的	
城陽市	市内遺跡	各種開発確認、史跡内内容確認、出土遺物保存処理	
八幡市	市内調査	各種開発確認、史跡内現状変更判断	
京田辺市	市内遺跡	各種開発確認	
木津川市	市内遺跡	各種開発確認、史跡内内容確認、詳細分布調査等	
井手町	町内遺跡	各種開発確認、詳細分布調査等	
亀岡市	市内遺跡	各種開発確認、農業基盤整備本調査	
南丹市	市内遺跡	各種開発確認、保存目的、出土遺物保存処理	
京丹波町	町内遺跡	各種開発確認、詳細分布調査等	
綾部市	市内遺跡	保存目的、農業基盤整備本調査	
福知山市	市内遺跡	各種開発確認	
舞鶴市	市内遺跡	各種開発確認	
宮津市	市内遺跡	各種開発確認	
京丹後市	市内遺跡	詳細分布調査等	
与謝野町	町内遺跡	各種開発確認	

付表14 令和2年度（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター委託事業等一覧

番号	遺跡名	所在地	委託者	関連工事名
1	小樋尻遺跡ほか	城陽市	国土交通省京都国道事務所	道路建設事業
2	芝山遺跡	城陽市	西日本高速道路株式会社	道路建設事業
3	小樋尻遺跡ほか	城陽市	西日本高速道路株式会社	道路建設事業
4	下水主遺跡	城陽市	西日本高速道路株式会社	道路建設事業
5	美濃山遺跡	八幡市	西日本高速道路株式会社	道路建設事業 整理等作業
7	金生寺遺跡ほか	亀岡市	近畿農政局	ほ場整備事業
8	稚児野遺跡	福知山市	国土交通省福知山河川国道事務所	道路建設事業
9	カンジョガキ遺跡ほか	京丹後市	国土交通省福知山河川国道事務所	道路建設事業
10	平遺跡ほか	京丹後市	府丹後土木事務所	道路建設事業
11	平ヶ岡古墳群	京丹後市	府丹後土木事務所	道路建設事業
12	新町遺跡ほか	京丹後市	府丹後土木事務所	道路建設事業
13	満願寺跡	舞鶴市	府中丹東土木事務所	砂防施設事業 整理等作業
14	犬飼遺跡	亀岡市	府南丹土木事務所	道路建設事業
15	犬飼遺跡	亀岡市	府南丹土木事務所	河川付替事業
16	平安京跡	京都市	京都府	施設建設事業 整理等作業
17	長岡京跡・開田遺跡	長岡京市	府乙訓土木事務所	道路建設事業
18	稻泉遺跡	福知山市	府中丹西土木事務所	道路建設事業
19	大岩原遺跡・堂後遺跡	宇治田原町	府山城北土木事務所	道路建設事業
20	柏ノ木遺跡	井手町	井手町	施設建築事業
21	普及啓発	一	府教育委員会	普及啓発事業

【普及啓発】

1 刊行図書

『京都府遺跡調査報告書』第179・180冊

『京都府埋蔵文化財情報』第137・138号

『もっと知りたい 京都の遺跡』第7・8号

2 埋蔵文化財セミナー・シンポジウム

第144回「中世の騒乱と武士の館」

令和2年9月26日（土）於：ガレリアかめおか

桐井理揮「堀の内には誰が住んだのか？」

飛鳥井拓「文献史料にみる丹波の中世城館と領主」（亀岡市教育委員会）

中居和志「中世・丹波地域の城館の様相」（京都府教育委員会）

第145回「恭仁宮と長岡京 その実態に迫る！」

令和3年3月6日（土）於：ウイングス京都

中居和志「恭仁宮中心部の構造—朝堂院区画を中心にしてー」（京都府教育委員会）

小池 寛「長岡京遷都の実態一周到に計画された遷都ー」

3 特別展・特別講演会

特別講演会「動乱の世から太平の世へ」

令和2年12月6日（日）於：京都産業会館ホール

藤井讓治「かわりゆく京都 秀吉のお土居と家康の二条城」（京都大学）

山田邦和「戦国・桃山時代と京都のすがた」（同志社女子大学）

加藤雄太「遺物からみる戦国・江戸のくらし」

特別展覧会「動乱の世から太平の世へ」

令和2年12月11日～令和3年1月31日 於：京都文化博物館

4 展覧会・体験講座

夏休み考古学体験教室「勾玉をつくろう」

令和2年8月8日～10日 於：公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター研修室

5 共同研究・単独研究

面 将道・中川和哉 「瀬戸内技法の流入時期について」

加藤雄太 「中世丹後の土器・陶磁器」

桐井理揮・高野陽子 「擬凹線文土器様式の成立と展開」

菅 博絵・伊賀高弘 「城陽市芝山古墳群出土鏡の研究」

## 付表15 令和元（平成31）年度発掘調査報告書等刊行状況

## 【報告書等】

- ・『京都府埋蔵文化財調査報告書 令和元（平成31）年度』京都府教育委員会 令和2年3月（恭仁宮跡、川北遺跡、余部遺跡、法貴峠古墳群、佐伯遺跡、矢田遺跡、乾谷大崩遺跡、中海道遺跡、出雲遺跡、白石浜遺跡）
- ・『京都府遺跡調査報告集』第179冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 令和2年3月（木津川河床遺跡第32次、向島宇治線地方道路交付金業務関係遺跡）
- ・『京都府遺跡調査報告集』第180冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 令和2年3月（一般国道163号木津東バイパス関係遺跡、岡田国遺跡第3～6次）
- ・『京都市内遺跡発掘調査報告書 令和元年度』京都市文化市民局 令和2年3月（平安宮内裏内郭回廊跡・聚楽遺跡、平安宮豊樂院跡・鳳瑞遺跡、平安京左京一条三坊十町跡・史跡西寺跡（36・37次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡、山科本願寺跡（23次）、山科本願寺南殿跡（6～8次）、中臣遺跡（92次）、伏見城跡・桃山古墳群跡、伏見城跡・指月城跡）
- ・『京都市内遺跡詳細分布調査報告 令和元年度』京都市文化市民局 令和2年3月（平安宮正親司跡、平安京左京四条二坊十三町跡、平安京右京六条三坊十一町跡・花脊経塚群・植物園北遺跡、延勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡、伏見城跡・指月城跡、長岡京左京九条三坊五・十二町跡・淀城跡、上ノ山古墳・大藪遺跡、周山城跡）
- ・『京都市内遺跡試掘調査報告 令和元年度』京都市文化市民局 令和2年3月（平安京左京三条三坊四町跡・左京四条三坊十町跡・烏丸御池遺跡、平安京左京五条三坊十六町跡・烏丸綾小路遺跡、平安京右京三条四坊一町跡、平安京右京七条二坊十一町跡・衣田町遺跡・西市跡・史跡西寺跡・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡、大徳寺旧境内・上京遺跡・寺ノ内旧域・中臣遺跡・深草遺跡・鳥羽離宮跡・竹田城跡・鳥羽遺跡・史跡名勝嵐山・嵐山谷ヶ辻子町遺跡）
- ・『令和元年度京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書 本能寺跡出土品』京都市文化市民局 令和2年3月
- ・『令和元年度重要遺跡出土文化財整理報告』京都市文化市民局 令和2年3月
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2018-11 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 令和元年5月「植物園北遺跡」
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2018-12 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 令和元年10月「平安京右京七条一坊十二町跡」
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2019-1 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 令和元年9月「平安京右京一条二坊十六町跡」
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2019-2 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 令和元年11月「平安京右京二坊十二町跡・西ノ京遺跡」
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2019-3 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 令和元年12月「平安京右京一条四坊十五町跡・公家町遺跡」
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2019-4 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 令和元年12月「平安京左京五条二坊八町跡・妙満寺の構え跡」
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2019-5 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 令和元年12月「平安京右京四条三坊三町跡」
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2019-6 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 令和元年12月「平安京右京三条三坊十四町跡」
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2019-7 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 令和2年1月「平安京左京四条四坊一町跡・烏丸御池遺跡」
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2019-8 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 令和2年1月「平安京右京六条三坊四町跡」
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2019-9 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 令和2年3月「伏見城跡」
- ・『アルケス発掘調査報告』1 合同会社アルケス 令和元年10月「平安京左京二条四坊二町跡・烏丸丸太町遺跡—中京区大津町における埋蔵文化財発掘調査—」
- ・『アルケス発掘調査報告』2 合同会社アルケス 令和元年10月「平安京左京三条三坊五町跡・烏丸御池遺跡—中京区役者町における埋蔵文化財発掘調査—」
- ・『アルケス発掘調査報告』3 合同会社アルケス 令和元年10月「平安京左京二条二坊十町跡・高陽院跡・二条城北遺跡—中京区七丁目町における埋蔵文化財発掘調査—」
- ・『イビソク京都市内遺跡調査報告』第21輯 株式会社イビソク 令和元年10月「平安京左京九条四坊二町跡・烏丸町遺跡－東九条東山王町における埋蔵文化財発掘調査報告書－」

## 京都府埋蔵文化財調査報告書（令和2年度）

- ・『イビソク京都市内遺跡調査報告』第22輯 株式会社イビソク 令和2年3月「平安京左京三条四坊五町跡・烏丸御池遺跡－大阪材木町における埋蔵文化財発掘調査報告書－」
- ・『イビソク京都市内遺跡調査報告』第23輯 株式会社イビソク 令和元年8月「平安京左京九条三坊八町跡・烏丸町遺跡－東九条室町における調査－」
- ・『平安京左京六条四坊八町跡 京都市下京区松原通堺町東入る杉屋町288-1～3、289-1・2他の発掘調査』株式会社四門 令和元年8月
- ・『正覚寺跡発掘調査報告書』株式会社地域文化財研究所 令和元年11月
- ・『植物園北遺跡発掘調査報告書』株式会社地域文化財研究所 令和2年3月
- ・『平安京左京八条二坊五町跡発掘調査報告書』株式会社文化財サービス 令和元年8月
- ・『白河街区跡発掘調査報告書』株式会社文化財サービス 令和元年9月
- ・『平安京左京六条二坊十町跡・烏丸綾小路遺跡発掘調査報告書』株式会社文化財サービス 令和元年10月
- ・『六波羅政跡、音羽・五条坂窓跡発掘調査報告書』株式会社文化財サービス 令和元年11月
- ・『平安京左京三条四坊十町跡・烏丸御池遺跡発掘調査報告書』株式会社文化財サービス 令和2年3月
- ・『平安京左京六条二坊十二町跡・烏丸綾小路遺跡』公益財団法人元興寺文化財研究所 平成31年4月
- ・『史跡本願寺境内・名勝滴翠園・平安京跡－災害復旧事業に伴う保存修理工事・発掘調査報告書－』宗教法人本願寺 令和2年3月
- ・『向日市埋蔵文化財調査報告書』第114集 公益財団法人向日市埋蔵文化財センター 令和元年12月「長岡宮跡（西辺官衙・西一条大路・北山遺跡）、長岡京跡（左京四条一坊十六町・四条二坊一町・東一坊大路・左京一条三坊四町・高田遺跡）、修理式遺跡、中海道遺跡」
- ・『向日市埋蔵文化財調査報告書』第115集 公益財団法人向日市埋蔵文化財センター 令和元年9月「久々相遺跡」
- ・『向日市埋蔵文化財調査報告書』第116集 公益財団法人向日市埋蔵文化財センター 令和2年3月「長岡宮跡（朝堂院北西官衙・近世向日町遺跡・北辺官衙・岸ノ師田遺跡・辰巳遺跡・南垣内遺跡北部）、長岡京跡（北一条二坊五～七町・十六町・二条条間南工事・左京二条三坊一～四町・八町・鶏冠井遺跡・一条大路・東二坊大路・左京一条三坊二町）、渋川遺跡」
- ・『向日市埋蔵文化財調査報告書』第117集 公益財団法人向日市埋蔵文化財センター 令和2年3月「五塚原古墳」
- ・『長岡京市文化財調査報告書』第74冊 公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 令和2年3月「長岡京跡右京、長法寺七ツ塚古墳群、乙訓寺、金原寺跡」
- ・『長岡京市文化財調査報告書』第75冊 公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 令和2年3月「伊賀寺遺跡」
- ・『大山崎町文化財調査報告書』第57集 大山崎町教育委員会 令和2年3月「山崎津跡、山崎城跡」
- ・『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第58集 大山崎町教育委員会 令和2年3月「長岡京跡」
- ・『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第78集 城陽市教育委員会「城陽市埋蔵文化財調査報告書」
- ・『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告』第66集 八幡市教育委員会 令和2年3月「美濃山廃寺、美濃山廃寺下層遺跡」
- ・『木津川市埋蔵文化財調査報告書』第22集 木津川市教育委員会 令和2年3月「令和元年度木津川市内遺跡発掘調査報告書（木津遺跡・吐師遺跡・恭仁宮跡・上狛北遺跡・大林遺跡・上津遺跡・錢司遺跡個人所有史料調査・片山遺跡）」
- ・『木津川市埋蔵文化財調査報告書』第23集 木津川市教育委員会 令和2年3月「吐師遺跡」
- ・『亀岡市文化財調査報告書』第97集 亀岡市教育委員会 令和2年3月「国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡、余部遺跡」
- ・『亀岡市文化財調査報告書』第98集 亀岡市教育委員会 令和2年3月「篠窓跡詳細分布調査成果」
- ・『舞鶴市文化財調査報告』第52集 舞鶴市 令和2年3月「女布遺跡」
- ・『福知山市文化財調査報告書』第70集 福知山市教育委員会 令和2年3月「福知山城跡」
- ・『福知山市文化財調査報告書』第71集 福知山市教育委員会 令和2年3月「上ヶ市遺跡」
- ・『京都府京丹後市文化財調査報告書』第21集 京丹後市教委育委員会 令和2年3月「網野銚子山古墳」
- ・『京都府京丹後市文化財調査報告書』第22集 京丹後市教委育委員会 令和2年3月「女城跡、加悦岡遺跡」
- ・『京都府京丹後市文化財調査報告書』第23集 京丹後市教委育委員会 令和2年3月「途中ヶ丘遺跡」
- ・『令和元年度与謝野町国庫補助事業発掘調査報告書』与謝野町教育委員会 令和2年3月「大風呂南墳墓群、地蔵山遺跡」

### 【雑誌等】

- ・『京都府埋蔵文化財情報』第136号 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 令和元年10月（「平成三十年度京都府内の埋蔵文化財の調査」（村田和弘）／「軽石考2－丹後の遺跡から見た日本海流域における軽石」（引原茂治・小池 寛）／「宇治市一本松古墳の埴輪とその年代」（桐井理揮）／「東園家邸跡出土の禁裏御用品－平安京左京北辺三坊五町の調査

- 成果から－（加藤雄太）／「美濃山遺跡第 8 次」（増田孝彦）／平成 30 年度発掘調査略報「木津川河床遺跡第 32 次」（岡崎研一）／長岡京跡調査だより 132（土橋 誠）／センターの動向）
- ・『京都府埋蔵文化財情報』第 137 号 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 令和 2 年 3 月（「京都府京丹後市上野遺跡における堆積物の帶磁率測定」（上峯篤史）／「京都府内における横穴式石室導入期の古墳の検討」（竹村亮仁・荒木瀬奈）／「西外古墳群の研究（上）」（桐井理揮・肥田翔子・木村結香）／「古墳築造終焉後の環状瓶（上）」（名村威彦）／「左京近衛・西洞院辻の町屋について」（加藤雄太）／令和元年度発掘調査略報「保安塚・長井野塚・奥城土遺跡」（加藤雅士）、「芝山遺跡・芝山古墳群第 19 次（O・P 地区）」（菅 博絵）、「犬飼遺跡第 2・3 次」（桐井理揮）、「上野遺跡第 3 次（面 将道）」、「丹波丸山古墳群第 4 次」（名村威彦）、「稚児野遺跡第 2 次」（黒坪一樹）、「稻泉遺跡第 1 次（桐井理揮）」／長岡京跡調査だより 133（土橋 誠）／センターの動向）
  - ・『研究紀要洛史』第 12 号 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 令和元年 10 月（「特集「京都の土器再考－土師器編－」に寄せて」（柏田由香）／「京都・土師器皿研究の歩み」（赤松佳奈）／「土師器再考」（平尾政幸）／「北山七重大塔の所在について（下）」（東 洋一）／「洛西竹林公園石仏調査レポート 2」（丸川義弘））
  - ・『都城』31 公益財団法人向日市埋蔵文化財センター 令和元年 12 月「平成 30（2018）年度の組織及び事業概要／調査した遺跡の概要」
  - ・『長岡市埋蔵文化財センターレポート 平成 30 年度』長岡市埋蔵文化財センター 令和 2 年 3 月「埋蔵文化財センターの概要と事業報告／右京第 1170 次（7ANKKM-2 地区）調査概要／右京第 1171 次（7ANQKS-3 地区）調査概報／右京第 1177 次（7ANKJS-4 地区）調査概報／右京第 1178 次（7ANKAN-3 地区）調査概報／右京第 1179 次（7ANKYD-4 地区）調査概報／右京第 1180 次（7ANOOD-16 地区）調査略報／右京第 1185 次（7ANMKH-1 地区）調査概報／右京第 1186 次（ANNYR-4 地区）調査概報／右京第 1187 次（7ANHTC-4 地区）調査概報／奥海印寺遺跡第 20 次（2LOPMK-3 地区）発掘調査概報／奥海印寺遺跡第 26 次（2LOPN-2 地区）調査概報」
  - ・『長岡市埋蔵文化財発掘調査資料選』11 公益財団法人長岡市埋蔵文化財センター 令和 2 年 3 月
  - ・『京都大学構内遺跡発掘調査研究年報』2018 京都大学大学院文学研究科付属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門 令和元年 2 月「道路遺構の考古学的検討に向けて－京都大学構内遺跡での検出事例から－」（伊藤淳史）
  - ・『摂関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究－丹波・篠窯跡群を主な対象に－』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室 令和 2 年 3 月（高橋照彦ほか）
  - ・『大阪歴史博物館研究紀要』第 18 号 大阪歴史博物館 令和 2 年 3 月「大阪歴史博物館所蔵の今熊野亀塚瓦経関係資料－山根徳太郎旧蔵の拓本と瓦経片－（前編）」（加藤俊吾）

【図録等】

- ・『京都市文化財ブックス』第 34 集 京都市文化市民局 令和 2 年 3 月「京の礎 2－文化財保護の現場から－」
- ・『動乱の世から太平の世へ 戦国を乗り越えた人々のくらし』 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター令和 2 年 12 月

付表 16 令和元（平成 31）年度埋蔵文化財発掘調査届出・報告一覧

(92 条に基づく届出)

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
1	長岡京跡	向日市上植野町切ノ口 12 - 10 ほか	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	梅本康広・松崎俊郎	平成 31 年 3 月 11 日～平成 31 年 3 月 22 日
2	犬飼遺跡・金生寺遺跡	亀岡市曾我部町犬飼、法貴	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	村田和弘・引原茂治・桐井理揮・荒木瀬奈・山本梓	平成 31 年 4 月 22 日～令和元年 9 月 30 日
3	長岡京跡	長岡京市今里南平尾 17 番地ほか	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	原秀樹	平成 31 年 4 月 2 日～平成 31 年 4 月 22 日
4	海印寺跡・奥海印寺遺跡	長岡京市奥海印寺大見坊 2 - 1・24	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	中島皆夫	平成 31 年 4 月 3 日～平成 31 年 4 月 13 日
5	平安京跡・烏丸町遺跡	京都市南区東九条室町 57	株式会社イビソク	熊谷洋一	平成 31 年 1 月 15 日～平成 31 年 4 月 30 日
6	平安京跡	京都市下京区四条通油小路東入傘鉾町 50 ほか	国際文化財株式会社	長林 大	平成 31 年 3 月 25 日～令和元年 10 月 31 日
7	平安京跡	京都市北区大將軍東鷹司町 109 番 1、110 番	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	岡田麻衣子	平成 31 年 4 月 1 日～令和元年 5 月 10 日
8	正覚寺跡	京都市伏見区深草正覚町 7 - 3、32 - 8 の各一部	株式会社地域文化財研究所	市田英介・松田直子	平成 31 年 3 月 27 日～令和元年 6 月 14 日
9	北野廢寺跡・北野遺跡	京都市北区下白梅町 60 - 1 から 4	関西文化財調査会	小田切淳	平成 31 年 3 月 29 日～平成 31 年 4 月 30 日
10	水主神社東遺跡・小樋尻遺跡	城陽市寺田大畦・島垣内、富田久保田・小樋尻	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	高野陽子・小泉裕司・竹原一彦・福山博章	平成 31 年 4 月 1 日～令和 2 年 2 月 28 日
11	犬飼遺跡	亀岡市曾我部町法貴中溝・綿打川	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	村田和弘・浅田洋輔	令和元年 5 月 7 日～令和元年 8 月 9 日
12	満願寺跡	舞鶴市万願寺地内	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	中川和哉・竹村亮仁	令和元年 5 月 20 日～令和元年 9 月 27 日
13	長岡京跡・伊賀寺遺跡	長岡京市下海印寺樽井 4 ほか 12 筆	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	山下研	令和元年 5 月 7 日～令和元年 6 月 17 日
14	長岡京跡	長岡京市長岡二丁目地内	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	福家恭	平成 31 年 4 月 23 日～令和元年 6 月 30 日
15	平安京跡	京都市南区猪熊通八条上る戒光寺町 185、西九条戒光寺町 13	株式会社文化財サービス	大西晃靖	令和元年 5 月 7 日～令和元年 6 月 28 日
16	平安京跡・妙満寺の構え跡	京都市下京区四条通堀川西入唐津屋町 523 番地ほか 3 筆	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	小檜山一良・松吉祐希	令和元年 5 月 7 日～令和元年 7 月 12 日

## 平成 31 年、令和元・2 年における埋蔵文化財の発掘

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
17	平安京跡・西ノ京遺跡	京都市中京区西ノ京南上合町 46 番地ほか	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	近藤章子	令和元年 5 月 14 日～令和元年 6 月 14 日
18	相国寺旧境内・公家町遺跡	京都市上京区今出川通烏丸東入玄武町 601 番地	学校法人同志社理事長	若林邦彦・浜中邦弘・佐伯公子・森川美香	令和元年 7 月 1 日～令和 2 年 3 月 20 日
19	平安京跡・東本願寺前古墓群	京都市下京区木津屋橋通新町西入東塙小路町 601 番地ほか	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	鈴木康高	令和元年 6 月 3 日～令和元年 9 月 13 日
20	久々相遺跡	向日市寺戸町瓜生 22 番 1 ほか	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	中塚 良	令和元年 6 月 3 日～令和元年 6 月 28 日
21	長岡京跡・中野遺跡	向日市寺戸町中野 2 番 1・45、3 番 2・4	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	松崎俊郎	令和元年 6 月 5 日～令和元年 6 月 25 日
22	渋川遺跡	向日市寺戸町東田中瀬 11・2、12・2・4・5	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	田原葉月	令和元年 6 月 17 日～令和元年 7 月 5 日
23	長岡京跡・鶏冠井遺跡	向日市鶏冠井町石橋 21 番	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	中島信親	令和元年 5 月 20 日～令和元年 6 月 7 日
24	渋川遺跡	向日市寺戸町東田中瀬 11・2、12・2・4・5	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	田原葉月	令和元年 4 月 18 日～令和元年 4 月 25 日
25	上ノ山古墳	京都市西京区松尾山上ノ山町 10・1、山田葉室町 13・9	龍谷大学文学部考古学研究室・実習室	國下多美樹・木許 守	令和元年 8 月 18 日～令和元年 9 月 6 日
26	浜詰遺跡	京丹後市網野町浜詰小字栗山 677 番 20	同志社大学考古学研究室 水ノ江和同	水ノ江和同・津村宏臣	令和元年 8 月 16 日～令和元年 9 月 2 日
27	平安京跡・烏丸綾小路遺跡	京都市下京区醒ヶ井通五条下る泉水町 134 番地 2・5・6 ほか	株式会社文化財サービス代表取締役	辰巳陽一ほか 1 名	令和元年 7 月 8 日～令和元年 9 月 30 日
28	長岡京跡・乙訓寺・今里遺跡	長岡京市今里四丁目 5・10	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	山下 研	令和元年 7 月 22 日～令和元年 8 月 23 日
29	上京遺跡・相国寺旧境内	京都市上京区室町通寺之内上る二丁目下柳原北半町 207	古代文化調査会	水谷明子	令和元年 7 月 22 日～令和元年 9 月 14 日
30	平安京跡	京都市中京区西ノ京月輪町 33・1	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	岡田麻衣子	令和元年 7 月 10 日～令和元年 9 月 6 日
31	平安京跡・烏丸綾小路遺跡	京都市下京区室町通高辻下る高辻町 580 ほか	古代文化調査会	小松武彦	令和元年 7 月 16 日～令和元年 10 月 31 日
32	中臣遺跡	京都市山科区勧修寺東栗栖野 77・5・6、柳辻番所ヶ口町 31・1、32・2	有限会社京都平安文化財取締役	中村吉孝	令和元年 7 月 29 日～令和元年 8 月 31 日
33	物集女城跡・中海道遺跡	向日市物集女町中条 9 番地、9 番 3 の一部	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	中島信親・松崎俊郎	令和元年 7 月 29 日～令和元年 9 月 13 日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
34	平安京跡・公家町遺跡	京都市上京区京都御苑	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	近藤章子・田中利津子	令和元年7月29日～令和元年8月2日
35	丹波丸山古墳群・平ヶ岡古墳群	京丹後市峰山町丹波大糸ほか	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	中川和哉・竹原一彦	令和元年8月5日～令和元年10月30日
36	長岡京跡・今里遺跡	長岡京市今里二丁目121番3ほか	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	福家 恭	令和元年8月9日～令和元年9月17日
37	稚児野遺跡	福知山市夜久野町井田稚児野	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	村田和弘・黒坪一樹	令和元年8月26日～令和元年10月31日
38	上野遺跡	京丹後市丹後町上野地内	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	中川和哉・面将道	令和元年8月26日～令和元年12月25日
39	上京遺跡	京都市上京区塔之段通今出川上る2丁目上塔之段町480-1	一般社団法人歴史文化研究所代表理事	小泉信吾	令和元年8月6日～令和元年9月10日
40	長岡京跡	向日市寺戸町中野20番2	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	田原葉月	令和元年8月19日～令和元年9月20日
41	平安京跡	京都市右京区西院春日町3番地の1	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	松吉祐希・岡田麻衣子	令和元年6月17日～令和元年8月23日
42	平安京跡	京都市右京区西院溝崎町21番地	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	西田倫子	令和元年8月5日～令和元年9月20日
43	長岡京跡・今里遺跡・乙訓寺	長岡京市今里三丁目地内	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	福家 恭	令和元年9月25日～令和元年11月8日
44	土山遺跡	長岡京市金ヶ原御所ノ内1-1ほか	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	原 秀樹	令和元年9月17日～令和元年10月1日
45	長岡京跡・雲宮遺跡	長岡京市神足稻葉1番2及び焼町1番3	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	山下 研	令和元年10月1日～令和2年4月27日
46	稻泉遺跡	福知山市夜久野町今西中から井田地内	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	村田和弘・桐井理揮	令和元年10月16日～令和元年12月13日
47	平安京跡・鳥丸御池遺跡	京都市中京区富小路通御池上る守山町165-1	株式会社文化財サービス代表取締役	大西晃靖	令和元年9月2日～令和元年12月28日
48	川向遺跡・川向南古墳群	京丹後市丹後町成願寺地内	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	中川和哉・竹原一彦	令和元年10月21日～令和2年1月17日
49	長岡京跡・伊賀寺遺跡	長岡京市下海印寺下内田、岸ノ下の各一部	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	岩崎 誠・原秀樹・山本輝雄	令和元年10月1日～令和2年1月28日
50	白河街区跡・吉田上大路町遺跡	京都市左京区吉田近衛町26番地53ほか	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	近藤章子・岡田麻衣子・松永修平	令和元年9月4日～令和2年1月17日
51	平安京跡	京都市中京区西ノ京中保町81-1	古代文化調査会	上村憲章	令和元年10月15日～令和元年12月6日
52	茶壺蔵跡（創建）	宇治市宇治里尻	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	中川和哉・岩松 保	令和元年11月1日～令和2年1月31日

## 平成 31 年、令和元・2 年における埋蔵文化財の発掘

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
53	犬飼遺跡・金生寺遺跡・春日部遺跡・法貴峠古墳群	亀岡市曾我部町犬飼、中、春日部	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	村田和弘・引原茂治・桐井理揮・荒木瀬奈・山本梓・上井佐妃	令和元年 11 月 5 日～令和 2 年 2 月 27 日
54	植物園北遺跡	京都市北区上賀茂松本町 96-1	株式会社地域文化財研究所	福永信雄・影山美智与・江崎周二郎	令和元年 10 月 9 日～令和元年 11 月 30 日
55	平安京跡・烏丸丸太町遺跡	京都市中京区両替町通夷川上る松竹町 120 番、烏丸通夷川上る少将井町 231 ほか	合同会社アルケス	持田 透	令和元年 11 月 1 日～令和 2 年 4 月 17 日
56	平安京跡	京都市中京区岩上通錦小路下る松浦町 848 番 2 ほか	関西文化財調査会	小田桐淳	令和元年 10 月 21 日～令和元年 11 月 30 日
57	長岡京跡・開田遺跡・開田古墳群	長岡京市開田二丁目 12 番 12 号	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	中島皆夫	令和元年 11 月 5 日～令和元年 12 月 24 日
58	長岡京跡・近世向日町遺跡	向日市寺戸町東ノ段 1-1	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	中島信親	令和元年 10 月 10 日～令和元年 10 月 21 日
59	長岡京跡・森本遺跡・岸ノ下遺跡・辰巳遺跡	向日市寺戸町西野辺 25	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	松崎俊郎	令和元年 10 月 15 日～令和元年 10 月 23 日
60	長岡京跡・鶏冠井遺跡	向日市鶏冠井町十相 37-1	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	梅本康広	令和元年 7 月 9 日～令和元年 7 月 30 日
61	長岡京跡・鶏冠井遺跡	向日市鶏冠井町十相 34-1、35-1	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	梅本康弘	令和元年 7 月 9 日～令和元年 7 月 30 日
62	平安京跡・公家町遺跡	京都市上京区京都御苑	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	小檜山一良	令和元年 11 月 5 日～令和 2 年 1 月 31 日
63	平安京跡	京都市右京区山ノ内赤山町 1 番 7、2 番、2 番 3、4 番 2	有限会社京都平安文化財	中村吉孝	
64	平安京跡・壬生遺跡	京都市中京区西ノ京小倉町 101、102、103、105	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	西田倫子・松吉祐希・鈴木康高	令和元年 12 月 1 日～令和 2 年 8 月 31 日
65	平安京跡	京都市下京区松原通堺町東入る杉屋町 288 番 1 から 3、289 番 1・2、柳馬場通松原下る忠庵町 296 番、298 番	株式会社四門京都支店	辻 広志	令和元年 11 月 11 日～令和 2 年 1 月 31 日
66	平安京跡	京都市下京区梅小路高畑町 1-2	安西工業株式会社	濱口芳郎	令和元年 11 月下旬～令和 2 年 2 月末日
67	長岡京跡・南垣内遺跡	向日市寺戸町南垣内 4 番 5	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	田原葉月	令和元年 11 月 18 日～令和元年 11 月 29 日
68	長岡京跡・鶏冠井遺跡	向日市鶏冠井町馬司 2-1、3-1	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	中島信親	令和元年 11 月 25 日～令和元年 11 月 29 日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
69	菖蒲谷口遺跡	舞鶴市万願寺地先	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	村田和弘・黒坪一樹	令和元年12月11日～令和2年1月31日
70	長岡京跡	向日市上植野町地後14番地	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	中塚 良	令和元年12月2日～令和元年12月13日
71	金原寺跡	長岡京市金ヶ原芝35ほか	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	福家 恭	令和元年12月9日～令和元年12月20日
72	長岡京跡・鷄冠井遺跡	向日市鷄冠井町十相34-1、35-1	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	梅本康広	令和元年12月9日～令和元年12月26日
73	水主神社東遺跡	城陽市寺田金尾	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	高野陽子・小泉裕司・近藤匠	令和元年11月18日～令和2年1月30日
74	水主神社東遺跡・下水主遺跡	城陽市寺田金尾	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	高野陽子・石井清司・加藤雅士	令和元年11月18日～令和2年2月28日
75	伏見城跡	京都市伏見区桃山町伊庭地内	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	上村和直・津々池惣一	平成31年4月22日～令和元年11月29日
76	岩倉忠在地遺跡	京都市左京区岩倉大鷺町89	同志社大学歴史資料館	若林邦彦・浜中邦弘	令和元年12月16日～令和2年2月15日
77	相国寺旧境内・上御靈遺跡	京都市上京区相国寺門前町709番地	株式会社文化財サービス	辰巳陽一・辻純一・田邊貴教・望月麻佑	令和元年11月27日～令和2年5月29日
78	長岡京跡・開田遺跡	長岡京市神足2丁目9-20ほか	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	中川和哉・面将道	令和元年1月7日～令和元年2月27日
79	長岡京跡	長岡京市花山一丁目11-1、15-1・2	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	福家 恭	令和2年1月7日～令和2年2月5日
80	音羽・五条坂窯跡・道仙窯	京都市東山区五条橋東四丁目448番地3ほか	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	岡田麻衣子	令和元年10月17日～令和元年12月27日
81	平安京跡	京都市中京区西ノ京壺ノ内町8-1	学校法人花園学園理事長	高橋克壽	令和元年10月18日～令和元年12月20日
82	平安京跡・二条城北遺跡	京都市上京区丸太町通黒門東入藁屋町536-71・85・86・87・93、536	古代文化調査会	小松武彦・水谷明子・梶川敏夫	令和2年1月14日～令和2年12月25日
83	平安京跡	京都市右京区花園木辻北町1-1(一部)ほか	学校法人花園学園	高橋克壽	令和2年2月1日～令和2年4月30日
84	室町殿跡	京都市上京区御所八幡町110-13・14・15	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	松永修平	令和2年1月27日～令和2年3月19日
85	長岡京跡	向日市森本町佃13、15、15-7、22	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	中島信親	令和2年1月21日～令和2年2月7日

## 平成31年、令和元・2年における埋蔵文化財の発掘

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
86	長岡京跡・伊賀寺遺跡	長岡京市下海印寺下内田、岸ノ下、伊賀寺の各一部	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	岩崎 誠・山本輝雄	令和2年2月12日～令和2年3月22日
87	長岡京跡・下海印寺遺跡	長岡京市奥海印寺岡本7、8、9-1	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	中島皆夫	令和2年2月4日～令和2年2月28日
88	長岡京跡・開田遺跡・開田古墳群	長岡京市開田一丁目1番1号	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	福家 恭	令和2年2月1日～令和2年8月31日
89	長岡京跡	向日市上植野町切ノ口15番13ほか9筆	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	田原葉月	令和2年1月27日～令和2年2月14日
90	長岡京跡	向日市寺戸町西野17番1の一部	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	中塚 良	令和2年2月3日～令和2年2月21日
91	法住寺殿跡	京都市東山区東大路通り七条下る東瓦町	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	木下保明	令和2年1月20日～令和2年2月14日
92	平安京跡	京都市下京区富小路通五条上る本神明町407番地ほか	関西文化財調査会	小田桐淳	令和2年3月2日～令和2年5月30日
93	富ノ森城跡	京都市伏見区横大路六反畝地内（京都市伏見区西部第五地区）	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	中谷正和・南孝雄・伊藤潔	令和2年1月17日～令和2年6月17日
94	平安京跡	京都市中京区新シ町通御池上る織物屋町219番ほか	株式会社イビソク	熊谷洋一	令和2年2月10日～令和2年4月17日
95	長岡京跡・下海印寺遺跡	長岡京市奥海印寺森ノ下28番の一部ほか	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	原 秀樹	令和2年2月25日～令和2年3月16日
96	長岡京跡・宝菩提院廃寺	向日市寺戸町西野36番1	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	梅本康広	令和2年3月9日～令和2年3月19日
97	長岡京跡・谷田瓦窯群	長岡京市天神三丁目201ほか	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	原 秀樹	令和2年3月16日～令和2年3月30日
98	長岡京跡・森本遺跡・岸ノ下遺跡	向日市寺戸町岸ノ下13番1、14番1	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター	田原葉月	令和2年3月5日～令和2年4月28日

## (99条に基づく報告)

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
1	上津屋遺跡	八幡市上津屋浜垣内地内	八幡市教育委員会	高橋祐太	平成31年3月14日
2	今里遺跡	八幡市下奈良下三床地内	八幡市教育委員会	高橋祐太	平成31年3月18日～平成31年3月19日
3	平安京跡	京都市右京区太秦安井水戸田町5番4	京都市文化市民局	馬瀬智光	平成31年3月22日
4	平安京跡	京都市右京区西院春日町3番地の1（西院小学校）	京都市文化市民局	馬瀬智光	平成31年4月1日～平成31年4月2日
5	平安京跡	京都市中京区堀川通三条下る橋浦町223、226ほか	京都市文化市民局	奥井智子	平成31年4月8日
6	平安京跡・烏丸綾小路遺跡	京都市下京区室町通高辻下る高辻町580	京都市文化市民局	新田和央	平成31年2月12日～平成31年3月14日
7	糠塚城跡	宇治田原町大字立川小字南垣内21番地ほか	宇治田原町教育委員会	下岡浩喜・飯田謙吾・村田真二	平成31年3月11日～平成31年3月20日
8	福西古墳群	京都市西京区大枝北福西町4-3	京都市文化市民局	馬瀬智光	平成31年4月4日
9	平安宮跡	京都市上京区日暮通丸太町上る西入西院町922番地	京都市文化市民局	馬瀬智光	平成31年4月5日
10	大風呂南墳墓群（3～8号墳）	与謝野町字岩滝1421番地ほか	与謝野町教育委員会	白数真也	平成31年4月15日～令和元年6月30日
11	途中ヶ丘遺跡	京丹後市峰山町長岡1727番地、1769-1番地	京丹後市教育委員会	岡林峰夫・藤田智子	平成31年4月15日～平成31年4月26日
12	宮津城跡	宮津市字鶴賀2161番地の20	宮津市教育委員会	河森一浩	平成31年4月23日～平成31年4月26日
13	平安京跡・烏丸綾小路遺跡	京都市下京区烏丸通松原下る吉水町456ほか	京都市文化市民局	奥井智子	平成31年4月10日
14	平安京跡・西ノ京遺跡	京都市中京区西ノ京南上合町46ほか14筆	京都市文化市民局	奥井智子	平成31年4月12日
15	宇治市街遺跡（川西地区）	宇治市宇治壱番19番2	宇治市教育委員会	荒川史・大野壽子・岡紗佑里・上阪航・松村真・久後千穂	平成31年4月22日～令和元年7月31日
16	平安京跡	京都市南区猪熊通八条上る戒光寺町185、西九条戒光寺町13	京都市文化市民局	熊井亮介	平成31年3月27日
17	長岡京跡	大山崎町字円明寺小字横林16-1、18の各一部	大山崎町教育委員会	角早季子	令和元年5月7日
18	平安京跡・平安宮跡	京都市中京区西ノ京南両町116	京都市文化市民局	新田和央	平成31年4月15日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
19	平安京跡	京都市右京区花園木辻北町 1-1・6、36 の各一部、花園妙心寺町 1-5・6、1-7 の一部、59-2、62-2・4、68 の一部	京都市文化市民局	新田和央	平成 31 年 4 月 16 日
20	平安宮跡・聚楽遺跡	京都市上京区千本通出水十四軒町 431 番 30、413 番 31 の一部	京都市文化市民局	奥井智子	平成 31 年 4 月 22 日
21	平安宮跡	京都市中京区聚楽廻南町 41-6、37-4	京都市文化市民局	奥井智子	平成 31 年 4 月 23 日
22	平安京跡	京都市下京区三ノ宮町通七条上る下三之宮町 301、303、304、304-1	京都市文化市民局	黒須亜希子	平成 31 年 4 月 25 日
23	平安京跡・烏丸町遺跡・御土居跡	京都市南区西九条藏王町 31 ほか	京都市文化市民局	新田和央	平成 31 年 4 月 17 日
24	平安京跡・烏丸丸太町遺跡	京都市中京区烏丸通夷川上る少将井町 225・227	京都市文化市民局	新田和央	平成 31 年 4 月 18 日
25	上久世遺跡	京都市南区久世上久世町 253 番地 3	京都市文化市民局	馬瀬智光	平成 31 年 4 月 24 日
26	白河北殿跡・白河街区跡	京都市左京区丸太町通川端東入東丸太町 29 番地	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年 5 月 7 日
27	平安京跡	京都市上京区上ノ下立壳通御前西入大宮町 478 番、480 番	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年 5 月 8 日
28	平安宮跡	京都市中京区西ノ京右馬寮町 12-3、13-1・14・15、16-1・5・6・9	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年 5 月 8 日
29	本庄遺跡	福知山市字新庄小字本庄畠 672-2、687-3、688、672-2 の一部	福知山市	鷺田紀子	令和元年 5 月 8 日～令和元年 5 月 31 日
30	福知山城跡	福知山市字内記 5 番地 ほか	福知山市	松本学博	令和元年 5 月 20 日～令和元年 7 月 31 日
31	美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡	八幡市美濃山古寺地内	八幡市教育委員会	太田喬士	平成 31 年 2 月 12 日～令和元年 5 月 31 日
32	吐師遺跡	木津川市吐師西垣内 48 番 1 ほか	木津川市教育委員会	大坪州一郎	令和元年 6 月 4 日～令和元年 6 月 29 日
33	女城跡	京丹後市弥栄町須川 1810 番地 2	京丹後市教育委員会	新谷勝行・奥勇介	令和元年 5 月 17 日
34	太田古墳群	京丹後市弥栄町和田野小字太田 110 番地	京丹後市教育委員会	岡林峰夫	令和元年 5 月 10 日～令和元年 5 月 31 日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
35	平安京跡・唐橋遺跡	京都市南区唐橋大宮尻町22	京都市文化市民局	鈴木久史	平成30年12月10日～平成30年12月14日
36	平安京跡・烏丸綾小路遺跡	京都市下京区醒ヶ井通五条下る泉水町134-2・5～15・32	京都市文化市民局	新田和央	平成31年4月19日
37	北山蓮台寺境内	京都市北区紫野西舟岡町2番地	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年5月16日
38	平安京跡	京都市中京区車屋町通御池上る塗師屋町344番ほか	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年5月15日
39	平安京跡・烏丸御池遺跡	京都市中京区六角烏丸西入骨屋町149番、151番、154番7・8	京都市文化市民局	熊井亮介	平成31年3月28日
40	平安京跡	京都市上京区室町通出水上る近衛町32-2、37、37-5・6、同区下長者町通烏丸西入鷹司町18、18-3	京都市文化市民局	熊井亮介	平成31年4月2日～令和元年5月17日
41	法住寺殿跡	京都市東山区東大路通七条下る東瓦町964	京都市文化市民局	黒須亜希子	令和元年5月29日
42	小倉町別当町遺跡	京都市左京区北白川上別当37番地	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年5月13日
43	大徳寺旧境内	京都市北区紫野西野町25-1ほか	京都市文化市民局	黒須亜希子	令和元年5月27日
44	平安京跡	京都市下京区五条通寺町西入御影堂町834番1、同区河原町通五条上る安土町612番	京都市文化市民局	馬瀬智光	平成31年2月25日～令和元年5月22日
45	平安京跡・烏丸御池遺跡	京都市中京区富小路通御池上る守山町165-1	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年5月23日
46	上京遺跡・相国寺旧境内	京都市上京区室町通寺之内上る二丁目下柳原北半町207ほか	京都市文化市民局	黒須亜希子	平成31年2月8日～令和元年5月30日
47	平安京跡	京都市中京区西ノ京月輪町33-1	京都市文化市民局	黒須亜希子	令和元年5月31日
48	山科本願寺殿跡	京都市山科区音羽伊勢宿町32-106	京都市文化市民局	黒須亜希子	平成31年4月8日～平成31年4月17日
49	平安京跡・烏丸御池遺跡	京都市中京区六角通烏丸西入骨屋町149、151、154-7・8	京都市文化市民局	新田和央	令和元年5月27日～令和元年6月7日
50	久津川車塚古墳	城陽市平川鍛冶塚11番地31	城陽市教育委員会	浅井猛宏・廣富亮太	令和元年6月5日～令和元年6月28日
51	馬場遺跡	八幡市八幡馬場100番1の一部、100番5ほか	八幡市教育委員会教育委員会	太田喬士	令和元年5月27日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
52	倉梯山古墳群	宮津市字須津小字倉梯山 23 番地の 1	宮津市教育委員会	河森一浩	令和元年 6 月 3 日～令和元年 6 月 28 日
53	余部遺跡	亀岡市余部町塞又 5、8、12～13、24	亀岡市教育委員会	土井孝則・飛鳥井拓	令和元年 5 月 28 日～令和 2 年 2 月 28 日
54	平安京跡	京都市南区唐橋高田町 36 番 2・3	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年 6 月 5 日～令和元年 6 月 6 日
55	太秦馬塚町遺跡	京都市右京区太秦馬塚町 3 番、3 番 2・4・5・7	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年 6 月 10 日
56	平安京跡・西京極遺跡	京都市右京区西院安塚町 60、61、62	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年 6 月 10 日
57	平安京跡・朱雀大路跡	京都市下京区朱雀内畑町 41 ほか	京都市文化市民局	新田和央	令和元年 6 月 17 日～令和元年 6 月 18 日
58	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	京都市伏見区竹田真幡木町 151 番	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年 6 月 14 日
59	長岡京跡・水垂遺跡	京都市伏見区淀水垂町	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年 6 月 11 日～令和元年 6 月 12 日
60	法界寺旧境内	京都市伏見区日野畠出町 1-1	京都市文化市民局	新田和央	令和元年 6 月 21 日
61	大徳寺旧境内	京都市北区紫野大徳寺町 49-4 ほか	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年 6 月 13 日
62	長岡京跡	京都市伏見区久我西出町 1 番 6	京都市文化市民局	熊井亮介	令和元年 6 月 24 日～令和元年 6 月 25 日
63	植物園北遺跡	京都市北区上賀茂桜井町 27 番 1	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年 7 月 4 日
64	山科本願寺南殿跡	京都市山科区音羽伊勢宿町 35-52	京都市文化市民局	新田和央	令和元年 6 月 17 日～令和元年 7 月 5 日
65	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	京都市伏見区竹田西小屋ノ内町 34、35、36、37	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年 7 月 1 日
66	長岡京跡	京都市伏見区羽束師菱川町 402、403	京都市文化市民局	新田和央	令和元年 7 月 9 日
67	上京遺跡	京都市上京区塔之段通今出川上る 2 丁目上塔之段町 480-1	京都市文化市民局	新田和央	令和元年 7 月 8 日
68	平安京跡	京都市下京区東之町ほか地内	京都市文化市民局	新田和央	令和元年 7 月 12 日
69	平安京跡	京都市右京区西院溝崎町 12-1 ほか	京都市文化市民局	熊井亮介	令和元年 6 月 28 日
70	芝ヶ原遺跡	城陽市久世芝ヶ原 83 番、84 番、85 番	城陽市教育委員会	浅井猛宏・廣富亮太	令和元年 6 月 28 日～令和元年 7 月 12 日
71	長岡京跡・雲宮遺跡	長岡京市神足七ノ坪 10 の一部	長岡京市教育委員会	大高義寛	令和元年 7 月 12 日
72	二子塚古墳・寺界道遺跡	宇治市五ヶ庄大林 35 番 24	宇治市教育委員会	荒川 史・上阪 航・久後千穂	令和元年 7 月 18 日～令和元年 7 月 19 日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
73	日吉ヶ丘遺跡	与謝野町字明石 2120番地ほか	与謝野町教育委員会	白数真也	令和元年7月22日～令和元年9月30日
74	久津川車塚古墳	城陽市平川横道82番地9	城陽市教育委員会	浅井猛宏・廣富亮太	令和元年8月16日～令和元年8月30日
75	中臣遺跡	京都市山科区勧修寺西金ヶ崎 250、251	京都市文化市民局	赤松佳奈	令和元年6月17日～令和元年7月12日
76	平安京跡	京都市中京区両替町通夷川上る松竹町120番	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年7月16日
77	平安京跡	京都市下京区歡喜寺15-5ほか	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年7月18日
78	中臣遺跡	京都市山科区柳辻番所ヶ口町31-1、32-2、勧修寺東来栖野町77-5・6	京都市文化市民局	熊井亮介	平成31年3月25日～平成31年3月26日
79	六波羅政庁跡・方広寺跡	京都市東山区妙法院前側町431	京都市文化市民局	黒須亜希子	令和元年7月25日
80	岩倉中所在地遺跡	京都市左京区岩倉村松町72、76-1	京都市文化市民局	黒須亜希子	令和元年7月26日
81	常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡	京都市右京区常盤村ノ内町1-18ほか	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年7月24日
82	仁和寺院家跡	京都市右京区常盤古御所町2番の一部ほか17筆	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年7月29日
83	植物園北遺跡	京都市北区上賀茂松本町96-1	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年8月1日
84	革嶋館跡	京都市西京区川島玉頭町57-1・2・4・6、59、59-4	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年8月2日
85	岩倉中所在地遺跡	京都市左京区岩倉中所在地町8-1・2、9、10、11-1・2	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年8月9日
86	深草遺跡	京都市伏見区深草緑森町31-1	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年8月13日
87	平安京跡	京都市右京区山ノ内赤山町1番7、2番、2番3、4番2	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年7月3日
88	富ノ森城跡	京都市伏見区横大路六反畠地内	京都市文化市民局	新田和央	令和元年8月5日～令和元年8月7日
89	平安京跡	京都市右京区西京極豆田町(東大丸公園)	京都市文化市民局	新田和央	令和元年8月15日
90	伏見城跡	京都市伏見区福島太夫北町52(呉竹総合支援学校)	京都市文化市民局	鈴木久史	令和元年7月30日
91	木津川河床遺跡	八幡市八幡吉野39番	八幡市教育委員会	太田喬士	令和元年8月2日～令和元年8月5日
92	平安京跡・西京極遺跡	京都市右京区西院安塚町84番地	京都市文化市民局	別府正広	令和元年8月14日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
93	山崎津跡	大山崎町字大山崎小字西島・柳島	大山崎町教育委員会	角早季子	令和元年9月24日～令和元年9月25日
94	途中ヶ丘遺跡	京丹後市峰山町長岡804番地ほか	京丹後市教育委員会	岡林峰夫	令和元年9月20日～令和元年9月30日
95	平安京跡・烏丸丸太町遺跡	京都市中京区烏丸通夷川上る少将井町231ほか	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年9月3日
96	平安京跡	京都市南区吉祥院前河原町18番1・2、19番、20番	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年9月5日
97	北野廃寺・北野遺跡	京都市北区北野下白梅町ほか地内(鉄道敷地内)	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年9月2日
98	平安京跡	京都市中京区岩上通錦小路下る松浦町848番2・3、854番	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年9月4日
99	上鳥羽遺跡	京都市南区上鳥羽第105Aブロック鴨田1-2ほか	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年8月8日～令和元年9月18日
100	法金剛院境内	京都市右京区花園寺ノ内町34-2の一部、36-1・3、38-1、39	京都市文化市民局	熊井亮介	令和元年9月9日
101	平安京跡・新在家構え跡・公家町遺跡	京都市上京区京都御苑438の1	京都市文化市民局	熊井亮介	令和元年9月10日
102	平安京跡	京都市下京区間之町六条下る夷之町77	京都市文化市民局	熊井亮介	令和元年9月12日
103	淀城跡	京都市伏見区淀下津町140番1・4・5・6	京都市文化市民局	熊井亮介	令和元年9月13日
104	伏見城跡・桃山古墳群	京都市伏見区桃山町永井久太郎55番1・2	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年7月22日～令和元年8月14日
105	相国寺旧境内・上御靈遺跡	京都市上京区相国寺門前町709番地	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年8月26日～令和元年9月19日
106	平安京跡	京都市下京区高畠町1-2	京都市文化市民局	黒須亜希子	令和元年9月25日
107	大徳寺旧境内	京都市北区紫野大徳寺町49-4ほか	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年9月17日
108	白河街区跡・岡崎遺跡・得長寿院跡	京都市左京区岡崎徳成町2番、3番の各一部	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年10月1日
109	中臣遺跡	京都市山科区勧修寺東金ヶ崎町58～62、81、82	京都市文化市民局	黒須亜希子	令和元年9月26日～令和元年9月27日
110	平安宮跡・聚楽遺跡・平安京跡	京都市上京区小山町908-15	京都市文化市民局	黒須亜希子	令和元年7月29日～令和元年8月24日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
111	女郎花遺跡	八幡市八幡女郎花 88 - 2、90 - 2	八幡市教育委員会	川崎文子	令和元年9月2日
112	上柏北遺跡	木津川市山城町上柏 宝本3番1ほか	木津川市教育委員会	大坪州一郎	令和元年9月12日～ 令和元年10月18日
113	木津遺跡	木津川市木津川端 10 - 1	木津川市教育委員会	永澤拓志	令和元年9月26日～ 令和元年10月18日
114	木津遺跡	木津川市木津池田 20 - 8の一部ほか	木津川市教育委員会	永澤拓志	令和元年9月26日～ 令和元年10月18日
115	女布遺跡	舞鶴市字女布地内	舞鶴市	松崎健太	令和元年10月15日～ 令和元年12月末
116	山家陣屋跡	綾部市広瀬町上ノ町 85番地ほか	綾部市教育委員会	三好博喜	令和元年9月24日～ 令和元年10月31日
117	鳥羽離宮跡・ 竹田城跡・鳥羽遺跡	京都市伏見区竹田中 内畠町18、19、20	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年9月30日
118	平安宮跡・聚 楽遺跡・平安 京跡	京都市上京区千本通 二条下る聚楽町 863 - 52	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年10月3日
119	六波羅政序跡・ 方広寺跡・法 住寺殿跡	京都市東山区妙法院 前側町431	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年7月25日～ 令和元年10月2日
120	指月城跡・伏 見城跡	京都市伏見区桃山町 泰長老官有地（桃山 東合同宿舎・泰長老 公園）	京都市文化市民局	新田和央	令和元年8月19日～ 令和元年10月4日
121	白河南殿跡・ 白河街区跡	京都市左京区川端よ り六筋東夷川上る秋 築町 251番1	京都市文化市民局	熊井亮介	令和元年10月7日
122	平安京跡	京都市下京区唐橋高 畠町1-2番地ほか	京都市文化市民局	熊井亮介	令和元年10月8日～ 令和元年10月9日
123	広沢古墳群	京都市右京区嵯峨広 沢池下町29	京都市文化市民局	熊井亮介	令和元年10月11日
124	平安京跡	京都市下京区松原通 堺町東入杉屋 288番 2ほか	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年9月11日
125	室町殿跡・上 京遺跡	京都市上京区御所八 幡市八幡町	京都市文化市民局	新田和央	令和元年10月23日
126	加悦岡遺跡	京丹後市久美浜町平 田89番地ほか、三分 10番地ほか	京丹後市教育委員会	岡林峰夫・奥 勇介	令和元年11月5日～ 令和元年11月15日
127	平安京跡・堂 ノ口町遺跡・ 御土居跡	京都市下京区朱雀堂 ノ口町20番地3の 一部ほか	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年10月29日
128	平安京跡	京都市南区八条源町 16番	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年10月31日
129	平安京跡	京都市中京区西ノ京 職司町67番4の一部	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年11月1日
130	長岡京跡・友 岡遺跡・鞆岡 廃寺	長岡京市友岡四丁目 3-1、4-1、5-1、7-1、8- 1の各一部	長岡市教育委員会	大高義寛	令和元年11月29日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
131	大山崎遺跡群	大山崎町字大山崎小字谷田 77 - 1	大山崎町教育委員会	原田早季子	令和元年 12 月 16 日～令和元年 12 月 20 日
132	平安京跡・烏丸町遺跡	京都市南区東九条烏丸町 5 番地	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年 11 月 18 日
133	栢ノ木遺跡・井手寺跡	井手町天字井手小字東高月、宮ノ前地内	井手町教育委員会	茨木敏仁	令和元年 11 月 13 日～令和 2 年 3 月 20 日
134	平安京跡・東本願寺前古墓群	京都市下京区不明門通七条下る東塩小路町 709、709 - 5・6・7・8、710 - 5、7035、東洞院通七条下る塩小路町 508 - 1、543	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年 11 月 20 日
135	平安京跡	京都市右京区山ノ内宮脇町 15 - 2 - 6	京都市文化市民局	新田和央	令和元年 11 月 14 日
136	平安宮跡・聚楽遺跡	京都市上京区下立壳通千本東入下る中務町 486 - 24 - 25 - 59	京都市文化市民局	黒須亜希子	令和元年 11 月 11 日
137	平安京跡・御土居跡	京都市下京区朱雀分木町 85、86、中堂寺南町 1 - 1、6 - 14	京都市文化市民局	黒須亜希子	令和元年 11 月 12 日
138	平安宮跡・鳳瑞遺跡	京都市中京区聚楽廻西町 90	京都市文化市民局	熊谷舞子	令和元年 11 月 11 日～令和元年 11 月 21 日
139	平安京跡・西寺跡・唐橋遺跡	京都市南区唐橋西寺町 11、25	京都市文化市民局	鈴木久史	令和元年 9 月 30 日～令和元年 11 月 15 日
140	乾谷大崩遺跡	精華町乾谷大崩	京都府教育委員会	岡田健吾	平成 31 年 4 月 8 日
141	中海道遺跡	向日市物集女町御所海道	京都府教育委員会	古川 匠・岡田健吾	令和元年 6 月 10 日
142	世尊寺跡	京都市上京区智恵光院通五辻上る紋屋町 330	京都府教育委員会	岡田健吾	令和元年 9 月 24 日～令和元年 10 月 29 日
143	備前遺跡	八幡市八幡南山 38 - 1、39 - 1、87、107 - 5	八幡市教育委員会	太田喬士・川崎文子	令和元年 11 月 11 日～令和 2 年 11 月 20 日
144	長岡京跡	京都市伏見区久我森ノ宮町 14 - 14 - 15 - 56	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年 10 月 17 日
145	伏見城跡	京都市伏見区片原町 293 - 4	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年 10 月 18 日
146	平安京跡	京都市下京区四条通麁屋町西入立壳東町 28 番 2	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年 11 月 28 日
147	平安京跡	京都市右京区西京極東大丸町 8 番地	京都市文化市民局	新田和央	令和元年 12 月 4 日
148	伏見城跡	京都市伏見区南部町地内	京都市文化市民局	新田和央	令和元年 12 月 2 日
149	平安京跡	京都市上京区天神通上ノ下立壳上る北町 572 - 1	京都市文化市民局	黒須亜希子	令和元年 12 月 13 日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
150	富ノ森城跡	京都市伏見区横大路 六反畠地内	京都市文化市民局	黒須亜希子	令和元年11月25日～ 令和元年11月27日
151	馬場遺跡	八幡市八幡馬場 104 番ほか3筆	八幡市教育委員会	八十島豊成・ 川崎文子・伊野近富	令和元年11月22日～ 令和2年1月20日
152	平安京跡	京都市右京区西院西 寿町 28	京都市文化市民局	黒須亜希子	令和元年12月25日
153	土師遺跡	福知山市字土師小字 植村 718番1・2	福知山市	松本学博	令和元年12月26日
154	上ヶ市遺跡	福知山市字川北ほか	福知山市	鷲田紀子	令和元年12月3日～ 令和2年1月31日
155	山科本願寺跡	京都市山科区西野山 階町 36-2、38-1、51	京都市文化市民局	奥井智子	令和元年12月9日～ 令和元年12月19日
156	前田遺跡	福知山市字前田小字 岩畠 1395番1	福知山市	松本学博	令和元年12月24日～ 令和2年1月31日
157	長岡京跡	京都市伏見区羽束 師古川町 588、589、 590、591、592、594 -1、600	京都市文化市民局	新田和央	令和元年12月23日
158	久津川車塚古 墳・横道遺跡	城陽市平川山道 12 番地1	城陽市教育委員会	浅井猛宏・廣富亮太	令和2年1月7日
159	下三栖遺跡	京都市伏見区横大路 下三栖辻堂町 21	京都市文化市民局	新田和央	令和元年10月25日
160	鳥羽離宮跡	京都市伏見区竹田西 桶ノ井町 10番1	京都市文化市民局	新田和央	令和元年12月27日
161	広隆寺旧境内・ 常盤仲之町遺 跡	京都市右京区太秦西 蜂岡町 9-1ほか	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年11月29日～ 令和元年12月6日
162	北白川追分町 遺跡	京都市左京区北白川 追分町 38-2・11	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年12月12日
163	平安京跡	京都市中京区新シ町 通御池上る織物屋町 219ほか	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年12月20日
164	下鳥羽遺跡	京都市伏見区竹田松 林町 56番の一部	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和元年12月24日
165	平安京跡・鳥 丸御池遺跡	京都市中京区高倉通 三条下る丸屋町 165 ほか	京都市文化市民局	赤松佳奈	平成30年11月21日～ 平成30年11月22日
166	上ノ段町遺跡・ 多藪町遺跡	京都市右京区太秦多 藪町 19番の一部、 19番13の一部、1 番6の一部	京都市文化市民局	新田和央	令和2年1月14日
167	法住寺殿跡	京都市東山区七条通 大和大路西入西之門 町 552番1ほか	京都市文化市民局	熊井亮介	平成31年2月20日～ 平成31年2月21日
168	山科本願寺南 殿跡	京都市山科区音羽伊 勢塾町 32-54・85	京都市文化市民局	熊井亮介	平成31年3月29日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
169	平安京跡	京都市下京区五条通 富小路西入塩竈町 391 - 1・2・3、 富小路通五条上ル本 神明町 405・407・ 408	京都市文化市民局	熊井亮介	令和元年 12 月 16 日～ 令和元年 12 月 17 日
170	伏見城跡	京都市伏見区桃井町 伊賀 2 - 3、3 - 1・ 6	京都市文化市民局	熊井亮介	令和元年 12 月 18 日～ 令和元年 12 月 19 日
171	平安京跡・本 能寺城跡	京都市中京区油小路 通六角下る六角油小 路町 343 番 1・2	京都市文化市民局	熊井亮介	令和 2 年 1 月 9 日
172	鳥羽離宮跡・ 鳥羽遺跡	京都市伏見区竹田真 幡木町 152 番地	京都市文化市民局	熊井亮介	令和 2 年 1 月 10 日
173	草木町遺跡	京都市右京区鳴滝中 海町 18 - 5・9・ 10・15・18	京都市文化市民局	新田和央	令和 2 年 1 月 15 日
174	立石遺跡	福知山市字私市小字 立石	福知山市	鷲田紀子	令和 2 年 1 月 27 日～ 令和 2 年 2 月 28 日
175	長岡京跡・宮 脇遺跡	大山崎町字下植野小 字梅ヶ畠 16 の一部、 17 の一部	大山崎町教育委員会	原田早季子	令和 2 年 2 月 17 日～ 令和 2 年 3 月 19 日
176	正明寺遺跡	福知山市篠尾 883 - 1、865 - 34	福知山市	松本学博	令和 2 年 1 月 16 日～ 令和 2 年 2 月 5 日
177	東堀遺跡	福知山市字堀小字道 場 2600 番 83	福知山市	松本学博	令和 2 年 1 月 14 日～ 令和 2 年 2 月 5 日
178	篠尾遺跡	福知山市字篠尾小字 家ノ下 468 番地 1 ほ か 13 筆	福知山市	松本学博	令和 2 年 1 月 9 日～ 令和 2 年 2 月 28 日
179	長岡京跡・神 足遺跡・近世 勝龍寺城跡	長岡京市東神足二丁 目 501 番	長岡京市教育委員会	大高義寛	令和 2 年 2 月 6 日
180	浜詰遺跡	京丹後市網野町木津 川市木津 247 番地	京丹後市教育委員会	岡林峰夫・奥 勇介	令和 2 年 2 月 17 日～ 令和 2 年 2 月 21 日
181	平安京跡	京都市中京区西洞院 通夷川下る薬師町 644 番、夷川通西洞 院東入泉町 661 番 3	京都市文化市民局	馬瀬智光	令和 2 年 1 月 29 日
182	平安京跡	京都市中京区壬生御 所ノ内町 40 - 3・ 4	京都市文化市民局	清水早織	令和 2 年 2 月 10 日
183	淀城跡	京都市伏見区淀木津 川市木津町 195 - 5	京都市文化市民局	熊井亮介	令和 2 年 1 月 20 日
184	長岡京跡・淀 水垂大下津町 遺跡・與杼神 社旧境内	京都市伏見区淀水垂 町ほか地先	京都市文化市民局	熊井亮介	令和 2 年 1 月 21 日
185	森ヶ東瓦窯跡・ 和泉式部町遺 跡	京都市右京区太秦和 泉式部町 6 番 1、7 番 2	京都市文化市民局	熊井亮介	令和 2 年 1 月 23 日～ 令和 2 年 1 月 24 日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
186	平安京跡・西市跡・衣田町遺跡	京都市下京区西七条西石ヶ坪町71、72、73-2	京都市文化市民局	奥井智子	令和2年2月6日
187	法性寺跡	京都市東山区本町20丁目440-2ほか	京都市文化市民局	奥井智子	令和2年2月7日
188	平安宮跡	京都市上京区千本通二条下る東入主税町953	京都市文化市民局	奥井智子	令和2年2月3日
189	平安京跡	京都市下京区朱雀分木町26番2、27番2の各一部	京都市文化市民局	奥井智子	令和2年2月4日
190	中久世遺跡	京都市南区久世中久世町730、731、732、733-1・2	京都市文化市民局	黒須亜希子	令和2年2月25日
191	平安京跡	京都市下京区下之町	京都市文化市民局	新田和央	令和2年2月12日～令和2年2月13日
192	奈島遺跡	城陽市奈島中島1番地1、2番地3、3番地1	城陽市教育委員会	浅井猛宏・廣富亮太	令和2年2月25日～令和2年2月27日
193	長岡京跡	京都市伏見区久我西出町7-13ほか	京都市文化市民局	黒須亜希子	令和2年2月26日～令和2年2月28日
194	池ノ谷1号墳	福知山市字猪崎地内	福知山市	松本学博	令和2年2月3日～令和2年4月30日
195	出雲遺跡・中館跡	亀岡市千歳町千歳辻18、19-2、20-1、21-1・2・3、25-1、寺山1	京都府教育委員会	北山大熙	令和元年10月30日～令和元年11月5日
196	法貴峰古墳群	亀岡市曾我部町中小路中地内	京都府教育委員会	中居和志・北山大熙・川崎雄一郎	令和元年10月1日～令和元年12月24日
197	矢田遺跡	亀岡市下矢田町正清、油田地内	京都府教育委員会	中居和志・北山大熙・川崎雄一郎	令和元年12月23日～令和2年1月17日
198	川北遺跡	福知山市川北ほか	京都府教育委員会	北山大熙・川崎雄一郎	令和元年12月3日～令和2年3月31日
199	白石浜遺跡	舞鶴市字瀬崎地内	京都府教育委員会	北山大熙・川崎雄一郎	令和元年12月3日～令和2年3月31日
200	長岡京跡・馬場遺跡	長岡京市馬場団所27、28-2	長岡京市教育委員会	大高義寛	令和2年3月13日
201	平安宮跡	京都市上京区下長者通土屋町西入二本松町4-11・12	京都市文化市民局	奥井智子	令和2年3月10日
202	平安京跡	京都市中京区壬生朱雀町25-15、6-1・7	京都市文化市民局	黒須亜希子	令和2年3月5日～令和2年3月6日
203	平安京跡・唐橋遺跡	京都市南区唐橋大宮尻町22	京都市文化市民局	鈴木久史	令和2年3月9日～令和2年3月11日

# 図 版



## 図版第1 恒仁宮跡第101次



(1) IR 10 I -s 調査区第1面遺構検出状況（北西から）



(2) IR 10 I -s 調査区第1面遺構集石・瓦検出状況（南から）

図版第2 恭仁宮跡第101次



(1) IR 10 I -s 調査区全景 (北から)



(2) IR 10 I -s 調査区北壁土層断面 (南西から)

図版第3 恭仁宮跡第101次



(1) S D 20103 検出状況（南から）



(2) S D 20103・S K 20104 土層断面（北から）

図版第4 恭仁宮跡第101次



(1) IR 10 I -s 調査区断面（北西から）



(2) IR 10 I -s 調査区西壁土層断面（東から）

図版第5 恭仁宮跡第101次



(1) S D 20103 北端掘削状況（南西から）



(2) I M 22 H-s 調査区 S A 19001 検出状況（西から）

図版第6 恭仁宮跡第101次



(1) IM 22 H-s 調査区西壁断面（北東から）



(2) IM 22 H-s 調査区東壁土層断面（北西から）

図版第7 恽仁宮跡第101次



(1) IN 05 G-s 調査区全景（東から）



(2) IN 05 G-s 調査区西壁土層断面（東から）

図版第8 府営農業農村整備事業関係遺跡（上ヶ市遺跡第3次）



(1) 上ヶ市遺跡 遠景  
(南から)



(2) 第2トレンチ 全景  
(南東から)



(3) 第4トレンチ 全景  
(南東から)

図版第9 国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡  
(法貴峠古墳群第1次)

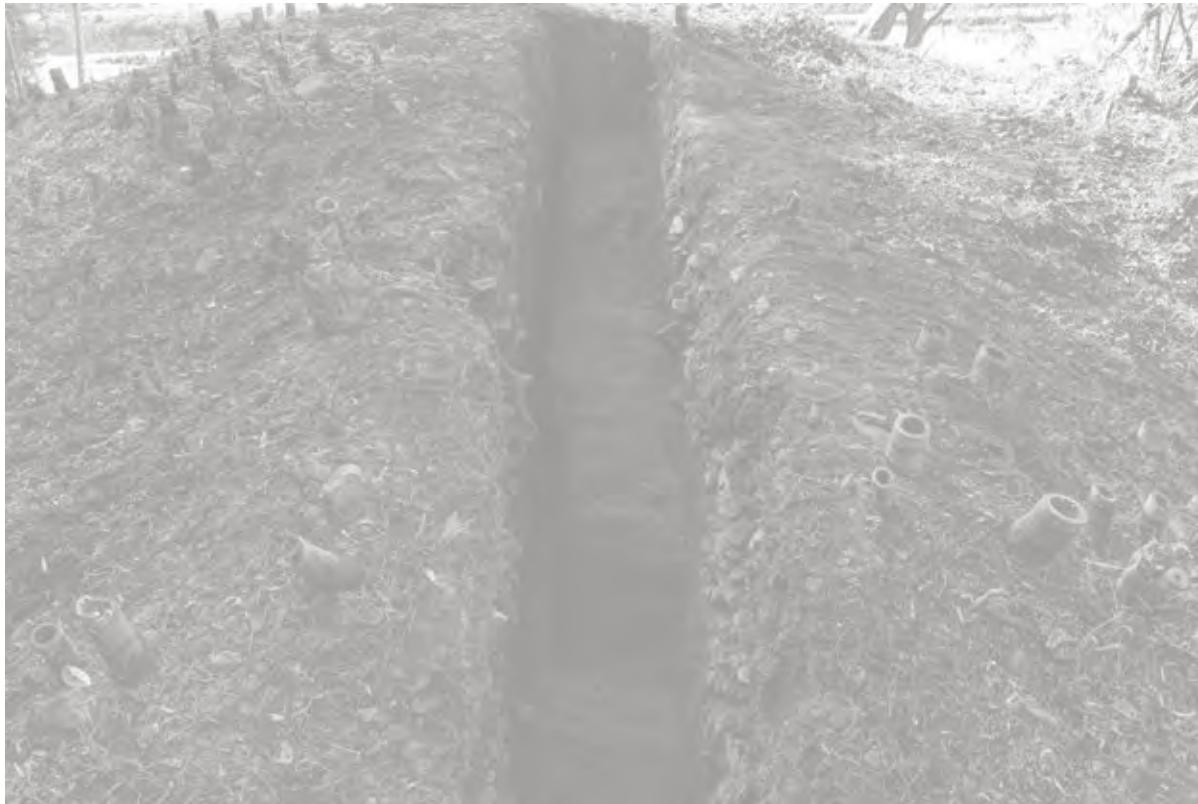


(1) 法貴峠 20号墳垂直写真



(2) 法貴峠 20号墳調査前近景（南西から）

図版第 10 国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡  
(法貴峠古墳群第 1 次)



(1) 調査区全景（北東から）



(2) 調査区東壁土層断面（西から）

図版第11 府内遺跡（特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園）



(1) 第1トレンチa区東壁（西から）



(2) 第1トレンチa区北壁東部（南から）

図版第12 府内遺跡（特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園）



(1) 第1トレンチ断割西壁（南東から）



(2) 第1トレンチb区（南から）

図版第13 府内遺跡（特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園）



(1) 第2トレンチ（南東から）



(2) 第2トレンチ盛土層近景（東から）

図版第14 府内遺跡（奈具遺跡第4次）



(1) 遺構検出状況  
(南東から)



(2) 遺構検出状況  
(西から)



(3) S P 15 遺物出土状  
況 (南から)

図版第15 府内遺跡（奈具遺跡第4次）



285



216



1



216



291



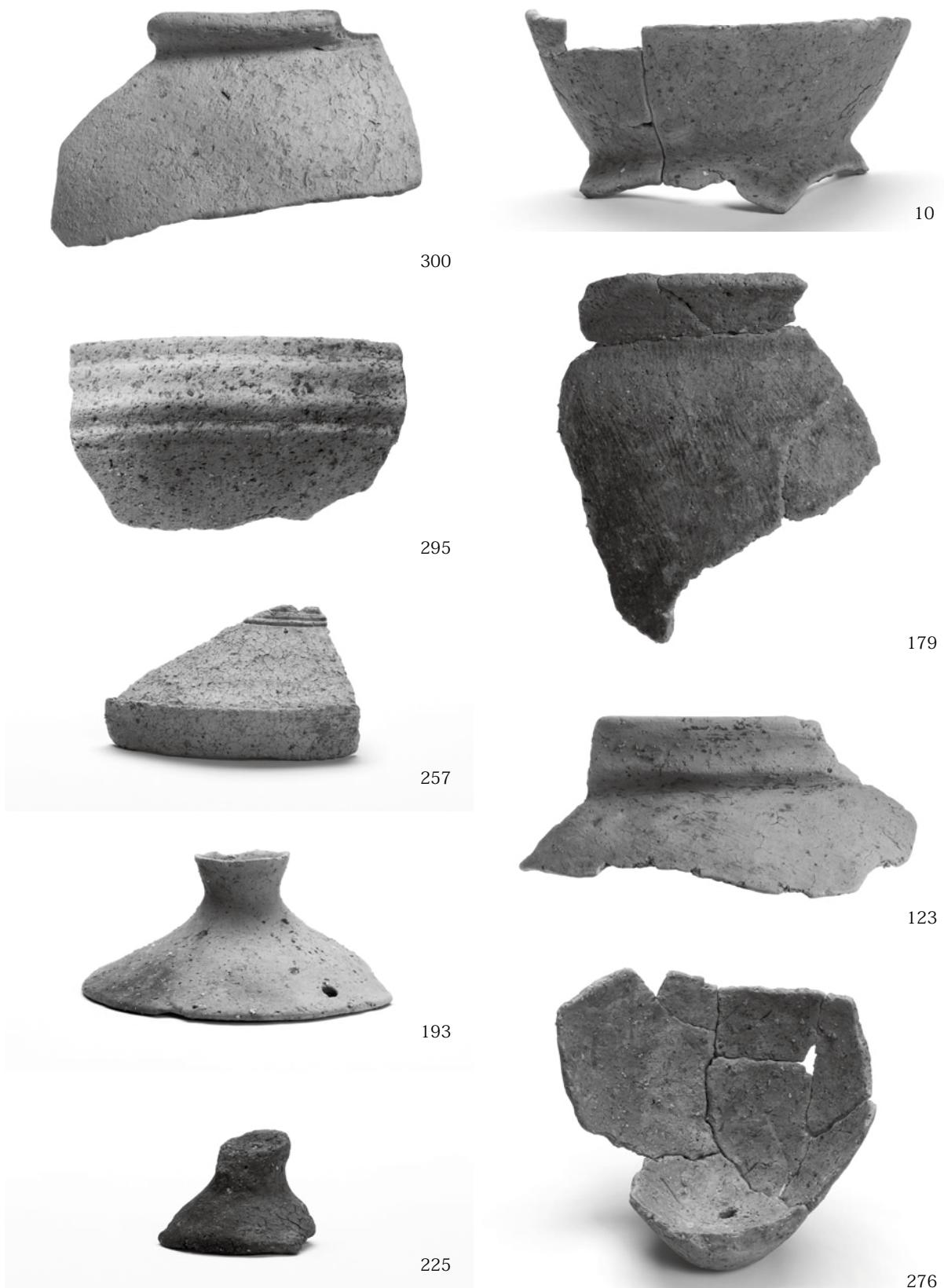
138



207

出土遺物（1）

図版第16 府内遺跡（奈具遺跡第4次）



出土遺物（2）

図版第17 府内遺跡（奈具遺跡第4次）



108



234



110



211



17



116



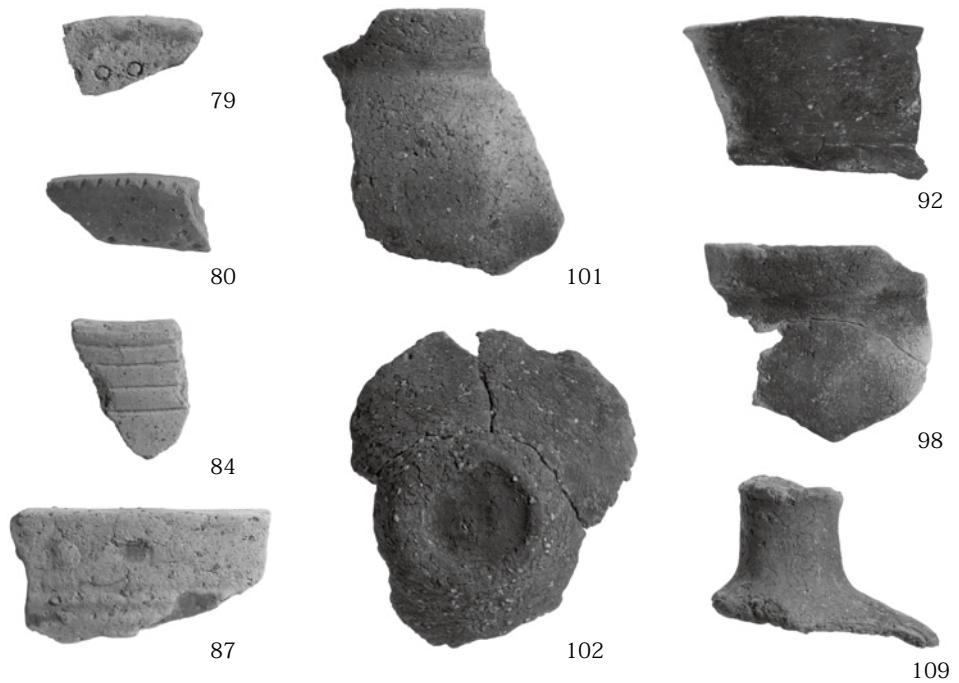
114



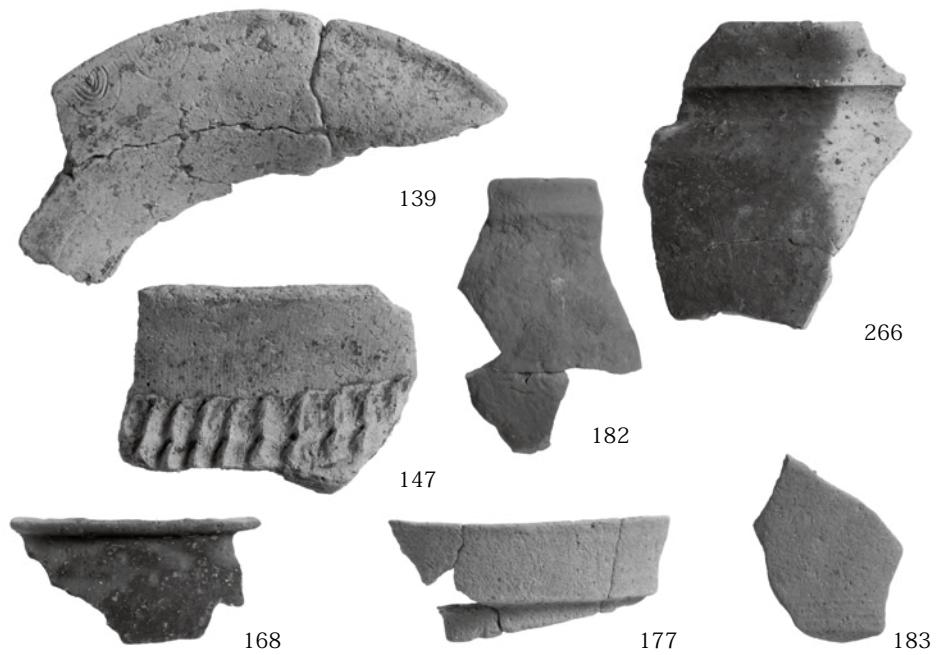
282

出土遺物（3）

図版第18 府内遺跡（奈具遺跡第4次）

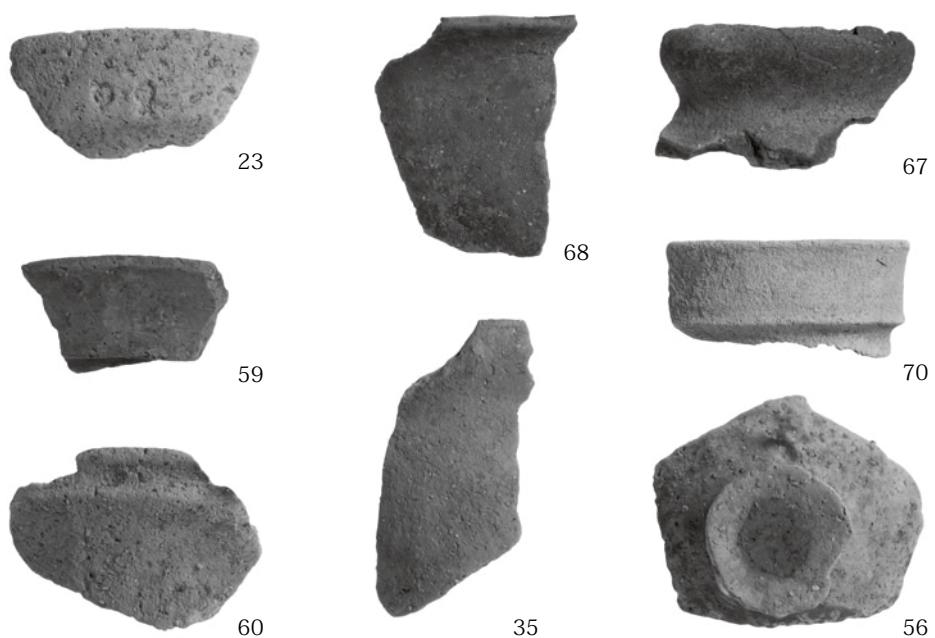


(1) 出土遺物 (4) S D 12 出土遺物

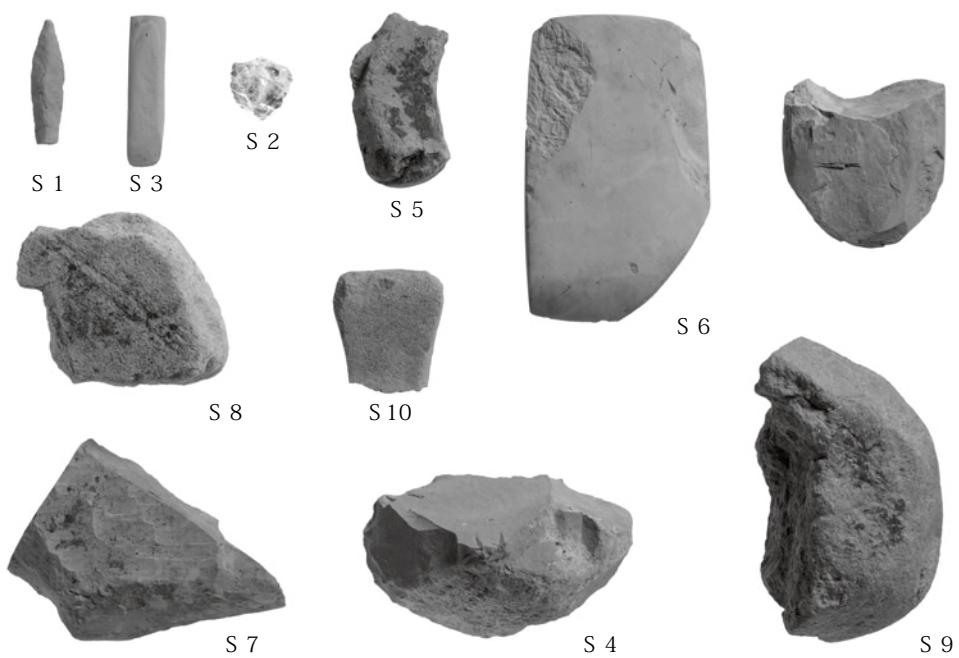


(2) 出土遺物 (5) S D 19 出土遺物

## 図版第19 府内遺跡（奈具遺跡第4次）



(1) 出土遺物 (6) SK 16 出土遺物



(2) 出土遺物 (7) 石器・石製品など

図版第20 府内遺跡（矢田遺跡第4次）



(1) 第1トレンチ 全景  
(南から)



(2) SD 01 全景  
(南東から)



(3) 第2トレンチ 全景  
(南から)

報告書抄録

報告書抄録（英文）

Title	Kyoto Pref. Cultural Properties Report (Reiwa 2)					
Writer	Yoshihisa Ishizaki Yasumasa Nara, Takumi Furukawa, Kazushi Nakai, Kengo Okada, Daiki Kitayama,Yuichiro Kawasaki,Tomomitsu Umase,Ryosuke Kumai					
Copyright	Kyoto Prefectural Board of Education 〒 602-8570 Yabunouchicho Shinmachi-nishiiru Shimodachiuri-tori Kamigyo-ward Kyoto-city Japan					
The date of issue	31.Mar.2021					
Site	Location	North latitude	East latitude	Excavated term	Excavated area(m <sup>2</sup> )	Origin of excavation
Kuni Palace site	Reihei Kamo-town Kizugawa-city Kyoto-pref	34° 45' 45"	135° 51' 55"	20201001~1218	217	Investigation for preservation and application
Uwagaichi site	Kawakita Fukuchiyama-city Kyoto-pref	35° 18' 49"	135° 9' 48"	20200727~0730	16	Pref-managed improvement in agricultural infrastructure for raising an agriculture manager
Umenokihara site	Iden-town Ayabe-city Kyoto-pref	35° 18' 44"	135° 13' 54"	20201102~1218	162	Pref-managed improvement in agricultural infrastructure for raising an agriculture manager
Kitanodai site		35° 18' 47"	135° 14' 2"			
Houkitouge kofun group	Sgabé-town Kameoka-city Kyoto-pref	34° 59' 05"	135° 32' 22"	20190128~0228 20191001~1220	9	The government-managed Kameoka agricultural land reorganization consolidation project
Chiyokawa site	Chiyokawa-town Kameoka-city Kyoto-pref	35° 03' 09"	135° 32' 26"	20201201~ 20210226	900	
Rokuon-ji(Kinkaku-ji) temple	Kita-ku Kyoto-city Kyoto-pref	35° 02' 22"	135° 43' 53"	20200831~1021	34	verification of impact on the mound
Nagu site	Mizotani Nagu Yasaka-town Kyotango-city Kyoto-pref	35° 40' 17"	135° 05' 47"	20180523~0608	57	Emergency disaster prevention work
Yata site	Shimoyada -town Kameoka-city Kyoto-pref	35° 00' 09"	135° 34' 40"	20191220~ 20200117	155	Road construction
Uryuno kofun group	Ryuno shonobe-town Nantan-city Kyoto-pref	35° 07' 26"	135° 28' 22"	20200604	10	New facility
Shino-old kiln ruins	Shino-town Kamaoka-city Kyoto-pref	34° 59' 24"	135° 36' 27"	20200803~0804	76	New facility
Fukuchiyama-castle site	Naiki Fukuchiyama-city Kyoto-pref	35° 17' 53"	135° 7' 41"	20200901	20	Road construction
Kizugawakasyou site	Yawata Yawata-city	34° 53' 25"	135° 42' 3"	20201217	12	bridge refurbishment
Site	Sort (class)	Period	Features		Artificial description	
Kuni Palace site	palace	nara	posthole type wall		sue ware,haji ware,ash glaze pottery,roof tile	
Uwagaichi site	dwelling cluster	-	-		yayoi ware	
Umenokihara site	the distribution area of relics	medieval period	-		sue ware,haji ware,gaki ware	
Kitanodai site	the distribution area of relics	medieval period	-		sue ware,haji ware,gaki ware	
Houkitouge kofun group	kofun	kofun	edge of mount,leveling soil		sue ware,haji ware,gaki ware	
Chiyokawa site	dwelling cluster	jomon-medival times	posthole,hole,ditch		yayoi ware,sue ware,haji ware,roof tile	
Rokuon-ji(Kinkaku-ji) temple	garden	muromachi	mound		sue-ware,haji-ware, roof tile,modern relics	
Nagu site	dwelling cluster	yayoi	ditch,hole		yayoi ware,sue ware,haji ware,iron slag	
Yata site	dwelling cluster	medieval period	ditch,hole		sue ware,haji ware,ash glaze pottery,stone mill	
Uryuno kofun group	kofun	kofun	hole		yayoi ware	
Shino-old kiln ruins	kiln site	kohunk-heian	-		-	
Fukuchiyama-castle site	castle site	medival-modern period	ditch		haji ware,roof tile	
Kizugawakasyou site	dwelling cluster	yayoi-modern period	ditch		yayoi ware,sue ware,haji ware	

# KYOTO PREF. CULTURAL PROPERTIES REPORT

COPYRIGHT ©Kyoto Prefectural Board of Education, 2021

Kyoto Prefectural Board of Education

Shinmachi Shimodachiuri Kamigyo-ward Kyoto 602-8570, Japan

edited by Cultural Properties Division Department of Guidance

Kyoto Prefectural Department of Education

Published by Kyoto Prefectural Board of Education

No Parts of this publication may be reproduced or by any means Without prior

permission of copyright owner

## 京都府埋蔵文化財調査報告書

(令和2年度)

発行 令和3年3月31日

編集 京都府教育庁指導部

文化財保護課

発行 京都府教育委員会

〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町

印刷 株式会社 田中プリント

〒600-8047 京都市下京区松原通麿屋東入石不動之町

